桃太郎侍

山手樹一郎長編時代小説全集＝1

春陽堂

桃太郎侍

山手樹一郎長編時代小説全集＝1

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井富士弥

日本的な土俗性の再評価によって、あらためてその因果譚の怖さの味を覚えたヤングの諸君も、民話に出てくる鬼が人間の心に潜む悪の具象化だということは知っている。そういう心と対置する善の心の表徴が、われらの桃太郎伝説だ。美少年で、知恵があって、強くって……というのは、いつの世でも庶民の願望のシンボルで、トップに立って不合理な社会悪を退治してくれる。

時代小説の面白さのひとつは、この理想をどこかに秘めて発展した物語ジャンルであったともいえよう。だが、小説の中でズバリ桃太郎を江戸時代に歩かせたのは山手樹一郎だ。市井の盗児・女スリ・お家騒動の善玉悪玉という懐かしい人々の勢ぞろいは本編から始まる。特筆したいのは、あくまでも冷酷無惨な剣鬼伊賀半九郎の造型で、彼を設定したとき、初めて両極並び立つ人間の業がとらえられ、以後の山手文学を末長く読者の支持に価する底力を持つものにしたといえる。

――作者自身、本編をもって大きく文壇に躍り出た颯爽たる記念碑的代表作！

桃太郎侍

山手樹一郎長編時代小説全集＝1

春陽堂

春陽堂●450円
0193－200401－3066

桃太郎侍

山手樹一郎長編時代小説全集 1

春陽堂

桃太郎侍

山手樹一郎長編時代小説全集 1

春陽堂

桃太郎侍

山手樹一郎長編時代小説全集

1

春陽堂

桃太郎侍

●編集／解説
＊尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治
＊本巻執筆者

仮の宿

（おや――！）

かつぎ呉服の伊之助は目をみはった。暮れやすい秋の西日が、まだひんやりと片側に明るい浅草蔵前通りを、着流しに雪駄ばき、いやしからぬ若い浪人者が両国のほうへ歩いている。

（たしかに八、九十両、ひょっとしたら百両か――？）

伊之助は商売がら、この男一皮むくと、身の軽いところから仲間ではサル之助でとおる盗児だ。今はすっかり足を洗っているが、昔の癖で、なんとなくその浪人の懐中の金けにひかれて、駒形あたりから、ふらふらとつけてきた。別にどうしようと考えたわけではない。

と、いましがたそこの横丁から出た女が、ふと間にはさまって、遅れるでもなく、追いこすでもなく――気をつけて見ると、どうやら歩調を合わせているらしい。

（畜生――）

ただ者ではない。ホウズキ色のサンゴの根掛けが心憎いばかりいきないちょうくずし、えりのかかったじみな黄八丈を抜き衣紋にして、つやつやと白いえりあし、顔はわからないが、すらりと肉づき、なまめかしいうしろ姿の、どこかに鋭い気合いがあふれて、――漫然と歩いているのではない。たしかにねらっているのが、ぬすっとの勘にピンとくる。

（女スリだな）

急にサルの敵愾心が燃えあがった。むろん、はじめから金がほしくてつけていたのではないのだが、敵があらわれたとなると、しかもそれが女では、いじでも黙ってひっこめない。一足先に金を抜いて、女の鼻をあかしてから、無事に元の浪人にかえしてやる、つまり腕くらべだ。

（負けるんじゃねえぞ。サル）

伊之助は背中の荷物をゆすりあげて、なにげなさそうにあたりを見まわした。人通り絶えない表通りだが、まだだれも、このふしぎな自分たちの連鎖に気のついた者はないらしい。

それはまずいいとして、伊之助がちょっと困るのは、――どんな厳重な戸締まりでも破って物音を立てず、まっ暗やみを平気で歩いて、ちゃんと金のありかをかぎ出す芸は、サルと呼ばれていささか仲間に知られた手ぎわを持っているが、白昼、人の懐中を抜く芸当は、残念ながら自信がない。このままでは、いかに敵愾心に燃えても、とうてい勝ちみのないことだ。

しかし、勝ちみがないからといって、ただ相手の仕事のじゃまをしたのでは、なんのてがらにも自慢にもならぬばかりでなく、むしろ、ぬすっと仲間のつらよごしだ。

（どうしてくれよう！）

女のあだっぽいうしろ姿をそれとなく見張りながら、サルの伊之助はすこしあせってきた。さすがに女も、ちょっと相手に乗ずるすきがないらしい。若い浪人のうしろ姿に、自然とそなわるたしなみがうかがわれるのだ。女はとりすましてけぶりにも見せず、だての素足に吾妻下駄、すそさばきも軽く、――やがて天王橋へかかろうとすると、

「見つけたぞ、女！」

通り合わせた勤番ふうのふたりづれ、そのひとりが、つかつかと、つかみかからんばかりに、突然女の前へ立ちはだかった。

バカげた大声だったので、あたりを歩いていたほどの者が、みんなびっくりして立ち止まる。

「なんだ、進藤！」

連れの年上らしいのが、いぶかしそうに寄ってきた。どっちもいなか侍らしく、堂々たるからだつきの武骨者である。

「それ、このあいだ、拙者が品川で、――な、話したろう、あれだ」

先のがいいしぶるのを、

「ああ、貴公の胴巻きを抜いたという女か」
大きいのが地声で、連れは遠慮がない。
「そ、それだ、そのずぶとい女だ」
「よし、逃がすな」
肩を怒らせて、退路を断つように、うしろへまわる。しかも、柄に手をかけたのは逃げたら斬る気か——それにしても、気の早い男だ。
(妙なことになりやがったぞ)
サルの伊之助は、ちらっと、若い浪人のほうをぬすみ見た。百両のカモである。こいつを逃がしては、いじも腕くらべもない。
が、突然のことに、これも思わず足を止めたという形で、——見ると、鼻筋のとおったおようなおもだち、キリッと結んだくちびるに決断力の強さを思わせる男らしい侍だ、それが好奇の目をみはって立っているので、
(まず、カモのほうはだいじょうぶ——)
安心して伊之助は女のほうへ目を移した。
全く、妙なことになったものである。

「さあ、おとなしく出せ！　ふらちなやつだ。盗んだ胴巻き、いや、財布だけでもこれへ出せ」
進藤と呼ばれた勤番者が、クマ手のような手を突きつけてわめいているのだ。
「いやですねえ」
わめかれた女は、びっくりしたように美しいまゆをひそめて、——二十三、四でもあろうか、これはまた、うしろ姿にも増して、妖艶ともいいたい年増ぶり。
「あたしは、ついそこの、代地で踊りの師匠をしている坂東小鈴って女です。なにかお人違いじゃないんですか？」
ちゃんと名のりをあげて、恐れげもなく相手の顔を見あげる。
「黙れ黙れッ！　坂東だか、小鈴だか知らんが、きさまに違いはない。いくら姿を変えても、拙者の目はごまかせんぞ」
いたけだかになってわめきかえす進藤。
「まあ、あたしがどんな姿で、なにをしたとおっしゃるんです？」
小鈴と名のる女は、至極落ち着いている。
「こやつ、ぬけぬけと、しらをきる気だな。あの時は百姓女に化けおって、——いいかわした男が江戸にいる。それを追って故郷を出てきたのだが、途中で路用をつかい果たした。お恥ずかしいが、腹がすいて歩けない。ご親切なお武家様と見ておすがりするのだと、拙者に泣きつきおったろう」
勤番者は正直である。もし、この女がほんとうに胴巻きを抜いたのだとすると、その抜いた女をつかまえて、ご丁寧にも、初めから説明しだした。
「ちぇッ、のんきなもんだな」
伊之助はあきれてしまった。物珍しそうに集まってきた見物が、ニヤニヤ笑っている。
「拙者はきのどくに思った。で、品川の茶屋で中食をとってつかわしたに、いつの間に薬をいれおったか、——一本か二本の酒に正体もなく酔いつぶれるような拙者ではない。それが、気がついてみると、きさまも胴巻きも消えている」
「ホホホ、おきのどくさまですこと。胴巻きが消えたのはお察しいたしますが、その、きさま呼ばわりだけはとんだ迷惑——」
「迷惑したのは拙者だ。いくらきさまがごまかそうとしても、こっちにはちゃんと証拠があるぞ」
「証拠——？」
小鈴は小バカにしたようにわらっている。
「そのきさまの左の二の腕に、なんとか命、と男の名がいれずみになっているはず、——どうだ、今のうちに、すなおにあやまってしまったほうが身のためだぞ」
「いやですねえ。お武家様のくせに、むやみにそんな女のからだなんか探りたがるから、胴巻きが消えたがるんですわ」
「無礼な！　きさま、あくまでしらをきる気だな。——よし、化けの皮をはいでくれる」

進藤はカッとなって、いきなり女の腕をつかもうとした。

「なにをするんだ。バカ！」

気の強い女である。ピシャリと白い手がそのほおへ走って、すばやく横へ身をひるがえそうとしたが、そうはいかなかった。

「おのれ――！」

退路をふさいでいた男が、ヒョウのようにおどりかかって、背後から小鈴を抱きすくめるように、グイと右腕を首へ巻きつけたのだ。

「あッ、なにを！　――放して！」

女はその腕をかきむしりながら、バタバタと身をもがく。

「静かにしろ。騒ぐと絞め殺すぞ。――進藤、早く女の腕を調べろ」

「よし――！」

不覚にも横っつらをなぐられて、激怒していた進藤は、パーンと小鈴のほおへ平手打ちをくれ、荒々しく左手をわしづかみにする。

「ひきょう者！　よくもあたしを、あたしを！」

小鈴は自由にならぬ顔をゆがめて、必死に進藤をけろうとする。たちまちゲタが飛んで、白いはぎが、乱れたすそが――。

（なんでえ、大きなやろうが、ふたりがかりで、ざまあねえや）

少しおとなげないので、見ていたサルの伊之助、さすがに義憤を感じた。群衆の中にもまゆをひそめている者が多い。――これで、問題のいれずみがあったら、どんなことになるだろう。同情とも不安ともつかぬ感情が、だれの心にもあるらしい。

「騒ぐな、こいつ！」

進藤は乱暴にも女の腕をぬじあげぎみに、スルリと緋のこぼれるそで口を肩のあたりまでまくりあげた。白々と肉づき豊かな二の腕が秋日にさらされて、一点のしみさえない。

「あっ、消えている！」

「バカ！　いれずみが消えるものか」

小鈴はくやしそうに罵倒した。

「右の腕を見ろ、進藤」

「おお」

しかし、その右腕も、ただいたずらに女盛りの、みなぎる膚のなまめかしさを思わせるばかりで――。

「ないか――」

「ないな、たしかにこの女なんだが」

進藤は当惑のまゆをよせた。

「焼き消すという手があるぞ。もう一度左を調べてみろ」

こうなると、抱きすくめているほうが、どうにもひっこみがつかないのだ。

（おや――！）

伊之助はギョッと目をみはった。――そいつ、よほど腹のすわったやつとみえて、わめきながら、早くもことめんどうと思ったのだろう、首へまいている手にじんわりと力を入れて、絞め落としにかかっている。

女はもう声も出ない。

「貴公ら――！」

声を掛けて、ツカツカとそれへ出た男、――カモ浪人だ。

「いいかげんに許しておやりなさい。若い女ひとりを、かわいそうではないか」

たまりかねたとみえて、語気が鋭い。思わず群衆がひしめきたった。

「なんだ、きさまは――！」

「まず、その女を放しなさい。なにも絞め落とすことはあるまい」

「や、こやつ！」

ずぼしをさされて、さすがにハッと女を突っ放しながら、いきなり柄に手をかける。てれかくしだ。

ヨロヨロとよろめいた小鈴は、大地へくずれるように両手を突いて、蒼白の額へジットリあぶら汗をうかべている。肩も胸もせつなげに大

きく波打っていた。
「名を名のれ。なんだ、きさまは！」
横合いから進藤が、これもてれかくしに意気ごまざるをえなかったのだろう。
「わしの名が聞きたければ、貴公ら、先に名のりたまえ」
「拙者は進藤儀十郎だ」
「おれは橋本五郎太――主名は遠慮する」
「そのほうが利口だな」
カモ浪人はニコッと笑った。相手ふたりが目をむいているだけに、そのおうようぶりが人目に立つ。
「ムダ口をたたかずに名のれ！」
橋本五郎太が詰めよった。――なんのことはない、女で失敗した気まずさを、ここで取りかえそうといった形だ。
「別に名のるほどの者ではないが、――わしは素浪人桃太郎」
「なにッ――？」
「桃から生まれた桃太郎」
カモ浪人はケロリとしている。
（こいつはいい）
サルの伊之助は背中の呉服物をゆすりあげて、フンと鼻を鳴らした。うれしくなってしまったのである。
「きさま、われわれを愚弄する気だな」
進藤がたちまち憤慨した。
「いや、愚弄はせぬ。桃太郎だから桃太郎と名のったまで」
「しからば姓をいえ、――姓を！」
「姓は鬼退治！」
伊之助がどなってヒョイと人の背へ隠れた。
どっと群衆が笑いだす。
「だれだ！」
進藤がまっかになって、いきりたつのを、
「捨てておけ、進藤」
さすがに五郎太が苦い顔をして、
「貴公、われらになんの用があるのだ」

改めて桃太郎侍のほうへ向きなおった。
「いや、女がかわいそうだから、ちょっと口をきいたまで、――どうやらこれは貴公らの見込み違いのようだ。もう許しておやりなさい」
「黙れ、見込みちがいではない。たしかに、この女なのだ」
進藤はまだ納得せぬ。
その女はやっと立ち上がって髪をなでつけながら、まぶしそうに桃太郎侍をみつめていた。
「しかし、貴公が見たという証拠のいれずみはなかったではないか」
「消したのだ。墨で書いておいて、あとで消す、やりかねない女だ。よけいな口は出さずに、ひっこんでいてくれ」
「よろしい、わしもひっこむから、貴公らもひっこみなさい。たとえ事実、この女だったにもせよ、武士が胴巻きを抜かれるまで気がつかなかったのは貴公の不覚、今さら往来中で騒ぎたてるのは恥さらしだ。いさぎよくあきらめることですな」
「なにッ、そんな口をきくところを見ると、さては、きさま、この女の同類だな」
くやしがって、進藤が食ってかかる。
「そう見えますかな。もっとも、一度物をとられると、人がみんなどろぼうに見えるそうですからな」
軽くかわされて、カッと逆上したらしい。
「許さん、こやつ！」
乱暴にも、サッと抜刀してくる。
「たわけめ！」
とっさに体を左にひねって、前のめりに流れてくるきき腕をハッシ！　したたか手刀がはいった。
「アッ」
ガラリと刀を取り落として、進藤がよろめく。
「やったな！」
横合いから五郎太がすかさず風をまいて斬りつけた。すばやく左足をひいてかわし、そのき

まった体勢を利用して、
「エイ！」
抜き打ちの一刀、——ちょうど空を切っておよび腰になった相手の胴へ目にもとまらず、ただし峰打ちだった。
「ウウム」
くずれるようにひざを突く五郎太、——桃太郎侍はと見ると、もう刀をサヤに、さっさと人込み中へ消えて行く。あまりにも水ぎわだった一瞬のかけ引きに、群衆はあっけに取られて声も出なかった。
（よけいな腕好みだったかな）
やっと群衆の目からのがれて、もうだれもついて来ないとわかると、桃太郎侍はホッとして苦笑した。
（しかし、桃太郎とは思いつきだった）
われながらとぼけていておかしい。しかも、この桃太郎、きょうから宿なしなのだ。生をうけて二十五年、生みの親とばかり思っていた母千代が乳母とわかり、その乳母の臨終に意外な身の秘密を聞かされて、過去いっさいを捨てる気になった自分だ。その人生のかどでに、桃太郎の名はふさわしいではないか。
が、物心ついて以来、
「あなたはりっぱな侍のお子——侍というものは、世の中の人のお手本になるものです」
常にいましめられて、母とふたり江戸の片すみに住み——早く出世して、この慈愛深い母によろこんでもらいたい、槍一筋の武士になったら、よろこんでくれるだろうか。一世にうたわれる剣客となって大道場の先生になろうか、——ただ母のよろこびのみが目当てであった楽しい生活、その夢があとかたもなく消えたのだ。
「若様、千代はしあわせでございました。もったいないと思いながら、生みの子にもまさる孝行をつくしていただいて、日本一の果報者でございます」
乳母は自分に抱かれて、満足そうに死んで行った。
死んで行く乳母はそれでよかろうが、ただ一つの夢である母を失ってしまった自分は、どうすればいいのだ。名のれぬ父、名のれぬ兄、そんなものはほしくない。
「母上」
呼べばやっぱり乳母の顔がうかんで、——いや、乳母ではない、千代こそ自分の母だ。生きているかぎり、母として千代のおもかげをいだいて行こう。それには、現実の思い出が残る家はいっさい捨てたほうがいいと思いたって、住み慣れた家に別れてきたのだ。
（つまり、宿なし桃太郎——おれは桃から生まれて、千代に育てられたようなものだからな）
天涯孤独、その寂しい心境に秋風が流れて、ふと見上げる空に夕月が白かった。
「お武家様——」
やがて浅草橋に近いあたりである。うしろから呼ばれて、
「やあ、おまえか」
桃太郎侍は意外な目をみはった。さっきの女小鈴が、スラリと立っているのだ。
「先ほどは、危ういところを、ほんとうにありがとうございました」
「わざわざその礼にはおよばぬ」
「いいえ、命の恩人でございますもの」
「そういえば、あぶなく絞め落とされるところだったな」
桃太郎侍は快活に笑った。その気軽さにつりこまれたように、
「あんまり様子のいい格好ではございません。声が出ないのですもの、あたし、どうしようかと思いました」
小鈴はあでやかなまゆをよせて見せた。
「とんだ災難、まあ、そう思ってあきらめなさい。——失礼」
あっさりきびすを返そうとするのを、
「お、お武家様」

小鈴はあわてて、そでをつかまんばかり。
「いけません。あたしの家はついこの横丁でございます。どうぞ、ちょっとおたちよりあそばして」
「それにはおよばぬ」
「いいえ、それではあたしの気がすみません。母にもしかられます。どうぞ、お願い」
いつの間にか、ほんとうにそでをつかんでいるのだ。若いから桃太郎侍、町中で美女にそんなまねをされると、ちょっとてれる。——それに、通りかかったかつぎ呉服の中年者が、こっちを見て笑っているのだ。

踊りの師匠ということだったが、なるほど、こぢんまりと黒板塀をまわした粋な住まいであった。玄関わきからすぐ二階の六畳へ通されて、下のことはわからぬが、廊下に立つと、せまいなりによく手入れのとどいた小庭が見おろせる。往来一つ越したところを、神田川が流れていた。
「どうぞ、ごゆっくりなすってくださいまし」
母親だという老婆は、口数少なく娘の礼をいって、早々に降りて行った。
(気の弱そうな年寄りだな)
ひとりとり残された桃太郎侍は、死んだ乳母と思いくらべる。千代はものやさしい中にも気性の勝った折り目正しい母であった。武士の娘だから、町家の女とは比ぶべくもないが、物腰になんともいえぬ気品があって、病の床につくまで、一度も寝姿など見せたことがない。いつも自分より早く起き出して、おそく臥所へはいるのだ。
「先にやすんでくだされればよかったのに」
たまに夜ふけて出先から帰った時など、よくこういうのだが、
「いいえ、これが女に生まれてきたものの、つとめなのです」
と、必ず針仕事などしながら待っていて、わらいながら茶をいれてくれた。
(いい母だったなあ)
しだいに溶けてくるたそがれの色の中に、またしても桃太郎侍は、しみじみとそのおもかげを追っている。
軽い足音が階段をあがってきた。
「すみません、お待たせしました」
小鈴がふすまぎわにひざをついたが、
「まあ、気のきかないおっかさんたら。——お寒かったでしょう?」
急いで廊下の障子を立てて、絹あんどんに灯を入れる。明るくやわらかい灯影がサッとへやの内へ夜を迎えて、——薄化粧をはいた女の顔が昼より白く、いきいきとなまめかしい。少し手間どったと思ったら、すっかり着替えをすませて、ぜいたくな絹物をわざとふだん着らしく、くつろいで着こなしているのだ。
「なんにもございませんけれど、ほんの一口」
いつの間に用意したか、階段のふすまのかげから膳を運ぶ。ちょうしが出る。
「いや、それはいかん。わしはすぐ戻るつもりでいたのだ」
桃太郎侍はちょっと当惑そうな顔をした。事実、すぐ帰るつもりでいたのだし、物堅い母に育てられて、まだこういう種類の女と差し向かいになった経験がないのだから、まして酒などを出されると、堅くならざるをえない。
「まあ、よろしいではございませんか。ほんのお一つ、あたしのお礼心ですもの」
むりに杯を持たせて、
「長くお引き留めしようとは申しません。おうちにお待ちかねのおかたがあるんでございましょう?」
小鈴はそっと顔色をうかがう。
「いや、わしは宿なしだ」
桃太郎侍は正直だった。
「宿なしって?」
「天涯孤独、きょうから世に捨てられた宿なし

桃太郎だ」
「本当ですか」
「本当だ」
「ああ、わかりました。きっと、お好きなかたがおできになって、少しもおうちへよりつかない。それで、見せしめのためのご勘当——お手の筋でしょう？」
「——」
なるほど、そんな見方もあるかと、桃太郎侍は苦笑した。
「まあ、うらやましい。どんなひとでしょう、だんなさまにそんなにかわいがられるかたって」
小鈴は如才がない。そういいながらも、しきりに酒をすすめているのだ。

「違う。わしは母のほかに女は知らぬ」
桃太郎侍はまじめに弁解するのだ。ポッと酔いがほおに出てきたが、ひざ一つくずさない。
だいいち、この男は女に杯を差すことさえ知らぬらしい。ほんとうにうぶなんだと、小鈴はおもしろくなってきた。
「その母に死なれて、急に家がいやになった。なにを見ても思い出すことばかりだからな」
「ほかにご兄弟は？」
「ない。母ひとり子ひとり、二十何年ふたりきりで暮らしていたのだ。ここへ寄る気になったのも、実は、おまえが母にしかられると聞いて、急にうらやましくなったからだ」
大の男に、こんな顔があるだろうかと思われるほど一瞬子どもっぽく寂しげにわらう。
「ごめんなさい。そうとは知らず、勘当だの、いいひとだのって、かってなことばかり申しあげて」
小鈴はしみじみといいながら、なるほど、それで大金を持っているのかと、チラッと男の顔を見あげる。純真そのもののように澄んだきれいな男の目だ。

「それで、これからどうなさるおつもり」
「わからんなあ、天下の風来坊、きょうが宿なし桃太郎の店開きだ」
「もったいない。あたし、拾わしていただこうかしら」
気をひくようにいってみる。
「よしたほうがいい。食うよりほかに能のない男だ」
「お流れを一つ、くださらない？」
小鈴はそっとにじり寄った。
「ほう、酒が飲めるのか？」
「飲みたくなりましたの、あなたのお酌で」
桃太郎侍は武骨な手つきで、ちょうしを取りあげた。
（すなおな坊やだこと。もうこっちのものだ）
だいたい男なんて甘いものだ。どんなむずかしい顔をしていても、すぐでれりと参る。また、参らせるだけの自信が小鈴にあるのだ。まして、世間知らずの青二才など、物の数ではない。

「ね、だんなさまの本当のお名まえを聞かせてくださいましな」
「桃太郎だ」
「あら、人がまじめにきいているのに。ひやかさないで教えてくだすってもいいでしょう？」
「だから、桃太郎」
「じゃ、姓は？」
「日本一——鬼退治でもよい」
わらっているのだ。
（フン、きいたふうなことを。いまに日本一のでれすけにされるのも知らないで）
小鈴はちょっとしゃくにさわったが、
「ようござんす、教えてくださらなければくださらないでも。そのかわり、今夜はもう帰しませんからね」
杯をかえしながら流し目にしっとりと風情を含んで。——が、この男には通じぬらしい。
「いや、そんな迷惑をかけてはすまぬ。こうしてごちそうになるのからして分に過ぎると、心

苦しいのだ」

「いやですね。命の恩人ですもの、当然じゃありませんか。本当はね、あたし——むしのいい考えだって笑われるかしら、——もう一つ、お杯をください。少し酔わなくちゃ、恥ずかしくてお話しできませんわ」

深沈と情熱のみなぎるようなまめかしい肢体をくねらせて、小鈴は大胆にわらって見せた。いつの間にかしどけなくいずまいが乱れて、不謹慎な手が時々男のひざに触れんばかりである。

「もう酔っているではないか」

「いいえ、もっと酔いたいんです。うれしいんですもの。——でも、桃太郎さんは少しもお酔いになりませんのね、お酌がへただからかしら」

下からそっと運ぶちょうしの数もやがて四、五本、男の様子はまだ少しも変わらないのだ。

「酔っていないことはない」

桃太郎侍は端然として答えた。

「だって、少しもお乱しにならないではございませんか、あんなまじめなお顔をして」

「婦人の前だからつつしんでいる」

「まあ、憎らしい。それじゃ、あたしが恥ずかしくなりますわ。ね、どうぞご自分のうちだと思って、くつろいでくださいよ。さあ、お熱いのがきました」

すすめれば決して遠慮はしないが、どうもかってが違う。どんな媚態を見せても、ただ澄んだきれいな目が微笑するだけで、少しも女というものを感じていない。

(よっぽどトウヘンボクにできているんだね)

男のくせに、そんなはずはないと、小鈴のほうが少しじれてきた。

「あたしね、うちが女ばかりで無用心でしょう。ですから、ちょうどいい桃太郎がどこかに落ちていたら、ぜひ拾いたいと思っていたんです。そうすれば、さっきのようないなか侍にバカにされなくてもすむし——ね、決してご迷惑はかけませんから、ここを宿にしてくださらない」

これでもわからなければ、ほんとうに金仏だと、小鈴はあけすけに、目にもからだにもあふれる色気を投げ出して笑った。

「せっかくだが、それはできぬ」

桃太郎侍の顔から、ふと微笑が消えた。それだけ真剣になったのだ。

「まあ、なぜいけませんの」

やっとわかったかなと、小鈴は、わざと燃えるような目をみはった。

「わしは畳の上で死ねる人間ではない」

「え——?」

「性分として、無法なやつを見ると許しておけないのだ。今までは母があったからつつしんでいたが、もう天涯の孤児、大きなことを申すようだが、遠慮なく鬼退治がしてみたい。せっかくの好意、身にしみてありがたいが、男一生の念願、悪く思ってくれるな」

心持ち頭を下げるのだ。

(畜生!)

小鈴はカッとなって、思わず顔がまっかになった。かりにも男にふられたのは、はじめてである。しかも、トウヘンボクだとのみ小バカにしてかかったのが、ちゃんと色も情も知っていたのだ。知っていながら、あの静かな目、動ぜぬ物腰、——これが本当の男というのだろうか?

(畜生、負けるものか!)

だれにも触れさせたことのない、いとしいからだだが、このはだを張っても、一度はきっと色ガキにおとしてやる。このあたしのきりょうに、からだに迷わない男なんてあるものか!

小鈴はじっとくちびるをかんで、うなだれた。初めはふところの金が目的だったが、今はもう女のいじである。

「思わぬちそうになって、かたじけない」

桃太郎侍は静かに杯を伏せた。

「桃さん!」

小鈴がやきつくような目をあげる。
「女に、女に、死ぬほどの恥をかかして、それでもおまえさんは男？」
「許せ」
もてあましぎみに立とうとするのを、
「いや！　帰さない、帰さない！」
すばやく膝を片寄せて、いきなり、からだごと狂暴に男のひざへ、——制しきれぬ甘美な感情が、われにもなく胸へせつなく波打って、しばいだか真実だか、自分でもわからなくなる。
（ほれちまったのかしら。——畜生、だれがこんな子どもみたいな青二才に！）
狂おしく身もだえする豊潤な双の肩を、男の強い両手が、たくましく静かに、スッと引き放したと思うと、
「やはりおいとましよう。思い立った男一生の仕事だ。許してくれ」
みじんもまどわぬ、しかし大きな愛情をたたえて、澄んだ目が一瞬じっとみつめて来るのであった。
酒気にかもされて、むせるような女の脂粉の香を、むりにのがれて外へ出た桃太郎侍は、妙にほっとした気持ちだった。酔ったほおに秋の夜風がさわやかである。
（どうもわからんなあ）
あんな女の痴態を見せられたのは、はじめての経験なのだ。振り切ってきたのがあわれなような気もするし、ついにまどわされなかった自分の強さが誇らしくもある。
（とにかく、女は苦手だ）
そうきめて、——さて、どこへ行ったものか、今夜の宿を求めなければならぬかれである。足は自然と、寄すぎてひっそりと静まった町筋を、浅草橋のほうへ向いている。
「だんな——桃太郎のだんな」
物陰からそっと呼ぶ者があった。
「だれだ」
きょうはじめて名のった名まえ、桃太郎のだ

んなとは、おかしなことをいうやつもあるものだと、ふり返ってみると、
「へへへ、あっしなんで——」
月あかりの中へ顔を出したのは、どこかで見たことのあるような、中年の男だ。呉服物らしい荷を背負っている。
「だれだ、きさまは？」
「おや、忘れちまったんですか、いやだなあ、——まあいいや、歩きながら話しましょう。だんな、あっちへ行きましょう」
ニヤニヤ笑いながら、蔵前のほうを指差す。なれなれしいやつだ。しかし、悪意のなさそうな、平凡な顔の、どこかあいきょうのある男である。
「いや、拙者はこっちへまいるのだ」
浅草橋のほうへ向かおうとすると、
「いこじだね、だんなは。別にどこへ行かなきゃならないってだんなじゃないんでしょう。帰るあてのある家があるわけじゃなし」
男は平気でそんなことをいうのである。
「なに？」
「まあいいから、あっしと行きましょうよ。悪いようにしやせん」
「そうか。よかろう」
妙に好奇心がわいて——それに、事実どこへ行かなければならないからだではない。桃太郎侍はあっさり男についてってみる気になった。
「偉い！　そう来なくちゃいけねえ。そのあっさりしているところが、だんなの身上なんだ。ほれちまいましたぜ、全く」
歩きながら男はひとりで感心している。
「ほれるっていや、だんなはまたひどくほれられちまったもんですね。ああいう女はむきになると、こおうござんすよ」
「なんのことだ、それは」
「ごまかしちゃいけません。だんなが今別れて来た坂東小鈴——きれいな女だ」
「……？」

おかしな男だ。なんでもよく知っている。桃太郎侍はいささかあっけにとられた形だ。

「たいていの男なら、ひとにらみで参っちまいまさ。ところが、だんなは違う。そこがだんなの値打ちなんだ。ね、だんな、初めはあの女のてくだだが、だんなのきっぷがあんまり男らしいんで、小鈴のやつ、しまいにゃ、ほんとうにほれちまったんですぜ。そうに違いねえんだ」

「きさま、見ていたようなことをいうな」

「へへへ、まあそんなものなんで。けど、だんな、悪気があったわけじゃありません。これでもだんなの身が心配だったから、そっと見張っていたんでさ」

「見張る？」

桃太郎侍は思わず赤くなった。いったい、どこから見張っていたのか、この男に疑問を持つ前に、ああいう女とふたりきりの対座を見ていられたことが、別にうしろめたい事実はなくても、やっぱり気恥ずかしい。

「いったい、きさまはだれだ。どうしてわしを知っているのだ」

きかずにいられなかった。初対面のこの男が、なんのために自分を見張っていたのか、どうも桃太郎侍の常識では判断しかねるのである。

「へへへ、今種を割りますがね、その前に、もうちっとかってにしゃべらしといておくんなさい。道中が長いんだ。種を明かしちまうと、歩くのがつまらなくなります」

男は背中の荷物をゆすりあげて、——から身の桃太郎侍と、平気で歩調を合わせて行くのだから、相当達者な足である。やがて天王橋へかかろうとしていた。

「では、わしをどこへ案内しようというのだ」

「あっしの巣へお連れ申そうってんで」

「巣——？」

「浅草聖天裏のお化け長屋、あんまりりっぱじゃありませんが、けっこう夜露はしのげます。あっしがひとり者で、だんなが——なんとかうまいことばがありましたっけね、ひとり者のことを？」

「天涯の孤児か？」

「それそれ。つまり、天涯の孤児がふたり集まったんだ。ぜひお世話をしようと思いましてね」

「世話はいいが、きさま、天涯の孤児まで聞いていたのか？」

苦笑せざるをえない。

「へへへ、小鈴がだんなのひざへすがりついたのまで見ちゃいませんが、ちゃんと聞いていたんで。——すっかり当てられちまった」

「油断のならんやつだな」

「まあね。——けど、あの女のほうが、もっと油断がなりませんぜ。だんなはもう少しで一服盛られるところだったんだ」

「なに？」

桃太郎侍は耳を疑った。男はグルリとあたりを見まわす。往来はひっそりと、むろん、もう人影一つなくふけていた。

「大きな声じゃいえませんが、ありゃ洗えばたしかになんとかいう肩書きのある女だ。だんなは気がつかなかったろうが、あの二階の床の間と並んだ押し入れね、その押し入れから抜けられる中二階になった隠し間があるんですぜ。しかも、家の横手の路地の塀へのぼると、そこの小窓がうまく入り口になっている。そんな隠し間が、普通の踊り師匠に必要があるでしょうかね」

「すると、きさまは、そこから押し入れへ抜けて潜んでいたのか？」

「大きい声を出しちゃいけません」

男はもう一度なにげなさそうにうしろをふりかえって、

「まあ、そんなことです」

クスンと得意の鼻を鳴らす。

「では、きさまの肩書きはなんだ」

すかさず桃太郎侍が斬りこんだ。

「おやおや、少し早すぎちまったな。あっしは

サルの伊之助、一口にサル之助って呼ばれていたが——昔のことでさ。この三年ばかし、すっかり足を洗って、かつぎ呉服の伊之さんです。本当ですぜ。でなけりゃ、なにも、だんなをうちへなんかお連れしやしません」

伊之助はひとごとのようにけろりと答えたが、驚いたのは桃太郎侍である。

「フフフ、だんな、驚いてますね。小鈴は初めから、だんなのふところの大金——失礼だが、あっしは九十両から百の間とにらんだが、違いますか？」

「気味の悪いやつだな」

「当たったでしょう？　そいつをねらって、蔵前あたりから跡をつけていたんです。すると、あの天王橋のいなか侍でさ」

「きさまの話の様子だと、あの女は品川で、ほんとうに侍の胴巻きを抜いたことになりそうだな」

「やりかねませんとも。だいいち、子どもじゃあるまいし、いくらいなか侍だって、あんなひと違いをするはずはないじゃありませんか」

あまり世間を知らぬ桃太郎侍にとって、サルの伊之助のいうことは意外なことばかりであった。

「サル、実はきさまもこの金が目当てでわしの跡をつけていたのだろう。どうだ」

「冗談いっちゃいけません」

伊之助はちょっとろうばいしたようだったが、

「フフフ、だんなに隠したってしようがねえが——本当をいいますとね、さっぱり商売替えをしちまったあっしなんだ。悪気はみじんもねえんですが——持っているなと思うと、ついその金気にひかれましてね、フラフラッとわけもなくだんなの跡をつけていたんで」

正直に頭をかくのである。

「では、わしがあの侍たちに桃太郎と名のった時、鬼退治とヤジウマの中からどなったのもきさまだったのか」

桃太郎侍はどうやら見当がついてきた。

「へえ、勇ましかったね、あの時のだんなは。あれですっかりほれちまったんだ」

「金にほれたのではないのか？」

「おこりますぜ、だんな。あの女といっしょにされちゃたまらねえや。いやんなっちまうなあ。こうしてお供をするんだって、あっしのは、ほんとうにだんなのためを思ってるんだのになあ」

「わしのため？」

「だんな、あわててふり返って見たりしちゃいけねえよ。あの女はきっと、だんなの跡をつけてますぜ」

伊之助は声をひそめて、ものものしく真剣だった。

「ああいう女は、一度思いこんだら、なかなかあきらめるもんじゃねえ。もっとも、もう金はねらっちゃいねえだろうが、帰りにだんなにいったでしょう？　——女の口から一度こんな恥ずかしいことを言いだしたんだ。思いを遂げるまでは、きっと一生つきまとうってね。だんなはそれを、いいかげんな女の口説だと思っているんでしょう？」

「——」

事実、桃太郎侍はもうそれほど気にはしていなかった。だいいち、どこへ飛んで行ってしまうか風のように当てのない身だ。別れてしまえば二度と会うこともあるまいと考えていたのである。

「生娘やしろうと女の甘いのと違いますぜ。ちゃんと覚悟があるから、今夜はおとなしく帰したんだ。あの執念は、とても世間知らずの——気にしちゃいけませんよ。つまり、だんなのようなほっちゃん育ちにはふせぎきれない。及ばずながら、あっしが後見役をしようと買って出たんだ。さんざっぱら当てられたうえ、疑われたんじゃ間尺に合いません」

「きさまはまた、なんでそんなにわしに肩を入れるのだ」
「だから、ほれたといったじゃありませんか。あっしのいちばん気に入ったのは、鬼退治をしてえっていったんなのあの気性だ。こう見えても、その気持ちだけは前からあっしも持っている。どろぼうに義賊ってのもおかしゅうござんすがね、あっしは今まで決して、没義道なことや貧乏人いじめはしなかった」
「よし、わかった。では、後見役を任せることにしよう」
一脈なにか相通じるものがある。その心意気に、桃太郎侍は思わず青年らしい興奮をおぼえてうなずいた。
「ありがてえ、やっとわかってくれましたね」
クスンと得意の鼻を鳴らして、背中の荷物をゆすりあげた伊之助が、
「おや！」
なにを見つけたか、すかすように首を前へのばしたのだ。やがて聖天社に近い浅草山之宿——月かげになった道ばたに夜たかそばの赤い灯が見えて、人影が二つ三つ。
「なんだ、伊之助」
「へえ。——たしかにそうだ」
急に伊之助の足が早くなった。
遊び人体のふたりの男が、フーフーいいながら夜たかそばを食っている。すこし離れた軒下に、十ばかりの男の子の手をひいて、そのあんどんの灯に顔をそむけるように、うなだれて立っている女——しょんぼりとは、こういう格好をさしていうのだろう。
「おかみさん。お俊さんじゃありませんか！」
伊之助が立ち止まって、とがめるように声を掛けた。
「あ、お隣のおじさんだ」
子どもの目が急にいきいきと輝いて呼ぶ。
「まあ！」
女は目をみはって——二十七、八でもあろう

か、むぞうさなくし巻き、疲れたようなもめん物、貧にやつれた姿ではあるが、まゆの跡も青青と、年増盛りはあらそわれぬなまめかしさが、おのずとにおいこぼれる美貌を、力なく面伏せた。
「どこへ行きなさる、この夜ふけに」
「はい」
「仙坊、どこへ行くんだい？」
お俊のいいにくそうなのを見て取って、伊之助は子どもに話しかけた。
「あの、あのおじさんたちが迎えにきたんだ」
ちらっと男たちのほうをうかがいながら、子どもが悲しげな顔をする。
「ふうん。この夜ふけに、どんな用があるんだろう」
「——」
お俊は深くうなだれて答えなかった。その母親の顔を見上げながら、
「いくらおっかさんがあやまっても、おっかない顔をするんだもの」
子どもはべそをかくのだ。
「おかみさん、あの金のことかね？」
「はい。どうでも今夜は話をつけなければならないからと、たっての迎えをうけまして」
伊之助はじっとくちびるをかんだ。
「さあ、行こうぜ、あにき」
若いほうの目の鋭いやつが、そばを食い終わると、わざと大きな声を出した。
「うむ。いくらだ、おやじ」
年上の、額に向こう傷のあるやつが、勘定を払っている間に、
「おかみさん、行くよ」
若いほうがあごをしゃくって、うながしながら——伊之助など眼中にない。
「もし、お身内衆——」
伊之助は丁寧に頭を下げた。
「おれかい？」
「へえ、田原町のお身内衆でございますね」

「そうだよ、上州屋亀八の身内だが、なにか用かい？」

「てまえはこの親子の者の隣に住む伊之助というかつぎ呉服でございますが、あしたの正午の刻までにまちがいなく、お俊さんのお借りした五両はお届けいたします。まことにかってなお願いですが、今夜のところはもう一晩だけ、お待ちいただけないでございましょうか？」

「ダメだよ」

「へえ」

「おれたちは親分のいいつけで、今夜金を受け取るか、それができなけりゃ親子のからだをひっぱって来いって、堅く念を押されてきたんだ。文句があるなら、行って親分にいいな」

相手はせせら笑って鼻であしらっている。

「そこのところを、あなたがたのお情けで、どうか親分さんにひとつ――」

「うるせえなあ。何もおまえ、他人の借金をそんなに気にすることはなかろう。それとも、てめえ、この後家となにかくせえことでもあるのか」

「とんでもない」

神妙に下から出ている伊之助を、桃太郎侍は少し離れた軒下から感心してながめていた。

「そんなら、てめえ、何もよけいな口をきかなくてもいいじゃねえか。――どきなよ」

ひどく人を小バカにしたやつだ。――お俊親子が抱き合うように身を寄せてはらはらしている。

「へえ。そうでもございましょうが、あんなに心配している子どもがかわいそうでございます」

伊之助はどこまでも丁寧だ。

「なら、ガキだけてめえにやるから連れて行ったらいいだろう」

「へへへ、ご冗談をおっしゃらないで――金のほうはきっとあしたまでにつごういたします」

「くどいやろうだな。だれがてめえなんかつまえて冗談をいうもんか。いいかげんにしろい。こっちは先を急ぐんだ」

「そうでもございましょうが、たった一晩のことで、今までお待ち願ったんですから、今夜一晩ぐらい――」

「やかましい！　泣きごとならひとりでいってろ、聞きたくもねえや、バカやろう！」

男はいきりたつと、乱暴にも伊之助の胸を突き飛ばした。ヨロヨロッとうしろへよろめきながら、背中の荷を取り落として、

「――」

がまんの緒が切れたのだろう、伊之助は無言で、鉄砲だまのように男のむなぐらへ飛び込んだ。

「ワーッ！」

男が顔を押えてのけぞったのは、すばやい一拳を鼻ッ柱へ食ったらしい。

「あっ、おじさん」

子どもが悲鳴をあげた。見ていたあにきといわれる向こう傷が、キラッとあいくちを抜いて飛鳥のようにつっかけたのだが、自分からサルと名のった伊之助、初めから敵はふたりと勘定に入れていたのだから抜けめはない。

「――」

ひょいとふり向きざま刃物をかわして、そのきき腕へむしゃぶりついた。

「やろう、放さねえか！」

「――！」

「あ、いててッ」

腕へかみついたらしい。向こう傷は思わずあいくちを放したが、

「畜生！　やりやがったな」

猛然と組みついて、組み合ったまま、ドスンと往来へぶっ倒れた。上になろうとして、ふたりのからだが砂ほこりをまいてころげまわる。

「ウヌ！――やろう」

向こう傷はうめくようにわめいているが、サルは決して声を出さない。

（偉いやつだなあ）

桃太郎侍は感心して見ていた。——あまりの猛烈さにお俊親子も、そば屋も、ただあえいでおろおろするばかり。

「アアッ！」

そのお俊が思わず金切り声をあげた。

一度倒された若いほうが、顔を血だらけにしてフラフラと起き上がったのだ。これがまた、あいくちを抜いて残忍な目を光らせながら、ねらい寄って行く。

「待て！」

桃太郎侍はつかつかと暗い軒下から、月あかりの往来へ出た。

「ひきょうなまねをすると許さんぞ」

「アッ」

ギクリとしりごみするやつを、にらみつけておいて、

「伊之助、上か下か？」

組み合っているふたりのほうへどなった。——返事のかわりに、ちょうど上になったサルが、向こう傷の首を両手で絞めつけながらヒョイと顔を上げる。ほおへ血が流れてさすがに目が殺気だっている。

「もうよかろう。放してやれ」

桃太郎侍はなだめるように、静かにいって笑って見せた。

「へえ」

伊之助はちょっと不服そうに相手の顔をにらんでいたが、パッと手を放して飛びのく。

「やろう！」

フラフラッと起き上がった向こう傷が、悪魔のような顔をゆがめて、なおも夢中でつかみかかって行こうとするのだ。

「たわけめ！」

桃太郎侍は一喝、気つけがわりにピシャリと横っつらを張り飛ばした。

「アッ！　だれだ、うぬは！」

「だれでもよい。けんかはきさまたちの負けだ。さっさと黙って帰れ！」

「なんだと！」

それでも一瞬ヒョウのような目をしたが、とうていかなわぬと見て取ったらしい。

「畜生、覚えてやがれ！」

くやしそうにわめいて、ふたりともサッと横丁へ飛びこんでしまった。

「おじさん、強いなあ」

子どもがいきなり伊之助に飛びついていく。

「仙吉、なんです。おけがのようだから、おじさんにからみついちゃいけません」

お俊はあおい顔をして子どもをたしなめたが、仙吉はギュンギュン伊之助の胸のあたりへ顔を押しつけて行きながら、突然激しくしゃくり上げた。子ども心にも身に振りかかる悲しさ、くやしさが、急にせきを切ったのであろう。

「なんだ、仙坊。泣かなくたっていいや。男は泣くもんじゃない」

伊之助はまだ肩で息を切りながら、——その子ども心がピンと胸へ来たのだ。仙吉の肩を抱くようにして目を伏せた。

「とんだご迷惑をおかけしまして」

お俊がそっと涙をふく。

「そば屋」

桃太郎侍は、まだきのどくそうに立ち去りかねていた夜たかそばの前へ寄った。

「すまぬが、この手ぬぐいに湯をかけてくれぬか」

「へえ」

「ついでに、そばを四つ頼む」

熱い湯でしぼった手ぬぐいを持って来て、

「伊之助、血をふけ」

「すみません」

「この中の丸薬をかんで傷にぬっておくがいい」

腰の印籠を取って差し出した。

「へえ。——おかみさん、あっしの元の主筋にあたるだんなです」

驚いているお俊に、伊之助は如才なくうまいことをいう。

「はじめてお目にかかります。いろいろと伊之助さんにご厄介になっている俊と申すふつつかもの」

「いや、ごあいさつは改めて、——坊や、こっちへ来ていっしょにそばを食わぬか」

桃太郎侍はじっと顔を見上げている仙吉に笑いかけた。目の大きい利口そうな子だ。

「はい」

そっと母親の顔をうかがう。

「そそうのないように、ちょうだいなさい」

「おじさん、いただきます」

子どもはうれしそうに走って来た。

（武家出だな）

どこか物腰が違うとさっきから見ていたが、やっぱりそうだったのだ。なにか不運に付きまとわれている親子に違いない。桃太郎侍は伊之助の世話をお俊に任せて、そば屋の屋台へ帰ってきた。

「坊はいくつになる」

「十です。田上仙吉といいます」

「そうか。おとうさんはどうした」

「武者修行に行ってるんですって。帰ってくれば、仙吉もおじさんのように侍になるのです」

子どもは目を輝かして、うらやましそうに桃太郎侍の両刀を見るのだ。

「坊や、早くだんなのような強い侍になりなよ」

そば屋が七輪の下をあおぎながらわらった。

「世の中にゃあんな貧乏人泣かせの毒虫が多くってかないません」

かんばしい汁のにおいが夜気にしっとりと流れて来た。

（なるほど、世の中は広い）

浅草聖天横の裏店、俗にお化け長屋というのだそうだが、伊之助のわび住まいに一夜をあかした桃太郎侍は、路地に面した三畳で朝茶をきっしながら感心していた。

伊之助がきれい好きとみえて、やもめ暮らしに似ず、ここだけはこぢんまりとかたづいているが、——なにしろ、この辺浅草の奥山という盛り場をひかえて、やし、かごかき、日雇い人足、棒手ふりなどは上の部で、すり、かっさらい、小どろぼう、どうかすると人殺し凶状まであるやつがもぐりこんでいるというのだから、ただゴミゴミとがさつで、無知で、らんぼうで、夏の暑い時でもあったら、ちょっとその悪臭にいたたまらなかったろう。

しかも、貧乏人の子だくさんというごたぶんにもれず、その子どもの多いこと。——もっとも、役にたつのは日かせぎに出ているだろうし、でっち奉公に行っているのもあるだろう、あまり大きいのは見かけない。せいぜい十歳どまり。

「変なのがすわってるよ」

さっきから何人も何人も窓をのぞいては、チョロリと消えるのだ。侍が珍しいというわけではあるまいが、きちんと服装がととのって、折り目正しくすわっているのが、ここでは物珍しいらしい。

「——」

桃太郎侍がニッとわらって見せると、

「やあ、笑ってやがらあ」

わめいて逃げて行く。苦笑せずにはいられなかった。

子どもばかりではない。窓の筋向かいが共同井戸で、洗たくしているのや、水をくみにくるのや、なんとも行儀がいいとはいわれぬ女たちまで、

「ちょいと。伊之助さんとこへ変なのがきたね」

「ああ。あのおつに気どってすわってるんだろう？　今も話してたんだよ。おおかた、元の主人とかいうやつで、きのう途中でつかまったんだろう。つかまえたほうは運がいいが、つかまった伊之さんこそ、この米の高いのに因

果なもんだってね」
「ちょいといい男じゃないか」
「そいつが身のあだでね、どうせ腰元かなんかに手を出して、甘ったれているところを人に見つかってさ、不義はお家の法度と来たんだあね。どうもそんなつらだよ」
当人は聞こえないつもりだろうが、ないしょ話などできる連中ではない。つつ抜けに聞こえて——ゲラゲラ笑っているのだ。
(大変なことになった)
桃太郎侍は驚いてしまった。が、話の様子では、伊之助はこの連中にも評判が悪くないらしい。
「だんな、驚いてますね」
食器のあと始末をすませて、伊之助が台所から上がって来た。
「少し、かってが違うようだな」
「なあに、すぐ慣れまさあ。これであの連中は口ほど腹は悪くありません。みんな貧乏にいじめられてますからね、お互い同士は仲がいいんです」
「そういうものかな。わしのことを不義者にきめてしまった」
「フフフ、男がよすぎるからでさあ」
伊之助はクスリと笑いながら一服つける。
「きさま、きょうは商売はどうする」
桃太郎侍は思ったよりがっしりとした伊之助の骨組みを見ながらきいた。
「一日休んで、様子を見ましょう」
平気でいう。相手は田原町の上州屋亀八、ばくち打ちでぜげんをかねた有名な悪玉だ。あれだけのことをされたきのうのきょう、黙ってひっこんでいるはずはない。覚悟をきめているらしい。
「それもそうだな」
桃太郎侍がうなずいた時、そっと台所の戸が開いて女の声がした。
「ああ、お俊さんか。——遠慮なくこっちへお

上がんなさい」
伊之助はすわったまま台所のほうへ声をかけた。この男のどこに、ゆうべのあの闘志があるのだろうと思われるくらい人のいい顔だ。
「ごめんくださいませ」
お俊はふたりの前へ、しとやかに両手をついた。この裏長屋にはない行儀である。
「ゆうべはあぶないところをお助けいただきまして、お礼のことばもございません」
身にふりかかる不運におびえてよく眠れなかったか、あおざめた顔はしているが、——おっとりと落ち着いた年増盛りのみずみずしさが、おのずとからだにおいこぼれて、なるほど、ぜげんが目をつけそうな美貌である。
「なあに、あっしなんかのはただがむしゃらで、礼をいわれちゃ恥ずかしいが、——ね、だんな、これからが少しめんどうじゃありませんかね」
「しかし、金さえ返せば別に文句はあるまい」
桃太郎侍は至極おうようだ。
「まあ、そういえばそんなものですがね」
借りた金は五両、しかも、この春仙吉が大病をわずらった時、針仕事先の上州屋亀八が自分のほうから、——困った時はお互いだ、つごうのいい時返せばいいからと、おためごかしに用だてくれたのだという。伊之助はあとで聞いて、その時すでに臭いと思った。はたして、このごろになって、ないのを承知で急に返せ、利子は月一両、金ができなければ、からだで立て替えてもらおうと、火のつくような催促だったという。
利子が月一両などというべらぼうな話は、あとになって言いだしたのだとも、ゆうべはじめてきいた。
「ね、お俊さん、あの亀八のやつ、おまえさんをめかけにでもしたい下心があったんじゃありませんか？」
「はい」
お俊は急にあかくなった。

「そうだろうね。お俊さんはつつしみ深いから口にしない。が、あのやろう、きっと金で恩にきせて、いい寄ったのをはねつけられたんだ。その腹いせが無理な催促になった。もともと金が目当てじゃない。ひどいどろ亀やろうでさ」

伊之助がくやしそうな顔をする。

「失礼だが――」

桃太郎侍がなにげなくきいた。

「ご主人は何か修行の旅に出られたと聞いたが、その後たよりはおありかな」

「はい」

「もう長いご修行のようだが」

「――」

深い事情があるらしい。お俊は当惑したように面伏せた。

「いや、別に立ち入っておうかがいしようというのではありません。――では、今までずっと針一本で、子どもを養ってこられたのですな」

「はい」

「ご苦労おさっしする。拙者も母ひとりに養われて成長しました。どうか、子どものために、おおしく世の中とたたかってあげてください」

「わたくしの、わたくしの心得ちがい――お恥ずかしゅうございます」

そっと涙をぬぐうお俊をながめて、――こういう不幸な女を平気で食い物にする、ことに子どもの母をしいたげる冷血漢、許しがたい、と桃太郎侍は思った。

「お俊さん、心配しないがいい。あっしひとりじゃ夜逃げでもしてもらうよりほかに知恵のないところだったが、ちょうどいい時だんなにめぐりあったもんだ。――まあ、親船に乗った気で安心しておいでなさい」

サルの伊之助が冗談のように本音をはく。

不意にバタバタとどぶ板を鳴らして路地へ駆けこんで来る大ぜいの子どもの足音がした。ワアッという声が、ただごとではない。

「おじさん、大変だよ。来たよ来たよ！　おっかさんをとりにきたよ」

仙吉が目をまるくして飛び込んできたのである。子ども心にもおとなたちの話を心配して、今まで路地の入り口に見張っていたのだろう。

――ゾロゾロ仙吉について来た子どもたちが、

「ほんとだよ、お侍のおじさん。田原町の泥亀が子分を連れて来たんだぜ」

「女さらいの泥亀なんだ。こわいんだから、あいつは」

表にかたまって、口々にいう。おそらく、この長屋にも、その鬼にさらわれて行った娘たちが相当あるだろう。

「坊や、その棒はなんだ」

桃太郎侍は笑いながらきいた。仙吉が三尺ほどの青竹を、たいせつそうにつかんでいる。

「拾ったんだ」

「それで坊や、泥亀退治をするのか？」

「――」

仙吉は気恥ずかしそうに、そっと青竹をそこへはなした。

「仙吉、おうちへ帰っていなさい」

母親がたしなめるようにいった。

「はい」

仙吉は不安そうに、チラッとその顔を見上げたが、強い母親の目がにらんでいるので、すごすごと出て行こうとする。

「仙坊、心配しなくてもいいんだ。おとなしく家で待っておいで」

うしろから伊之助がふびんそうに声をかけてやった。

「あ、来たぞ！」

「逃げろ！」

集まっていた子どもたちが、わけもなくむらスズメのように飛び散った。

「わたくし、ここにいましてもご迷惑ではございませんでしょうか」

「かまわん。なにをいっても知らん顔をしておいでなさい」

桃太郎侍はすわったまま笑っていた。
「ここだ、親分」
「畜生、そろってやがる」
そういう声が急に表で立ち止まった。見ると、ゆうべのふたりが先に立って、うしろから四十年輩のでっぷり太った大男、いなかずもうの大関を取ったやつだそうで、唐桟の着流しに太い長脇差、仁王のような顔をうなずかせ、ヌッと中へはいって来た。
「おう、ゆうべこいつらの仕事をじゃまをしたのは、おまえたちだってな」
無作法なやつだ。いきなりあごをしゃくって、ジロジロにらみ回しながら、おうへいにわめきたてる。
「――」
桃太郎侍は黙ってその悪相をながめていた。
「やいやい、なんだって、人の顔ばかり見てやがるんだ。てめえ、口がきけねえのか」
「――」
「おれはこの浅草界隈でちっとは名を知られた上州屋亀八って男だ。てめえたちのような青二才になめられちゃ顔が立たねえ。そこにいる女にも、十一両という大金が貸してあるんだ。くやしかったら、その金をここへ耳をそろえてならべてみろ。小判で十一枚、文句があるなら、そのうえで聞こう。断わっておくが、待ってくれの、負けてくれのってえ泣きごとは、こんりんざい聞かねえよ」
ないとたかをくくって大みえを切る。
「そこに証文を持っているか」
「あるとも、見たけりゃ拝ましてやろう」
大きな皮ザイフから自慢そうに取り出したのは金五両の証文、お俊のらしいつめ印がおしてある。
「お俊さん、これに相違ないか」
「はい」
うっかり借りたこの一枚の証文のために、危うく貞操をじゅうりんされようとしているのだ。お俊はじっとうなだれた。
「ここには五両と書いてあるな」
桃太郎侍は証文を見直しながら、おだやかにきいた。
「元金が五両、利子が六両、おれの金は人のより利子が高いからね。いやなら初めから借りねえがいいのさ」
泥亀はすましたものである。
「そうか。――伊之助、わしの紙入れから金子を出してくれ」
「だんな、いうなりに払うんですか？」
伊之助は不服そうだ。
「いいから出しなさい」
「へえ」
押し入れの中から数えて取り出して来たので、桃太郎侍はあっさりとそこへ投げだした。
「小判で十一枚、別に耳はそろえんから、かってに自分で数をとれ」
「おや」
意外だったのだろう、泥亀はさんぜんと輝く小判をてばやくかき集めながら、
「なるほど、おまえさんは利口者だ。変におれなどに逆らうと、せっかくの色男が台なしになるからね」
「――」
「たしかに十一枚、十一両、――どこから拾って来たか、盗んで来たか知らねえが、もらっとくよ」
憎まれ口をたたきながら、サラサラッと皮ザイフの中へ流しこんでふところへ入れる。
「ところで、おい、ゆうべこいつらが、ちっとばかり痛い思いをしているんだ。親分とか、子分とかいわれてみりゃ、黙ってすますわけにもいかねえ。こいつらの療治代のほうはどうしてくれるね」
相手を弱いと見ての難題、亀八はずうずうしくつけ上がって来た。
「ほう、療治代が入用か」

「あたりめえじゃねえか。てめえたちにひっぱたかれて、黙ってひっこんでいたといわれちゃ、上州屋亀八の顔にかかわらあ。なんとかあいさつをしてもらおうじゃねえか。断わっとくが、おれにつむじを曲げられると、ただじゃすまねえよ」

「そうか。では、あいさつをしてやる。表のあき地へ行け」

「なんだと――？」

「断わっておくが、わしのほうは、さっきから大いにつむじが曲がっている。ただではすみそうもないから、覚悟して行けよ」

桃太郎侍はニコリとわらった。まじまじとその顔をながめた亀八、

「こん畜生、ふざけたことを！　さあ、もう承知できねえ。たたっ殺してやるから出て来い」

バカにされたと気がついて、憤然といきりたった。

「まちがっちゃいかん。たたっ殺されるのは、おまえのほうだ。ムダ口をたたかずと、さっさと表へ出なさい」

「畜生、ようし、こんちくしょう！――やい、やろうども、何をぐずぐずしてやがんだ」

泥亀ははがみをしながら、子分どもをどなりつけて、ノッシノッシと表へ出た。

「だんな、桃太郎のだんな、お刀は？」

伊之助がさすがに緊張して呼び止める。

「そんなものはいらん。おまえたちは来るな」

桃太郎侍はさっき仙吉が捨てて行った青竹を拾って、気軽に亀八のあとを追って出る。

「伊之助さん、だいじょうぶでしょうか」

お俊がオロオロと腰を浮かした。

「なあに、だんなは強いからね。やっとうのほうじゃ免許皆伝なんだ」

伊之助はきのうの天王橋の腕まえを見ている。おそらく免許皆伝なんだろうと、ひとりできめているが、それにしても、刀を持って行かないのが心配だ。弘法にも筆の誤りということがある。

「とにかくおかみさん、あっしは行って見て来る」

桃太郎侍の大刀を取るなり、伊之助はたまりかねて、ぞうりをつっかけた。

とんだあばれ者がそろっているお化け長屋の連中さえ、今まで上州屋亀八には手も出なかった。わずかな言いがかりから、女房や娘をさらって行かれて泣き寝入りになっているのが相当あるらしい。

その亀八とふたりの子分を相手に、桃太郎侍が、けんかを買って出たのである。

「だいじょうぶだろうかね、たったひとりで」

「そりゃおまえさん、やっとうを知っているだろうさ。ほら、青竹を持って、笑いながらついて行くよ。やっぱり、お侍は度胸がいいね」

さっきまでのあくたいはケロリと忘れて、こうなると長屋じゅうが長屋の者の味方になるから不思議だ。

長屋を出はずれたあき地は、おおやがいつも古材木などをつんでおくところで、子どもたちのいい遊び場所になっている。

「やろうども、かまわねえから、ばらしちまえ。たかが青二才一匹、負けると承知しねえぞ」

亀八がこわい顔をした。

「へえ」

いずれは凶状持ちらしいふたりの子分ども、相手の得物が青竹一本とわかっているので気が強い。無気味な目を光らせながら、手に手にのんでいたアイクチを抜き放った。

「やろう、命はもらったぞ」

すごい顔をしてジリジリ左右からつめ寄る。

「どこからでも来い」

桃太郎侍は右手に青竹をさげて、別に身構え一つするでもなく、平気でわらって立った。しらじらと明るい秋日の中、さすがに人々はハッと息をのんで、これを殺気とでもいうか、妙にいらだたしい空気が、しーんと息苦しいまでに緊張して来る。

「どうした、小悪党。みえばかり切っておらんで、いいかげんにかかって来ぬか」
からかいながら、桃太郎侍の涼しい目が深く澄んでいる。おうようなうちにも、どこか凛と張りのあるつら魂に圧倒されて、ふたりともちょっと、かかって行けないのだ。
「ハハハ、おまえたちのはつら構えばかりすごいな。子どもではあるまいし、にらめっこならやめろ」
「ぬかしたな、やろう！」
ひとりがたまりかねて、アイクチをかざしながら、タッと飛び込んで来た。もとより法も術もない命知らずのけんか仕込み、まるっきり胴があけっぱなしだ。
「それ、ケガ代一本！」
とっさに左足を引いた桃太郎侍の青竹が、片手なぎにあけっぱなしの胴へ風をきって、ハッシ！　よけるもかわすもない。
「ワアッ」
そのまま前へつんのめって行く。すかさず残るひとりが、こやつはアイクチを両手で引きつけるように胸へ構えて、からだごと横合いからつっかけて来た。
「どっこい！」
ヒョイとふり返りざま、返す青竹が目にも止まらず、したたかそやつの肩先へ、
「ウウム」
大の男がふたりとも、青竹一本であっさり左右にぶっ倒れる。
「こんちくしょう、やりやがったな！」
じだんだふんだ亀八、いつの間に取ったか太い丸太ん棒をふりかぶって、力いっぱいビューン！　と打ち込んで来た。なるほど、すもう上がりだけに、すごい力だ。
「あれえッ」
こわごわ見ていた女たちや子どもたちのほうが、思わず悲鳴をあげる。一つ当たったら、人間のからだなど、骨がバラバラに砕けて飛ぶだろう。
「ほう、えらいものを持ち出したな」
ヒラリと飛びすさりながら、さすがの桃太郎侍もあきれて目をみはった。
「さあ、やろう、よくも亀八様をおこらしやがったな」
仁王のようなやつが、大丸太を振り回して来るのだ、これは子分たちのようにあっさりというわけにはいかない。
「亀八、自分でその丸太をしょわぬように気をつけろよ」
「何を、このやろう、動くな！」
ピューンと横になぐ。桃太郎侍は風のように飛びのいた。それを追いかけて、
「こんちくしょう、たたっ殺してくれる」
ヨイショ！　ブーンと打ちおろす。スルリとかわして背後へかけ抜け、
「こっちだ、上州屋。かわいそうに、きさま、やぶにらみだな。――泥の亀八、やぶにらみか。ハハハ」
桃太郎侍がはやしたてる。
「なにを！　ど――うだ、やろう！」
からだごと、うなりを立ててふり回してくる。縦横自在に恐るべきくそ力だが、――それを飛びのき、かけぬけ、桃太郎侍の身の軽さ、まるで弁慶をなぶっている牛若丸という図だ。
「やろう、こんちくしょう」
「そら、また違った。こっちだ、こっちだ」
小バカにされて逆上ぎみの亀八、もうむちゃくちゃだ。力いっぱいあばれまわっていたが、人間の体力には限りがある、しだいに疲れて来て、三度に一度はふりおろす丸太が、ドスーン！　地響き立てて地面をひっぱたくようになった。フーフー肩で息を切って、滝のような汗だ。
「どうした、泥亀、だいぶ参って来たようだな」
桃太郎侍は涼しい顔をして、別に息一つ、はずませていない。
「うーん、このやろう！」

死力をつくして風車のごとく横へ払ってきたのはいいが、勢い余って自分の腰をとられ、クルクルと二、三回、ついに目がまわったか、ドスンと大きなしりもちをついた。

「さあ、やろう、かんべんできねえ」

しりもちをついて、みえを切っている。だらしのない泥亀弁慶だ。とうとう丸太をほうり出して、長脇差を引き抜き、ヨロヨロッと立ち上がろうとするところを、

「たわけめ！」

おどり込んできき腕をビシャリッ！

「アッ」

ガラリ刀を取り落として、ごていねいにも、もう一度しりもちのつき直しだ。

「動くな！　亀八！　動くと脳天を打ちくだくぞ」

その前に立って桃太郎侍が、さっと青竹を振りかぶった。

「へえ」

思わず泥亀が首をちぢめる。見ている連中が喜んでワーッと手をたたいた。

「さあ、療治代を払ってつかわすから、もう一度ここで、さっきのタンカをきってみろ。断わっておくが、泣きごとは聞かぬぞ！」

ほんとうに打ちおろしかねまじき激しい気合いに、アッと亀八はあおくなった。

「だ、だんな、お見それいたしました。こ、このとおりあやまります、だんな」

いじもみえもなく、そこへ両手をつく。

「療治代はどうなるのだ。きさま、利が高いと自分で申したな。望みの利子をつけて払ってつかわすから、申してみろ」

「あやまります。助けておくんなさい。そのかわり、利子は、さっきの六両の利子は、返せとおっしゃればお返しいたします。ありゃ少したこうございました」

「そうか。高いと気がついたら、遠慮なくそれへ出せ」

「へえ」

亀八はしぶしぶとサイフから六両取り出して、なごり惜しそうに数えながら手渡ししようとする。

「バカ、一度けがれた金を、武士が手にうけられるか。そこへ置け」

「へえ」

六枚の小判を、泥亀はいわれるままに地面へならべた。

その日ぐらしの多いこの貧乏長屋に、小判の色は珍しい。しかも六枚、地面に並んで燦と輝いたから、見物のかみさんれんは思わず目をまるくした。

「伊之助――！」

桃太郎侍はふり返りながら呼んだ。さっきから桃太郎侍の大刀を腰に差して、へっぴり腰をしながら感に堪えて見ていた伊之助が、

「へえ、お刀ですか、だんな」

飛び出して来て、急いでささげるように差し出す。

「持ってきたのか」

桃太郎侍は苦笑しながら受け取って、

「この小判、上州屋亀八が長屋じゅうを騒がしたわびに、ほんのあいさつがわりだということだ。モチでも買って、みんなにくばれ」

「あの、これをみんなでござんすか？」

伊之助があきれる。大工の手間が一日三匁（三銭五厘）で月に一両あれば一家五人を養って寝酒がのめるご時世だ。長屋じゅうといっても五十軒足らず、一両一石と見て六両で六石、あいさつがわりに一軒当たり一斗二升のモチは、少しおおげさすぎる。

「かまわん。上州屋の罪ほろぼし、このとおり両手をついてあやまっているのだから、おまえ亀八にかわって、あいさつしてやれ」

「へえ」

伊之助もめんくらったが、亀八もすわったまま、どんぐりまなこをパチクリやっている。

「ようござんす。一つやらかしましょう」
そこはしゃれっけのあるサルの伊之助、度胸がきまると、エヘンと一つせきばらいをして、
「ええ、お集まりのお長屋の衆、これなる上州屋亀八にかわりまして、てまえ口不調法ながら、ちょっとごあいさつを申し上げます。亀八儀、今日まで、ずいぶんとあくどいまねをつかまつりまして、お長屋様じゅうを泣かしたこともござりまするが、このたび、これなる桃太郎侍のだんなのご意見が身にしみまして、今後は心を入れかえ、必ず世間様へ善根を施すように心がけます。どうぞ、これまでのことは水に流して、以後はごしんせきづきあいが願いたく、つきましては、ごあいさつがわりに、モチ少々おくばりつかまつります。まずは口上かくのとおり、すみからすみまでズラリッとお許し願いたてまつる」
うやうやしく一つおじぎをした。
「よう、呉服屋ア！」
「伊之助屋ア！――モチをごまかすと、きかないようッ」
ワアッという騒ぎだ。
「わかったか、亀八」
桃太郎侍は、わらいながら上州屋を見おろした。
「へえ」
「わかったら、子分をつれて、さっさと帰れ」
「へえ」
上州屋亀八の器量の悪いこと、未練らしく地面の小判をながめていたが、フラフラッと立ち上がって歩きだした。が、よっぽどくやしかったらしい、路地口でヒョイと仁王づらをふり返って、
「おぼえてろ、青二才！」
せめてもの捨てぜりふ、ノソノソとかけだした。太っているから、思うようには走れないのだ。
「なにいってやがんだい、泥んこ亀」

「お化け長屋にゃ桃太郎だんながついてるぞ」
モチに浮かれたかみさんたちが、口々に浴びせかける。いや、そのにぎやかなこと！――桃太郎侍が苦笑しながら引き揚げようとすると、
「お侍のおじさん」
家で留守番をしていたはずの仙吉が、目を輝かしてかけよってきた。
「なんだ坊や、見ていたのか。さあ、帰ろう」
手をひいて家へはいると、
「かさねがさねご迷惑をかけまして」
お俊が両手をつくなり、うれしさ、ありがたさ、女心の胸が迫って、思わずすすり上げた。

いろは草紙

一躍桃太郎侍はお化け長屋の英雄になった。
いや、お化け長屋ばかりでなく、もてあまし者の上州屋亀八をおもちゃにした痛快さと、モチの山を長屋じゅうへくばった風変わりな話は、だれにもまねのできないことだけに、聞くほどの人をすっかりうれしがらせて、たちまち浅草じゅうへひろまってしまったのである。
それがまたお化け長屋の連中の自慢の種となって――うちの親分、うちのだんな、うちの大将と、呼びかたはさまざまだが、人に話す時は必ず、うちの、と頭へつけることを忘れない。
そこまではよかったが、なんといっても貧乏長屋のこと、
「だんな、いいにくいんだが、ガキが急病なんで、助けておくんなさい」
「親分、かかあのやつがあわてやがってね、ひと月早く生んじまったんだ。こんだけ一つ」
せつぱつまったのが、なんのかのとかけ込んでくる。五十軒からある長屋だ。借りにくるほうは今度だけだろうが、貸すほうになると、のべつ幕なしということになる。金高はわずかだが、なかには借りたっきり返すのを忘れてしまうひどいやつがあったりして、たちまち、だん

なの金が減りはじめた。
「こりゃいけねえ。だんな、あんまりいい顔ばかりしていると、いまに裸にされちまいますぜ」
財布を預かっている伊之助が心配しだした。
が、桃太郎侍はおうようなものである。
「なあに、裸になってしまえば借りにこないだろう。つまらん心配はするな」
これでは手がつけられない。
(まるでお大名なんだからな、おれが働くよりしようがねえや)
モチ配りやなにかで四、五日遊んでしまった伊之助は、その日からまた、かつぎ呉服にでることにした。
「お俊さん、時分どきだけ頼みます。だんなは台所を知らないんだから」
「いってらっしゃいまし。あとはわたくしが何でもご用に立ちますから」
頼んでおいて長屋をでた伊之助は、表通りまできてハッとした。向こうから代地の踊りの師匠坂東小鈴が、どこへ行っても人目につくあですがた、往来の目を奪いながら小ぶろしきをかかえて来かかるのである。
(いけねえ、とうとうかぎつけやがった)
思わず立ち止まると、向こうでもこっちを見つけたらしい。
「あのう――」
いかにもなにげなさそうに、ニッコリ立ち止まって、
「ちょいとお伺いいたしますが、このご近所にお針のじょうずなかたで、お俊さんとかいうお内儀さんをご存じないでしょうか」
ずうずうしいやつだ、ちゃんと知っているくせに、そらっとぼけたことを聞く。
「さあ」
しゃくだから伊之助も、わざと小首をかしげて見せた。
「ご存じありません？　なんでも、かつぎ呉服の伊之助さんとかいう人のお隣だと聞いてきたのですけれど」
かってにしやがれ――！
「知りませんねえ」
伊之助はさっさと歩きだした。だが、こうなるともう商売どころではない。早く裏路地から引っ返して、桃太郎のだんなを連れだすか、そばへついていてじゃまをしてやるか、どうも女はお俊が目当てではなく、桃太郎侍をくどきに来たんだから、油断はできない。
そのつもりで、急いで別の横丁へ曲がろうとすると、
「もしもし」
ふいに小鈴が呼び止めるのだ。
『あなた、何か落ちています』
(畜生――！)
ふり返って伊之助は、ムカッときた。――サイフを落としていたのである。いや、どう考えても落とすはずはない。いつの間にか、小鈴がいたずらをしていたに違いないのだ。
「――」
しゃくにさわるから、黙って拾って行こうとすると、
「あら、せっかく教えてあげたのに、黙って随徳寺――？」
小鈴がからかうようにいう。
「おいら、少し忙しいんでね」
伊之助はにらみつけた。
「ホホホ、だれだってしゃくにさわるでしょ？だから、あんまり人の家へなんか黙って忍び込んでいただきたくないのさ」
さては、あの晩、忍び込んで立ち聞きをしていたことがわかったとみえる。そのかたき討ちだったのだ。
「チェッ、人聞きの悪いことをいうねえ」
「あたしこそ、人聞かれの悪いところをさんざん聞かれちまって――あとで顔から火がでたじゃありませんか。おサルさんにゃかなわない」
あだ名まで知ってやがる。伊之助は驚かざる

をえなかった。
「伊之さん、そんなこわい顔しないで、いいかげんに仲直りしない？」
「――」
「うちの人が厄介になっているんだもの、あたしはかたき同士みたいに、にらみっこしていたくないのさ」
「うちの人ってのは、だれのことでえ」
「桃さんのことよ。知ってるくせにいやな人ね」
にらんでポッとあかくなった。――いけねえ、いけねえ、この色っぽさで詰め寄られたら、いくら親分が堅人でも、しまいにゃくどきおとされてしまうと、伊之助はぞっとした。
「だけど、たいへんな評判ね。浅草の桃太郎侍が鬼退治をして、モチをまいたって、両国のほうまでそのうわさ、あたしゃ少し心配になってきた」
「大きなお世話だよ」
「そうはいきません。あんまり強いと人にねらわれる。それに、男はいいし、妙なうわきのムシにでもつかれると困ります」
「フフフ、もうそのムシがたかってきやがって、大困りなんだ」
「本当、伊之さん。どこのだれさ」
「大きな声を出すねえ、往来の人がふり返って行くじゃねえか」
そのとおりなのである。あだっぽい女との立ち話、みんなふり返って行くのだ。
「だって、心配なんだもの。どこの小娘？　それとも商売女？」
「代地の坂東小鈴とかいうしたたかな姐御ムシだそうだ」
「よしておくれ。こう見えても、あたしはちゃんと約束をかわした女房ですよ」
「お断わりだ。伊之の目の黒いうちは、肩書きのある女なんかには、だんなは渡せねえ。うちの人だなんて、あんまりこころやすだてに呼んでもらいたくないね」

伊之助はいじわるくせせら笑った。
「肩書きがあって悪うござんしたね。おまえさんがそういう気持ちなら、もう頼まない。サイフを落とさないように気をつけておかせぎ」
プッと小鈴はふくれて、――そのおこった顔がまたうわき男ならわざとおこらして喜ぶだろうと思われるほど、なまめかしいのである。この女は悪魔だと、伊之助はあきれた。
「おや、おまえさん、ついてくるつもり？」
ついて行かざるをえない。伊之助は黙って女のあとから歩いた。
「どこまでもじゃまをする気だね、やきもちザルめ、犬に食われちまえ！」
小鈴は悪口をついて、さっさとお化け長屋のほうへ横丁を曲がった。やっぱり、ちゃんと知っているのだ。
長屋の路地へはいって、伊之助はアッと目をみはった。例のあき地まで来た時、
「いろはにほへと、ちりぬるをわか……」
大ぜいの子どもたちのいっしょに歌うような声が耳を驚かしたが、それが自分の家からなのである。
子どもたちが窓いっぱいにたかって歌っているのだ。いや、窓ばかりではない、家の中にもはいりきれないほどつまって、いずれを見ても山家育ちといいたいガキどもが、顔を輝かして熱心にいろはにほへとと、暗唱している。
窓ぎわに、路地を背にした桃太郎侍が端然とすわっている。子どもたちがやっぱり将棋のコマのように胸を張ってかしこまって、みんな一様に先生の顔を見ているのだ。
井戸ばたで洗たくをしている娘さんたちが、きょうは自分のおしゃべりを忘れがちに、耳を傾けながら、楽しそうな顔をしていた。
（なあるほど――）
伊之助は胸を打たれてしまった。自分がかよった寺小屋、その遠い昔をなつかしく思い出すと同時に、それを始めてくれた桃太郎侍の心が

うれしかったのである。
（わしは世の中の弱い者、貧しい者の味方になって鬼退治をする）
その気持ちにほれたから文句なく子分になったのだが、ここまでは気がつかなかった。
子どもたちに、いろはを仕込み、行儀を教える、どんなにそれが貧しい子どもたちの幸福になることか、――それをやってくれようとする桃太郎侍の心が尊くありがたい。親分はただ強いばかりじゃなかった。
（やっぱり、おれたちとは違うな。見ろ、あの子どもたちのうれしそうな顔を、聞いてくれ、あのいきいきとした張りのある声を！　きょうまでこの腐ったように暗いお化け長屋に、こんなはつらつとして美しい空気のただよった日が、一日だってあったか）
伊之助はじっと立ちつくした。目がしらが熱くなって来た。
「――」
ひょいとふり返って、小鈴がしんみりとわらった。これも唖然としてながめていたのだ。
（ざまあ見やがれ！　これじゃいくら化かそうたって、そばへも寄れねえだろう。だんなは神様なんだ）
それにしても、親分がこんな女に迷わされはすまいかと心配したのは、けちな了見の自分たちの思い過ごし。おれは働かなくちゃいけねえ。うんと働いて、この親分に安心して世の中のために尽くしてもらわなけりゃならねえ、――伊之助はそう思った。
小鈴は黙って、隣の家へはいって行く。
「ごめんなさい。お針のお俊さんのお宅ですね」
「はい」
お俊が針をおいて、この見知らぬあだっぽい女を不思議そうに見あげた。気のせいか、あれ以来顔色もさえて、これは寂しい女だが、また捨てがたい美貌である。
「あたし、お隣の伊之助さんに聞いて、仕事をお願いにあがったんですけど――」
それとなくじっとお俊をみつめながら、――小鈴はやっぱり心配になるらしい。それより、伊之助さんに聞いてと、平気で切り出した度胸のよさに、立っていた伊之助はあきれた。
「まあ、ようこそ。きたのうございますが、どうぞお上がりくださいまして」
何も知らぬお俊はいそいそと縫いかけの仕事を押しやって立ち上がった。
「あ、お俊さん」
伊之助が急いで叫んだ。
「はい」
「大将はたいへんなことを始めたね」
あごでさす隣のにわか寺小屋は、急に子どもの暗唱がピタリとやんで、涼しい桃太郎侍の声が聞こえてきた。
「いろはは四十八文字ある。昔、弘法大師という偉い坊さんが作ってくれたものだ」
凛として教えている桃太郎侍の声に聞き入りながら、
「あの、おじさんがお出かけになると、すぐ始まりましたの」
お俊がうれしそうに答えた。
「はじめ、家の仙吉に素読を教えてくださるとおっしゃって――子のたまわく、学んで時にこれを習う、またよろこばしからずやと始めますと、お子さんたちがいっぱい窓の下へ集まってまいりまして、お侍のおじさん、おいらにも教えてくれよと」
それではみんな上がれ、おまえたちにはいろはから教えてやると、始まったのだという。
「家へはいれない子が、あんなに窓の下まで立って――」
話しながらお俊はニッコリした。目に涙さえためている。
「せまいねえ、あれじゃ。机だって買わなけりゃいけないし」
伊之助はひとりでうなずいた。もう小鈴など

問題でないのである。
その小鈴はずうずうしく上がりこんで、出された座ブトンに澄ましてすわっていた。が、耳は隣の桃太郎侍の声をじっと聞いている。
「なんでしたら、わたくしのほうも使っていただいていいのですけれど」
「そうだ。お俊さんだって、学んで楽しからずやを知ってるくらいなんだから、いっそお針なんかやめちまって、だんなのてつだいをしたほうがいい」
「まあ、わたくしなど――」
お俊はあかくなった。
「とにかく、あっしはかせがなくちゃ」
チラッとうらやましそうな顔をする小鈴を見て、伊之助は得意だった。
「行っていらっしゃいませ」
「頼みます」
伊之助は軽い足取りで出て行く。
「――みんなは、だれだって偉い人になりたいだろう。道で人に出会ったら、向こうから今日はと丁寧に頭を下げてもらいたいだろう。あいつは物知らずだといわれるより、あの人は偉い人だといわれたいだろう。そういうりっぱな人になりたいと思ったら、どうしても字を知っておかなければならない」
桃太郎侍のじゅんじゅんといって聞かせている声がする。
「失礼いたしました」
その声を楽しんでいるように、お俊は豊かに両手をついた。
「いいえ、あたしこそ突然おじゃまして――」
小鈴は油断なく、お俊のどこかにもう男のにおいがするのではあるまいかと、鋭敏に探っている。
「あたし、あの、ついでといっちゃ悪いんですけど、実はぜひ桃さんの耳へ入れたいことがあって来ましたの」
お俊はハッと顔を上げた。こころやすげに桃

さんなどと呼ぶ女、不思議だったに違いない。
「代地の小鈴だっていえば、桃さんよく知っているんです。まさか、大ぜい子どもさんたちのいるところへもはいって行けないし、――すみませんけど、あなたからちょっと耳に入れていただけないかしら」
小鈴は勝ち誇っていた。少なくとも、この女には負けまいと自信がついたのだ。
「はあ、なんと申し上げればいいのでしょう」
「ほんのしばらく、お顔が貸していただきたいって――すみませんわね」
「かしこまりました」
お俊はすなおである。桃太郎侍のたいせつな客と見て、すぐに出て行った。が、まもなく当惑したような顔をして、帰って来たのである。
小鈴にはその様子で、もう聞かなくても返事がわかってしまった。
「あの、申し上げたのでございますが、子どもを教えている間は、どなたにもお目にかからぬと申しまして」
お俊はきのどくそうにいった。
「それ、いつごろすむんでしょうね。あたし、どうしてもきょうお目にかからなければならないことがあるんだけれど」
「さあ」
実はけいこ中のじゃまをして、不快な顔をされて来たお俊なのだ。おのれのはしたなさが恥じられて、それどころではない。
「たぶん、お昼ごろには終わると存じますが、なんでしたら、ここでお待ちなさいましては」
「そうね」
勝気な小鈴は、おもしろくなかった。が、その自分の自由にならぬ男が、くやしいけれど忘れられないのだ。
「じゃ、こうしてください。あたしお昼からカゴを迎えによこしますから、ぜひ来てくれるようにって、――お願いしますわ」
「おことづけだけは、たしかにそう申し上げま

す」

小鈴はふろしき包みの中から武家好みの渋い着物を出して、なるべく急いで仕立ててくれるようにと頼んで、お俊の家をでた。

「無理でしょうけれど、くれぐれもお願いしますよ」

かど口へ出てから、わざと聞こえよがしにいったのは、窓から見える桃太郎侍が、もしやこっちを向いてくれはすまいかと思ったからである。が、端然とすわって子どもたちに忠孝の道を説き聞かしている桃太郎侍は、身動き一つしなかった。

（まあ、憎らしい！）

その凛とした男の横顔をにらんで——というより、見ほれていたのかもしれない。井戸ばたで洗たくをしていたかみさんたちの中から、きかないのが、

「へん、いやにきどりやがって、ご覧よ、よだれがたれそうな顔をしてるじゃないか」

とげのあるヤジを飛ばした。さすがの小鈴がポッとあかくなりながら小走りに、——すそから燃えるような緋がこぼれる。

「うちの先生を張りに来たのかしら。そういうけど、いい女だね」

ひとりがうしろ姿を見送りながらいった。

「なあに、着物で引き立つのさ、どうせあんなのは、うわきっぽいあばずれにきまってるんだよ」

きかないのが承知しない。

「だけど、うちの先生は偉いね。ああしてすわったまんま、さっきから横目一つ使わないんだから」

「おや、じゃ、おまえさんは、さっきから先生の顔ばかし見とれていたんだね。うわき者め、亭主にいいつけてやるから」

ゲラゲラとみんなで笑う。

にわか寺小屋のすんだのは、お昼少し前であった。

「いろはにほへと、いろはにほへと、——ご飯にしておくれよう」

歌いながら家へ駆けこんで行く子どもがある。

「おっかあ、あしたからお侍のおじさんが、字を書くのを教えてくれるってさ」

どなりながら飛び込んで、

「バカヤロウ、お侍のおじさんなんていうんじゃない。あしたから先生様というんだ」

母親から妙なたしなめられ方をしている子がある。子も親も、みんなうれしそうだ。

（わしのいうことが、どれだけわかったか知らぬが——）

その子どもたちを見送って、桃太郎侍は心からほほえんだ。こういう子たちを教え導いてこそ、世の中が明るくなるのだと、楽しかったのである。自分の生きがいをはっきりと見いだしたのである。

「だんなさま——」

呼ばれてふとふり返ると、子どもたちが砂だらけにしていったザラザラな畳へ——台所口から上がってきたのだろう、お俊がピタリと両手をついて、あおい顔をしている。

「どうした、お俊さん」

桃太郎侍は思わず目をみはる。

「先ほどは、おけいこ中を心づかぬことをいたしまして、おわびの申し上げようもございません」

罪を待つように、畳へひたいをおしつける。

「ああ、つい夢中になっていたので、にらみつけたようだが——わしこそ失礼した。どうぞ、手をあげてください」

もう、少しもこだわっていないのである。

「わしも急に千松になった。オムスビでもくださらんか」

「まあ。——ただいますぐ、お膳のしたくをいたしますから」

ほっとしたようにお俊がわらった。

「千松といえば、仙坊もおなかがすいたろう。

ついでにこっちへ呼んでください」
「いいえ、あれはあちらで、したくしてやりますから」
「そりゃいかん。おとなが先に食うのはわがままだ。じゃ、拙者もそちらへまいろう」
「――？」
お俊がちょっとためらうような色を見せる。若後家同様の身、さすがに世間の口が気になるらしい。
（なるほど李下のかんむりかな。――仙坊！仙坊！）
桃太郎侍は、ほんのりとあかくなるお俊から目をそむけて、隣へ呼んだ。
「なあに、先生」
「いっしょにオムスビを食うからこい」
「はい」
バタバタッと駆けだす子どもの足音がする。
「だんなさま。あの、先ほどのおかたが、おひるからカゴをお迎えによこす。ぜひ、きょうおはなしせねばならぬことがあるように、申し置いてまいりましたが？」
顔色をうかがうように、お俊がいった。
「捨てておいてください。拙者は、飯がすんだら、仙坊をつれてちょっと運動にでる。早くオムスビをくださらんか。――な、仙坊」
「うれしいな。おっかさん、早くオムスビ」
仙吉はもうちゃんと桃太郎侍とならんですわっていた。
「ほんとうに、オムスビでよろしいのでございますか」
お俊はいそいそと台所へ立った。こうしてわが子に結ばれて来る桃太郎侍が、女心のやっぱり妙に気恥ずかしい。
食後、桃太郎侍は仙吉をつれて、ブラリとお化け長屋を出た。小春びよりといいたいよく晴れた日である。二、三日閉じこもっていたので、若いからだに、外気はやはりすがすがしかった。

竹屋の渡しを渡って向島へ上る。急にいなかめいて、このあたりの秋は人通りもまれに、実ったイネがサヤサヤと風に鳴っていた。
「仙坊、けさの素読を覚えているか」
桃太郎侍は、うれしそうに飛びはねながらついて来る仙吉に、声をかけた。
「覚えてるよ」
「いってみろ」
「ええと、学んで時に習う、よろこばしからずや――」
「違う」
「学んで時に習う」
「違うぞ。仙坊は侍の子ではないか。ほかの町人の子どもとは違う。もっとよく覚えていなければいかんな」
「はい」
仙吉は顔をまっかにした。
「学んで時にこれを習う、またよろこばしからずやだ。大きな声でいってみろ」
胸を張って暗唱する。
「もう一度」
歩きながら二度も、三度も――子どもの透る声は森にこだまして、やがて、長命寺の境内へはいった。
「アッ！」
桃太郎侍は思わず目をみはったのである。長命寺の境内に名高いサクラモチ、その床几に若党ひとり腰元ふたりを従えて武家方の娘が休んでいたが、
「学んで時にこれを習う……」
無邪気な仙吉の暗唱を聞いて、なにげなくこっちをふり返るなり、ハッと立ち上がったのだ。
家柄と見えて、ちりめんの振りそで、錦の帯、十八、九でもあろうか、濡潤と端麗な目鼻立ち、雪なす白さに薄桜の紅をほんのりうつしたかと、におうばかりの高雅な美しさ。――その鈴を張った目が、まじまじと不思議そうに桃太郎

侍をみつめているが、すぐにぶしつけを恥じるように、
「――」
丁重に会釈して、あかくなりながらうなだれた。
（妙な娘）
桃太郎侍は会釈を返して行き過ぎながら、おのずと備わるその高雅な気品に、強く心をひかれているのである。
（あんな美しい娘が、この世にいるとは――）
妙に寂しい気さえした。その感傷を、バカな！　打ち消しても、まぶたに映像が焼きついて、われながら苦笑せざるをえない。
「おじさん、おれ剣術も教えてもらいたいなあ」
暗唱にあいて、仙吉がいった。
「うむ、いまに教えてやる」
「学問を覚えて、剣術が強くなれば、りっぱなお侍になれるねえ」
「なれるとも。――しかし、仙坊はなんのためにりっぱな武士になりたいのだ」
「それはね、あの――」
ちらっと顔を見上げていいしぶる。
「いえないのか？」
「ううん」
「なら、いってみろ。男の子ははっきりと物をいうものだ」
「おれ、おれ、偉くなったら、おっかさんが喜ぶだろう、ねえ、おじさん」
仙吉ははにかむように目を輝かした。
「そうか」
桃太郎侍の胸に、ふっと少年時代のおのれの姿がほうふつとして浮かびあがる。乳母千代を実母と思い込んでいた自分は、やっぱり母のために早く偉くなりたかった。父のいない母が、子ども心にどんなに哀れに思えたか？
「仙吉、その心がけを忘れるなよ」
桃太郎は小さな手を強く握ってやった。
「その心がけを忘れずに、いっしょうけんめいに勉強すれば、きっとりっぱな武士になれる」
「うん、おれ、いっしょうけんめいおじさんに学問を習って、剣術を教えてもらうんだ」
「よし、教えてやるぞ」
いつの間にか、娘の映像が消えていた。――おれにはたくさんの弟子がある。ほっておけばどんな人間になるかわからない貧しい子どもたち、親たちからさえ無関心にすてられがちな哀れな子どもたち、その弟子たちを育ててやるために、おれは一生をささげてやらなければならないのだ。
（学んで時にこれを習う、またよろこばしからずや）
たのもしい弟子の暗唱が、いきいきとはじまる。
向島堤を引き返して、やがて竹屋の渡しに近づいた。
「ああ、カゴやさん、ちょっと待って！」
うしろから追い越したカゴの中から、かん高い声がしてサッとたれが上がった。
「桃さん！」
小鈴である。妖精のような目がキラキラと燃えて、
「ひどい人ねえ。あたしがあれほど念を押していいおいて、せっかく迎えにやったのに、――からカゴで返すなんて、あんまりじゃありませんか！」
恨みがましくひしと見上げて来る。
食いついたら放さない小鈴の執念、結局桃太郎侍は負けて、仙吉を女の乗っていたカゴで帰し、ほど近くの大七という料理屋の離れに連れこまれてしまった。
窓障子いっぱいにひざしの明るい秋のひるさがり、閑静な離れを囲む疎林に、時々ヤブウグイスのそぼくな声がする。
「はい、お一つ――」
女中が酒さかなを運んで去ると、小鈴は器用に杯洗の水を切って杯を差した。身近にほれた

男を引きつけて、うれしそうである。
「だいじょうぶかな」
「何が？」
「おまえは時々、器用な手品を使うという話だが」
桃太郎侍は杯を受けてわらった。
「憎らしい！」
いざり寄って、いきなり白い手が男のひざをつねる。
「たわけめ、痛い」
「さ、も一度おっしゃい。こんどは食いついてやるから」
「いや、一服盛りさえしなければいいのだ。もっとも、きょうは盛られるほど持っておらんが」
「おサルさんがしゃべったんでしょ。よござんす。そんなこというんなら、ほんとうに盛って、家へ連れてっちまうから」
「番犬ほどの役にもたつまいよ」
「どういたしまして。ちゃんと長火バチの向こうにすわらして、あげぜんすえぜん、横のものを縦にもさせやしません」
「ついでに首輪をはめて、クサリでつないで、おあずけ、おまわりちんちんを仕込む」
「桃さん、どうしてそう口が悪くなったの。だから、おサルさんなんかに預けちゃおけない」
「あの男がサル——おまえの肩書きは？」
「知りません」
小鈴はつんと横を向いたが、
「ね、それはもう昔のこと、今はすっかり改心して、代地の踊りの師匠坂東小鈴なんですから、そういじめないでくださいよ」
急に小娘のようにしょげてしまった。
「べつにいじめはせんが、では、このあいだの品川のことは、ほんとうにおまえではなかったのか？」
桃太郎侍の澄んだ目が、ちらっと、まじめに光る。
「品川？」

「百姓女に化けたいれずみの小細工」
「ああ。実はそのことで、あたし、ぜひ桃さんに会いたかったんです。すっかり白状しますから——一つお杯をちょうだい」
「——」
このあいだの夜で慣れているから、桃太郎侍酌をしてやるのを忘れなかった。
「桃さん、あんた仕官をして出世する気ない？」
「やぶからぼうに、妙なことをいいだしたな」
「だって、浪人していつまでもお化け長屋なんかにゴロゴロしているより、槍一筋のお侍になったほうがいいじゃありませんか。しかも、あなたのお好きな鬼退治ができて、その腕の働き一つで、どんな出世でもできるんです」
「鬼退治！」
「ええ。大名の名はちょっとだせませんけど、さる西国の大藩で、今たいへんな事件が持ち上がっているのです」
「待て。そこのふすま障子をあけろ」
桃太郎侍が制した。
「どうして？」
「人に聞かれては悪そうな話だ。念のため、あけ放しておけ」
「そうね。このあいだの晩みたいに、とんだぬれ場を立ち聞きされて、いくらあたしでも、顔から火がでちまった」
小鈴は立って縁の障子、次の間のふすま、窓障子をいっぱいにあけ放す。パッと小鳥が木の枝を飛び立った。
こうあけひろげては、小鈴もさすがにベタベタと男のそばへくっつくわけにもいかぬ。きちんと行儀よく前へすわり直って、
「ね、人が見たら、ご夫婦でハギ見に来ていると見えるかしら」
ニッと女がなまめかしい目をする。庭にハギがきれいに咲いているのだ。
「それとも、桃さんはどう見てもお旗本のような気品があるから、ちょいと御前様御愛妾をつ

れてのおしのび、――ホホホ、しゃれてること」
「そうは見えまい。御愛妾お鈴の方、実は毒婦のお鈴が、若侍に悪知恵をつける図」
「またそんな憎い口を――」
つと柔らかいからだをくねらせて、すり寄ろうとするので、
「これ、はしたないまねをするな。外から見通しだぞ」
桃太郎侍はからかいながら、たしなめた。
「憎らしい。あとでどっさり、いじめてあげるから、覚えてらっしゃい」
「とにかく、その大事件というのを聞こう」
「悪いやつは江戸家老神島伊織というやつです。お殿様を毒殺して、江戸のバカ若殿をご家督にしよう。そのバカ様には自分の娘でなんとかいう、たいへん美人なんだそうですが、それを押しつけてお家をかき回そうとしているんですって」
「ほう。で、その殿様はもう、毒殺されたのか？」
さすがに桃太郎侍はまゆをひそめた。
「ところが、お国もとに鷲塚主膳とおっしゃる忠義なご家老があって、このかたが江戸の悪だくみを見抜いたもんですから、お殿様をお国もとへご病気といってお止めし、自分の腹心の伊賀半九郎というかたを江戸へそっとよこして、悪家老の様子を探らせているのです。少し訳があって、あたしはその伊賀さんと知り合いなんです」
「どんな知り合いなのだ」
「おや、桃さんやいたの？」
「多少気になるな」
「まあ、うれしい――いいえ、そんな仲じゃない、ほんの顔見知りというだけ。これでもあたしは、まだ身も心もきれいなのよ。今まで男なんか男とも思っていなかった。それが、くやしいけれど、桃さんだけは一目で、――自分でも

変だと思うんだけど」
小鈴がわれにもなくあかくなる。
「光栄のいたりだな」
「また、そんな口をきく」
「で、その変でない顔見知りの伊賀さんが、どうしたのだ」
「いやッ！　そんなことというんなら話さない」
「そうか。話したくなければ、別に聞かんでもいい。拙者には何の関係もない対岸の火事だ」
桃太郎侍はすまして杯を置いた。冷静そのもののような凛と落ち着いた顔。
「薄情者！　人がせっかく、仕官の口をさがしてきてやったのに。――あんたという人は、どんな心を持って生まれてきたんだろう」
「こりゃ拙者が悪かった。人の好意を無にしては人倫にはずれる。あやまる。きげんを直してくれ。さ、一献。――仲直りだ」
「もうかなわない。どうしてそう急にじょうずになったのかしら」
「まあいい。――で、伊賀さんの話？」
「それがね、伊賀さんが江戸屋敷の様子をさぐってみると、江戸の家来はたいていその悪家老の味方なんですって。だから、どうしても早くその神島伊織を倒さなくてはならない。それには証拠がいる。お家のためだから、たって頼まれて、国もとから江戸の伊織に送られた密書をあたしが手に入れる役にまわったんです」
「ほう、それがあの品川の百姓女か」
「そうなんです」
小鈴はそっとあたりを見まわして、むっちりとつやっぽいひざを進めた。
「その密書というのはあったのか」
桃太郎侍はじっと見すかすような目を小鈴に向けた。
「ありました。その手紙には、国もとの陰謀――向こうは向こうで、こっちが陰謀をたくらんでいるように理屈をつけているんですね。国もとの陰謀を捨てておいてはますます大事にいたる

から、この際、父君ご病気お見舞いと称して公儀の許しをうけ、至急若殿にご入国を願い、一挙に悪人を始末するよう。ただ、敵の虚をつくには、くれぐれも、不意のご出立が肝要、そんなことが書いてあるんです」

「ほう。すると、双方でお互いに悪人呼ばわりをしているのだな」

「そうなんです。けれど、お殿様ご病気というのは、たしかに伊織が国もとへ手をまわして、毒を盛らせた形跡があるので、若殿はとにかく、伊織の一味だけは国へ入れられない。そのほうは伊賀さんたちがこっちで働くから、あたしに国もとの老女になって、このうえ陰謀の手が奥へ届かぬよう、お殿様のお身のまわりを見張ってもらいたい、というんです」

「つまり、お鈴の局になるわけだな」

「まあね」

小鈴はちょっとくすぐったそうな顔をした。

「あたし、そんな堅っ苦しいのいやだって断わったんですけれど、ほかの女じゃ気がきかないから心もとないっていうんです。ぜひと頼まれるんで、じゃ、あたしの好きな人を連れてってもいいか、それはどんな人間だ、腕の立つりっぱな浪人さんですというと、よかろう、悪人退治にはいくらでも人手がいるんだから、国もとの鷲塚様に手紙をつけてやろうっていうところまで、きのう話がついたんです」

「では、お鈴の局の付人として行くのか」

桃太郎侍はわらった。

「そうしてくれれば、あたしだって心じょうぶだし、いまに腕次第で、ご指南にだって、何にだって出世ができるんですもの。ね、いっしょにいってくださいな」

「そのゆく先はどこなのだ」

「それはいえません。桃さんがちゃんとあたしの桃さんになってくれて、切っても切れない約束ができたうえでなくちゃ」

「信用ができんというわけだな」

「いいえ、あたしはかまわない。どうせ男は桃さんひとりときめているんだから、斬られようと突かれようと御意のままだけど——このことに関係しているたくさんの人の、命にかかわる話なんだもの、それだけはもう少し勘弁してください」

「よし、わかった。一仕事しようというからには、だれにもそのくらいの覚悟はあるだろう。感心感心、さすがはお鈴の局だ」

「いやな人、上げたり下げたり」

「せっかくのご好意、考えておこう。拙者にとっても、これは一身上の大問題だ」

「考えておくって、いつご返事がいただけるの？」

「二、三日待ってくれ、かわいい弟子たちのことも考えてやらんければならん」

「じゃ、三日ときめてください。話がきまれば、一度伊賀さんにも、会ってもらわなければならないし」

「祝言の杯もしなければならんし」

どこか茶化しているような語気に、小鈴はじっと男の顔をみつめて、

「心配だわ、その三日が」

思わずつぶやいてしまった。

桃太郎侍はおだやかにわらっている。事実、三日と改めて日など限らなくとも、覚悟ははじめからきまっているのだ。金や力などで心を動かす男ではない。

「もう話はすんだから、障子をしめてもいいでしょう」

しめてもう一度男を手管にかけるつもりか、小鈴はこびるような目をあげた。

カゴで帰る小鈴と、大七の門前で別れて、桃太郎侍はわざと裏手の寺島のたんぼ道を取った。酒に酔ったより、女の濃艶な執念にさんざん悩まされた頭を冷やしたかったのである。

すでに夕暮れて、秋風がひえびえと稲田を鳴らしていた。

（一つ運命がまちがえば、今ごろ自分も大名にされて、あるいは毒を盛るの盛られるのと騒がれていたかもしれぬ）

桃太郎侍は苦笑せずにはいられなかった。

小鈴のいう陰謀事件は、どこの藩か知らぬ。江戸表の家老が悪いのか、国もとの家老が陰謀の張本人なのか、あさはかな女のいうこと、真偽はもとより知るよしもない。また、知ろうとも思わないのだ。

が、自分の身の上もある大名のたねとして、家老の娘の腹にふたごとなって生まれたのだという。母はその驚きと難産のため死んだんだそうだが、——自分には祖父にあたるその家老は、名聞にとらわれて娘がふたごを生んだことを恥じ、先へ生まれた自分を腰元の千代に託し、多分の金をつけて、ひそかに江戸へ落としたのだそうで、むろん生涯不通の約束であった。

それを千代の臨終の時聞かされたが、今となっては、大名となって家老どもの傀儡に踊らされるより、何の名聞も見得もない裸一貫の世界に、かわいい弟子どもを相手にして暮らせる身分に、よっぽど生きがいと楽しさを感じる。

（世つぎをどうするの、当主を押し込めるのと、みんな醜い人間の欲から出ることだ。たかが一大名の藩政、そんなものをかき回してみたところで、どれほどのことがある。まして、その藩主と生まれたために、家来どもから寄ってたかってオモチャにされる大名こそ、きのどくなものだ）

桃太郎侍はおかしかった。

「若様、あなたは武士として、どこへ出ても腕一つでりっぱに世を過ごせるおおしい男になってくださいました。せめても千代の誇りです。どうか、昔のことは問わず、ご自分の力で生きがいのある生涯をお送りなさいませ」

千代が手を握っていった。千代のいうことが本当である。あの女は、どうしてああ偉かったのだろう。

（そのわしが、いまさら大名の陰謀事件なんかにまき込まれて出世がしたいものか。なあ、乳母）

桃太郎侍はなつかしい乳母のおもかげを抱いて、しみじみと話しかけるのだ。

（乳母じゃない、天にも地にもたったひとりの母上——あなたこそわしのために、若い一生を尼のように送らせてしまって）

それ一つが、ただ心のこりである。

「ワーッ」

突然静寂を破る必死の絶叫を聞いて、桃太郎侍はハッと顔を上げた。

夕やみせまる向島堤、落ち葉の桜並み木の間に覆面の武士が十人あまり入り乱れて、——中間が土手下へけおとされた。カゴかきがカゴを捨てて一散に走るのを追って、峰打ちに違いない、のめるようにぶっ倒れる。

取り残された女カゴを死守するように、若党が抜刀した。ふたりの女中が懐剣を抜いたが、ぞうさもなく、ひとりはこれも峰打ちに大きくのけぞり、ひとりはわしづかみにされて、ねじ倒された。

まだ日暮れ前だというのに、不敵な狼藉！

見るより、桃太郎侍は一気に土手のカゴのわきへ駆けつけた時には、その若党もたたき倒されて、うしろのとびらからカゴの主がスラリと抜けて立つところだった。

「おお！」

思わず見合わせた顔、さっき長命寺のサクラモチの床几に休んでいた娘だ。ほんのいちべつだが、青白いほお、りんと張った目、さすがに武士の娘らしく、おおしく美しく！

「狼藉者！」

その娘を背にかばうように、桃太郎侍は一喝した。

意外なじゃまの出現に、くせ者はハッと半円を造り、手に手に抜刀した。

「事情は知らんが、貴公ら、覆面とはひきょう

だぞ。覆面は悪党か、謀反人、ぬすっと、人に顔を見られてつごうの悪いやつのすることだ」

すかさず叱咤したのは、出ばなをくじいて敵の気勢をくずし、その間におのれの呼吸を整える舌刀というやつ。はたして乗って、

「無用の腕立て、後悔するなッ」

中央正面の覆面が威嚇するようにわめいた。こやつが大将らしい。

「後悔するくらいなら飛び出しはせん。貴公らこそ、そのざまを人に見られたらどうする。まだ日暮れ前、水戸様お下屋敷の近くだぞ！」

油断なく柄に手をかけながら、桃太郎侍はずっとひととおり、くせ者を見渡した。ゆうゆうたるつら魂、寸分のすきない身構え、腕にも度胸にもよほど自信がなければできない態度だ。——明らかに覆面どもの間にちょっと動揺が見える。

「お女中、これをお取りなさい」

大胆不敵、その一瞬のすきに桃太郎侍は左手に小刀をサヤごと抜き取って、うしろざまに差し出した。

「拝借いたします」

落ち着いた返事である。声の様子で、——これならだいじょうぶ、多少は武術の心得もあるらしいと察したから、

「どうした、おいはぎども、目ばかり光らしておらんで、こぬかッ」

小バカにしたような挑戦の嘲罵を飛ばした。

「うぬッ」

短気なのが、たまりかねて左からタッと斬り込んで来る。右足をひいて半身にかわし、前へ流れて来る胴へ抜き討ちに、

「エイ」

むろん峰打ちだが、ワーッとのめって行くのと、その体のくずれへ正面からひとり敵が斬り込んできたのと同時、

「トーッ」

「エイ！」

桃太郎侍の返す一刀が、流星となってわずかに速く、敵の剣を力いっぱいはね上げたので、チャリン！　火花が散って刀が飛ぶ。

「こんど来るやつは、遠慮なくたたっ斬るぞ」

先の体勢に返って、青眼、これだけの働きに少しも位置は動いていないのだ。

「——！」

意外のてなみに、くせ者たちは色めきたったが、すぐにかかって来そうなやつはない。人通りがないといっても向島堤、まだたそがれ前の見通しはきくし、長びいては覆面のほうが不利だ。必ず逃げると思ったから、桃太郎侍はこっちからは仕掛けて行く愚は踏まなかった。はたして、

「ひけッ、おりが悪い！」

大将が低く号令する。待っていたように、バラバラッと土手下へ散るくせ者、そこに舟が用意してあるのだろう。

「青二才、見覚えておくぞ」

さすがに大将だ。いちばんあとから、ゆうゆうと刀を引く。

「光栄至極——」

桃太郎侍はニッと一礼した。

「そのことばを忘れるなよ」

まもなく形屋舟二艘、グングン中流へこぎ出して、あとはおりからの引き潮に流れ去る。もうたそがれが溶けはじめていた。

「とんだ災難でしたな」

ふり返ると、これはまたたのもしい、娘はいつの間にか小褄をキリリと取って、桃色ちりめんのしごきを、たすきにかけている。ほんとうに戦うつもりだったのだ。

「あ、おかげさまで——」

「いいお覚悟ですな」

思わず口に出てしまった。

「まあ」

ニッコリわらってたすきをはずす落ち着いた身のこなしに、いい知れぬ高雅さがにおいこぼ

れる。
　しとやかに身じまいを直してから、娘は帯の間へ勇ましく差していた小刀を抜き取り、振りそでぢりを払って、
「ごたいせつな品を拝借させていただきまして、ほんとうにありがとうございました」
　改めて丁寧に小腰をかがめるのだ。しっとりと教養のある端麗さ、これはまた小鈴には見られぬ美しさ、なまめかしさである。
「いや。――失礼ですが、あなたは武芸のたしなみも深いようですな」
　桃太郎侍はなぜかほほえましく聞いてみた。
「ほんのまねごとでございますの」
　ハキハキと受け答えするのも好ましい。
「まねごとで、とっさの間にそれだけのお覚悟ができれば、たいしたものです。いざとなったら、くせ者を斬るおつもりだったのでしょう？」
「お恥ずかしゅう存じます。でも、あなたさまにきていただけませんでしたら、斬られていたかもしれません」
「すると、命の恩人ですかな」
　つい冗談口が出た。
「一生ご恩は忘れません。――そう申せば、先ほどは、はしたないまねをいたしまして、お許しくださいませ」
　娘はほのかにほおを染めた。長命寺の境内で顔を合わせるなり、ぶしつけに驚きの色を見せたことをいうらしい。
「いや、人相があまりよくないから」
「いいえ、あまりよく似ておいであそばすので、わたくし、びっくりしてしまったのでございます」
「どなたに？」
「――」
　娘は気がついたように、あたりを見まわした。若党はじめ、腰元、中間、カゴかきまで、別にたいしたケガもなかったとみえて、いつの間にかそれぞれの位置へ戻り、不安そうに主人の顔をうかがっているのだ。無理もない、すでにたそがれの色が濃く、今戸河岸あたりの灯がチラチラと水に揺れだしている。
「だれもケガはありませんか？」
　娘が声をかけた。
「ハッ」
「みんな自分で歩けますね？」
「お菊殿が足をくじきましたか、少し痛みますそうで」
「いいえ、お嬢様、歩けますでございます」
　菊と呼ばれるかわいい腰元があわててさえぎるのを、娘はつと寄って手を差しのべた。
「立って、歩いてごらんなさい」
「は、はい」
　しかし、菊は痛そうによろめいて、思わず娘の手にすがってしまった。
「もうよい。無理をしてはいけません。――孫平」
「ハッ」
　若党が急いでかけ寄った。その耳へ、娘がそっと何かささやく。
「そ、それはお嬢様、あんまりおかるはずみ」
　孫平は何かひどく驚いたらしい。取りすがらんばかりにするのを、
「いいえ、かまいません、いいつけたとおり早くなさい」
　娘がきっとたしなめた。たしなめられて孫平はしぶしぶと、菊という娘をカゴに乗せる。
「ほんとうによろしいのですか、お嬢様」
「心配ありません」
「では、おことばに従いまして」
　孫平は丁重に桃太郎侍のほうへ会釈した。そしてカゴに合図をしたと思うと、行列は娘ひとりを残して静かに歩きだしたのである。
「あなたは？」
　驚いて桃太郎侍がきいた。
「あの、ご迷惑でもお宅へ寄せていただきまして、白湯ひとつちょうだいいたしたいと存じま

す」
「白湯？」
唖然とせずにはいられなかった。
「ご迷惑でございましょうか」
「別に迷惑ということはござらんが――」
しかし、若い娘ひとり、もう夜になるというのに、見ず知らずの男の住まいへたち寄りたいというのだ。
「拙者の家は俗にお化け長屋といわれる貧乏住まい、あなたのようなお嬢様のすわれるところではありませんよ」
あまり大胆千万なので、桃太郎侍は一応断わらざるをえなかった。
「でも、あなた様がおすわりになれるところでございますもの」
このお姫様はなかなか理屈をいう。何か深い子細がありそうなので、
「よろしい、じゃいらっしゃい。ご案内しましょう」
桃太郎侍はかまわず歩きだした。妙に好奇心が持ててきたのである。
「あなたはなにも知らんから、そんなのんきなことをいわれるのだが、お化け長屋には強盗、おいはぎ、人殺しのすごいやつばかりがうようよしている。こわいからすぐ帰りたいと申しても、一度行った以上、そうは参らんかもしれませんぞ」
「けっこうでございます」
平気で寄り添って歩きながら、娘はわらっている。
「人殺しを何とも思っていないような鬼のような悪人は、お屋敷にもたくさんいるのですって。こわがっていては一日も住んではいられません」
「ほう。すると、さっきの覆面もその鬼なのですか？」
「さあ、どの鬼だかわかりませんけれど、鬼には違いないと存じますの」

「あなたのお屋敷は？」
「小川町でございます。わたしは百合と申すふつつかもの、どうぞよろしくお願いいたします」
その屋敷も名も、姓も名のろうとしない。
「ぶしつけでございますけれど、あなたさまは？」
「桃太郎といいます」
「え？」
「姓は桃、名は太郎、鬼には縁の深い男です」
「まあ、いいお名ですこと」
本気なのか、ひやかしているのかわからない。いそいそと両そでを胸に抱いて、つぶやくのだ。油断のならぬ姫御前である。
もう竹屋の渡しであった。暮れ六つに近く、しまい舟が四、五人を乗せて、薄暗い岸で待っていた。
「お客さん、渡るのかね。早くしねえと舟を出すよう」
石段を降りて行くふたりへ、船頭がどなった。
「今、まいる」
桃太郎侍はふり返って百合に手を貸した。恥じらいながらその手へすがって乗り込む娘、――服装といい、美しさといい、町家には見慣れぬ姿である。乗り合いの者はちょっと不思議そうに目をみはった。
（大家の娘をそそのかして、かけおちする若侍）
そう取れぬこともない。ぴったり背へ隠れるように寄り添われて、桃太郎侍は多少くすぐったかった。
「出すようッ」
舟がすっと岸を離れる。
「船頭さん、堤へぶっそうなものが出たっていうじゃないか」
ひとりがタバコの火を赤く光らせながらきいた。
「そんな話だねえ。おれは見たわけじゃないが、覆面をしているのが十五、六人、いきなり土手下から飛び出して、カゴの中の娘をさらっ

て舟で逃げたって話だ。それがほんのまたたき一つする間のことだってよう」

「へえ、そんなことがあったんですかい。よっぽどきれいな娘だったとみえるね」

別の男が口を出しながら、じろじろ百合を見る。もうそんなうわさが人の口へ伝わっているのだ。

夜がらす

お化け長屋はちょうど夕飯どき、イワシを焼くにおいやヌカミソのにおいにまじって、子どものはしゃぐ声、かみさんたちの荒っぽい口小言、赤ん坊の泣き声、酔っぱらっているらしい男の猥雑なだみ声、相変わらずごたごたと勇ましくうすぎたなく——。

(どんな顔をしているのだろう)

桃太郎侍は黙ってついて来る百合に、わざと声もかけず、家の戸をあけた。

「だんなですか、お帰んなさい」

飛んで出たサルの伊之助が、うしろに立つ百合を見て、

「おや、お客さんですね」

びっくりして目をまるくした。

「うむ。お姫様、白湯がほしいと仰せられる。お上げ申して進ぜなさい」

桃太郎侍はいいつけて、さっさと先へ上がってしまった。

「へえ。——さあ、お姫様、どうぞお上がんなすって。きたのうござんすがね、そうじだけはよくしてありますんで。さあ、どうぞ」

伊之助は急いで押し入れからふとんを出す。

「おじゃまをいたします」

百合はうしろの障子をしめて、悪びれた様子もなく、しとやかに座についた。

「粗茶でござんす」

すぐ台所から、伊之助が茶をくんで来た。

「伊之助、隣の仙吉は帰っているだろうな」

「へえ。用なら呼びましょうか」

「いや、帰っておればそれでよい。——百合殿、ちょうど時分どき、せっかくまいられたのだから、湯づけなりと上がってまいられぬか」

桃太郎侍はなにげなさそうにすすめる。どんな顔をするか見たいのだ。——驚いたのは伊之助である。

「だんな、サケの焼いたのしかありませんぜ。なんならひとっ走り行って、みつくろって来ましょうか」

どこかのお姫様と思い込んでいるから、サケの切り身では悪いと思ったのだ。だいいち、その切り身も飯も桃太郎侍の分しか残っていない。

「いいえ、それより、わたし、ちょっとお使いをお頼みしたいのですけれど」

百合は相談をするように桃太郎侍の顔を見た。

「あっしでまにあうことなら、どこへでも行きますよ、お姫様」

伊之助が自分から即座に買って出るので、

「ご遠慮なくお使いください」

桃太郎侍はわらってうなずいた。娘の高雅さにすっかり圧倒されているようなサルの、もっともらしい顔がおかしかったのである。

「お筆を拝借したいのですけれど」

「へえ、——ろくなんじゃありませんが、これでよござんすか」

「けっこうでございます」

百合が会釈をして三畳のほうへ立つと、伊之助は手まめに行灯をそばへ持って行ってやる。

「ああ、お座ぶとんをしかなくちゃあいけません、冷えますからね」

それをまた百合が立ったまま、当然のことのように待っているのだ。鷹揚なものである。

「だんな、どこのお姫様です?」

やっと火バチのそばへすわった伊之助が、ささやくようにきいた。娘は格好のいいうしろ姿

を見せて、懐紙へ何か熱心に書き始めたのである。
「わしにはまだわからん」
「え――？」
「まあ、黙って見ておれ」
桃太郎侍が苦笑するのを見て、伊之助はきょとんとしてしまった。
「そういえば、だんな、仙坊の話じゃ、どうやら代地の小鈴につかまったようですね」
「うむ」
「気をつけてくださいよ。よけいな心配かもしれませんが、ありゃただの女じゃない。実は」
何かいいだそうとした時、
「あのう――」
ふっとお姫様がふり返った。
「何かご用ですか？」
伊之助が急いで立って行く。
「文箱がありましたら、拝借したいのですけれど」
娘は書き終わった手紙をひざの上で丁寧に折りながらいった。
「あいにく、貧乏世帯で、そんな気のきいたものはありませんので。へえ、どうもすんません」
「では、おのりを貸してください」
「おまんま粒じゃまにあいませんか！」
伊之助は頭をかく。
「ほんのここをはればいいのですから」
結局、手紙のうわづつみを飯粒ではって、
「ここに名あてを書いておきました。ご苦労でも、急いで返事をもらってきてください」
百合は伊之助に手渡した。
「かしこまりました。すぐ行ってまいります」
「なんでしたら、カゴで――」
「なあに、一日二十里ぐらいは平気の、自慢の足でさ。小川町ぐらい、行って帰って半刻もありゃたくさんで――だんな、じゃ、ひとっ走り行ってきますよ」
「うむ」

屋敷へ手紙を持たしてやるらしい。そのあて名を見れば、娘の素性も、想像がつくと思われたが、単純な伊之助はさっさともう懐中へ入れて――桃太郎侍、まさか見せろともいえない。
「だんな、隣のお俊さんに頼んで行きますからね、おなかがすいたら声を掛けてくださいよ」
伊之助は言い置いて出て行った。
「――？」
さて、お姫様どうするかと見ていると、ちゃんと行灯を元のところへ戻し、自分で座ぶとんを持って火バチのそばへ来てすわる。
「失礼いたしました。あの、わたしでよろしければ、お食事のしたくをいたしましょうか」
それをまじめな顔をしていうのだ。
「ほう、あなたにご飯がたけるのですか」
桃太郎侍はからかってみずにはいられなかった。
「まあ！　わたしだって女でございますもの」
その女が、一つ家に若い男とただふたり、じっと澄んだ目にみつめられて、百合はさすがにあかくなった。急にうなだれて、一度にそんなことを思うと、こわいような恥ずかしいような、いじわるく胸がはずんでくるのである。
「――」
桃太郎侍にしても同じであった。あまり身近にすわりすぎたのである。妙に恥じらう百合のみずみずしい姿に、思いがけないむすめのなまめかしさを感じて、甘くただよう脂粉の香気がヒタヒタと胸に迫るのだ。
「お姫様――！」
その重い空気を払いのけるように、桃太郎侍はわざと気軽に呼んだ。
「いやですわ、お姫様などと」
思わず顔をあげて、百合はそこに微笑を含んだ男の、春の海のような強くあたたかいまなざしを見てしまった。甘美な感情がさっと胸いっぱいにふくらんで、自分の目も炎と燃え上がったに違いない。

「いや――！」
急いで振りそでに顔をかくしたが、もう心の底まで見抜かれてしまったような、激しい幸福感に息苦しくなる。
「お送りいたそうか。ご両親が心配されてるといかん」
桃太郎侍は静かにいった。
「いいえ、今、父が迎えにまいりますの」
「伊之助の使いはそれだったのですね？」
「はい」
「こんなところへひとりで来て、父上にしかられはせんかな」
「そんなことはないと存じますけれど」
百合はひざの上でたもとをもてあそびながら、時々男の顔をチラッと見ては、うっとりと伏し目がちになっていた。
「あの、ぶしつけな女とお思いあそばしてでございましょう？」
それが気になって来たらしい。ふと、百合がいいだした。
「いや、別に――」
だが、男の家へこうしてひとりで押しかけて来たがるのは、決して娘らしいとはいえぬ。むろん何か深い事情があることとは、はじめから察しているが――男女七歳にしてうんぬんというおしえがある。
「わたし、きょう乳母の病気見舞いにまいりましたの。長命寺の境内でお目にかかりました時は、乳母が好きだと存じていましたので、おみやげにサクラモチを求めておりました」
「そういえば、あなたは先刻、拙者がだれかに似ているといいましたね」
「ええ、ほんとうによく似ておいでになります」
「だれにです？」
「父がまいりましたら、お話し申し上げますわ」
「すると、お父上がそばにいないと、安心できぬとおっしゃるのですね。よろしい、そのお話はもう伺いません。だれがだれに似ていようと、拙者には関係のない話だ」
桃太郎侍はちょっといじになった。さっきからなんでも隠したがるのが、しゃくにさわったのである。
「まあ！」
敏感にその語気を感じた百合は、びっくりしてかわいい目をみはる。
「お気を悪くなさいましたの？」
「悪くする必要もありませんな。あなたとは、きょう会ったのがはじめて、一度お別れすればもう何の縁もないおかたなのだから、むやみに話を聞きたがるのがまちがい。そうでしょう？」
「わたし、わたし、どうしましょう」
百合がおろおろとさしうつむいたが、急にひちりめんのそで口を目にあてた。
「申しわけ、ございません。わたしが、悪かったのでございます」
「いや、あなたはいいお姫様だ。決して悪くはありません」
「わたし、わたし、みんなお話し申し上げますから、どうぞお許しあそばして」
「許します。だから泣かないでもらいたいな」
百合が、泣きぬれた子どものような目をあげた。
「許すも、許さないもない。どうしてそう急に泣きたくなったのです？」
「悲しいことをおっしゃるのですもの。これからお力になっていただこうと存じていましたのに、何の縁もない人だなどと、あんまりでございます」
「ふ、ふ、縁があったから、こうして口をきいているのでしょうな。そで振りあうも他生の縁というのに、さっき渡し場ではちゃんとお手を取ってしんぜたはずだ」
「あら」
百合ははにかみながら涙をふいて、――なんのことはないちわげんかだと、桃太郎侍は苦笑せざるをえない。が、その百合の偽らざるうい

ういしい姿が、じっと胸へしみとおって来る。
（恋――？）
あかずにながめながら、われにもなくあかくなる。
「あの、お国もとに悪い家来がおりまして、江戸表の若様のお命をねらっておりますの」
打ち明けて話さなくてはきらわれると思ったのだろう、百合が急に話しだした。
「あ、お待ちなさい」
桃太郎侍は愕然とした。ここにも何か陰謀事件があるらしい。
「人に聞かれては悪い。これへ――」
「はい」
百合がすり寄って、ほとんどひざがふれんばかり。――
「国もとの仕置き家老に、鷲塚主膳と申す者がございますの」
百合がささやくように話しだした。
「ほう」
桃太郎侍は思わず目をみはる。さっき小鈴から聞いた話の国家老も、鷲塚主膳とか聞いた。同じ事件なのではあるまいか。
「その主膳の妹で梅と申しますのが、たいそうお美しいとかで、お殿様のお気に入り、あの、お子をもうけたのだそうでございます」
「つまり、お梅の方になったわけですな」
「ええ。万之助様と申し上げて、ことし六歳におなりあそばします。若様ができたものですから、主膳はなんとかして、万之助君をお家の跡目にさして、藩政を自分の自由にしたい野心を起こしたのだそうですの」
「うむ」
「けれど、江戸表には新之助様と申し上げる公儀へおあとめお届けずみのりっぱな若君がございます。それがじゃまになるので、主膳は国もとの者をしだいに味方につけ、いよいよ江戸表へまで毒手をのばしてきたのだそうです」
「ありそうなことですな」

「困ったことには、この春お殿様はご参勤をまぢかにひかえて、にわかにご発病あそばし、ご出府ができないと、国もとから申してまいりました。その実、国もとからの密書によりますと、お殿様は主膳たちのために酒色をもって幽閉されているので、決して病気ではない、国もとは忠義な人たちがみんな遠ざけられ、主膳のほかはだれもお殿様に近づけぬ。しかも、街道や船着き場まで新関を設けて陰謀の一味がみはっているので、江戸へは手紙一つ容易に送れないと、父のところへ申してまいりました。あの、父は神島伊織と申しまして、江戸屋敷を預かっておりますの」
「――？」
はたしてそうであった。小鈴は、その江戸家老神島伊織こそ陰謀の発頭人であり、自分の娘をバカ若殿に押しつけようとしているのだといっていたが、――すると、その娘というのは、この百合でなければならぬ。
「失礼ですが、あなたはその江戸の若殿のお嫁さんになるかたではないのですか？」
桃太郎侍はぶしつけにきいてみた。
「まあ、そんなこと」
近々と顔をみつめられて、百合はまっかになる。
「若様にはもうさる大名の姫様がちゃんときまっておりますの。そのおこし入れの日も近いので、父は胸を痛めているのでございます」
「それで少し安心した」
わざとそのほうへ話をそらしたが――してみると、小鈴に聞いたのとは事情が少し違う。やはり、たての両面ということになるのだろうか。
「――？」
百合はなぜそんなことを聞くのかというような目を上げている。
「きれいなお姫様は、なるべくほかの人にとられたくはありませんからな」

「まあ！」
「失礼しました。今のは拙者の失言、――で、その主膳の陰謀は、どう江戸表へのびてきたのです。何か証拠でもあるのですか？」
　恥じらって身のおきどころがないようにろうばいする処女の姿を、桃太郎侍は、心たのしくながめながら、話の次をうながした。
「あの、さっきのくせ者たちもそれかと存じますの。悪人の一味はお屋敷の中にも外にもいて、若様をねらっております。その若様をお守りしている父が何よりじゃまになるのです」
「なるほど。つまり、まずあなたをおとりにして――」
　いいかけた時、ガラリと表の戸があいた。
「だんな、行ってきましたよ」
　サルの伊之助の声である。
「伊之助か、早かったではないか」
　桃太郎侍は目をまるくした。普通の足なら、向こうへ着いたか着かないかの時分である。
「フフフ、自慢の足でさ」
　この男は汗ひとつかいていないのである。
「お嬢さん、すぐ迎えにきますよ」
「ご苦労さまでした」
「びっくりしちまった。ご家老様ですってね、お嬢さんのおうちは。案内してくれたご門番に、あっしはかつぎ呉服の伊之助という者だが、どうだろう、これからこのお屋敷内へ商売に来ていいだろうかってきいたら、そりゃご家老様のお声がかりならかまうまい。お係りへ願って門鑑をちょうだいしろってね。なにしろ、あっしはご家老様にちょいと縁引きの者だっていったもんだから、バカに丁寧でしたぜ」
「そんなつまらぬことをいうやつがあるか」
　桃太郎侍はあきれて苦笑した。
「なあに、だんな、世の中ははったりをきかせるにかぎりまさあ。小さくなっていた日にゃ、いくらでも踏みつけられますからね。――ね、お嬢さん、これをご縁に、ひとつ商売のできるように口をきいてください。お屋敷をひとつ持っていると、ぐんと商いが違います。欲ばりでいうんじゃありません。あっしはこのだんなを養って行かなくちゃならないんだ。だんなにゃあしたっから寺小屋の師匠、つまり先生になってもらうんです。子どもが喜びますんでね。けど、この貧乏長屋じゃ一文も礼は取れない。むろん、だんなだってあっしだって取りやしません。取るどころか、こっから紙や筆の用意までしてやるんです。子どもはみんな楽しみにしているんだ」
「――」
　ひとりでしゃべっている伊之助のうれしそうな顔をながめて、そうか、この男はそんなことを考えていたのかと、桃太郎侍は実にあたたかい気持ちがした。
「おとうさまに話してあげます」
　百合はおうようにわらっている。
「あっ、お着きのようだ」
　伊之助は不意に飛び出して行った。また不思議な耳の持ち主でもあったのである。
「だんな、ここですよ。ここんとこのどぶ板はあぶないから、足もとに気をつけてくださいましよ」
　かど口に立ってどなっている。
「あの、父には今の話、聞かなかったことにしておいてくださいませ」
　百合はそっとささやいて、ほおを染めた。そのきれいな目に、あなただから信用して話したのだといわぬばかりの思い入れがなまめかしい。
「拙者も武士――」
　桃太郎侍がうなずいてわらうと、百合はいそいそと上がり口へ出迎えに立って行った。
「さあ、どうぞおはいんなすって」
　伊之助の案内で、つと土間にあらわれた老武士、からだはそう大きくないが、がっしりと落ち着いて、温顔ながらおのずとおかしがたい威

の備わるあたり、さすがは一藩の老職とうなずける。
「おとうさま」
百合は迎えて、しとやかに両手をついた。
老人はうなずいて、鋭い視線を娘からジロリと桃太郎侍へ移したが、
「――」
一瞬、あっといわぬばかりの驚きの色を隠しきれなかった。が、すぐに、もとの冷静な表情に返って、
「失礼いたす」
会釈をして静かに上がって来た。
「はじめて御意得ます。拙者は若木讃岐守の家来、不肖ながら江戸家老をつとめる神島伊織と申します」
「若木――？」
こんどは桃太郎侍が愕然としたのである。
「拙者は桃太郎と申します」
名のりながら、なぜこの父娘が自分の顔を見て驚いたか、はじめて納得がいったような気がした。
今、伊織が口にした若木讃岐守こそ、千代が死ぬ時教えてくれた自分の父だ。――おそらく江戸の若君新之助が自分に酷似しているのだろう。そうだとすれば、その新之助は母なる国もとの城代家老右田外記の娘の腹に生まれて、自分にとってはふたごの兄である。
不思議な邂逅！――だが、その兄にひきかえて無残冷酷にも陋巷に捨てられた自分だと思うと、奇縁に驚くより先に、桃太郎侍はやはり激しい怒りを感じる。思わず伊織に相対する顔が冷淡にあおじろんでいた。
「娘が、あぶないところをお助けいただいたそうで、まことにかたじけない」
世慣れた伊織は如才なかった。
「いや、拙者はほんの行き合わせただけです」
「供の者が帰っての話では、たいそうおできなさるということだが、何流をご修業なされたな」

「小野派を少々、――修業というほどのものではありません」
「ご浪々のようでござるな」
「はあ」
「失礼だが、ご仕官などのご希望は」
「ありません」
至極あっさりしている。父の背後へつつましくすわって、さっきとはまるで違ってしまった冷淡さを百合は敏感に感じながら、何か不安そうに桃太郎侍の顔色をそっとながめていた。
「すると、何かご趣味にでも生きようという風流が――」
「いっこうにありません。ただのんきを楽しむとでも申しましょうか」
「おうらやましゅうござるな」
「はあ」
聞いていた百合は、悲しくなってしまった。
「へえ、粗茶でござんす」
伊之助が台所から茶を運んで来た。――大将きょうはどうかしているぜ、いやにぶあいそうだと、これも気にしているのだ。
「うちのだんなの道楽はね、ご隠居さん、鬼退治と寺子屋なんです。寺子屋のほうはきょうが店開きなんでしてね」
「ほう」
「鬼退治は三度かな。いや、きょうのお嬢さんのを入れると、四度だ。これでだんなは剣術のほうは達人ですからね。だいいち、度胸がいい」
「つつしまぬか。伊之助」
桃太郎侍が苦い顔をしてたしなめた。
「へえ」
伊之助は首をすくめる。
「一度、ぜひゆっくりご高説をうけたまわりたい。これをご縁に、お暇のおり、ちと拙宅へもお運びください」
潮時と見たのだろう、老人は丁重にあいさつをして立ち上がった。
「おじゃまいたしまして」

百合は白々とした両手をつかえて、何か自分にだけのことばを待つように見上げたが、
「いや――」
桃太郎侍はにっこりともしてくれないのである。
「では、ごめんくださいませ」
しかたなく、世にもやるせなげに、しおしおと父のあとを追う。
やがて、伊之助に送られて、どぶ板を踏んで去る父娘の足音を聞きながら、桃太郎侍はじっと腕を組んで、火バチの中をみつめていた。
(対岸の火事ではないか)
まだうっぷんがおさまらないのである。
送って出たまま手間どっていた伊之助が、急に路地をかけこんで来た。
「だんな、よろしくいってましたぜ」
伊之助はニコニコしながらはいってきた。
「あのご家老様はなかなか苦労人ですね。――今夜はご苦労であったといって、小判一枚包んでくれました」
「伊之助、ふたりはカゴか？」
桃太郎侍がふっと鋭い目をあげた。
「へえ、カゴでしたよ」
「供の者は何人ぐらいだった」
「中間に若党、侍がふたり、五人ばかりでしたかね」
「うむ」
桃太郎侍はちょっと考えているようだったが急に立ち上がった。
「どうしたんです、だんな」
伊之助がいぶかしそうな顔をする。
「途中がぶっそうだ」
「え？」
「そこまで送ってやることにしよう」
「なるほど、そう来なくちゃ、だんなじゃねえ。お嬢さんがすっかりしょげちゃって、あれじゃ少しぶあいそうすぎると、あっしもきのどくでしようがなかったんだ。ようござんす、ひとっ走り、あっしがご注進！」
気の軽い男である。いいながら先になって飛び出そうとするのを、
「伊之助、どこへ行く」
桃太郎侍が呼び止めた。
「遠くは行くめえ、お嬢さんに知らせてやるんで――きっと、うれしがりますぜ」
「たわけめ、よけいなことをしてはいかん。そっと、あとをつけるだけだ」
対岸の火事とは思ったが、現在、伊織親子は悪人たちにねらわれているからだである。向島堤の例もあるのだ。どこにくせ者の目が光っているかもしれない。わずか五人ぐらいの供では、いざという時こころもとないと気がつくと、それをしも黙って見ていることは、桃太郎侍の性分としてできなかった。
「黙ってつける？」
伊之助にはちょっとのみこめないのである。
「きさまは待っておれ。疲れてもいるだろうから」
「なあに、行きますよ。行って帰って二里足らず、そんなこって疲れていたんじゃ商売になりませんや」
「よし、では参れ。しかし、断わっておくが、ひと言も口をきいてはならんぞ」
「おやおや、だいぶやかましいんですね。だんな」
山の宿の通りで一行に追いついた。雷門から田原町のほうへ道をとって行く。
秋の夜はもうひっそりとふけて、きれいな星空だった。五日ばかりの月が明るい。
「だんな！」
伊之助がそっとそでを引く。
「黙っておれ」
桃太郎侍はたしなめた。すでに雷門のあたりから気がついていたのだが、浪人者ふうの男が酒にでも酔ったように、軒下を行くかと思うと、フラフラと往来の中央を、ちょうどカゴから五、

六間ばかりのところをついて行く。それが東本願寺の土塀にそって清島町のほうへ曲がるころから、桃太郎侍たちのうしろへもひとり、妙なやつがつきはじめたのだ。つまり、カゴをつけて浪人者、その浪人者を自分たちがつけ、自分たちはまた、うしろからあやしいやつにつけられて——カゴからずっと一本のひもになっている形だ。

「おや、だんな！」

「黙っておれと申すに」

車坂に近くなって、物陰からまたひとり、ふっと前の浪人者と肩をならべた。このあたりから山下辺まで、しばらく寂しい寺つづきで、くせ者が仕事をするとすれば最もくっきょうの場所である。

（出るかな！）

油断なくうしろをふり返った桃太郎侍は、おや！　と目をみはった。

いつの間にか、うしろの人影が三人になっていたのである。そして、前を見ると、これは一瞬にかき消すごとく——カゴの一行だけが黒々と進んで行く。

（わからん！）

桃太郎侍はちょっと判断に迷った。あるいは、前の浪人者は何の関係もないただの通行人だったのだろうか？　それにしては、いましがた、そこでふたりになった時、既定の事実でもあるかのごとく、ことば一つなく肩をならべたのがおかしい。もし、くせ者だとしたら、なぜ尾行を中止したのか。

（いずれにしても、油断はできぬ）

前後に気を配って行くうちに、いつか寂しい寺町を通り抜けて上野山下へ出てしまった。ここから筋違橋までは、俗に御成街道といって、町家が軒を並べているから、まず襲撃されるような場所はない。

が、油断のならないのは、依然として背後から三人がつけて来ることだ。それが黒門町を過ぎるころ五人になって、

（さては、一つになったな）

わざと歩調をゆるめてみると、ぐんぐん追いついて来る。

「失礼でござるが——」

突然、中のひとりが追いすがるように呼び止めるのだ。筋違橋の近くである。

「拙者ですか」

桃太郎侍は、ゆっくりとふり返った。むろん、五分もすきのない身構えである。

「お見送りありがとうござった」

ひとりが立ち止まって丁重に頭を下げている間に、残る四人が会釈をして、これはさっさとカゴをおって行く。

「見送り？」

「てまえどもは神島伊織の手の者、貴殿が桃太郎殿であることをよく存じております。早くご辞退いたそうと思ったのですが、なにぶん、車坂あたりがぶっそうのように見受けられましたので」

服装ものがたい羽織りはかまだし、どうも疑う余地はないらしい。

「すると、貴公がた、陰ながらの手配りというわけですか」

「はあ」

「車坂辺でふたりになって消えた浪人ふうの者は？」

「実は、それが心配だったのです。われわれ要所要所に分かれて見張っていたのですが、あの辺の寺町にふたり、あるいは三人、ブラブラしている浪人者がいたそうで、——たぶん、向こうでもこっちの手配りに気がついて、手出しを中止したものと思われます」

「なるほど」

考えてみると、悪人を向こうにまわしてたたかっている一藩の老職、そのくらいの用心は当然あってしかるべきだ。

「いずれ主人に申し伝えて、お礼にまかりでま

すから」
そういって駆け去る男を見送りながら、ひとりでよけいなとり越し苦労をしていた桃太郎侍は、思わず苦笑してしまった。
「だんな、なんです、あれは？」
なにも知らぬ伊之助が、不思議そうにきくのだ。
「いや、なんでもない。——ブラブラと柳原堤をぬけて帰ろう」
歩きながら、——悪人が伊織親子をねらっているのだと、桃太郎侍が簡単に説明してやった。
「へえエ。あっしはまた、だんなが、黙ってろ黙ってろっておっしゃるから、何だろうと思っていたんで」
柳原堤は江戸でも名代のつじ斬り、おいはぎの本場だが、ひとりは俠骨、ひとりは前身が俠盗、ふたりにとっては町つづきを歩くのも同じことだ。ただ困ったことには、気がついてみると桃太郎侍、まだ夜食をすましていない。
「伊之助、どこかに、なべ焼きうどんでも出ておらんかな。少し空腹を覚えてきた」
いった時、ふっと柳原稲荷の森のあたりで、夜ガラスが三声ばかり無気味にないた。
「縁起でもねえ」
伊之助がいやな顔をしてつぶやく。
「なんだ、伊之助」
「今、夜ガラスがないたでしょう、だんな」
「うむ」
「あれがなくと、ろくなことがありません」
真顔になっているのだ。
「きさま、もとの商売を思い出したんだろう。カラスだってねぼけることはある。気にするな、それより、わしは腹がすいてたまらん」
桃太郎侍はこともなげに笑った。
「おなかがすいたら、カラスでもとって煮て食ったらいいでしょう」
もとの商売とひやかされたのが、しゃくにさわったらしい。伊之助はぷっとふくれてしまった。

（おこったな）
この男がおこるのは珍しい。いつまでおこっていられるのか、桃太郎侍はわざと知らん顔をしていた。
やがて聖堂の森のあたりへ月の落ちるころである。その長い月かげをしょって、新しい橋の近く、ひとところ土手下から急に森の迫ったあたりへかかろうとして、
「いけねえ、だんな！」
ふくれて黙々と歩いていた伊之助が、いきなり桃太郎侍のたもとをつかんだ。
「うむ」
桃太郎侍も気がついて、じっと見定めようとしていたところである。
「だから、あっしのいわねえことじゃねえんだ。夜ガラスなんてやつは、だてに鳴くもんじゃありませんや」
この男はまだ、夜ガラスに固執している。——前方の暗い柳の陰に、ちらっと、たしかに人影が動いたのだ。つじ斬りか？　物とりか？　それなら格別驚くにもあたらないが、妙にヒタヒタと夜気に低迷する殺気を感じる。
「伊之助、ひとりやふたりではなさそうだぞ」
「あっしもそう勘づいてるんで」
「いざとなったら、かまわんから、きさま逃げろ」
「冗、冗談いっちゃいけません。そんな不実なあっしだと——」
「いや、かえって手足まといだ」
「まあ、黙って見ていてください。ちゃんと考えがあるんだ」
森かげへかかると、はたしてバラバラッと五、六人、覆面ガラスが行く手の道を断ち切った。
「——！」
桃太郎侍は黙って立ち止まる。すばやいのは伊之助で、どこへ消えたか、とたんに姿を消してしまった。

覆面ガラスも無言、——だが、ピタリと体を固めて柄に手をかけた構えに、六人が六人、初めから斬って捨てようという激しい敵愾心が感じられるのは、人違いやできごころで飛び出したのではないらしい。こっちをちゃんと桃太郎侍と知って待ち伏せしていたのだ。

（何者だろう）

桃太郎侍は、じっと下腹に力を落ち着けて、油断なく、六人の気息をうかがっている。空腹がいっぺんにすっとんで行ってしまったから不思議だ。

「おぼえているだろうな。向島堤の礼をしようと思って、これに待っていたのだ。ただし——」

左端神田川添いに立った覆面ガラス——なるほど、聞き覚えのある声だ。

「今後いっさい、貴公この事件から手を引くと誓約するなら、われら無益の殺生は好まぬ。返事を聞こう」

「この事件とは何のことだ」

すかさず桃太郎侍は静かに反問した。向島堤のやつとすれば、じゅうぶんこっちの手練は知っているはず、しかもこの小人数で待ち受けていたのは、むろん、人選してあるとは読める。が、それにしても、相手の語気にあまりしゃくしゃくたる自信がありすぎるのは、ひょっとすると、このうえどこかに飛び道具が隠れているのではあるまいかという疑問がわいた。

うぬぼれるわけではないが、桃太郎侍、たとえ一流の剣士をそろえて来ても、めったに負けようとは思わぬ。腕が互角なら、機知で勝つ。万一こっちよりまさっていれば、度胸と気魄で、圧倒するのだ。生死を超越してしまえば、天下に恐れるものはなにものもない。その恐れず、まどわざるの剣を無想剣という。一刀流の極意だ。

相手が何人いようともびくともしないが、飛び道具が隠れているとすると、うっかり手出しはできない。それを探り出そうとするむだことばだったのだが、

「無益な問答はいらぬ。この事件から手を引くか、それとも、あくまでわれわれの敵になるか、その返答だけでいい。どっちだ？」

覆面ガラスの大将は、さすがにその手に乗ろうとはしない。

万事休す！

大将ガラスのこの落ち着きは、まさに飛び道具ありと見るのが至当だが、桃太郎侍の気性として、手を引くとはいえない。運を天に任せてと思った時——ヒュッ！　と空を切るつぶての音、

「ワアッ！」

突然大将ガラスの立っていた側のこずえから、どっと堤下へ転落したやつがある。やみに目のきくサルの伊之助の助太刀に違いない。

「アッ」

動揺した覆面ガラスが、いっせいに抜刀した。飛び道具をしのばせて置いたほうが、逆にやみ夜のつぶてを食う立場になったのだからおもしろい。

「トーッ！」

その一瞬の動揺を見のがすような桃太郎侍ではなかった。抜き討ちに、タッと中央めがけて斬り込んで、その激しさに思わず敵が左右へ飛びのきながら夢中で一刀をふりかぶった時には、右へひとり、返す烈剣が左へ、これは斬ったのと斬られたのと同時。ただ、こっちのほうがわずかに早かったから、敵の一刀を肩先に感じただけで、相手の胴をしたたか斬って、

「ワッ……」

「ウウム……」

のけぞる声を聞きながら、矢のようにかけ抜けてしまった。

「逃がすな。斬れッ、斬れッ……」

大将ガラスが叱咤している。

（フフフ、こっちこそ、無益の殺生は好まんのだ）

逃げ足にかけても人後に落ちない桃太郎侍である。背後のろうばいした足音を、ちょっと嘲笑してやりたい気持ちだったが、――いけないッ！　それどころか、新し橋のたもとに、第二陣があったのだ。

「きたぞ！」

「気をつけろ！」

バラバラッと堤下からおどり出して、四、五人、手に手に抜刀する。

「くそ！」

背後にも敵がある。立ち止まっては不利だ。ただまっしぐらに突破するよりしかたがない。が、走りながらふと気のついたのは、この調子だと、どてにはまだ第三陣、第四陣を用意しているかもしれぬ。

（よしッ、新し橋へそれてやろう）

面も振らず第二陣へ飛び込んで行くと、

「エイ」「ヤッ」「トーッ」

口々にわめいて、さっと道を開きながら、あわてぎみに斬りつけて来る。が、以外の大胆さにひるんだ太刀だから、じゅうぶんに伸びて来ない。

「エイ、オーッ！」

その敵を右と左へよこなぎに、ひとりはたしかに斬った。斬りながら、パッともう橋をふんでいる。

「アッ」

橋にかかって敵の裏をかいたつもりの桃太郎侍、思わずうなってしまった。敵はもうそこにもぬかりなく、佐久間町河岸のたもとに、ちゃんと手配りがしてあるのだ。

「それ、行ったぞッ」

背後の敵が声をかけて、なだれをうって橋へかかる。すでに月は落ちて、星空に、行く手の人数は黒々と七、八人！

（何人でも来い）

一陣、二陣と突破して意気軒昂たる桃太郎侍は、一気に斬り抜ける覚悟で、――腹背に敵を

うけては、それよりしようがないのである。ダダダッ！　と新し橋をすごい勢いで突進して行く。

断じて行なえば鬼人もこれを避けるというが、ちょっともちゅうちょということを知らぬこの男の気魄に、思わず気をのまれたのだろう、佐久間町側の人数がたじたじと橋詰めを離れて、下谷のほうへ抜ける道路の入り口にかたまってしまった。

（しめたッ）

橋を渡りきって、桃太郎侍はとっさに右へ折れる。とたんに、一度退いた人数の中から、

「エイ」

ひとりが槍をふるって、追いすがるように激しくつっかけて来た。ふり向きざま、サッとその柄を斬り払うと、河岸っぷちにひそんでいたやつが、そこを待ち構えていたように、

「オーッ」

右手から拝み打ちに斬って来た。ちょうど体が左を向いて槍の柄を斬った瞬間だから、受けるも払うもできない。

が、剣気を感じると同時に、左足をけって跳躍したから、間一髪、敵の烈刀がわずかに肩をかすめて流れた。そのすきを、われにもなくスッと一刀が返って、

「ワーッ」

背後に絶叫が起こった。斬った桃太郎侍は別にそれほどの手ごたえは感じなかったが、いわゆる夢想剣、みごとに胴にきまっていたのだ。

そのままあとをも見ずに、河岸に添って駆けつづける。

「エイ！」

またひとり路地から飛び出して来た。たたきつけるようにその一刀を打ち落として、

（いったい、どのくらい敵は手配りしているのだろう）

多少不安になって来た。どの路地、どの横丁にも、ふたり三人の覆面ガラスがひそんでいる

のである。さすがの桃太郎侍もしだいに走り疲れて、息がはずんで来たのだ。やきつくような渇をおぼえる。

（そうか、河岸を走っているのがまちがいだ。向島堤の例で、敵は舟を用意している。橋へかかったとみると同時に、みんなこっちへ舟で渡ったに違いない）

やっと気がついたが、すでにおそい。酒井左衛門尉下屋敷俗に左衛門河岸という、その塀つづきの暗い河岸へかかると、敵の人数がいっぱいにうごめいているのが見えた。

むろん、背後からひしひしと追撃の手は迫っている。

（よし、決戦のほかなし）

とうてい逃げきれぬとわかると、そこは決断のいい男だ。急に走っていた足を止めて、土塀を小楯に大胆にもつっ立った。敵が迫いつくまでのほんの短い間、——二度、三度、深沈たる夜気を大きく呼吸して、戦闘準備の気息をととのえる。軽く目を閉じて、じっと心耳をすました。

「いた、ここだッ！」

「油断するな！」

追いすがった覆面ガラスが、バタバタッと半円を描い時には、わずかな休息にみなぎる闘志を回復した桃太郎侍、

「——」

無言でピタリと青眼につけた。——許さぬ！善悪はさておいて、これほどまでたくらんで人を倒そうとする陰険さが憎い。かたっぱしから斬って捨ててやると、腹の底から、激怒を感じて来たのだ。もう一瞬の猶予もしない。

「エイ、トーッ」

多勢をたのんで、まだじゅうぶん備えの固まらぬ隙、意を決した桃太郎侍は、ダッと自分から攻勢に出た。まっ正面から面も振らず斬り込んだのである。

ワーッ！　覆面ガラスがただひとりを中心に、たちまちうずを巻いて、——そのうずを目がけて、あら手が前後からどんどんかけつけて来る。

代地の小鈴は女中に戸締まりをさせて、もう寝るばかりのからだを、うっとりと、長火バチに寄せていた。このごろ、こうした手あきの、何もすることのない時間が、妙にわびしく、はかないのである。

（ひとりも身寄りがないなんて——）

それを思う。今まではその身寄りのないのが結局身軽で、ずいぶんあぶない橋を渡りながら、そこに生きがいを感じて来た。

母親は相当な町家の娘だったそうだが、出入りの鳶の者とできて、自分が生まれたので、しかたなく両親がこれを婿養子にしたのだという。これが放蕩とばくちで身代をつぶし、さんざん母親をいじめぬいて、自分の八つの時死んだ。

母は自分をつれ子にして、二十も年の違う建具職の後妻になったが、これがまた飲んだくれで、飲むと若い母をいじめ通した。今から思うと、酒癖も悪かったが、人一倍嫉妬深くもあったのだ。

気の弱い母は、なまじ美貌であったばかりに、まだ三十二という若さで男にいじめられ通しに死んで行った。自分が十四の時である。

そして、半年もたたないうちに、その義父が自分を虐待しだしたのだ。八つの時からかよっていた踊りの女師匠の家へ逃げだしたが、そこにもいやなやつがいた。亭主でありながらお師匠さんに養われている年下の、のっぺりした、男である。

お師匠さんは母親の幼友だちとかで、いい人だったが、三月といないうちに、とうとうその年下の亭主の横っつらを思いきりひっぱたいて、自分から逃げ出して、——それから十年、荒い浮き世をひとりで渡って来た苦労、

（男なんてみんなけだものだ。だれが負けるも

んか！）

生きるために、ついに肩書きのつく女にはなってしまったが、まだ一度も男に負けたことはない。男に負けた母親を思い出すたびに、

（おっかさんが悪いんだ）

妙に同情が持てず、——まして身寄りのない寂しさなんか考えてみたこともなかった。

それが、このごろ急に心細いのは、いや、本当は身寄りじゃない、すがれる男が、その男もたったひとり、あの人だけ。

（フフフ、小娘じゃあるまいし）

小鈴は時々自分をあざけりたくなるが、すぐその下から、あの人だけは同じ男でも、けだものではないんだからと、自分にいいきかせているのだ。凛とした桃太郎侍のこにくらしくも冷たいおもかげが、うっとりと胸に浮き上がる。

「もう寝たかしら——」

思わず口に出て、勝ち気な小鈴ははっとあかくなった。

「お師匠さん、何かいいましたか？」

隣の小べやからねぼけたような小女の声がきく。

「なにもいいやしないけど、おまえそこで、また居眠りしてるんじゃないか？」

「いいえ、ほどき物をしてます」

「いいかげんにしてお寝よ。わたしも寝るから」

やさしくいいながら、小鈴は泣きたいような寂しさやるせなさを感じた。秋の夜の長さ、——自分は何のために生きているのか、胸がうずいて、こんなにも思いこがれている自分が、急にいとしくなったのだ。

トントントン！

軽く玄関の戸をたたく者がある。

「はあい」

小女がそそくさと立って行った。戸をあけて二言、三言、

「ねえや、どなた？」

ふすま越しに玄関へきくと、

「拙者だ」

答えながら無遠慮に、もうつかつかと、

「おや、伊賀さん——！」

小鈴は思わず目をみはった。

「茶を一杯、ちそうしてくれぬか」

気がねや遠慮などは、薬にするほども持ちあわさぬ男だ。どっかと長火バチの前へ陣取る伊賀半九郎。三十四、五歳のまゆ太く苦み走って、角張った意志の強そうなあご、冷たく光るギロリとした目、なるほど鷲塚主膳のふところ刀といわれるだけあって、好男子ではあるが一癖も二癖もありそうな人物だ。

「こんなおそく、何かご用？」

小鈴は五年前、侍の懐中をねらって、つまらぬどじを踏んだことがある。その時助けられて以来の知り合いだが、妙にこの男には人を圧倒するような強さを感じるのだ。それだけに、恩は恩として、常に一歩も負けまいとする敵愾心がわくのである。

「うむ、用もある」

半九郎はぶしつけに、小鈴の心を見抜くようにみつめて、ニヤリとわらった。

「夜ふけの差し向かい、さすがのあねご、少しこわそうだな。別にくどきはせんから心配するな」

「フフフ、くどかれたって、これだけはいくら伊賀さんでもねえ」

「やっぱり桃さんにかぎるか」

「フフフ」

小鈴は背後の茶ダンスから茶筒を取って、器用に茶を移す。そのうつむいたあごのふっくらとした感触、肩から胸へ流れて静かに息づいているむっちりとしたからだつき、みなぎる年増盛りのはだの白さなまめかしさが思われて、——半九郎の目がちかりと光ったが、

「いまに桃さんなんかより、拙者のほうが好きになるさ」

冗談ともまじめともつかず、平気でわらうの

である。この男はそういうずぶといところのある男なのだ。

「好きになったら、くどいてあげるわ」

小鈴も負けてはいなかった。

「それはそれとして、——たぶん、あした一役買ってもらわんければなるまいと思うのだがな」

半九郎はもうけろりとして真顔になった。

「一役？」

「うむ。江戸のおいぼれは今夜片づくことになっている。これが片づいたらバカ若殿を小梅の下屋敷へ引き出すから、あねごは下屋敷留守番北野善兵衛の妹お鈴にばけてもらいたい。——筋書きはあした教えるが、あねごのきりょうがバカ若殿のお目にとまりさえすれば、もうこっちのものだ。そのきりょうならきっと、ういやつじゃ、とくるにきまっている」

「いやですよ、あたしゃおめかけなんかにされるのは——」

小鈴のきれいな目に、急に険が出た。その底いじの悪い顔に、男をしびらすような魅力がにおうのだからすごい。

「それも桃さんへの義理だてか？」

半九郎はからかうようにわらった。

「心配しなくもいい。そのあねごの色気と手くだでバカ若殿を二、三日下屋敷へ引き留めておいてもらいさえすればいいのだ。思いきりじらしてやるさ」

「そんなことをいって、——世間を離れたお屋敷内のこと、あたしゃ自分の身があぶなくなったら、殿様だって、若様だってただはおかないから、それでようござんすか？」

「かまわん、あとは伊賀半九郎がなんとでも始末をつける。お国もと若君のためだ。あねごの腕まえに信頼しよう」

いってのけて、うまそうに熱い茶を喫する半九郎——その押しの強さに小鈴はひそかに目をみはった。事実、この男は一度引き受けたら必ず責任を持ってくれる男なのである。敵にまわすとこわいが、それだけ味方にはたのもしい男なのだ。

「伊賀先生——！」

玄関の雨戸をたたいて、そっと呼ぶ声がした。

「バカめ、——しくじったらしい」

その声を聞いただけで、半九郎はふっとそんなことをつぶやくのである。

「あねご、ちょっとここを借りてもいいか？」

半九郎がきいた。

「どうぞ。——なんなら、あたしは座をはずしましょうか」

江戸で采配をふるっている半九郎は、すべてを秘密主義にして、味方でも関係のない者は会わせないようにしている。その半九郎さえどこに寝泊まりしているかも知らない小鈴は、気をきかせて自分から遠慮しようとした。一つには桃太郎侍に会って以来の小鈴は、その人以外には、もう何も興味が持てなくなっていたのでもある。

「いや、あねごに遠慮してもらうほどのいいたよりもなさそうだ。くだらん話は、あねごのきれいな顔でもながめながら聞くにかぎる」

「おやまあ、ただ見せるだけで、すみませんことね」

小鈴はすぐ反発する。一歩でも退けば、それだけのしかかってこられそうで、少しも油断のできない相手なのだ。

「おそくなりまして——」

うしろのふすまをしめて、若いたくましい武士がそこへ小さくかしこまった。チラッと小鈴を見て、名のろうかどうしようかというような顔をする。

「報告を聞こう」

半九郎が冷然と、頭から命令した。

「はっ。——申しわけありません」

声の調子で、どうやら覆面ガラスの大将らし

い。

「敵にも要所要所にてくばりがありまして、町中での襲撃は残念ながら無理とわかりました」

「中止したんだな」

「はい。しかも、以外なことには、向島堤の浪人者がその護衛の中に加わっているのです。たぶん、神島が屋敷を出たのは、その男のところへ娘を助けられた礼に行ったのではないでしょうか」

「よけいな自分の想像などは口にするな、事実だけ話せ」

半九郎の語気はきびしい。

「はっ。不利な戦いはムダだという先生のご注意がありましたので、そのほうの襲撃は中止して、せっかく来たのだから、向島堤のかたき討ちだけでもやって帰りたいと思いました。さいわい、そやつが柳原堤へ道をとりましたので、先回りをしてじゅうぶん手くばりをしたのですが、——申しわけありません」

「失敗したのか？」

「もう一歩というところで、左衛門河岸から川の中へ飛び込まれてしまいました。もっとも、じゅうぶん手傷はおわしてありますが」

「こっちの人数はどうした」

「八人ばかり手負いができて、中のひとりは即死でした。一同先へ船で引き揚げさせてあります」

大将ガラスは深くうなだれた。

「西村、貴公は上屋敷から伊織外出の密報があった時——向島堤の名誉回復のため、こんどこそ必ず成功して帰るから、ぜひもう一度拙者をやってくれ、といったな」

「はい」

ギクリと西村が顔を上げた。ことばは穏やかだが、妙に無気味なひびきを感じたのである。

「あねご、世話をかけた。あしたのことは改めてまた相談に来よう」

小鈴に対しては笑って立った半九郎が、

「西村、いっしょに来い」

氷のようにいい捨てて、ゆうゆうと、出て行くのだ。

「伊賀さん、まさか、まさか！」

小鈴はさっと顔色を変えて呼んだ。——この男は、罰として、斬られるのではあるまいか。そのくらいのことはしかねない半九郎なのである。そう思うと、さすがに黙って見ていられないような気がしたのだ。が、半九郎はもうふり返りもしないのである。

「失礼しました」

立ち上がる西村の顔は、紙より白い。フラフラッとよろめいて、しかし見えない強い力にひかれてでも行くように、玄関のほうへ泳いで行った。

好敵手

「おじさん、きょうも先生は起きられないのかなあ」

台所で仙吉のつまらなそうな声がする。

「うむ、もう一日だけ休もうや。先生、ずいぶんくたびれてるんだからな。それに、まだ少し熱もあるんだ」

伊之助がゴトゴト炊事をやりながら答えていた。

「あしたはだいじょうぶなんだね、おじさん」

「うむ、あしたはだいじょうぶだろう」

「みんながっかりしてるんだよ、せっかくおぼえたいろは忘れちまうって。為ちゃんたちは今、観音様へ行ったよ」

「けいこが休みだから遊びにか？」

「違うよ。早く先生がなおってくれなけりゃつまらねえって、拝みに行ったんだ」

「へえ」

「小さい組は聖天様にしたんだ。近いからね。おじさん」

チーンと伊之助が急にはなをかむ。

（子どもというものは――）

かわいいものだなあと、桃太郎侍は軽く目を閉じた。せっかく子どもたちのために寺子屋を始めておきながら、一日教えたきりで、二日寝てしまったのである。

あの晩、左衛門河岸から神田川へ飛び込んで危うく剣難はのがれたが、空腹と疲労に多少参っていたからだを長い間秋の水につかっていたので、すっかりカゼをひき込んでしまったのだ。

きのうも、おとといも、子どもたちが心配してかわるがわる窓の下へ集まっては、先生がうるさくて眠れないからと、かみさん連に追い散らされていたが、――とうとう、がまんがしきれなくなったとみえる。

よし、きょうは起きてやるぞ。

子どもたちのいじらしい気持ちを聞かされては桃太郎侍、もうじっと寝てなぞいられない。けさは熱も下がったようだし、気持ちもだいぶ軽くなっている。そのつもりでやっと床の上へ起き上がってみたが、やっぱり高熱のあとである、まだ多少からだがフラフラした。

「おや、目がさめましたね、だんな」

台所からヒョイと顔を出した伊之助が目をみはった。

「うむ、もうすっかりなおったらしいよ」

「冗、冗談いっちゃいけませんや。そんな顔色をしてまだ無理だ。きょう一日なんといったって起こしませんからね」

「しかし、ほんとうに――」

「いいや、しかしもほんとうもありません。さあ、寝てらっしゃい。きょう一日は寝てなくちゃいけねえ。子どもたちが皆心配してるんだ、無理をして長びかれた日にゃ、この伊之助が子どもたちに合わせる顔がなくなりまさあ」

子どもでも押えつけるようにして寝かして、上からフトンをかけてしまうのである。

「いかんかなあ」

桃太郎侍は苦笑した。しいては逆らわなかったのは、まだどこか大儀だったからである。

「いけませんとも。あっしのいうことさえ聞いてりゃ、まちがいはないんでさ。このあいだの夜ガラスだってそうでしょう、カラスの寝言だなんてバカにするから、あんなめに会っちまったんだ」

伊之助はまだそれを根に持っている。しかし、あの時のこの男の働きは、さすがにサルだった。どこをどうついて来たものか、川へ飛び込んで浮き上がると、いきなり腕をつかんでグイグイ泳ぎだしたのである。ちゃんと先回りをして隠れる穴を見つけておいたらしいのだ。

「さあ、だんな、これでうがいをして、顔をふいといてくださいよ。今、おかゆのしたくをしますからね」

熱い手ぬぐいを絞ったのと、塩水に金ダライを添えてまくらもとへ置いてこまめに立った伊之助が、どうしたのだろう、急いで引き返して来た。

「いけねえ、だんな、やって来ましたぜ」

きょうは三日と日を切った桃太郎侍の返事を聞ける日である。

（いっしょに行ってくれる気になったかしら）

小鈴はどうにも家にじっと待っている気にはなれず、引き寄せられるようにお化け長屋へ急いでいた。

その気になってくれたとすれば、――祝言の杯もしなければならんしと、あの時あの人はわらっていたが、もう他人ではなくなるのだ。どちらかといえば、少しおっとりしすぎる世間知らずの若様なんだから、道中はあたしがしっかりして、ハシの上げおろしまでめんどうを見てやらなければならないだろう、ふたりきりのうれしい旅、

（あたしはきっと、いいおかみさんになってみせる）

が、もし断わられたら、——少しも欲というものがないんだから、あるいは仕官なんか窮屈だ、というかもしれないのだ。そうなったら、あたしは一度伊賀さんに約束した手前、どうしてもしばらく江戸を留守にしなければならないんだし、小鈴は考えただけでも目の前がまっ暗になるのだ。

「どうしてこう、あたしは弱くなっちまったんだろうな」

桃太郎侍の家の窓が見えだすと、小鈴はもうワクワクと胸がはずんで、やっぱりすぐにはいって行けなかった。素通りをして、隣のお俊のかど口をあけてしまったのである。

「あ、いらっしゃいませ」

お俊は縫いかけの、——それはこのあいだ頼んだ自分の着物だ、針を置いて立とうとするので、

「いいえ、かまわないでください。先日はおじゃまをしました」

小鈴は手で押えるように、上がりかまちへ腰をおろした。

「あの、このとおり、もうそでをつければいいのでございますけれど、——おそくなって申しわけございません。実は急に病人があったり何かしましたもんですから、それでなければ、きのうはちゃんとお届けできたんですけれど」

「そうお——病人って、どなた？」

「お隣の先生が、おとといから急に熱が出まして」

茶道具を出しながら、お俊がいった。——意外に熱が高かったので、お俊も一晩じゅう伊之助とかわるがわる、ぬれ手ぬぐいを絞りとおしたのである。

「先生って、桃さんのことですか」

「はあ」

「じゃ、まだお悪いの？」

小鈴の顔色が変わった。道理で、きょうは子どもたちのけいこもなく、ひっそりと障子が締

まっていると思ったのである。

「はあ。けさあたり、おかげさまでお熱が下がったようでございますけれど、二晩ほど、うわごとをおっしゃったほどおひどくて、余病が出はしまいかと、ずいぶん心配いたしましたの」

「まあ、ちっとも知らなかった。ちょっとごめんなさいよ」

そそくさと立ち上がったのである。

「あの、お召し物のほうは、きっと夕方までに」

「ええ、どうぞ」

そんなものはもう、どっちだってよかった。たいせつな男を、こんなあかの他人に看病させたかと思うと、むしょうに腹がたつ。だいいち、熱が下がったといっても、それで安心していい病気なんだろうか？　気のきかない人間なんかに任してはおけない。

「今日は——！」

小鈴は、さっきあんなにはいりにくかった伊之助の家の障子をあけるなり、案内も待たずさっさと上がってしまった。

「だれだ？」

ふすまをあけた伊之助がこわい顔を出す。

「おや、黙って人の家へ上がるおまえはだれだッ」

「おふざけでないよ、伊之さん。病気だってのに、なぜ早く知らせてくれないのさ」

小鈴も負けてはいない。

「冗談じゃねえ。だれが病気だって大きなお世話じゃねえか。おまえなんかの知ったことじゃねえや」

伊之助は立ちはだかって、病間へ通そうとしないのだ。

「おや、おまえさん、うちの人を見殺しにするつもりなんだね。大きなお世話だなんて、きっと医者にもみせないで、ほったらかしてあるんだろう？」

「何をッ、黙って聞いてりゃ、このあま——」

「くやしけりゃお通しよ。薄情なまねをしてい

るから、あたしに病人が見せられないんだろう。かわいそうに、病人には一に看病っていうくらいなんだよ。あたしゃきょうかぎり桃さんを家へ引き取りますからね」

「薄情だと！　こん畜生、かってなごたくを！」

「いいますよ。おまえさんにゃ赤の他人でも、あたしにはたいせつな亭主なんですからね。医者にもかけないで、せんべいぶとんにくるんでほうり出しておかれちゃ、がまんができません」

「せんべいぶとんだと、こんちくしょう！　赤の他人とはぬかしやがったな」

だが、口では伊之助、小鈴の敵ではない。初めはそれでも近所の手前、声が低かったが、小鈴はくやしまぎれに気が立っているのだ。その早口にいいまくられて、

「出て行け！　ここはおいらの家だ。てめえこそ赤の他人――」

とうとう大きな声を出してしまった。

「静かにせんか、みっともない」

たまりかねて奥から桃太郎侍が制した。

「それ、ごらんなさい。伊之さんが悪いからさ」

さすがに小鈴はあかくなった。腹だちまぎれに、うっかりうちの人だの亭主だのと、聞かれてしまったのがちょっと気恥ずかしい。

「何いってやがんでえ。てめえひとりのだんなだと思ってやがらあ」

「ええ、そうよ。おきのどくさまみたいだけど、あたしひとりのだんなだもの」

「ふん、いい気なもんだ。おれの目の黒いうちは――」

「伊之助、よさんか。――代地の師匠、なにか用か？」

「はい、今そこへ行きます。――おどきよ、サル！」

「かってにしやがれ」

伊之助はにらみつけて、台所へはいってしまった。

「だんな、おかゆ食べますか？」

伊之助が台所からわざと声をかけた。

「うむ」

「おや、まだ朝ご飯前なの。じゃ、あたしがよそってあげる」

つと台所へ立って行ったと思うと、

「よけいなお世話だよ。おまえ、フトンを見たら安心したんだろう。さっさと帰ってもらいたいね」

とんがった伊之助の声がした。

「伊之さん、そんないじの悪いことをいわないで、このとおり、あやまります」

小鈴はにっこりわらって頭を下げた。

「フトンはきれいだし、そうじは行きとどいているし――あたしが悪かった。おまえさんは毎日いっしょにいられる人じゃないか。お願い、きょうだけあたしに看病させてくれたっていいでしょう」

「ちぇッ、その口車でだんなをくどこうったった。

「まあ、やせたねえ。どうしたのさ、桃さん」

小鈴は近々とまくらもとへすわって、のしかかるように上から顔をのぞきこむ。女のはだにかもされたような濃厚な脂粉の香がむっと迫るので、

「これ、カゼが移るぞ」

桃太郎侍は、その真剣な顔を見上げながら思わず苦笑した。

「あたしに移ってなおるんなら、貰って行くわ。お医者にかかっているんですか？」

「いや、それほどではない」

「だって、こんなにやせちまって」

「ひげが伸びたせいだろう」

「なぜ、すぐあたしに知らせてくれなかったの。うわごとをいうほど熱があったっていうんじゃありませんか？」

小鈴はどうしても、顔をどけようとしないのだ。

て、おれの目の黒いうちは――」
「わかっていますよ。そんなに心配なら、ちゃんとそばへすわって番をしてりゃいい。ホホホ」
行平をのせた盆をひったくるようにして、小鈴はさっさとまくらもとへ運んで行く。
（かってにしやがれ）
まさか伊之助、そうまでいわれると、のめのめとそばへすわるのも業腹だ。ちょっと台所へ立ち往生の形である。
「師匠、きょうはこのあいだの返事をする約束の日だったな」
行平のかゆをいそいそと茶わんに移している小鈴の横顔を見上げながら、桃太郎侍は思いだしたようにいった。
「ええ」
ドキリとしたように小鈴は男の顔を見たが、
「桃さん、養ってあげましょうか」
いざとなるとその返事を聞くのがこわいらしい。とってつけたようにいって、どぎまぎするのだ。
「いや、そんなまねをすると、伊之助にしかられるからよそう」
桃太郎侍はわらいながら腹ばいになった。
「旅立ちの日はもうきまったのか？」
「近いうちだと思うんですけれど」
「わしにはどうもあぶない仕事のように思えるが、いまさら中止するというわけにはいかんのか？」
桃太郎侍にはこのあいだの夜以来、もうおおかた事件の全貌が読めるのである。この女は要するに伊賀半九郎という者にだまされているのだ。
自分としては、こと、若木家に関するかぎり、国もとがたが負けようと、江戸表がたが勝とうと、知ったことではない。が、公平に見て、この事件はおそらく江戸方が勝つだろう。結局は正しいものが最後の勝利を得るようになるのだ。

「江戸の鬼はもう二、三日じゅうに退治できるんですって。あとは国もとの鬼だけですから、あたしはあしたにも江戸をたつようになるかもしれないんです」
「江戸の鬼って、あのなんとかいう家老のことか？」
「いいえ、バカ様のほうらしいんです。お家のためには代えられないから、しばらく下屋敷かどこかへ閉じ込めて、その間に悪人の根を断つ計画らしいんです」
「――？」
さすがに桃太郎侍、聞き捨てならなくなってきた。
「おかわりは」
桃太郎侍が黙って茶ワンとハシを置いたので、小鈴がきいた。
「いや、もうよそう」
「だって、まだ一つじゃありませんか。口がおいしくないの？」
だ。その負けるほうへ、――少なくとも陰謀側のほうへ、知らずにこの女が引き込まれて不幸になるのは忍びない。
「よけいなお世話だといわれればそれまでだが、踊りの師匠でその日がすごせるなら、それで満足すべきだとわしは思うな」
「桃さん、あんたこわくなったの？」
ふっと小鈴がそこいじの悪い目をする。
「何が？」
「あたしは弱い男きらいさ、あんた自分で鬼退治が好きだっていったくせに、その鬼がのさばっているのを、あぶない仕事だからといって黙って見ているんですか」
「なるほど」
桃太郎侍は苦笑した。
「ね、そんなこといわないで、いっしょにいってくださいよ。それに――」
小鈴は台所の伊之助をはばかるように、急に耳もとに口を寄せて来るのだ。

じゃない。悪いことなら、悪い仕事だが味方にならないかと、ちゃんと初めからいえる人です。——だから桃さん、一度あってくれるといいんだけれどね」

「うむ」

桃太郎侍は横になって軽く目を閉じた。これ以上つっ込んで話はできない。話すとすれば、どちらかの味方にならなければならないのだ。今の自分としてはそれを欲しない。このあいだは降りかかる火の粉だから覆面ガラスを相手にしたが、一度すてられた若木家の味方になる気なぞもうとうないし、むろん悪人の味方などはまっぴらだ。要するに対岸の火事、それでいいのである。

「師匠が信用するくらいだから、その伊賀さんという人物は、よほど器量人らしいな」

「そりゃあもう、敵にするとこわいけど、味方にはたのもしい男です。桃さんとなら、きっと話が合うと思うんだけど」

「うむ」

熱のあとで口もまずかったが、それより小鈴の話のほうが気になった——悪人に閉じ込められようとしているバカ様というのは、まだ会ったことはないが、自分の兄なのだ。それもある。が、兄新之助には伊織をはじめ、正義の家来が相当ついているだろうから、そうむざむざとは悪人に乗せられるようなこともあるまい。気になるのは、その悪人どもを忠義な者と信じているらしい小鈴のことだ。

「師匠、どうして江戸の家老が悪くて、国もとの家老が良いとわかる？」

「だから、それはこのあいだも話したじゃありませんか。江戸の鬼は自分の娘を——」

「それは聞いた。しかし、師匠はそれを実際に見たわけではなく、人の話を聞いて、つまり一方の話だけで、そうだときめてしまっているのではないのか？」

「いいえ、伊賀さんて人はそんなひきょうな人

「いや、拙者は弱い男だからダメだ。寺子屋の先生ぐらいがちょうどいい。伊賀さんのまねはできなかろう」

「——？」

小鈴ははっと目をみはった。

「桃さん、おこったの？」

「弱い男に、おこる気力などあるものか」

穏やかに笑っている男の澄んだ目に、小鈴は妙に強い意志を感じた。すねているのではない、自分にも、この事件にも、なんの興味も持っていないような冷淡さなのだ。

「気を悪くしちゃいや！　ねえ、桃さん、病人にこんな話をしたのが悪かったんです。お願いだから、そんなこわい顔をしないで——」

「そんなにこわい顔をしているか？」

「いや！　いや！　桃さんはあたしにあいそうをつかしたんでしょう！　その冷たい顔！」

「いろいろな顔に見えるんだな」

「桃さんてば！」

小鈴はいきなり身を投げかけて、愛情を取りもどそうとするように、近々と顔を寄せてきた。

「ごめんくださいませ」

ふいにかど口をおとなうきれいな女の声がした。

「アッ、だんな！」

聞きつけて伊之助が台所から飛んでくる。その伊之助の目を恥じるというより、かど口の女の声にしかも困っているらしい伊之助の表情に、小鈴はすわり直って鋭い目を向けた。

（こりゃいかん）

色には出さなかったが、桃太郎侍も一瞬当惑する。たずねて来たのは、声で伊織の娘百合とわかっているのだ。

かたき同士の女が偶然にぶつかってしまったのだ。これは対岸の火事といって澄ましてはいられない。桃太郎侍としては、できるなら陰謀側の小鈴に百合の素性を知らせたくないと思うのだが——問題なのは、まだ伊之助にくわしい

事情を説明してないことだ。おそらく小鈴が覆面ガラスの一味とは、いかにサルでも気がついていまい。

といって、現在小鈴が女の敏感さからじっとけはいをうかがっている目の前で、へたな細工はするほうがやぼだ。

「だれか来たようだな」

桃太郎侍はなにげなく伊之助を見上げた。

「へえ、女のようです」

「お百合さんのようじゃないか。立っておらんで出てみたらどうだ」

「へえ」

伊之助はまだとぼけたように顔色をうかがっている。

「フフフ、小鈴師匠に遠慮しているのか？」

「伊之さん、あたしがいちゃ、ぐあいが悪い女なの？」

これもなにげなさそうにいっているが、軽い嫉妬の色はおおうべくもない。

「いたってかまわねえよ。ただ、相手はおほこだから、おまえに変な気をまわされて、いじめられるとかわいそうだと思ってよ」

さすがに伊之助は要領がいい。桃太郎侍の語気一つで、小鈴の心を嫉妬のほうへ向けようとしているのだ。

「なにいってんのさ。早くお通しなさいよ。いつまでもお待たせしちゃお客様に失礼じゃありませんか」

小鈴は気がついたように、まくらもとの食器に手を掛けた。

「桃さん、もう召し上がらないんなら、片づけますよ」

世話女房であるかのごとく、ついと台所へ立つ。これが女のいじであり、まだ見ぬ敵への優越感でもあるらしい。

「さあ、どうぞお上がんなすって。あいにく、だんなはこの二、三日カゼで寝込んじまいましてね。散らかっていますが」

玄関へ飛び出して行った伊之助が、あいそうよく迎えていた。

「あの、お客様のようでございますね」

「いいえ、かまやしません。さあ、どうぞ」

「――」

やがてさわやかにはいって来た百合が、小笠原流にしとやかに両手をつかえる。

「先日はいろいろとありがとうございました」

じみな縫い返し物の矢がすり、矢の字に結んだ黒の帯、わざとどこかの小旗本の腰元か微禄者の娘のように装っているのは、お嬢様、何か秘密の急用でもあって、うまく変装をしてきたつもりだろうが、つやつやとした高島田にみごとな鼈甲のくし、銀台に金をあしらった高価な平打ちのかんざし、古代錦のぜいたくな箱迫を胸にのぞかせて、――だいいち、そのおっとりと高雅な物腰からして、ただの腰元や貧乏侍の娘にはうけとれないのだから、ちょっと微苦笑ものなのである。

「あの、ただいまご風気とうかがいましたけれど、ご気分はいかがでございます」

「いや、もういいのです」

「存じていれば、すぐにもおてつだいにまいったのでございますけれど」

まだ両手をつかえたまま、じっと潤いのあるきれいな目を向けて来るのだ。

「どうつかまつりまして。お百合さんにそんなことをされては罰が当たる」

「まあ！」

このあいだの別れぎわと違って桃太郎侍のきげんがよさそうなので、百合はほっとほおを染めた。

小鈴が台所から茶を入れて、とり澄まして出て来た。

「お茶をおあがんなさいまし」

小鈴は茶わんを百合の前へおいて、はじめてその顔をまともに見上げた。たかが小娘なんかにという優越も感じていたし、美貌にだってじ

ゆうぶん自信を持っている。

「――」

が、百合はしとやかに会釈をしてほのかにほおを染めたが、ういういしく落ち着いて、――いってみれば嫉妬などという感情は露ほども出ていない。

(いったい、桃さんとどんな関係の娘だろう。あいさつの口ぶりでは、全然、他人がましくも思えないが)

小鈴は心中穏やかでなくなった。その春風にもたとえたい物腰のゆたかさ、高雅さ、――向かい合ってみて急に自信がぐらつきだしたのだ。だいいち、いきなり嫉妬を感じさせられただけ、すでにいくぶんのひけめを認めないではいられない。

「桃さん、お茶をあげましょうか」

わざと近々とまくらもとへすわって、小鈴は男の顔をのぞくようにして見せた。百合への挑戦と同時に、桃太郎侍がどんな表情をするか、そこからも何か探り出そうと思ったのである。

「いや、ほしくない」

桃太郎侍は至極あっさりと、天井をながめていた。百合は行儀よく伏し目になったまま身動き一つしないし、

(畜生、にらめっこなら負けるものか)

妙に重苦しい沈黙がうずを巻きはじめた。

どこへ出て行ったのか、伊之助はさっきから帰って来ない。

「あたし、ここにいちゃおじゃまかしら」

結局根気負けがして、――小鈴はつらあてのつもりだった。生娘なら恥ずかしくて座にいたたまるまいと、わざとあけすけに百合を見て言ったのである。

「あの――」

何と思ったか、百合がふと両手をつかえた。

「ぶしつけでまことに申しかねるのでございますが、実は少しお願いしたいことがありまして出ました者、ほんのしばらくの間だけ座をはずしていただけませんでしょうか」

全く意外な逆襲だった。それをおっとりと邪気のない目をあげていうのである。

「あら、あたしだって桃さんに用があって来ているんですよ」

小鈴は、つんときて、そこいじ悪くにらみ返した。

「まあ、気のつかないことを申し上げました。では、わたくし、あとでもよろしいのでございますから」

すなおにほおをあからめて、百合がおとなしく立とうとすると、小鈴ははっとした。いじでそうはいったものの、桃太郎侍がどうとるだろう？　さっきあんな冷淡な顔を見せられたばかりである。このうえあいそうをつかされては立つ瀬がないと気がついたので、

「いいえ。じゃ、ここはあなたに譲りましょう。あたしはまた、いつでもこられるんですから。――ねえ、桃さん」

それでも何かやさしいことばをかけてくれはすまいかと、そっと顔色をうかがったが、桃太郎侍は無表情に天井をながめているのだ。

「ほんとにわがままばかり申し上げまして」

百合に送り出されて、外へ出ると小鈴はやっぱりくやしかった。たまらなく不安でもある。ちょうど伊之助が向こうから、ぶらりと、帰って来た。

「伊之さん、あれだれ？」

「あれって、だれだえ」

伊之助も人が悪い。真顔でそらとぼけるのだ。

「あのきれいなお腰元さ。まさか桃さんと何か訳のある女じゃないんでしょうね」

「さあ、知らねえなあ」

「おとぼけでない。ついでの時、あの娘によくそういっておくがいい。桃さんに変なまねをする女は坂東小鈴がきっと取り殺してやるってね」

その燃えるような執念の目を見て、さすがの伊之助もギョッとした。

「なにッ、若殿が毒殺された？」
思わず桃太郎侍は、フトンの上へすわり直った。
「いいえ、まだおなくなりあそばしたのではございませんけれど、ご危篤だと申すことでございます」
百合は暗然とうなだれる。……若殿新之助は明朝国もとへ悪人退治のため出発予定であったという。むろん、悪人の一味は江戸屋敷にもいると見なければならないので、この江戸出発はごく秘密に行なわれなければならぬ。
そこで、けさ、菩提寺である浅草の誓願寺へ、父讃岐守の病気平癒祈願と称して微行され、突然小梅の下屋敷へ一泊、そのままご風気でひきこもるていに見せておいて、明朝未明に腹心の十五騎でひそかに帰国の手はずであった。
それが、上屋敷を出る時までは元気であった若殿が、誓願寺に着いた時には顔面蒼白、驚いて一室へ運ぶまもなく吐血されて、それきり意識がないというのである。
「で、拙者にどうせよというのです」
「実は、父から急使がまいりまして、ぜひあなたさまを目だたぬよう小梅の下屋敷へお連れ申してくれ、若木家が立つか立たぬかの大事のせとぎわ、お目にかかりまして父からよくお話もし、おりいってお願いしたいことがあるのだから、必ずお出向きを願うよう、おまえからお頼みせよといいつけられました。……お願いでございます、どうぞ父伊織の苦しい立場をお察しくださいまして、お力添えくださいませ」
百合は必死に両手をつかえるのだ。
ここまで話を聞けば、桃太郎侍には伊織の頼みというのがほぼ想像がつく、……当主が病気のうえに、またまた若殿がご重態となれば、どうしても国もとの悪人どもの擁している万之助を家督に立てなければならない。しかも、場合によっては公儀の不審を受けないともかぎらないので伊織は今それを発表したくないのだ。さいわい自分が若殿に酷似しているところから、一時にせ若殿にこしらえて、あとの策を立てようというのだろう。
なるほど、さっき小鈴は、江戸のバカ殿はもう片づくと自信ありげにいっていたが、事実だったのだ。しかも、その片づけられたのは自分にとって血縁の兄である。さすがに桃太郎侍は激しい義憤をおぼえると同時に、冷酷悪魔のごとき力をもっている伊賀半九郎という者に対して、強い闘志を感ぜずにはいられなくなった。
「拙者に何ができるかしらんが、とにかく一度お父上に会ってみましょう」
「どうぞそうお願いいたします。どんなに父が喜ぶでございましょう」
「しかし、それほど才たけた悪人、ことによるとあなたは、もう、あとをつけられているかもしれんな」
一度覚悟がきまると、この男の頭はすぐ活動しだすのである。
「そうでございましょうか。わたくしずいぶん気をつけてまいったつもりでございますけど」
「いや、つけられていると見るのが本当だ。だいいち今ここにいた女、あれは不思議な因縁で、悪人とは知らずに悪人に一味している女です」
「まあ！　でも、よくご存じのかたなのでございましょう？」
百合の目に今までつつしんでいた感情がチラッと動く。
「伊之助！……伊之助！」
桃太郎侍は外へ呼んだ。伊之助は密談と見てさっきから家へははいらず、表で子どもたちを相手に話していたのだ。
「用ですか、だんな！」
「うむ。ちょっと表通りを見て来てくれ。あやしいやつがいるかもしれん」
「なあに、もうちゃんとさっきから調べてありまさあ。お嬢さんのお供の侍らしいのがふた

り、浪人者らしいのが三人、みんな、てんでんばらばらに、それとなくにらみ合っています。こいつあめったに外へ出られませんぜ」

やっぱりサルはサルだけのことはある。

小梅の若木家下屋敷では、若殿が微行されるかもしれぬというので、朝から係りの者が足軽をつれて来て、そうじ万端、したくを整えて待っていた。が、昼ごろという予定が一刻過ぎてもお着きがない。

「だいぶおそいようだな」

下屋敷を預かる留守番北野善兵衛が、ブラリと門番小屋へ来て声をかけた。少しねこ背の分別臭い中年者である。

「ご苦労さまでございます」

門番中間の森助が丁寧に、おじぎをしてわらった。

「まあ、一服おつけなすって」

「うむ」

「先ほどお出先からお使者があったようでございますな」

がっしりとたくましい森助が、手まめにタバコ盆や座ブトンを運んで、それとなく顔色をうかがう。見かけは柔和だが、時々油断のならぬずぶとさが、目の色にちらりと出る。

「うむ。若殿様慈海和尚の仏学のお話に興じられておいであそばすから、多少誓願寺お立ちが遅れるかもしれぬというご家老様からの使者であった」

善兵衛はいいながら、タバコ入れを取り出した。

「和尚の話じゃなくて、お経のほうじゃないんですかね、だんな」

「――」

「寺へ着くとすぐ血を吐いたってえじゃありませんか。そのまま冥土のほうへお立ちあそばせば、こっちはしたくのほねおり損だが、お寺様じゃムダな手数が省けて坊主まるもうけでさ」

「これ、めったなことは口にするな。壁に耳のたとえがある」

善兵衛は用心深くあたりを見まわしながら、たしなめた。

「なあに、だいじょうぶですよ、だんな。あっしはあんまり詳しいことは知らねえが、江戸屋敷じゅう半分はもうお国もと様の味方だっていいますぜ。なにしろ、こっちにゃ半の字っていうすごい軍師が采配をふるっているんだ。お互いにこれからおもしろい世の中が見られまさ」

ニヤリと森助が笑う。

「――」

善兵衛はむっつりとタバコを吹かしていた。むろん、お国もと様いよいよお乗り出しとなれば森助のいうとおりだが、その曉、こんな下郎にまで秘密を握られていて、はたして事がうまくおさまるだろうか？　ふっとそんなことが不安になるのだ。しかも、伊賀半九郎という男は、自分の命令にそむいた者や、いいつけられた仕事に失敗した者をすでに二、三人、人知れず斬っているとも聞く。そのくらいの覚悟がなくては大きな仕事は成就するものではないと思うが――しかし、その冷酷な刃がいつ自分にも下らぬものではないと考えると、決していい気持ちではない。

「これこれ――」

かど口からふいに聞きなれぬさわやかな声に呼ばれて時が時、善兵衛はギクリと顔を上げた。

「わしは若殿付き小姓神島百合之助であるが、下屋敷留守番北野善兵衛という者はおるか」

ふさふさとした若衆まげ、水色羽二重のふりそで、十六、七でもあろうか、輝くような美少年が澄んだ目をりんと張って立ったのだ。

「はっ、てまえが北野善兵衛にございます」

「さようか。若殿様は、ほどなくこれへお成りあそばす。お居間のしたくを見ておくから案内するように」

「はっ」

もう一度顔を見直そうとすると、すぐ背後に立っていた若党ふうの、右の目のまわりにすごい青あざのあるたくましい男が、ジロリとこっちをにらんでいるので、善兵衛は何か胸の中を見透かされそうな気がして、あたふたと立ち上がった。

（吐血なされたと聞いたが――）

その若殿のおなりとは、どうもげせない。

「百合之助様、うまく運びましたな」

ひととおり居間々々の準備を見てまわって、離れの茶屋へ落ち着いた青あざの桃太郎侍は、善兵衛がいんぎんに引き下がって行くのを見て、炉をへだてた下座からねぎらうようにわらった。

悪人のしつような尾行の目から脱れるために百合が自分からいいだした男装である。桃太郎侍は少しとっぴすぎはしないかと思ったが、――伊織の娘百合が自分を案内して下屋敷へはいることは、絶対に敵に気どられてはならないのだ。そのとっぴすぎるのが、かえって敵の意表に出るかもしれないと思い直して、賛成したのである。

だいたいの話を聞かされた伊之助は、何か不安そうだったが、しいてたてを突くような男ではない。どこをどう飛びまわったか、すぐにふたりの衣装をそろえて来てくれた。

お俊を呼んで、さっそく着物の身丈を直させる。髪を切って若衆まげに結ぶ。胸乳へはさらしもめんを巻いて、衣装をつけた懐中へ懐紙を入れてそり身に立つと、スラリとした目のさめるような美少年ができあがった。

「まあ、お似合いですこと」

つつしみ深いお俊が、うっとりと見ほれたほどである。

その間に桃太郎侍は、高熱のあとでまだ少しからだはふらつくが、そんなことはいってはいられない。伊之助にてつだわせて若党の衣装をつけ、右の目のまわりへ青あざをこしらえさせた。

それだけのことを近所へ少しも知れないように、てっとり早く仕上げたのである。楽屋の苦労は相当なものであった。

まもなく、あと片づけはお俊に頼んで、伊之助は敵の見張りと味方の付け人がにらみ合っているという表から誓願寺の伊織のもとへ、ふたりは裏の抜け道から向島へ渡って無事にここまでこぎつけて来たのだが、――道々に外輪に、外輪にと肩を張って歩く百合のうしろ姿、知っている者には痛々しく、おかしくもあったが、当人にとってはたいていの気苦労ではなかったろう。

「あの、ずっと男になって見えたでしょうか」

百合はまだ胸を張って、両手をひざにきめながら、ピタリとすわっているのだ。

「おりっぱです。欲をいえばちと色が白すぎて、美少年すぎますかな」

桃太郎侍が改めて見まわすと、

「いやですわ、そうまじまじと、ご覧あそばしては」

思わず肩をすぼめて恥じらうのがすっかり女になって、顔にも姿にもいいようのないなまめかしさがにおいこぼれる。

「いかんいかん。まだ気を許すのは早い。屋敷じゅう皆敵と思っていなければなりません」

ながめながら桃太郎侍は、気のせいか、しめきってあるせまい茶屋の中に、ふっと異性のにおいがこもるように思われたので、急いでぬれ縁の障子をあけはなした。

「どうかなさいましたか？」

「それもいけません。あなたは百合之助様、てまえは若党の桃助でございます」

「だって、もうほかにだれも――」

「なりません。お父上がお見えになるまでのごしんぼうでございます」

まっ四角にすわりなおされて、

「まあ、気づまりですこと」

百合之助になって胸を張りながら、目だけが女のまま甘えるようにチラッとにらむ。ふたりしか知らぬ秘密、それを持ったことが、むすめごころに何か楽しいらしい。

「おお、ご老人がみえられた」

庭の飛び石づたいに、神島伊織がただひとり秋日を浴びてゆっくりと歩いて来る。さし迫った、お家の大事を胸一つにたたんでいる苦衷をけぶりにも見せぬ温顔、さすがに若木家十万石の江戸屋敷を預かる人物だ。

「おとうさま、百合はお断わりもなく、こういう姿をいたしました」

ぬれ縁へ父を出迎えて、百合の百合之助はビタリと両手をつかえた。

「うむ」

すでに伊之助から聞いていたのだろう、伊織はジロリと娘の若衆姿を見まわしたが、

「ご苦労であった」

父の目にもりりしい男になって見えるのが満足だったらしく、うなずいて座敷へ上がる。

「桃太郎殿、突然ご足労をおかけ申した」

相対していんぎんに会釈する伊織。

「いや」

桃太郎侍は会釈を返して、じっと老人を凝視した。——この老人と会うのはこれが二度め、伊織にとって自分はうじも素性もわからぬ、いわば未知にもひとしい男である。大事を前にして、その自分をどこまで信用するか、それによって覚悟がきまるのだ。

伊織は端然とその凝視を見返しながら、

「実はかってながら、さし迫ってのお家の大事、御身を武士と見込んで、お願いしたい儀がござる。ご助力くださるまいか」

単刀直入に切りだした。

「お話によっては拙者も武士、いたずらに一命を惜しむ者ではございません」

「かたじけない。事情はだいたい百合からお聞き及びのことと存ずるが、お家の悪人をとり押

え、お国もとにあらせられるご当主様ご安否を探り出さねばならぬ。若木家にとってはたいせつな若殿新之助様、かえって悪人どもにはかられ、今朝誓願寺にて吐血、ご重態です。申しわけなきわしの落ちど、これはいずれおわびいたさねばならぬが、さしあたって、許しがたきは悪人ども、若木家存亡のため、是が非でもとり押えねばならぬ。思案に余って思いついたのが御身のこと、——と申すのは、先夜お目にかかった時から不思議に存じていたのだが、御身は若君とウリ二つ、からだつき、こわねまでそっくりそのままでござる、今若殿ご重態と知られては一蒂いよいよ騒動のもと、願わくば当分若殿のおみがわりとなって、この老人にご助力願いたいのだが、いかがでござろう」

容易ならざることを率直にひれきした老人のはらの底には、むろん、この場になって相手が見込み違いの男なら、生かして帰さぬだけの覚悟ができているのだろう。みつめて来る目に、しんちんたる気魄が感じられるのだ。

「つまり、にせ若殿となって、悪人どもをたたかってくれといわれるのですな」

「ご迷惑ながら、ひとえに御身の義心と手腕に信頼したいのじゃ」

「若殿ご生死のお見込みは？」

「誓願寺の慈海和尚が、一命は必ず引き受けると申していてくれる。わしはそれを信じたい」

「拙者が、お身代わりになることを知っている者は？」

「われら親子と慈海和尚だけじゃ」

慈海和尚は当代の傑僧と聞いている。伊織はこの人に相談して、最後のはらをきめて来たのだろう。

「ご老人は拙者が多くの人の目をあざむいてにせ若殿になりきれるという自信があるのですか」

「むろんある。御身の覚悟一つで事はきまるのだ」

「しかし、万一不幸にして、中途、敵ににせ若殿ということが露見した場合は、たとえ忠義のためとはいえ、申しわけの道がありませんぞ」

「正義のために敵を計って、及ばずして、敗れる。それは天命だ。いさぎよく腹を切っておわびするまで――が、敗れてはならないのだ。是が非でも勝たなければならんのだ。たとえ死んでも、なおかつ勝たなければならぬわしのこの苦労、わかってもらえまいか」

桃太郎侍は目を閉じた。――いうべきことをいいつくして、静かにへんじを待つ伊織。その父の背後につつましく控えながら、百合の百合之助が美しいほおを紅潮させて、じっと、息をのんでいる。

「承知いたした」

桃太郎侍は涼しく目を見開いてうなずいた。

――おのれの生命をかけて、いっかいの素浪人に大事を託そうとする老人の苦衷、ここまで信じてくれれば、事の成否は知らず、また男子の本懐ではないか。

まして、現在陰謀にさいなまれているのは、運命の皮肉から相見るを許されぬ人々とはいえ、自分にとっては父であり、兄であるのだ。今、くしくもその兄の身代わりとなって父を救う、寸毫も天地にはじるところはない。

「不肖、どこまで悪人とたたかえるか、一命にかけてお引き受けしましょう」

「お、引き受けてくださるか」

伊織の老いの目が、さすがに喜びを隠しきれず、一瞬サッと輝いた。百合はホッとして、思わずそこへ感謝の両手をつく。

「まあ、人事を尽くして天命をまつのですな」

一度覚悟がきまれば、何物にも動ずることのない桃太郎侍である。その迫らざるおおらかな風采に、おのずと天稟の気品が備わって、一諾千金の心強さを感じさせるのは、争われぬ素性とでもいおうか。

「かたじけない。人事を尽くすところに必ず天

の加護はある――まず、これへ」

伊織はスルリと上座をすべった。一刻をも争う場合、即座に若殿になれというのであろう。桃太郎侍は請われるままに上座に直った。

「若殿新之助様には、悪人どもの意表に出るおぼしめしにて、ご変装のうえ、小姓神島百合之助とともに誓願寺からひそかにお下屋敷へはいられました」

伊織が用意しておいた筋書きを説明する。

「うむ」

「激しいお毒に当たってご吐血。さいわい。慈海和尚の秘法に救われましたが、なにぶんご病後、多少ご日常の言語動作におかわりあらせられても、決して逆らわぬよう、家来どもに申しつけます」

「よかろう」

「百合之助はてまえがあらたにおつけ申した小姓、これは他家に預けておきましたてまえの庶子でございます。お心おきなくお召し使いくださいますよう。多少、武芸も心得おります」

「――」

百合はあかくなりながら、改めてうやうやしく会釈する。

「なにぶん一家じゅう皆敵と見て出直さなければなりません。おいおい信用のできます者から選んでお相手に差し上げることにいたします」

「当分は物をいわぬほうが無事らしいな」

桃太郎侍はいたずらそうにわらった。

「まずその辺でございましょうか。もうそろそろ、誓願寺から供の者が着きます時分、百合、――お居間に着替えの用意がある。若殿にお召し替えを願うよう」

「ハッ」

百合の百合之助は心得ておも屋のほうへ立って行ったが、まもなく、ふろしき包みをささげるようにして戻って来た。

「おしたくができたら、お居間のほうへご案内申し上げるように」

伊織は縁の障子をたてきって、さがって行く。

「若様――」

いそいそと桃太郎侍の背後へ回って、髪にクシを入れながら、――主従なればこそ、思う人のそば近くに仕えられる喜びを、百合はそっと呼んでみた。

「これからは百合之助が、毎朝こうして、おぐしをおあげするのでございます」

「うむ。大名というものは、黙ってすわっていて用が足りるのだから、便利だな。そのかわり、うっかりすると毒を盛られる」

「いいえ、それも百合之助がおそば離れず、いちいちお毒みつかまつります」

「それは命がけだ。今のうちに、もとの女にかえったほうが無事ではないかな！」

「まあ！　百合はお国もとまでも若様のお供ができると喜んでおりますのに」

うらむような語気がつい女になって、百合はハッとあたりを見まわした。

「若殿のお供をする体を見せて、行列を下屋敷へ回せ」

神島伊織から密令をうけた杉田助之進、大西虎之助、上島新兵衛、橋本五郎太、進藤儀十郎の近習たち五人、――これはこんどの若殿帰国の供の中にも選ばれているいわゆる忠義派有為の人々だが、誓願寺からからかごを守って意気しょうちん、思い思いにお家の前途を案じながら小梅の下屋敷へ着いたのは、やがて夕暮れ近かった。

そこで五人は奥の間へ呼ばれ、伊織から意外な事実を聞かされたのである。吐血してご重態、誓願寺の一室にひそかに慈海和尚の看護をうけているとばかり思い込んでいた若殿が、悪人どもの意表に出て、ご微行、すでに先着されているというのである。

「では、ご家老、あんなにご吐血あそばして、それでも若殿にはお変わりなくいらせられたのですか？」

日ごろは分別者といわれているむっつり屋の上島新兵衛が、思わずひざを乗り出した。

「うむ。天の加護とでも申そうか、さいわい慈海和尚の手当がまにあったので、大事が小事ですんだのだ」

伊織は静かに五人の顔を見比べている。

「それでは、われわれども、すぐにお目通りできましょうか？」

小太りにふとった、まるっこい童顔の杉田助之進が、目を輝かす。早くご無事な顔が見たい、それはだれの心も同じであったに違いない。

「ご家老、ぜひごきげん伺いさせてください」

のっぽで感情家の大西虎之助がつめ寄る。

「まあ待て。ご元気とは申しても、なにぶんあれだけのことのあったあと、若殿にはだいぶお疲れのご様子にて、今お茶室にご休息あらせられる。それに、多少ご興奮のていにて、家来一同を疑いおそれていられるようにも見受けられるから、いずれお呼び出しのあるのを待つほうがよかろうと思う」

「すると、われわれにまでご疑念をお持ちあそばしていられるのでしょうか」

国もとから密使に選ばれて出府し、そのままおそばに仕えることになった進藤儀十郎が、ちょっと無念そうな顔をした。

「いや、この五人は特別である。が、悪人どもの毒手は、意外なところまで伸びていると見なければならぬ。じゅうぶん気をつけて、控えていてくれるように」

伊織は念を押して、さっさと茶室のほうへ引き取って行った。

「ご無理もない。足もとへ火がついたのだからな」

「いったい、けさの毒は何がはいっていたのだろう」

一同は暗然として顔を見合わせた。

（どうもおかしい）

それとなく座を立った儀十郎は、何か心に解

けぬものを感じた。——あんなに吐血した若殿が、いかに名僧知識の介抱でも、そうすぐなおるというのは不思議だ。あるいは伊織のはら一つで一時のがれに事実いない若殿を、茶室にいるかのように味方までいっぱいくわせているのではあるまいか？　ほんとうに無事でいるものなら、忠義派ともくされている自分たちまで疑って、目通りを許さぬということはあるまい。

「進藤さん」

玄関から庭へ出ると、用ありげに追って来たねこぜの北野善兵衛が、肩をならべながらあたりを見まわした。

「あのおかごには、ほんとうに若殿が乗っていたんですか？」

「いや、あれはからかごだ。しかしご家老は、若殿がご微行で先に茶室へ着いていると申している。だれかそれらしい人物が門を通ったか？」

「いいえ、神島百合之助とかいう女にしたいような小姓が、ご準備を見回りに来たというて、先ほど若党をつれて茶室へはいりましたが」

「ふうむ」

儀十郎の目がチラリと光った。

「まあ、おりっぱな若殿様——」

すっかり着替えをすまして座についた桃太郎侍を、百合の百合之助はうっとりとながめながら感嘆した。偶然にも、病後の桃太郎侍は少しやつれて、若殿新之助と寸分たがわぬ人柄に見えたのである。

「馬子にも衣装と申すからな」

「いいえ、衣装がなくても、りっぱな若殿でございます」

おうようなうちにも、どこかりんと引き締まった鋭い気魄のほの見えるのが、百合には若殿以上にも見えて、世にもたのもしく好ましく、この若君とならば、いつでも喜んで水火の中へ飛び込めると思うのだ。

「そちは強い若殿びいきとみえる」

「はい、ですから、お国もとへでも、どこへでも、お供つかまつります」

「さあ、それができようかな」

ふたごの弟である自分が、兄の身代わりになってにせ若殿にばけおおせるのは、そう困難な仕事ではないが、あまり苦労というものを知らぬらしい百合が、どこまで百合之助で通せるか、——敵中に飛び込んで行く苦難の道中だけに、これは考えものである。

「馬にも乗らねばならんし、夜旅もかけねばなるまい。百合之助として、からだがつづくかどうか」

百合之助になりきろうとして当人、努めて肩ひじ張っているが、ともすれば女になりたがる百合の目をみつめながら、桃太郎侍は笑った。

「いいえ、だいじょうぶでございます。百合は武術のおけいこもいたしましたし、馬にだって乗れます。そんなにわたくし弱く見えるのでございましょうか」

「それ、その目がもう女だ」

「それはここだけでございますわ。若様はちゃんとご存じなのですもの、なんですかおもはゆくて、わたくし——」

とうとうまた百合になってしまった。

「困ったお小姓だな」

ふたりきりになると、顔にもからだにもおおうべくもない思慕の情を見せる百合である。桃太郎侍は苦笑せざるをえなかった。

「おお、これは！」

静かにはいって来た伊織が、にせ若殿ぶりを一目見るなり、驚嘆の目をみはった。

「おとうさま、いかがでございます」

百合の百合之助が、得意そうにすわり直る。

「うむ。おみごとな若殿ぶり——」

「伊織、一か八か近習どもに目通り許そうか」

化けるのにはいちばん危険な近習ども、これにさえ見破られなければ、まず、にせ若殿万歳ということになるのだ。

「よろしゅうございましょう。てまえはなるべく夜になってからと存じ、ご疲労とひろうしておきましたが――それでは、ひととおり近習どもの人物を申し上げておきましょう」

が、くわしく聞いている暇はなかった。

「ご家老、申し上げます」

ぬれ縁の外から、あわただしく呼ぶ声がするのだ。

「だれじゃ。――上島新兵衛か？」

「はい。ただいま国もとより急使と申しまして、伊賀半九郎なる者到着、若殿様にじきじきお目通りつかまつりたいと申しておりますが、いかが取り計らいましょう」

「百合之助、その障子をあけよ」

桃太郎侍がいいつけた。

「ハッ」

ぬれ縁の障子が左右に開く。

「アッ、若殿！」

けさにかわらぬ若君が、毅然とそこに着座しているのを見て、新兵衛は、ハッとくつぬぎの上へ平伏してしまった。

「一同、さだめて心痛いたしたであろうのう」

「ハッ、ご無事のご尊顔を拝し、恐悦に、恐悦に存じたてまつり――」

疑うどころか、狂喜せんばかりに感激して――それだけに、この者たちは、どんなにか主君の身を案じているのだろうと思うと、かえって桃太郎侍のほうが強く胸をうたれてしまった。

「新兵衛、このたびは容易ならざる悪人どもの隠謀、今朝のようなこともある、わしは今後とも、そのほうどもを唯一の力と頼むぞ」

聞いている伊織や百合之助さえ本当の若殿の声かとばかり、桃太郎侍のにせ若殿ぶりは堂々と板についているのだ。

「もったいなき御意、誓って新兵衛、身命をなげうってご奉公つかまつります」

新兵衛はじっと若殿を見上げた。これは決して悪人ではない。まず、第一の味方ができたのだ。

「伊織、国もとから急使と名のる伊賀半九郎、どんな男か？」

「さあ、聞いたことのない名でございます。近ごろの新参者でもありましょうか」

伊織はまゆをひそめる。

「すると、まず悪人と見てかかるほうがいいな」

口ではいったが桃太郎侍、伊賀半九郎の名は小鈴からたびたび聞かされている。こいつが隠謀派江戸の総大将なのだ。人物とは聞いているが、はたしてどんな男か、――大将みずから出馬して来たのは、けさの毒殺に自信があるので、その若殿が下屋敷へはいったことに疑問をいだき、正面から様子を見に来たのに違いない。

「とにかく、会ってつかわそう。新兵衛、書院へ通しておけ」

「ハッ」

新兵衛は勇んでさがって行った。

「伊織、敵にも味方にも一幕、大しばいになりそうだな」

桃太郎侍は声を落としてわらった。こうなれば知恵くらべだ。

「しかし、伊賀半九郎と申す者、どういう者か、一応てまえがためしたほうがよろしくはないでしょうか」

老人は老人らしい分別をする。

「いや、敵は若殿が誓願寺から下屋敷へはいったと聞いて、様子を見に来たのだ。いきなり出て行って驚かしてやろう。味方の者の安心にもなることだ」

「なるほど、それも一策でございましょうか」

まだ明るい夕方であった。書院の左右に近習が数名、中央に国もとの急使と名のる伊賀半九郎がひかえ、――伊織の案内で、百合之助を従えた桃太郎侍がつかつかと座に着くと、いずれもハッとその場へ平伏した。

「国もとからの使者大儀、おもてをあげよ」

「ハッ、若殿にはごきげんの体を拝し、恐悦に

存じたてまつります。てまえ儀は国もとにて物頭役をつとめまする伊賀半九郎、なにとぞお見知りおきくださいますよう」

ヌッと恐れげもなく頭を上げた。三十四、五歳、まゆ太く苦味走ったあっぱれ不敵な面貌である。

「聞かぬ名だが、そちは新参か」

なにげなく桃太郎侍がきく。

「ハッ、このたび国家老鷲塚主膳のご推挙にてご奉公つかまつりましてございます」

案にたがわず大胆不敵なやつだ。いわば敵の中へ飛び込んで来て、堂々と奸物の巨頭の名を口にする。近習思わず敵意の目を光らせたが、半九郎はどこを風が吹くかといわぬばかりに、うそぶいている。

「ああ、そちも主膳の推挙か。主膳は近来だいぶ新参者を推挙していると聞いたが」

桃太郎侍も負けてはいなかった。——はたして、半九郎がぶしつけな目をじっと向ける。おっとりとはしているが、バカ殿ではいえぬ一言だ。が表面至極いんぎんに、

「ハッ。いずれもお家にとりまして、役にたつ者ばかりでございます」

あくまで人をくった返事である。

「すると、きょうそちの急使は、やはり主膳からか？」

「ご賢察のほど恐れ入ります」

「よし、使者のおもむき聞こう」

「極秘でございますれば、なにとぞ、お人払いの儀を！」

半九郎はいじわるく目で笑って見せるのだ。いわば悪人からの使者、人払いをすれば一挙に相手を刺さぬともかぎらぬ。おそらく人払いはできまい、それが半九郎のつけめであった。

半九郎はただ国もとの急使といつわって、けさの毒の結果を見に来たので、——一味にどういう手違いがあったか、現在かくして無事な若殿に会った以上、これは失敗と見なければならぬ。もうここには用はないのだ。

その半九郎の胸中を、桃太郎侍はちゃんと見抜いていたので、

「一同、しばらく遠慮せい」

わざと、いじわるく出た。

「あ、若殿その儀は、ちと」

意外なことばに色をなした近習たち、けさのことがあったばかりだから無理はない。が、桃太郎侍はおうように、

「よい、よい」

伊織に目くばせした。

「御意であるぞ。一同遠慮しますよう」

早くも読んで伊織が先に立ち上がったのだ。一同はこれにならうよりほかなかった。

広い書院にふたりきりとなった好敵手。

「半九郎、極秘となれば、他聞をはばかるであろう。——許す、遠慮なく進め」

桃太郎侍はすかさず先手を打った。

「ハッ」

まかりまちがえば刺客にかわるかもしれぬ使者に、これはまた大胆千万。——さすがの半九郎もいささか気をのまれた形で、ちょっと若殿をみつめていたが、むろん悪びれるような男ではないから、スルスルと間近く膝行する。

「使者のおもむき聞こう」

「ハッ、遠慮なく申し上げます。恐れ入った儀でござりまするが、——このたび大殿様の御意にて、若殿には、なにとぞご隠居くださるよう、主膳よりの懇願にござります」

ぬけぬけといってのける半九郎だ。

「ほう、それはまたなにゆえじゃ」

「大殿にはお国もとの若君万之助様にご家督をおゆずりあそばされたき御意と承りましてございます」

「たしかにお父上の御意に相違ないか」

「さように承っております」

「それを主膳はそちに、まず毒を盛ってみてきかぬ節は隠居の懇願をせいとさしずしたのか」

「――」

キラリと半九郎は一瞬目を光らしたが、

「その若殿のご気性、万一不意にお国もとへご微行のようなことでもありましては、いよいよ騒動のもと、お家のためにはかえられぬと覚悟いたしました者が、ほかにもあるのではございますまいか」

暗に主膳をかばって、それにおのれのさしずだといわぬばかりのつら魂。――なるほど、悪人ながらあっぱれなやつだと、桃太郎侍は感心した。

「さようか。そちの申したとおり、主膳の推挙した者はよほど物の役にたつ者とみえるのう」

「おほめいただきまして、恐縮に存じたてまつります。失礼ながら、てまえも、若殿のご天稟、敬服つかまつりましてございます」

「向こうにまわして不足はないと申すのだな。ハハハ、ほめられてわしも満足。――いずれ国もとでまた会うこともあろう。返事はじきじき主膳に申し聞ける。使者、大儀であった」

「ハッ。それでは、ご道中じゅうぶんお気をつけあそばしますよう。今日はこれにておいとまつかまつります」

丁重に両手をつかえたが、ふと思い出したように、

「あ、申し忘れましたが、土地不案内とのご懸念にて、帰途見送りの者などいただきましては分に過ぎまするゆえ、つつしんでご辞退つかまつりおきまする」

尾行などつけてもムダだというのだろう、あくまでも人をくった男である。

「若殿、主膳めからの使者のおもむき、何とござりましたろうか？」

伊賀半九郎が去ると、お召しを待ちかねて座についた近習たちの中から、まるっこい杉田助之進がムックリ顔を上げた。これがいちばんせっかちらしい。小ダルマに似て、ちょっとひょうきんな目玉が純情そのもののように輝いてい

る。

「いや、たあいもないこと、わしに隠居をすすめに来たのじゃ」

桃太郎侍はこともなげにわらっていた。

「何と仰せられます、無、無礼なやつ！」

のっぽの大西虎之助が、精悍そうなつらがまえをして、

「若殿、てまえにきゃつの討っ手をおおせつけてくださりませ」

グイとひざを乗り出した。

「いかん、虎之助、横から、口を出すやつがあるか。――若殿、そ、その討っ手は助之進がつかまつります。まだ遠くはまいりますまい」

これはもう、いきなり立ち上がろうとする。自分から討っ手を買うくらいだから、ふたりとも相当腕まえには自信があるのだろう。その腕まえより、桃太郎侍には一本気なこの人たちの気性がうれしかった。

「待て、両人」

止めておいて、桃太郎侍はジロリと橋本五郎太、進藤儀十郎のほうへ目をやる。

「五郎太」

「ハッ」

「儀十郎」

「ハッ」

「そのほうどもは最近国もとよりまいった者、あの伊賀半九郎という者を存じおるか？」

このふたりは胴巻きごと密書を抜かれたといって、天王橋で代地の小鈴につかみかかっていたいなか侍だ。桃太郎侍はさっきから目をつけていたのである。

「五郎太申し上げます。てまえはこれなる進藤より半月ほど早く国もとを出発つかまつりましたが、そのおりにはまだ名さえ聞いておりません。ごく最近一味に加わった者ではないかと思われます」

まっ四角に両手をついて答えるのである。背後から小鈴をはがいじめにしたのはいいが、ど

うやら人違いとわかりかけると、群衆の手前、始末に困って絞め落とそうとした武骨者だ。

「儀十郎申し上げます。てまえは橋本より半月おそく、むろん、五郎太儀が出府したとは知らず国もとをたちましたが、てまえも、いっこうにあの者は存じません。もっとも主膳儀は、城下町に多くの浪人者を手なずけて養いおくそうでございますから、あるいは、てまえどもの目にふれずにいたのかもしれません」

如才ない返事だが、これはみごとに小鈴の色仕掛けにひっかかって胴巻きを抜かれているのだ。あまり頼りになる男ではない。

「さようか」

桃太郎侍は、色にも出さず、おうようにうなずいたが、

「そちたち両人に申しつける。伊賀半九郎なる者はみずから主膳の推挙と名のるほどの男、さだめし陰謀派にあって、相当重きをなす不敵者であろう。いずこに宿をとっておるか、あとをつけてみよ。ただし、無用の手出しをしてはならんぞ。そっと宿をつきとめて、ひとりは見張りに残り、ひとりはただちに戻って伊織に知らせよ。両人を見込んで、しかと頼むぞ」

ねぎらうように申しつけるのだ。

「ハッ、心得ましてございます」

言下に感激して立ち上がる五郎太と儀十郎。

「若殿、おことばではございますが、両人はまだ江戸の土地不案内――」

不服そうに小ダルマの助之進がふたりのうしろ姿を見送りながらいいかかるのを、

「ひかえよ、助之進」

珍しく桃太郎侍が鋭くしかった。

「助之進――！」

急に桃太郎侍の語気が親しみ深く変わった。

「ハッ」

「そちはあの両人に大役をいいつけたのが不服そうだが、よく考えてみよ、そちにはあの役は不向きじゃ」

「なぜでございましょう、若殿。てまえの腕まえが未熟とでも仰せられるのでございますか」

小ダルマの杉田助之進、こんどは目をクルクルさせて無念そうな顔をした。正直いちずだから感情を抑制することができない。

「それみよ。そちは伊賀半九郎をそのとおり斬りたがっておる。斬りたがっておる者にただ尾行せよと申しつけたとて、必ず事を構えて、けんかに出るにきまっておる。どうだな」

「御意」

なるほどというように、小ダルマは、小首をかしげた。

「虎之助、そちもその組であろう」

「ハッ」

のっぽで精悍な大西虎之助が、思わず首を縮めた。

「悪を憎んでやまぬそのほうたち、わしはうれしく思う。たのもしく思う。一藩の者皆が、そちたちのような人であってくれたら、かかる不祥事は起こるまい」

「――」

一同は暗然とうなだれてしまった。

「両人、わかったであろうな」

「ハッ」

「いずれそちたちの力を借りて、悪人どもを一挙に討たねばならぬ。討つには討つような策をたててからでなければ、かえって敵に乗ぜられるおそれがあるのだ。兵法にも、まず敵を知るということがある。軽挙をつつしんで時を待つのじゃ。よいな」

寛容のうちにおのずと凛然たる気魄があふれて、一言よく人の心をつかむ桃太郎侍のにせ若殿ぶり。

「若殿、助之進め、助之進め浅慮にして御意にさからいたてまつり――」

感情家の小ダルマが、まず声をつまらせて平伏する。

「よい、よい。戦いはこれからじゃ。皆の者、

力を合わせて勇ましくたたかおうぞ」
「ハッ、てまえども、若殿のおさしずにて、誓って身命をなげうちまする」
「過分である。頼みに思うぞ」
桃太郎侍はすっと立ち上がった。
「伊織、百合之助まいれ」
「ハッ」
あとにつづきながら、——少しできすぎる。若殿も決して凡庸のたちではないが、これだけ人をひきつける力はない。このわしでさえ命がささげたくなると、伊織はたのもしくもあり、満足でもあり、今は少しく不安にさえなったくらいである。万一、こういう人物に妙な野心でも起こされると、それこそ若木家を乗っとられてしまうだろうと思ったのだ。
「百合之助」
居間へはいると、桃太郎侍はすわるなり呼んだ。
「はい」
星のような目がほれぼれと前へ両手をつく。みごとな今の若殿ぶり、それが自分の若殿だと思うと、百合はうれしくてたまらないのだ。つい見上げる目が、自分へだけの愛のしるしを求めたくなって——。
が、桃太郎侍はそれどころでなかった。
「ふすまのあたりを気をつけているように」
事務的にいいつけるのだ。
「はい」
百合の百合之助は寂しそうに立って行く。
「伊織、聞きたいことがある」
「ハッ、何なりと」
「進藤儀十郎という者は、国もとのだれからの使者だったのだ」
「進藤は国もと城代家老右田外記から、てまえあての密書を持ってまいった者でございます」
なぜ?——というように、伊織は桃太郎侍の顔を見上げた。
「どういう文面であった」

「国もとの陰謀の様子を述べて、——なにぶん悪人どもは大殿を手に入れて跋扈しているので押えようがない。至急若殿お乗り出しを待つほかはないという書状でございました」
「さようか」
その書状が伊織の手にはいったというのが、一つの疑問なのだ。儀十郎は小鈴のために、その密書は品川の宿で抜かれているはずである。どうしてそれを取り返したろう。
「橋本五郎太はだれの使者だ」
「これは国もとの名門で番頭役をつとめております萩原忠左衛門と申す者からの書状で、文面は外記同様の意見を述べたものでございます」
「うむ」
「御意なれば、取り寄せましょうか」
何か考えているような桃太郎侍の様子を見て伊織はうっかり心から若殿と呼んでいる。それだけいつの間にか桃太郎侍の頭と腕を信じ、たよっているのだ。われながら不思議な気がした。
「いや、それはあとでよい」
桃太郎侍はじっと伏し目になった。深く物を思案する時の癖の一つである。——五郎太のほうはどうかわからぬが、儀十郎には、注意せねばならぬ。ふたりに伊賀半九郎のあとをつけさせたのは、——半九郎ほどの男が尾行を知らずに、のめのめと本拠を突き止められるような愚をふむはずはなく、むしろふたりの人物をためしたかったのだ。はじめから期待はかけていないのだから、それはそれでいい。
が、自分がにせ若殿役を引き受けた目的は、一日も早く国もとへ乗り込んで、主膳一派を倒すにあるのだ。それには、どうしても伊賀半九郎の正体をつかんで、陰謀派江戸組の勢力を知っておかなくてはならぬ。ただ知るだけでなく、できるならこれを倒して行きたいのだ。
(さて、だれだろう、うまく半九郎の正体をつかみうる者は?)
サルの伊之助、——それよりないと桃太郎侍

は思った。ほかに、小鈴があるにはある。が、女を道具に使うのは男のすることでないし、だいいち、小鈴は苦手だ、頼めば水火も辞さぬ女とわかっているだけに、頼むからにはその心をいれてやらなければならないのである。

「伊織、そちは、今夜下屋敷へ泊まるのであろうな」

「はい」

「ぜひ、そうしてくれ。若殿は急に不快になったので、今夜はだれにも会わぬことにする」

「――？」

「わしはちょっと外へ出たいのだ」

「外へ？」

「うむ。おそくも九つ（十二時）までには戻って来る」

「それはちと無謀――」

伊織は顔色を変えた。むろん出るには出るだけの思慮があるのだろうが、もうこの下屋敷は悪人どもの監視の目に包囲されていると見なければならぬ。このうえ、桃太郎侍に万一まちがいでもあったら、それこそ立つ瀬がない。

「ご用なればなんなりと家来どもに――」

「いや、ほかの者では足りぬ。一日も早く江戸をたたねばならん事態にあるのだ。少しぐらいの冒険はしかたあるまい。任せておいてくれ」

「では、だれか供の者を――」

「青あざの若党になって行くのだ。若党に供はつくまい。――百合之助、まいれ」

いいだしたら聞かぬ桃太郎侍である。さっさと立ってもう庭へ出る。茶室へ行くのだ。何のことはない、茶室は桃太郎侍の楽屋になってしまった。

火花

「すると、神島百合之助という小姓が青あざの若党をつれて第一につき、次に伊織、最後が行列という順だな」

若殿の御前を退いた伊賀半九郎は、門のほうへゆっくり歩きながら、見送って来る北野善兵衛に顔は動かさずにきいた。

「はい」

ねこぜの善兵衛はまえかがみに、目だけ八方へ配っている。すでに若殿がはいって警戒厳重な下屋敷、うっかり人にあやしいと見られたら、それこそ命がないのだ。

「伊織の供は？」

「若侍ふたり、若党、中間――」

「行列はたしかにからかごだったのか」

「進藤さんがそう申しています」

「――」

しかも、その若殿がちゃんといたではないか、会っておいてよかった。バカ殿どころか、頭といい度胸といい、考えていたよりはるかに恐るべき人物だ。今までは、少し甘く見すぎていたのである。腹をしめて、出直さなければならないのだ。

「裏門はどうなっている？」

「てまえがカギを預かっていますから、絶対に出入りはできません」

「では、伊織がつれて来た若侍ふたりのうちのどっちかだな」

「はい」

「青あざの若党というのも油断ができん」

「はい」

三人の中のひとりが若殿だったに違いないと、半九郎は推察するのだ。が、今さらその事実をたしかめたところで、あとの祭りだ。

「神島百合之助というのは、伊織のせがれか？」

「はい。どこかへ預けておいたせがれだと、これも進藤さんの話です」

「娘が百合で、せがれが百合之助――」

疑えば疑える。いずれにせよ、半九郎の目的は当の若殿新之助を直接葬るか、伊織をのぞいて江戸の藩政を乗っ取り、しかるうえに国もとの万之助君をご家督に立てるにあるのだ。まか

りまちがっても、若殿を国入りさせるがごときは半九郎の恥辱である。

「せがれであっても、娘であってもかまわん。進藤と打ち合わせて、その百合之助を一刻も早く例の穴へ落としてしまえ。――あした一杯と日をきろう」

「はい」

善兵衛の顔が、うつむいてはいるが、うなじまで青くなった。

「第二、敵の外出には必要のあるかぎり尾行をつけると同時に報告すること。若殿、伊織、百合之助はいわずもがな、――伊織のつれて来た若侍ふたり、青あざの若党には特に気をつけろよ。わしのいるところは、当分船だ」

「ハッ」

すでに門に近く、いいつけるだけいいつけてしまうと、半九郎は例の不敵なつら構えを冷然と取り澄まして、もう口はきかないのだ。

「――」

中間森助が門番小屋の前へ飛び出して、丁重におじぎをした。

「森助――」

半九郎を見送ったねこぜの善兵衛が、それとなくあたりをうかがいながら、緊張したまなざしを向けた。

「如才もあるまいが、外出の者に注意して、例のとおりだぞ。当分は船だそうだ」

「それから――？」

ただならぬ善兵衛の顔色に――まだ何かあるだろうというように森助が人をくった悪党づらを上げた時、玄関のほうから進藤儀十郎と橋本五郎太が、あたふたと小走りに出て来た。

そのころ、――茶室では桃太郎侍が百合之助を相手に、早替わりのさいちゅうである。

「なるほど、自分でこうやってみると、役者というものも楽ではないな」

鏡に向かってつぶやきながら、桃太郎侍はせっせと青ずみで青あざをつくっているのだ。

「さあ、どうやら化けたぞ」

すでにまげを直し、着替えをすまして右の目のまわりに青あざのできた桃太郎侍が、にこりとしてふり向くと、――これが今までの気品高い若殿かと見違えるばかり、目の光からからだつきまで、平凡な若党になっている。

「まあ！」

物思いに沈みがちに若殿の衣装をたたんでいた百合の百合之助が見上げて、世にも悲しそうな顔をした。――女心の、恋する人にこんな姿は、なるべくしてもらいたくないのである。

「百合之助様、これなら、だれが見ても若党でございましょう」

桃太郎侍は得意そうだった。

「あの、百合はお供をさせていただきます」

わざと目を避けるように百合がいった。

「おや、お小姓が若党のお供ですかな」

「ですから、さっきのようにしていれば――」

「そうはまいりません。あなたさまには別に、たいせつなお役をつとめてもらわなければならないのです」

下座に直りながら、桃太郎侍はいうのだ。

「――？」

「この青あざの若党は、さっき下屋敷へはいったきりで姿を消している。一度はどうしても堂堂と表門から出て行く必要があるのです。こんどはいる時は人目につかぬよう、裏から忍び込むのです。それには、裏門をそっとあけてくれる人がいります」

「百合でなくてはいけないのでございますか」

「あなたよりほかに、ないではありませんか」

そういわれるのはうれしい。――が、さっき父伊織が、

（掌中の珠をとられるような気がする）

と、不安そうにつぶやいていたが、百合にとっては、しばらくでも別れることは、もっと悲しく不安なのだ。

「いつお帰りになりますの？」

「正九つ（十二時）」
「どちらへお出かけになるのでしょう？」
「とにかく、一度お化け長屋の寓居へ帰ってからのことです」
「――！」
当然なことではありながら、百合はハッとした。
「あの、あのかたが、あのかたがお見えになる約束でございましたのね」
小鈴のことをさすのだ。さすがにパッとあかくなりながら、嫉妬にも似た熱いまなざしを、おおうべくもない。
「さあ、気まぐれな女だから、どうするかわからんが、来れば好つごうですな。あれは敵方の女だ、意外な話が聞けるかもしれぬ」
さりげなくいいながら、桃太郎侍はきっとなって、
「日の暮れぬうちに、ひととおり裏門の様子を見ておく必要がある。お供しましょう」
「はい」
「百合之助様にならなければいけません。てまえは若党桃助、ご家老のいいつけで、用心のためお庭見分という名目です」
「あの、どうぞお気をつけあそばして」
外へ出てはいえないことばである。百合は両手をつかえて、いっぱい目に涙をうかべていた。長い別れでもするかのように――。
「なに、拙者はだいじょうぶだ。九つといえば真夜中、むろん夜番は絶えず回っているだろうが、どんな裏切り者がいないものでもない。あなたこそじゅうぶん気をつけなければいけません」
「はい」
急いで涙をふいているのを、桃太郎侍はわざと見ぬふりをして庭へ降りた。暮れるに近い秋の日が、やがてたそがれようとしている。
「百合之助様、おぞうりをそろえましてございます」

小梅の下屋敷は、西に常泉寺という寺一つ隔てて水戸家の大きな下屋敷とならび、南面は隅田川へおちる小梅堀、――水戸様の下屋敷に沿っているから水戸堀ともいう。堀ぞい二万坪の地で、茶室の庭を出ると裏手に深い竹やぶにつつまれた大池がある。裏門はその竹やぶを通って、池の土を盛ってこしらえたという、つき山の林をぬけた堀ぞいの東になるのだ。
「これはちと無理ですな」
青あざの桃太郎侍は、忍びよるたそがれの色に、水さびて静まりかえる池の面をながめながら、思わずつぶやいた。屋敷うちとはいえ、思ったより深い竹やぶ、これを深夜に近いころ、娘の百合之助にただひとり、裏門まで迎えに来させるのは、どうかと不安を感じたのである。
いや、あとになって思い合わせてみると、ただに竹やぶが深いから、というばかりではなかったのだ。一目その古池にも似た池のどんよりした水の色を見た時、人間に予感というものがあるならば、たしかに妙な不吉を感じさせられたのである。
「なんでございます」
物思いにとざされて歩いていた百合之助が、青くすきとおる顔をふり返ってきいた。
「いや、思ったより深い裏庭、ここをおひとりではどうであろうかと、ちょっと、不安になりましてな」
「だいじょうぶですわ」
あたりを見まわして、そっとわらった。人目がないとわかると、どうしても男にはなりきれない百合である。――なんといっても気ままにされて来たお嬢様育ち、そう口やかましくいっても、このところ桃太郎侍のほうが、ちょっと負けた形だ。
「お寂しくはありませんか。今はまだ明るいが夜半になるのだ、ここでは少しぐらい声をたてても、おも屋へはとどくまいし」

「いいえ、百合も、少しぐらいの心得はございます。それに、若様のお役にたつのでございますもの」

「そうでございましたな。これはてまえの取り越し苦労。百合之助様の腕まえに信頼いたしましょう」

いまさらそれよりしかたがない。どの道、多少の冒険はお互いに覚悟の前、無理を承知で乗りかかった船なのだ。

竹がつきると、小道はだらだらのぼりのつき山の林になって、クマザサが、一面においしげっている。その木の下やみ、——油断のない桃太郎侍は、前方右の林の中に、ちらっと人影らしい動きを見てとった。

「百合之助様、お気をつけなされませ。なにものか、こっちをうかがっているようでございます」

そっと注意すると、

「どこに——？」

急に緊張して百合之助がきく。

「前のほう、右手の林の中、今木の陰に身を隠しました。知らん顔をしてお進みなさいませ」

隠れるのがあやしいと思った。だれか警護のための見回りなら、こっちは堂々と歩いている小姓と若党、隠れる必要はない。そのあたりへさしかかったら、いきなり林へ飛び込んで捕えてやろうと、桃太郎侍はとっさに意を決した。

が、こっちの様子で、相手はすぐ見つけられたと気がついたらしい。不敵にもガサガサとクマザサをわけて、こみちのほうへ出て来た。

門番中間森助である。

「お見まわりでございますか、百合之助様、ご苦労さまでございます」

両手を道ばた近いクマザサの中へついて、笑いながらじっと百合の顔を見上げる目の鋭さ！

「進藤。こりゃ大役だぞ」

橋本五郎太が息づまるようにつぶやいた。ちょうど水戸の下屋敷の土塀つづき、左手は水戸

堀を越して町家にはもうチラチラと灯のはいった家もある。二十間ばかり前方を、伊賀半九郎が尾行されていると知るや、知らずやふりむきもせず、ゆうぜんと歩いて行く。

「ふりかえられたら、いっぺんで露見してしまうからな」

「なに、さいわい、このたそがれどき、そう遠目はきくまい。それより、見失っては一大事。もっと近づこうではないか」

大胆にも進藤儀十郎はグングン距離を縮めようとするのだ。

「いかん、進藤。それは危険だ！」

「貴公、こわいのか？　万一露見した場合は、どうせ憎むべきお家の奸物、しかも、ふたりにひとりだ、これでいけばいいではないか」

進藤は肩を張って丁と柄頭をたたいた。——品川で美しい百姓女に密書を抜かれて以来、非常に用心深くなっているかれにしては、珍しい大胆ぶりである。

「こわいかとは何だ、武士に向かって！　いかに親しい友人でも、少し口が過ぎるぞ」

正直な橋本は、むっとしたように、くってかかった。

「だから、いざとなったらふたりにひとり——」

「それはいかん。われわれの役目は、あいつの宿をつきとめればいいのだ。若殿の仰せつけにも、決して無用の手出しをしてはならんと、あったではないか」

「しかし、万一露見した場合は、しかたあるまい。大事をとって見失ってしまうより、おれはもっと強行手段をとりたいのだ」

一日の仕事を終えて家路を急ぐ小商人、職人など、絶えてはつづく人通りが、いずれも、口争いをして行くふたりを、けげんそうにながめて、そっと道をよけて行く。知らず知らず声が高くなっていたのだ。

「アッ、左へ切れた」

左は源兵衛橋を渡って、まもなく吾妻橋へ出

るのだ。——橋にかかってふり向かれたら、こっちは一目だ。さすがにふたりは口をつぐんで、なるべく土塀寄りに、ならば溶けこんでしまいたい心である。

が、半九郎はいっこうにわき見をする様子もない。

「急ごう！」

橋を渡りきるのを待って、どっちからともなく早足になったのは、尾行に好つごうのたそがれの色が、したいに濃くなって来たのだ。

「ううむ」

「こりゃいかん」

まもなく、ふたりは、はたと当惑の顔を見合わせなければならなかった。当の伊賀半九郎は吾妻橋の手前にならぶ船宿、田中屋の店へ、スッと姿を消したのだ。

「船で帰るんだな、進藤」

「そうらしい。——しかたがない、貴公早く吾妻橋の上へ行って、田中屋の船着場を見張っていてくれ。おれはあの隣へ行って、すぐに船の用意をする」

とっさに出た進藤の知恵だ。

「よし、早くしろよ」

人のいい橋本は駆けだしながら、——年は下だが儀十郎は、やっぱりおれより頭が働くと、つい今しがたの気まずさも忘れて感心してしまった。

橋から二つめの桟橋が田中屋のであると見当はつけておいた。橋へかかるとちょうど上げ潮どきの満々とふくれあがった隅田川が、ブーンといその香をふくんで、——今田中屋の桟橋から女に送られて屋根船が一艘出るところだ。

「アッ、まにあうかな」

いらいらとその屋根船に気をくばり、一方進藤の船を早かれと祈りたい心の五郎太、うっかり何者かにつきあたって、突然、タッと力いっぱい突き飛ばされた。

「アッ、何をする！」

突き飛ばされた橋本五郎太は、よろめきながら、危うく立ち止まった。

「人に突き当たっておいて、何をするとは何だ」

どこかの道場の門弟らしい若い三人連れ、いずれも黒もめんの紋服に小倉のはかま、竹刀にけいこ道具をゆわえつけたのをかついで、ほうばの高ゲタといういでたち——中のひとりが肩ひじ張りながらつめ寄るのだ。

「だいいち、武士のくせにみっともない。川をながめてウロウロキョロキョロ、貴公、身投げの場所でも捜しているのか？」

「無礼な——」

橋本はカッとなってしまった。——伊賀半九郎の乗った屋根船、見失ってはならぬ。進藤はどうしたろうと、気が気ではないが、目前に降りかかる火の粉！

「なにが無礼だ。貴公こそ、拙者に突き当たっておいて——あやまれ」

が、こうかさにかかられては、いじでもあやまれない。

「突き当たった、突き当たったと、きさまら——目があるのだろう、人がいたら、なぜよけて通らぬ。居眠りをして歩いていたのではあるまい」

「おや、こいつ、——もう許さぬ！」

血気の相手は憤然として、いきなり持っていた竹刀をサッと撃ち込んで来た。

「何をする！」

多少心得のある橋本、ヒラリとかわして——むろん、斬る気はない。峰打ちを食わせてやるつもりで、とっさに抜刀した。が、相手はことあれかしと待ちかまえていた若い三人、いつの間にかひとりが背後へまわって、

「どうだ、一本」

ピュン！　ともろひじを払って来た。不意である。

「アッ！」

前のほうにばかり気をとられていた橋本が、

思わずよろめくところを、
「こっちも、一本」
ピシリと右肩へ強打を入れられて、もう立ち直る暇がない。
「ひきょう――」
腰がくだけて、しりもちをつきながら、夢中で刀を振りまわしたが、――エイ！　トーッ！　おもしろ半分に、かわるがわるうち込んで来る三本の竹刀、とうとう気を失ってしまった。
そのころ――。
橋本が屋根船で乗り出したとばかり思い込んでいた当の伊賀半九郎は、船宿田中屋の二階で、進藤儀十郎を相手に話し込んでいた。
少し離れて代地の小鈴が、これはつまらなそうにポツンとすわって、窓の障子に移り行くそがれの色をながめている。へやの中はもう薄暗いが、わざと灯を入れさせないのである。
「とにかく、大名のせがれとしては生まれぞこないだな。ああ物がわかっていたら、家来が窮屈でたまるまい」
半九郎はじっと考え込むのだ。
「いや、きょうのは特別です。人間毒血を吐くと利口になるというが、それですかな。きょうの若殿は、われわれでさえ上できと感心したくらいですからな」
なに、すぐまたもとのわがままが出るひとりよがりのぼっちゃんになると、儀十郎はたかをくくっているのだが、――ほんとうに毒血を吐いて利口になってしまったのだとすると、表は忠義顔をしてその実敵に裏切っている自分の身に、いつ火がつくかもしれない。あまり気持ちのいい話ではないのだ。
「まあ、その辺だろう。貴公らをわしの尾行に選ぶようでは、やっぱりいくらか、底が抜けている。――それにしても、きょうは四方八方、こっちの失敗つづきだ。せっかく、伊織の娘を尾行させたのに、このほうもみごとにまかれているのだ」

半九郎は苦笑した。
「伊賀さん、あたしは、もう帰ってもいいでしょう」
ふっと小鈴が口を入れた。――娘ということばを聞いて、急にたまらくなったのだ。
なんだが知らないが、若い娘にうまく桃太郎侍を横どりされた形で、行きがかり上小鈴は、自分からお化け長屋を飛び出して来たのだが、――一刻もたったら、また押しかけるつもりでいた。こんどこそ、あの人の胸ぐらをつかんでも、うんといわせなければと、時間つぶしに仲見世へ出て、思い胸にあればうまくもない昼食をひとりで、それもゆっくりするために、わざとちょうしまでつけさせて、――さあこれからと、外へ出たところを、ばったり伊賀半九郎に出あってしまったのだ。
「師匠、いいところで会った。ぜひ相談があるから、とにかく、吾妻橋の田中屋、――知っているな、あの船宿で待っていてくれ。拙者はちょっと用を足して、あとからすぐ行く」
有無をいわせない半九郎である。
しかたなくこの二階で今まで待たされて、どうしたろう、あの娘はもう帰ったかしら。いったいどんな用件だったのだろう、まさか、あんな生娘が、ひとりで大胆に男をくどきに来るとは思えないが、そうはいっても、恋は思案のほかというし――いらいらとそればかり思い詰めていた小鈴なのだ。
「どうした、師匠」
突然だったのと、語気に何かつっかかるような響きがあったので、半九郎は意外そうな顔を向けた。
「いいえ、伊賀さんのほうが急な用でなけりゃ、あたし、ちょっと会いたい人があるんです」
「そうか。わかってる、わかってる」
半九郎はニヤリとした。
「恋路のじゃまはやぼ、というからな――が、ちょっと待ってくれ。いろいろと手違いがあっ

て、むだあしをさせたようになったが、すぐかたづく。少し話があるんだ」

口ではいったが、人のつごうなどおかまいなしの男だ。平気で儀十郎のほうを向いてしまうのである。

「伊織の娘がどうかしたのですか？」

進藤が不思議そうにきいた。

「うむ。お昼前に腰元ふうをして上屋敷を出たのだ。このあいだ、向島堤で助けられた浪人者が、なんでも浅草の聖天裏の長屋にいるんだそうだが、そこへ行ったのだそうで、おやじの留守に姿を変えて、こそこそひとりで男をたずねるところを見ると、これも恋路というやつかな」

半九郎はいたずらそうに、ちらっと小鈴の顔を見た。

「腰元ふう――？」

小鈴ははっとしたのである。

「伊賀さん、聖天裏の長屋って、お化け長屋のことじゃない？」

「さあ、お化け長屋というかどうか知らんが、聖天裏の長屋だということだ」

「その伊織の娘さんての、いくつぐらい？――美人？」

「わしは見たことがないから知らんが、美人だそうだ――な、進藤」

「美人です。武術の心得も少しはあるそうで、女にしては上背のあるほうでしょう。すらりとした面長な顔で、年は十九、百合という名です」

進藤が説明した。

「百合？　――その女なら、あたし、きょう会いました」

たしかにあの娘に違いないのだ――そうか、伊織の娘だったのか。向島で助けられたというが、その助けた浪人者というのが桃太郎侍としてみると、このあいだ柳原堤でこっちの一味に襲われて九死に一生危うく川へ飛びこんで逃げたというのも桃さんだったことになる。敵と味方――さすがに小鈴はあおくなってしまった。

「師匠、どこで伊織の娘に会ったのだ」

グイとからだを向ける半九郎の目が、異様に光っている。

「伊賀先生――！」

ちょうどその時、ふすまの外から呼ぶ声がした。――小鈴にとっては助け船である。

「だれだ？」

「岡です」

「はいれ」

顔を出したのは、吾妻橋で橋本五郎太にけんかを吹っかけた黒もめんの紋付きである。

「どうした？」

「ハッ。うまくいきました。気絶しましたから往来の者には仲直りをするように見せかけて、仰せつけのところへ運んであります」

黒もめんの紋付きは得意そうだった。

「ご苦労。――ちゃんと目かくしはしておいたろうな」

「その辺、如才はありません」

「よし、下で待っていてくれ」

その、ほんのわずかな間に、小鈴は小鈴だけのことを考えていた――半九郎は、百合がたずねた浪人者を、まだ桃太郎侍と知らずにいるのだ。一方桃太郎侍は、けさ、そんなあぶない仕事はよせと、親身になって忠告してくれたところをみると、これはまだ敵でもなければ味方でもない。それを伊織の娘百合が、あの人の腕まえを見込んで、味方にくどきに来たと見るのが本当だろう。百合は若殿の奥方になりたがっているというから、おそらく色恋ではあるまい。そのほうはまず安心だ。

が、不安なのは、半九郎がその浪人者、すなわち桃太郎侍をどう思っているかである、万一敵にきめているとしたら、この恐るべき男にうっかり、それは桃太郎侍だと教えられない。

「伊賀さん、その浅草の浪人者っての、敵なの、味方なの」

黒もめんの紋付きが出て行くのを待って小鈴

はすかさずなにげなくこっちから逆襲に出た。
「さあ、むろん味方じゃないが、敵ともいえまい。しかし、貧乏浪人のことだ、偶然向島で家老の娘を助けたのをいい恩にきせて、仕官したがっているんだろうから、いずれは敵になるかな。どっちにしても、腕は少し立つようだが、そうたいした男ではあるまい。おやじが迎えに行っているのに、忠義だてしてご苦労千万、のこのこ娘のかごのうしろからついて行く男だ。たいてい腹の底は知れている」
半九郎は頭から問題にしていないのだ。
「だって、その帰りに柳原堤で、西村さんたちがひどいめに会ったというじゃありませんか」
悪くいわれると、やっぱり、いい気持ちはしない小鈴である。
「なあに、食い詰め浪人が命がけになると、時時とんでもなく強くなることがある。——だいたい、あの時は、倒したところで一文の得にもならん浪人者を、かってに襲った西村が、まぬけなのだ」
半九郎は苦い顔をしたが、
「そんなやせ浪人は、どっちでもいいが、——師匠、伊織の娘に、どこで会ったのだ」
思い出したようにきく。
「その食いつめ者のやせ浪人の家で会いましたのさ」
小鈴はつんとして横を向いた。もう、がまんができなかったのである。
「何ッ？」
「あたしも今聞いてわかったんだけど、そのやせ浪人てのは、いつだったか、ここにいる進藤さんに天王橋であたしが手ごめにされている時、助けてくれた恩人の桃さんらしいんです」
「なに、桃太郎侍」
さすがの半九郎も、意外そうだった。
「ほう、あの桃太郎侍と名のったやつ」
とんだ引き合いに出されて、儀十郎も目をまるくする。

「やせ浪人で、すみませんでしたね。とにかく、あたしは、きょう、その桃さんの家で、たしかに伊織の娘とかいうのに会いました」
「そうか。小鈴師匠ごひいきの桃さんだったのか。こりゃ悪くいってすまなかった」
ツンとお冠を曲げてしまった小鈴の妖艶な横顔をながめながら、半九郎はあっさりとかぶとを脱ぐ。
が、そのびんしょうな頭は、——泥亀とあだ名のある一筋なわではいかぬ悪ぜげん、浅草の上州屋亀八を手玉に取った桃太郎侍、いや、手玉に取るくらいは自分でもできるが、亀八から取り戻した金をその場で貧乏人にばらまいて、たちまち人気をつかんでしまったという手腕、度胸、こっちに手ぬかりはあったとはいえ、二度まで一味の者の襲撃をみごとに切り抜けている腕まえ、とにかく、小鈴ほどのいじっぱりな女を一目で小娘のように夢中にさせた男だ、それへ伊織の娘がからんで行ったとなると、これは油断ができない。うかつにも、たかが貧乏長屋のやせ浪人ぐらいと見くびって、今まで深く調べなかったのは自分の不覚だったと、一瞬の間に活動しているのだ。
「なるほど、桃さんなら強いはずだ。たしか、師匠、その桃さんを国もとのほうへ、ぜひ推挙してくれとかいう話だったな」
活殺自在の半九郎、けろりとして急に桃太郎侍をほめだした。
「味方にして損のない人だし、あたしはそうしてもらいたかったんです。けど、あの人は、たとえ食い詰めても、きゅうくつな仕官なんかごめんだっていうんでねえ」
執念深い小鈴は、まだこだわってすねている。
「そりゃ師匠、ちと油断ではないのか。人間だれしも無一物の貧乏暮らしより、金と名誉のあったほうがいい。向こうは江戸家老神島伊織の娘が、じかにくどきに行ったとする。娘は美人だというし、桃さんぐらいの男なら祿高にも糸

目はつけまいし、――それでも、仕官はごめんだというかな」

半九郎はもっともらしく、チクリと、からめ手から小鈴の心をついた。

「そんなことあるもんですか。桃さんは寺小屋の先生を始めるんだって、自分が子どものように喜んでいる人です。だいいち、家老の娘がいくら美人だって、親が若殿のごきげんとりに押しつけようとしているんじゃ、どうにもならないじゃありませんか」

「ハハハハハ、恋は人を盲目にするというが、師匠ほどのあねごが、ちと、きょうはどうかしているぞ。伊織はお家の実権さえ手に入ればいいのだ。その目的のために、無理にも娘を若殿に押しつけたいのだ。陰へまわって娘がうわきをするくらい、黙って見のがしておくさ。――いったい、伊織の娘は桃さんの家へ、しかも姿まで変えて、何しに行ったのだ。会ったというなら、あねご、ほぼ想像はつくだろう？」

半九郎の知りたいのはそれである。一度へそを曲げたら、すなおに物をいわないいこじ女だから、うまく嫉妬心を利用して、やっと話をそこへ持って行ったのだ。

「その前に、伊賀さん、娘はどんなふうに、こっちの尾行をまいたの？」

さすがに小鈴は気が気ではなくなって来た。

「いや、それが至極まがぬけているのだ。娘にも陰の護衛がふたりついていたそうで、これが長屋の入り口で主人の帰りを待っている。安心してそれを見張っていると、二刻（四時間）もたつころ、向こうの護衛のひとりが、路地へはいったそうだ。おそらく、あんまり長いのでちょいと見に行ったのだろうな。そいつが青くなって引き返して来て、連れに何かささやくと、急いでふたりで駆けだしたのだそうだ。つまり、娘は自分の護衛までまいて、かってに裏の抜け道から消えてなくなっていたのさ」

「それで、それで、桃さんは？　あそこに伊之助っていう男がいるんだけど、その男は何をしていたんでしょう？」

小鈴はせきこまざるをえなかった。――万一、桃太郎侍が娘を送って出たとすれば、自分の恋はもう絶望と思わなければならないのである。

「その伊之助というのは何者なのだ？」

知るべきことはすべて知っておこうという半九郎である。

「かつぎ呉服を商売にしているんですけどね、桃さんの気性にほれこんで、自分の家へ引き取って、身のまわりの世話をしている変わり者なんです」

さすがに、その前身をあばくのだけは遠慮してやった。

「すると、その男にでも娘を送らせたのかな。様子が変なので、こっちのまぬけどもがすぐ探りに行くと、家の前に子どもが四、五人遊んでいて、おじさんも先生に用があるのか、先生は今ぐっすり眠ってるからだれにも会わないよ、けさからふたりもお客があったんで、また熱を出してしまったんだと、おこっていたそうだ」

「じゃ、きっと伊之さんが、子どもたちにいいふくめて出たんですね」

小鈴はほっと安心した。――そんな小娘なんかの口説に軽々しく乗るような人じゃないと思い出して、一時でも疑ったのが自分で気恥ずかしくなる。

「あねごは、いつごろ伊織の娘に会ったのだ」

「お昼前、あたしが病気見舞いに行っているところへ、娘がたずねて来たんです。なんだか知らないけど、ぜひ内密の話があるんだからと、娘が頼むもんですからね、あたしは気をきかして、座をはずしてやったんです」

「やっぱりおやじのさしがねだ。色気と欲気に、くどきにやらせたんだな。――あねご、油断はできんぞ」

半九郎がけしかけるようにいう。

「そんなこと、そんな手に乗る桃さんじゃあり

ません」
「とにかく、そういう男を敵にしたくはない。むろん、あねごがついているんだから、そんなことをさせはすまいが、向こうがどんな話を持ち込んだか、それとなく聞いて来てくれんかな」
「だって、伊賀さん、何かあたしに用があったんでしょう」
すぐにも飛んで行きたい小鈴だが、そこはいじっぱり女、こう出られると、はいと、すなおには立てないのである。
「先生――」
黒もめんの岡が、あわただしく顔を出した。
「今、青あざが、外出したという報告がありました」
「よし、連絡を絶やすな。必ずいけどりにするんだ。大物だから、じゅうぶん用意しろ」
「はい」
岡は急いで下へかけおりる。
「進藤――」
半九郎の目はキラキラ光っていた。
「貴公は橋本を助け出して、屋敷へ帰ってくれ」
「承知しました」
「百合之助の正体、青あざが今夜手にはいれば、きっとわかるだろうが、――そっちはそっちで、北野にもいいつけておいたが、よく連絡をとって、例の穴へ落としてくれ。あした一杯と日を切っておいた」
「ハッ」
「油断してしっぽを出すなよ。バカ殿だなどとあなどると、とんだことになる。これは少し臭いと思ったら、三十六計にしかずだぞ」
「心得ています。――では」
緊張した進藤が座を立った。あたりはすでに暗く、川に面した窓障子に、わずかなたそがれの色が残るばかり、――櫓の音が、ヒタヒタと寄せる波の間に静かに耳についた。
「あねご――？」
ふたりきりになると、半九郎の目が急にあや

しくわらって、――女の敏感さから小鈴がハッと次のことばに身構えた時、
「先生、青あざは今、吾妻橋へかかりました。適宜にやっつけてもかまいませんかと、きいて来ましたが？」
第二報が飛んで来たのである。
（やっぱりそうか――）
吾妻橋を渡りきって、何につまずいたかヨロヨロと前へ泳いだ青あざの桃太郎侍、ぬげたそうりを捜すふりをして、まだ橋の上の尾行の姿をすばやく見てとった。
下屋敷を出るとすぐ、常泉寺の門のあたりにぼんやり立っていた着流しの浪人者、そいつがジロリと鋭くこっちを見たのを、さりげなくさっさと通り過ぎて来たが、――今、橋の上にちょっと立ち止まってそっぽを向いたのが、やはりそれであった。しかも、ふたりになっている。
（さて、どうしたものだろう）
尾行は覚悟の前だ。それだからこそ、言問の渡しはとらず、わざと遠回りの吾妻橋へかかったのだが、なんとかこの尾行をまいてしまわなくては、うっかりお化け長屋へは帰れないのである。桃太郎侍は広小路のほうへ歩きだした。
尾行にはふたとおりあるはずだ。ただ跡をつけて行く先を突き止めればいいのと、途中適当な場所で襲撃に出るのと――。おそらく、今夜のは後者だろう。それも、神島家の若党と思いこんでいる敵だ、斬るのが目的ではなく、捕えていって、何か秘密を吐かせる。その辺のところだろう。
十五日に近い月が明るく、この辺関東一の観音堂を控え、奥山という盛り場があるから、まだ宵の口、相当の人通りだ、こんなにぎやかな場所では襲撃には出られぬ。
（逆襲してやるのも一つの手だがな）
いきなり敵に、こっちからけんかを吹っかけて、相手はふたり、そいつをたたき伏せておい

て、人ごみにまぎれて逃げてしまう。痛快でもあるし、そのくらいのことは朝飯前の腕を持っている桃太郎侍だ。が、はたして尾行はあのふたりきりだろうか。万一、ほかにも人数があるとしたら、たとえつかまらないまでも、相当厄介なことになりはすまいか？

（大事の前の小事だからな）

こりゃ自重しなければならぬと思い直した。なんとか、暴行ざたに及ばず、スルリとうまく敵をまいてしまう方法はないものか？　それも、時間のないからだから、急ぐのである。

考え考え桃太郎侍は、いつの間にか田原町へさしかかって、突き当たりは東本願寺の裏門、右へ折れれば蛇骨長屋。

（いかんなあ、これからは人通りの寂しい寺町になる。だいいち、こう反対の方角へ歩いて来ては、帰るのに時間がかかるばかりだ）

当惑した目に、ふっとふろ屋の灯が見えた。蛇骨長屋のかどである。

（これだ――！）

桃太郎侍は思わずつぶやいた。奇想天外の一計を思いついたのである。

さっさとのれんをくぐりながら、ちらっと横目を働かして見ると、例のふたりの浪人者、はたしてあぜんとしたようにヤナギ並み木の陰に立ち止まって、こっちをながめている。

（使いに出た若党が、まさかふろ屋へ飛び込もうとは思わなかったろうからな）

桃太郎侍は自分の思いつきに、いささか得意であった。――いかに尾行でも、まさか、ふろの中まではいって来られまい。ついて来たって、裸でけんかはできないのである。まあ、裏表の出口を見張って出て行くのを待つぐらいが関の山だろう。

時分時のことで、ふろ場はいっぱいにたてこんでいた。しかも、もうもうと湯気がこもって、灯が暗いのも時にとっての好つごう、――桃太郎侍は手早く衣類をザルの中へ脱ぎ捨て、ざくろ口のほうへ行った。客は近所の町人ばかり、一日の仕事をすまして来て、夜食の前のひとふろというのが多いから、いずれも、ゆだったからだを流し場へのんびりと、思い思いの世間話がはずんでいる。見知らぬ桃太郎侍の顔など、ふり向いて見る者さえなかった。

桃太郎侍は暗い湯舟の中で、たちまち青あざを洗い落とした。これが第一の目的である。

それがすむと長居は無用、カラスの行水よりも早くさっさと流し場へ出て、からだをふきとる。脱衣場へ上がると、番台のおかみさんが、何か女湯のほうの客にあいさつをしているところだ。はねまわる子どもに着物を着せようとわめいている中年男。自慢のいれずみを見せて涼んでいる勇みらしい男。出る者、はいる者ごったがえしている中を――桃太郎侍は何食わぬ顔をして、自分のとならんでいるザルの中、どう見てもあまり上等とはいえない盲縞（めくらじま）の薄どてらをいきなり素膚にひっかけて、豆絞りの三尺をクルクルと巻いてしまった。

だれも気のついた者はないらしい。万一の場合を思えば、鈍刀でもわきざしをおいて行くのは惜しい気はしたが、この姿では、それを刀かけへ取りに行くのはおかしい。

（ままよ――）

澄ましこんでぬれ手ぬぐいを、ちょいと頭にのせて鼻うたでも出そうなかっこうだったろう。

「毎度ありがとうございます」

番台の声をあとに、ぞうりをつっかけて、ガラリと外へ出た。

出て驚いたのは、――ふろ屋の前のヤナギのかげに例のぶっそうな浪人者がふたり、これは予期していたところだが、東本願寺側のみぞっぷち、門前町のあたりにも、田原町の路地口にも、ふたり、三人と、浪人者らしい姿が行くでもなく帰るでもなくブラブラと、いずれもこっちをうかがっているのだ。

（ほう、――なるほど、無謀なまねをしなくてよかった）

が、こうなっては、いかにウの目タカの目でも、ちょっと気がつくまい。――桃太郎侍はだての素どてらの両手をヤゾウにきめこみながら、もと来た広小路のほうへ引き返そうとした。とたんに、

「おい――」

柳の陰のひとりが、小声に呼ぶのである。

「へえ、あっしですか？」

伊之助といっしょに暮らして、耳慣れている伝法ことば、こういう時に役にたつ。

「つかぬことをきくが、ついいましがた、そのふろへ右の目のまわりに青あざのある男がはいって行ったはずだが――」

「ああ、どこかの若党さんですね」

桃太郎侍はニコリとして見せた。

「うむ。――まだ出て来る様子はないか？」

「だって、だんな。あっしと入れ違いに、今、ドボンと湯へつかったころだ。あざがなけりゃ、いい男ぶりですからね。ご当人、これからあのあざを、すっかりみがきこむんでしょうって。いくらかでも薄くしてえのが人情だ。フフ。けど、ありゃだんなの前だが、皮一枚はがなけりゃ取れねえさ。あっ、いけねえ。だんながたは、あの若党さんと知り合いかなんかで？」

こわそうに、わざとしりごみをする。

「いや、別に知り合いというわけではないが、――もうよい、行け！」

「へえ。じゃ、ごめんなすって」

なんとも笑いたい気持ちだった。おそらく、あの苦虫をかみつぶしたような浪人者が、一行の大将格なのだろう。

（まあ、ゆっくりそこで、あっけらかんと待つがよろしい。秋の夜は長いと申すからな）

桃太郎侍は伝法院の裏門をはいって、うしろをふり返って見た。たしかに尾行の影らしいものはない。うまくいったのだ。

足を早めて裏門から仲見世を横切り、山の宿の通りへ出ようとして、ハッとそこへくぎづけにされた。

「――？」

月あかりに白く浮き出した急ぎ足の横顔、一目で代地の坂東小鈴とわかったのである。

「お化け長屋へ行く気だな」

むろん、目あては自分に違いないのだ。――桃太郎侍の顔が急にひきしまった。

「伊之助――」

家へ飛びこむなり、桃太郎侍は、小声で呼んだ。

「アッ、だんな！」

ふすまをあけて伊之助が、ギョッと目をみはる。素どてら一枚というとっぴな風体より、何か語気にさし迫ったものを感じたからだ。

「ほう、珍しいな」

桃太郎侍はニコリとした。伊之助は夜食の膳に一本つけて、今始めたところらしい。

「フフフ、あんまりくさくさするもんですからね――だんな、飯は？」

「まだすまん。それどころではないのだ」

「だれかに追われてるんですね」

相変わらずこの男は勘がいい。

「うむ、追われどおしだ。まもなく小鈴が来るだろう。また病人に早変わりだ」

「執念深い女ですからね、よく今まで来ないと思って、変に思っていたんでさ」

手早く着替えをうしろから掛けてくれて、けさのまま、へやのすみへ二つに折ってあったフトンをのべてくれる。

「わしにはかまわんで、つづけてくれ。寝ながら話すから」

桃太郎侍は床の中へもぐりこんだ。

「なあに、むりに飲みたい酒じゃありません。ひとりで考えていたら、あっしゃ世の中が情けなくなっちまってね」

「情けない？」

「なんだってだんなは、そんな素町人のまねなんかして人に追いかけられて歩かなくちゃならないんです？　だんなはこの長屋じゅうのかわいい子どものことを忘れちまったんですか？」

伊之助は瞳の前にすわりなおって、くってかかるのだ。

「早くだんなの病気がなおるようにって、子どもたちは正直だから観音様を拝んだり、聖天様へ行ったり――だんながずっと寝ているものと思い込んでいるものだから、家の前じゃ決して大きな声は立てねえ。あっしが誓願寺へ使いに行った留守に、おそらく見張りのやつらだろう、変な侍がふたりも三人も様子を見に来たそうだが――先生は今眠ってるんだから、用があるならばあとで来てくれ、静かに帰っておくれって子どもたちがみんなで断わっていたと、お俊さんが――あっしは聞いて泣かされちゃった」

両手をひざにおいて、伊之助はじっとうなだれてしまうのだ。

「どんな事情があるか知らねえが、あっしはあのお嬢さんが恨めしい。こんなあぶない仕事にだんなをまきこんでしまった娘さんが憎い。――ねえ、だんな、あのお嬢さんは、かりにもご家老様の娘なんだ。ほかにいくらでも味方になる侍がついているんでしょう？　なんでもかでも、だんなが助けてやらなけりゃ、困るっていうんじゃないんでしょう！……この長屋の子どもたちにゃ、ぜひ、だんなが必要なんだ。だんなでなけりゃ、だれもほかに、めんどうをみてくれる人がねえんだ。ねえ、どうかあんまりよそごとに深入りしねえで、早く長屋の先生に帰って来てやっておくんなさい。お願いだ、子どもたちがかわいそうだ。自分たちの先生だとばかり思い込んでいる子どもたちがいじらしくって、伊之助は黙って見ちゃいられません」

「すまぬ」

多感な桃太郎侍はクルリと壁のほうを向いてしまった。決して子どもたちのことを忘れていたのではないのだ。事情余儀なく、こととここにいたったのだが、改めて伊之助にいわれてみると、いじらしい子どもたちの姿が目に見えるようで、思わず涙がほおにあふれて来たのだ。

「伊之助、決して長い間とはいわぬ、ここ半年、どう長くても半年だけ、がまんしてくれ」

「半年ですって、だんな？」

伊之助はおこったように、きっと顔をあげた。

「実はな」

桃太郎侍は静かに起き上がって、フトンの上へキチンとすわった。――まもなく小鈴が訪れて来るであろう。早く伊之助に理解させておかなくては、せっかくの計画が水泡に帰するのである。しかも、この男の力を借りなくては、今後の行動にひとかたならぬ不自由を感じさせられるのだ。

「わしは神島伊織に、武士と見て頼み込むと、容易ならぬことを託されたのだ。若木家十万石一藩の重大事、わしは誓願寺にたおれている若君の身代わりをつとめることになった」

さすがの伊之助があぜんと息をのんだが、

「ちょっと、だんな！」

押えるようにスルリと立ち上がって表の戸口台所の障子、ひととおり音もなく調べて帰って来たその敏捷さ、なるほどサルの伊之助だ。

「そんな、だんな、――そんなことが、だんなにできると思っているんですかい？」

声をひそめてつめ寄るのである。

「ところが、わしは若殿に声までそっくりなのだそうだ」

「いくら似ていたって、そいつはちと乱暴だ。いけません。いけませんぜ、だんな！」

「いや、昼間、すでに一度化けて来ている。近習たちひとりとして、わしを疑う者はなかった。――悪人に毒殺されたと思った若殿が、ふいに無事にあらわれたのだからな。近習たちのよろこび、それを見ただけでも、できることなら悪人どもを取り押えてやりたい。若木家の毒

虫を退治してやりたいとわしは思った」

「――」

「長いことはいわぬ。国もとへ乗りこんで帰って来る半年、それさえすめば、きっと長屋へ帰って子どもたちの先生になる。がまんしてくれ。不思議なめぐり合わせで、どうしても乗りかからなければならなかった仕事なのだ。ぜひおまえにも助けてもらわなければならないので、危険を承知で今夜屋敷を脱け出して来たのだ」

「このあっしに――？」

「うむ。実は小鈴が、当人は悪人と気がつかず、陰謀派から江戸に送られた伊賀半九郎という者に引き込まれて、わしに国もとのほうへ仕官してはと、親切ずくで、このあいだからしきりにすすめている」

その間の事情、きょうの半九郎との問答、進藤儀十郎への疑問、ここへ来るまでの恐るべき尾行、――桃太郎侍は隠さず説明して、

「何よりも、その半九郎の正体を知っておかなくては、江戸をたつことができぬ。これは容易ならぬ人物、屋敷勤めの侍では手に負えぬ、ぜひ、おまえの力を借りなければならんのだ。どうか、頼む」

手をつかんばかりに、もちかけたのである。

「だんな、あっしのような人間に、そんな大事までしゃべっちまっていいんですか？」

伊之助が妙に底いじのある顔を上げた。

「いいも悪いも、すっかりしゃべってしまったではないか。わしは死んだ母とおまえにだけは、何も隠す必要はないと思っている」

信頼しきっているような桃太郎侍の目は、静かに澄んでいた。――へそを曲げて、少しえこじになっていた伊之助だが、いわば男が男にほれて、自分から犬馬の労を誓った間柄だ。こうまではらを割って出られると、もう、いじもみえもないのである。

「もったいねえ、だんな。あっしが悪うございました。こんな人間を、それほどたよりにしてくださる。分に過ぎまさあ。うれしゅうございます」

「では、力になってくれるか」

「へえ、子どもたちのことさえ覚えていてくださりゃ、もう何もいうことはありません。――さあ、そうと話がきまると、こうしちゃいられねえ。だいいち、その素顔を人に見せるのは危険だ。どこに敵の目が光っているか知れませんからね」

「うむ」

「それに、あの執念女の陰にゃいつも伊賀半九郎って男の悪知恵が働いてると見てかからなけりゃなりません。――畜生、どうしてくれよう」

一人でしょって立つように、伊之助が急に力みだした。

（因果なめぐりあわせになるんじゃないかしら）

小鈴は気が気ではなかった。――軽々しく人の話に乗るような男ではないから、まさか伊織の娘の口説なんかにだまされてはいないと思うが、うっかり乗ったとすると敵と味方！

（そんなことはない。あの人にはちゃんと伊織の腹黒いたくらみを話しておいたはずだもの）

が、半九郎には隠しておいたが――けさ、あの人は自分に、どうして伊織のほうが悪くて国もとの家老のほうが良いとわかるのだときいていた。いいえ、伊賀さんはそんなひきょうな男ではない、悪いことなら初めから悪い仕事だが味方にならぬかと、打ちわって話せる強い男だと答えたが、あの人は急にふきげんになって、――あの時、あの人は、もうちゃんと伊織の娘からも話を聞かされて、ひょっとその口車に乗せられていたのではないだろうか？

娘の色香に迷う、むろんそんな人じゃないが、悪いやつ、悪いことに対しては黙っていられない俠気な人間である。そこへつけこんで、伊織の娘がどうだましたかしれないと思うと、小鈴はいても立ってもいられないのである。それに、一つは、

「あねご、自信があるなら、ぜひ今夜じゅうに

桃さんを味方にして来い。今夜一晩と日を切ろう。——あしたはあしたで、あねごでなくてはならない仕事が別にあるんだ」

と、堅く半九郎から念をおされて来たのだ。

「あたしが命にかけてほれた男、いまさら伊織の娘なんかに横取りされてたまるもんですか」

いじでいいきっては来たが、——さて、面と向かってくどくとなると、ほれた弱み、とかくしどろもどろになりがちだし、しかも、あの伊之助というういじわるザルがそばを離れないので、よけい気がひけるのだ。

「フン、小娘じゃあるまいし」

心も足もおのずとにぶる弱気をしかって、小鈴はカラコロと月のあかりの路地を曲がった。ひっそりと寄しずまる伊之助の家の前——。

「今晩は」

遠慮がちに戸をあけると、

「だれだえ、今時分」

その声でわかっているくせに、つっけんどんな伊之助の物言いだ。

「あたしよ」

「あたしって、だれだえ」

立って来るけはいもない。

「あたしっていえば、あたしに決まっているじゃありませんか」

小鈴はムラムラッとして、——今夜おこっちゃいけない。まず伊之助のきげんからとってからなくては道々考えて来たくせに、やっぱり性が合わないのだ。負けずぎらいの中ッ腹でかまわず上がりこんで、ガラリとふすまをあけると、

「なんだ、あねご師匠か」

病人のまくらもとへ瞳を出して、ひとりで一杯始めていた伊之助が、何か、気まずそうな顔を上げた。しかも、当の病人はひたいから目までぬれ手ぬぐいを当てられて、じっと身動きもせずあおむけに寝ているのだ。——さあ、いよいよ小鈴はおもしろくない。

「伊之さん、たいそういいごきげんね」

「なあに、いいにも悪いにも、たった今、杯を手に持ったところさ。少しくさくさするんでね」

「すみませんでしたね。おまえさんにゃ病人が気に入らないんでしょう?」

キラリと小鈴の目にけんが出る。

「フン」

伊之助はそっぽを向いて、ぐっと杯をあおった。どうも、いつもの様子と違うのである。

「桃さん、どうしたの? ぐあいはどうなの」

つらあてぎみに、わざとそばへいざり寄ると、

「師匠か、よく来てくれたな。伊之助がさっきから、ひとりでおこっていて困るのだ」

右の目だけ出して、左はぬれ手ぬぐいで押えながら、桃太郎が寂しく笑って見せるのだ。

「伊之助さんが何をおこっているんです?」

小鈴は思わず目をみはった。そういえば病人のまくらもとで不謹慎な、酒なんか飲んでいる伊之助である——いや、それよりこんな寂しそうな桃太郎侍の顔を、そして、こんなにもしみじみと自分をみつめてくれる親しみ深いまなざしを、いまだかつて見たことがないのである。

「どうしたのよ、桃さん」

「うむ、どうも困るのだ。——師匠、すまんが台所にけさのカユの残りがあると思うのだ。ちょっと見てくれんか」

「おや、まだお夜食前? 伊之さんがかまってくれないのね」

ジロリ伊之助を横目でにらんで、小鈴の顔色がたちまち変わった。

「桃さん、そんなにじゃけんにされてまで、そんなに踏みつけにされてまで、——畜生、ようござんす。今すぐにあたしがこしらえてあげます。けさの残りだなんて、あんまり情けないことはいわないでください」

急いでそで口を目へ当てて、——何に腹をたてたか知らないが、この病人にカユもやらずに、自分は酒を飲んでいるのかと思うと、むしょう

に腹がたつのだ。それをまた病人ゆえに黙ってがまんしていたのがいじらしくも哀れで、小鈴は女心のただカッと理性を失ってしまった。

「伊之さん、ちょっと台所を借りますよ。炭とお米とナベ、あとで買って返しますからね、借りてもいいでしょう?」

「フフフ、七輪はいらねえのか?」

杯をなめるようにしながら、そこいじの悪いことをいう伊之助である。

「七輪だって買って返せば、使ったっていいでしょ。だれがただで借りるっていうもんか」

プイと台所へ立っていって、まもなくバタバタと七輪の下をあおぐ音がしだした。

「だんな、ご親切なあねごがついていて、しあわせですね」

とげのある伊之助の声である。

「伊之助、おまえまだ心がとけんらしいな」

「へえ、こう見えても伊之は男でござんすからね、ひきょうなまねは大きらいな性分でさ」

「つまり、拙者がひきょうだというのだな」

「いいえ、だんなは利口者さ。考えてみりゃご親切で、べっぴんで、情の深いどこかの女がついていたんだ。お百合様のいうことをきいてやれなかったのも無理はねえや」

「――?」

小鈴はハッと聞き耳を立てた。――けんかのもとは、どうやら、伊織の娘! 意外だったのである。

「伊之助、口が過ぎるぞ」

「お気にさわったら、耳をふさいでいておくんなさい。こりゃ、あっしのひとりごとだ。――かわいそうにお百合様は泣いて帰った。無理もねえや、せっかく頼みにして、この人ならと思えばこそ事情を打ち明けてすがったのに、――拙者はそういう醜い争いの中へはいるのは好まん、世を捨てた浪人者だ。悪く思ってくれるな。全く世を捨てた浪人者でさ。いまにどこかのすごい腕のあねごが拾って、たんとかわいがってくれることでしょうよ」

「きさまには何もわからんのだ」

「わかりませんとも。あっしはサルですからね、サルはサルだけの知恵しかありません。どんな事情のある騒動か知らねえが、窮鳥ふところに入れば何とやら。そうでしょう、だんな」

「まあいい。もうよせ」

「よかアありません。あっしは窮鳥がかわいそうなんだ。それを見殺しにして、変な女にかわいがられようと待っているような――」

「伊之さん、変な女ですみませんでしたね」

たまりかねて、小鈴が台所から飛び出した。

「何も、何も、病人をそんなに出て行けがしにいじめなくたって――」

「フン」

伊之助はこにくらしくそっぽ向いた。

「桃さん。けさの、伊織の娘だったのね」

小鈴はじっと男の顔色をうかがった。――伊之助の話の様子で、この人が百合の頼みを断わったことはわかった。そして、伊之助はそれをこの人が自分をおもっていてのことのようにいうけど、もしそれが本当ならと、小鈴は、胸がはずむのだ。

「師匠、そんなことを、むやみに口にしてはいかん」

「ええ」

「拙者はどっちの話も聞かなかったことにしている。わしは一生浪人者でたくさんなのだ」

いじも張りもない、弱々しいその顔! 病気がこんなにも人の心を弱くするものだろうか?

「まあ、そんなとこでしょうね。せいぜいすごい腕のねえさんにかわいがられて養ってもらうさ。だんな、遠慮はいりませんぜ。さっきから、小鈴はまだ来ないかって、待っていたんでしょう?――何のことはねえ、男めかけさ」

「お黙り、サル」

「おれがサルなら、てめえはマムシだ」

「畜生、だれが、だれが、桃さんを男めかけに

するといったえ。ちゃんとあたしは、りっぱなだんなにして――」
「養っておくっていうんだろう？　やっぱり男めかけよ」
伊之助はいじが悪い。
「ふん、その男めかけが、いまにアンマになるんだってね」
「なんですって、伊之さん！」
「師匠、よせ、伊之助はきょうは、ちとムシのいどころが悪いのだ」
桃太郎侍が制した。
「だって、あんまり、あんまりだもの桃さん」
「まあいい。それより、師匠、ちょっとこれを見てくれ、どうも痛んでいかん」
ぬれ手ぬぐいでおさえていた左の目を、そっと放して見せるのである。
「あっ、ど、どうしたの、桃さん」
小鈴はがくぜんと飛びついて行った。――まぶたが痛々しく赤くはれ上がって、黒目一面にポッと白い曇がかかっているのだ。
「まあ！　どうしよう。医者に見せたの？」
「いや、夕方から急に痛みだしてな、――どうなっているか？」
「どうかって、桃さん、――右の目をふさいでごらんなさい。見える？」
「いや、霧が、かかったように、ポッとしておる」
「早く、早く医者にみせなくちゃ。どうしたっていうんだろう！――それに、あたしは、困っちまうね」
オロオロと小鈴はフトンの上から桃太郎侍を抱くようにして、顔に苦悩の色をあらわに――必ず味方につけて来いと、伊賀半九郎からいいつかって来たのだが、今はそれどころではないのである。夕方から痛みだしてこんな目になるようでは――ほっておけば、伊之助のいうとおり、あるいは両眼がつぶれてしまうかもしれぬ。たいせつな男がめくらになる！

（そんなことをさせられるもんか）
小鈴はもうみえも、いじも、なくなってしまった。
「桃さん、すぐ迎えに来ますからね」
「どこへ行くのだ、師匠」
「あたし、伊賀さんのところへ行って、ことわって来ます。もう他人のことどころじゃない。早くその目をなおさなくちゃ。ね、桃さん」
「そう大騒ぎするほどのことでもあるまい」
「いいえ、ダメ、これだけはあたしのいうことを聞いてください」
小鈴はあおい顔をして、伊之助の前へ両手をついた。
「伊之さん、あたしが悪かった。あやまります。すぐ帰って来ますから、その間だけ、どうか桃さんをこのままそっと置いてやってください。お願い――ね、お願いいたします」
「ちっとばかし、薬がききすぎましたかね、だんな」
どぶ板をふんで小走りに消えて行く小鈴の足音に耳を澄ましながら、サルの伊之助はコトリと杯を膳の上へ伏せた。妙にしんみりとした苦笑いをうかべている。
「いや、あれでいいのだ」
桃太郎侍はムクリと起き上がった。
「あれだけおまえにきらわれておけば、小鈴が改めて迎えに来る前に、わしはおまえとけんかをして、この長屋を飛び出せることになる」
「そりゃまあそうですが――少し罪でしたね。ああ真剣になられちゃ、やっぱりどうも」
「やむをえん」
「あすこまでからだを投げ出して来られると、なんだかいじらしくなりまさ。今夜の伊之の役は、ちっとつらかった」
済まなそうな顔をするのである。
が、投げ出された当人の桃太郎侍のほうが、よっぽどつらいのだ。女をあざむく、それさえ

いさぎよしとしないのに、あれまで恥もみえもなく女の真実をさらけ出させて、しかもそれを利用しなければならない——男として実に恥じられる。

「もういうな」

桃太郎侍はわざと冷酷な顔を上げた。かいのない愚痴にいつまで迷っていてもしかたないのである。罪は罪として、いつかはつぐない、報いる時も来よう。今は若木家一藩十万石の、多くの人の運命を双肩になっている身なのだ。

「伊之助、小鈴は伊賀半九郎のもとへ行くといっていたな」

「違いねえ！」

サルはすぐその心を察して、——これも本来の伊之助に返ったのだ、いきなり立ち上がって、

「だんなは？」

「下屋敷で待つことにする。あすの朝、伊織の中間になって来てくれ」

「あっしはだいじょうぶだが、だんな、ほんとうに気をつけてくださいよ」

「心配するな」

「その目の道具は小さいから、はずしたらなくさないようにしておかなくちゃいけませんぜ。耳の穴へ入れておくのがいちばん安全なんだ」

「わかった、わかった」

桃太郎侍がわらって見せると、伊之助はスルリと三畳のほうへ消えて、何かゴソゴソ身じたくを始めた。

「おい」

ふっと思い出して桃太郎侍が呼ぶ。が、もう返事がないのだ。

「伊之助——」

急いでふすまをあけてみると、すばやいやつ、いつの間にか出て行ってしまっていた。風が出たらしく窓の雨戸がゴトゴトと鳴っている。

（驚いたやつだな）

桃太郎侍はあっけにとられて、しかたなく左の目へ自分で大きな眼帯をかけ、手早く着がえをすませた。

くずくずはしていられない。あんどんを吹き消して、裏の台所口から隣のお俊の家の台所口へ。——すでに四つ（十時）に近い月があおくさえ返って、秋も深くこがらしに似た風がゴーッと軒下を通り過ぎて行った。

コトコトコト、と雨戸を軽くたたいて、耳を澄ましてみた。女ひとりの家の裏口から、——どなた？　と大きな声を出されては困ると思ったが、さすがに武家育ちはたしなみ深く、

「どなたでございます」

雨戸の向こうへ立って来て、静かにきくのである。

「隣の桃太郎——」

「あ、今おあけいたします」

戸締まりをはずす音がして、スッと、雨戸が開いた。飛び込むように、

「夜中、ぶしつけだが、取り急いでお願いしたいことがあってな」

うしろの戸を締めながらささやいた時、——ガラガラッ！　と今出て来たばかりの自分の家の茶の間あたり、何者か臆につまずいてひっくり返す音がした。

「あ——！」

せまい台所へ近々と向かい合って立つお俊の目が、物問いたげに桃太郎侍をみつめた。

「伊之助さんですか？」

「違う。あれは留守だ」

サルと呼ばれた伊之助が、しかも自分の家で、いかにやみとはいえ、自分の臆につまずくはずはない、——桃太郎侍はじっと耳を澄ました。

火打ち石の音がする。

「だれもおらんぞ」

「あ、寝巻きがぬいである」

「表から出れば、われわれの目につかぬはずはない。裏だ、台所口だ」

くせ者の声は三人、——ひとりが台所へ飛び出して来た。

「おい、遠くへは行っていないぞ、寝巻きにぬくもりがある」
「よし！　出口はどこもふさがっているんだ、袋の中のネズミさ」
台所の戸がガラリと開いた。
「――！」
桃太郎侍は手早く、こっちの戸の桟をおろす。
（もし、ここをたたかれたら？）
そういうようにお俊があおざめて胸をはずませているのが、息づかいでわかる。――が、足音は裏手のほうへ走り過ぎて行った。残るふたりが、ガサガサと戸ダナを捜している。
「お俊さん、昼間の娘の着物は？」
むろん、伊賀半九郎の一味に違いないくせ者、万一百合が着替えて行った腰元の衣装など見つかってはおもしろくない。
「あれは、家へおあずかりしてあります」
「そりゃよかった。――仙坊は眠っていますか？　おじさんなどと、今呼ばれては」
「ぐっすり寝込んでいますから――たいていのことでは」
「それもよしと。――が、えらいことになった。とんだ忍び男、退くも進むもできぬ」
「まあ」
お俊はハッとあかくなって、――あまりに身近に立ちすぎていたのだ、目のやり場がない。が、この桃太郎侍の思いがけない冗談口が、させまったお俊の気持ちを、いくらか楽にしたらしい。
「どうなすったのでございますか」
隣の物音へ耳をすましながらそっときいた。
「昼間の事件のつづきです。――半年ほど留守にするかもしれん。ここに金子が五十両ほどあります。長屋の子どもたちのために必要な時つかってください。かわいい弟子たちです、帰って来るまでひとりも失いたくない。頼みます」
それが頼んでおきたくて、わざわざ立ち寄ったのだ。桃太郎侍はすばやく重い紙入れをお俊の前に差し出す。
「あの、わたしに、そんなたいせつなお役目が」
事の重大さに、お俊は思わず身をひこうとしたが、
「いや、お俊さんの思ったようにつかってもらえばいいのだ。火急の場合、どうか、子どもたちのために――ぜひ、頼み入る」
その手を取らんばかり、せつなる桃太郎侍の依頼である。
一度走り去った足音が、せわしく引き返して来た。
「おらんぞ。どこか近所へもぐりこんでいるのではないかな」
小声に報告している。
「よし、一軒々々捜してみろ。路地の出口はみんなだいじょうぶなのだろうな」
「そのほうは心配ない」
「もう三、四人、連れて来たほうがいい。相当ぶっそうな長屋だというし、油断は禁物だ」
「そうしよう。大滝先生に相談して来る」
ひとりがまた雨戸の外を走り去った。――人数の用意もして来ているらしい。
「どうしましょう！」
ついにのがれがたい危険を感じて、お俊はそっと背筋に悪寒が走った。一軒々々捜すとなれば、第一に自分の家へ押し込んで来るに違いないのである。

悪　党

あとにして思えば、父伊織に相談して、父の手からカギを手に入れてもらえば、何のことはなかったのである。
が、百合は、――この役目、あなたをおいてほかにないではないか、と言い置いて行った桃太郎侍のことばを、あまりにも正直に取りすぎてしまったのだ。
（若様のおためなら――）

いや、若様のこととなると、なにごとも自分ひとりの手でしなければ気のすまない百合にもなっていた。

四つすぎるころだったろうか、百合の百合之助は、ひとりでそっと茶屋を出た。裏門のカギを手に入れておかなくてはならないことを思い出したのである。

夕方、あの裏山の林の中で出会った森助という門番中間に案内させて、裏門のあたりを見回った時、そこに厳重なカギのかかっているのを見て、百合はハッと桃太郎侍と顔を見合わせたが、——その裏門から少しはいったところに、堀ぞいに三棟ばかり大きな土蔵がならんで、これにもみんな同じようなカギがかかっていた。

「あれはなんだ」

青あざの若党の桃太郎侍が、きいたのである。

「へえ。右のがまぐさ倉、あとの二つは雑穀倉だそうでございます」

森助が答えていた。

「あのカギ類はだれが預かっているのだ」

「北野善兵衛様でございます」

「ああ、あのねこぜのかただな」

なにげなくいって、桃太郎侍はチラッと百合に目くばせした。

そこから外は堀ぞいの塀について、まっすぐに表門へかかり、

「では、百合之助様、行ってまいります」

その人は澄まして、さっさと外へ出ていってしまったが、——門小屋とならんだ一軒、下屋敷をあずかる北野善兵衛の小屋であることを、そっとそでをひいて教えて行くのを忘れない桃太郎侍だったのである。

が、百合の百合之助は、ひとりで父のもとへ引き返しながら、急に取り残されてしまったような寂しさにおそわれて、ついカギのことは忘れていたのだ。

(こんなにも寂しいものだろうか)

恥ずかしいけれど、百合は夜食さえ満足にのどへ通らなかったのである。

「掌中の珠をとられたようだ」

父はいっていたが——百合には、自分の魂を持って行かれてしまったような気がした。われながら、どんなに深くその人を愛しているか、こうして離れてみてはじめて驚いたのであった。もうとてもその人なしには生きていけそうもない自分になっていたのである。

「若様、——若様！」

百合はひとり茶室に閉じこもって、秋の夜の長さ——ともすれば、たいせつな人と会ってどんな話をしているか、小鈴の白い顔がのろわしく、いや、それより、万一思わぬ危険にさらされているのではあるまいかと、風の音にさえ不吉を感じ、いても立ってもいられない感情を、脱ぎすてて行ったその人の衣類にじっとほおを押しあてて、やっと堪えていたのだ。

そして四つ（十時）の鐘を聞いたのである。

（もういっときのがまん——）

われとわが胸にいいきかせながら、ふっとカギのことを思い出したのだ。

「まあ、なんという愚かしさ、カギがなくては門があけられないのに」

百合はひとりでにほおのほてるのを覚えた。お嬢様育ちは役にたたない、とさだめし笑うであろうその人のやさしい顔を思いうかべて、

「でも、若様はきっと、——よくこんな寂しいところを、ひとりで迎えに来てくれたと、ほめてくださるに違いない」

早くそのことばが聞きたいのである。早くその暖かい胸の中へ飛びこんで行きたいのである。処女心のただひとすじに——身にせまる魔の手のあることなど露ほども感じられなかった。

「門番！——門番！」

トン、トン、と戸をたたく者がある。

「どなたさまです？」

そろそろ寝酒を始めようとしていた門番中間

の森助は、——あ、帰って来たなと、その声でわかったので、すぐ小屋の窓をあけた。
「進藤様でございますね」
「うむ、お上のご用でただいま戻ったのだ」
「ご苦労さまでございます。今、くぐりをおあけいたします」
夕方、伊賀半九郎を追っていったふたりである。急いでとびらをあけると——明るい月かげに、もうひとり橋本五郎太が、さんばら髪の、無残にはれあがった顔、はかまも衣類もところどころ引き裂けて、どう見ても、けんかをして、さんざんなぐられて帰ったという格好を、さすがに恥じられるか、進藤儀十郎の背後に、かくれるようにして立っているのだ。
「おや、どうかなさいましたか？」
森助はわざとおおぎょうな顔をして見せた。
「いや、何でもない」
進藤はうながすように、チラッと五郎太をふり返って、そのまま玄関のほうへ歩き去る。五郎太の右の足が少しびっこをひいていた。
（おやおや、なんてざまだい。橋本とかいったな、進藤さんはこっちとグルなんだ。知らずにいいようにおもちゃにされて来やがった）
森助はおかしかった。——どんなふうにおもちゃにされたか知らぬが、うまくわなにひっかかって、大の男がもみくちゃにされている姿を思うと、この男は胸をくすぐられるような愉快さを感じるのだ。そういう凶暴な性質の森助だったのである。
「おや」
くぐりの戸締まりをして小屋へはいろうとして森助は、ハッとそこの物陰に身をちぢめた。
今、ふたりが消えた植え込みのかげから、そのふたりをやりすごしていたとも見えるように、明るい月の中へひょいと人影があらわれたのである。女にもしたいふっくらとみずみずしい美貌、ふさふさとした前髪、——サッと吹きつける風に、はかまがなびいて、わずかに漏れる脛の白さ、それを急いで直す姿さえ妙になまめいて、どうしても男とは思えぬ。
「百合之助だ——！」
森助はゴクリとつばをのんだ。何の用で今ごろこんなところへ——というより、伊賀半九郎から例の穴へおとせといいつけられている獲物が、しかも目の前へひとりで現われたのである。
「女に違いねえ」
夕方、あの森の中で会った時から、直感的にそう思い込んでいる森助は、そのばけのかわをはいでみることにも悪魔的な興味をそそられて——相手が家老のせがれだろうが、たとえ大名の何であろうと、そんなことに二の足をふむような男ではない、何よりも、あの底気味の悪い青あざの若党がついていないのが安心である。
（たまらねえや、畜生！　カモときやがった。ネギをしょってやがる。進藤さんにも、北野さんにも、おきのどくだが、ひとりでちょうだいするぜ。フフ、ギュッとしめつけて、ほうびの金が十両、——いや三十両と吹っかけよう。次第によっちゃ、五十両！——それでも安いや）
森助はワクワクとあたりを見まわした。ほかに人影はない。それに、庭木を鳴らして吹きめぐる風のあるのが、もっけのさいわいだ。
（おっと、あわてるなよ、森助。なわがいるぞ、なわが）
その間に百合之助は、スッと前を通りすぎて門小屋とならんでいる北野善兵衛の小屋の前に立った。
（へえ、善兵衛さんにご用とおっしゃる。——しかたがねえ、半口乗られたかな——）
が、考えてみると、そのほうが安全なのである。木戸の中なら、人目につく心配はないし、いざとなれば、こっちはふたり、——森助はそっと小屋へ引き返して、ほそびきの用意をした。手ぬぐいを二本わしづかみにした。
「カギと仰せられるのですな」

玄関へ出て来たねこぜの善兵衛は、妙な顔をしていた。

「ご家老の仰せである。とかくのうわさある昨今、若殿ご滞在中はカギ類はいっさい手もとにさしおかれるとのことだ」

背を向けて立った百合之助がいっている。——あけっぱなしの木戸からスルリとはいって、玄関わきのヤツデのかげへしのび込んだ森助は、もうこっちのものだと思った。飛び出しさえすれば、すぐ手の届くところに、百合之助のきゃしゃなうしろ姿があるのである。

「承知いたしました」

善兵衛は陰険な目をキラリとさせながら、暗い奥へ姿を消した。

(フン、善兵衛さんもやる気だな)

いいカモなのである。守銭奴といわれるくらいの男で、この中年までただ金を集めることのみを唯一の楽しみに、妻も子もなく、好きな酒さえ自分ではめったに買わない偏屈者である。五十両が五両でも、この男なら見のがすまい。

(が、こっちが先口なんだからね、お先へごめんこうむりますぜ)

森助はニタリとわらいながら、——見ると、百合之助は何の気もつかず、ひたすら善兵衛の消えたふすまのほうを待ちかねている、油断しきった姿だ。

サーッ！　と秋風が吹きつけて来る。

(今だ！)

ハッとヒョウのように、おどり出した森助、

「あ、な、なにを——！」

わずかに叫ぶ百合之助の背後から、左腕をその柔らかい首へからみ、右手に持った手ぬぐいで口を押えて、グイと力いっぱいしめあげた。かわすも避けるもない慣れきった手口のうえに、がっしりと体格のある森助の腕力である。不覚にも百合之助はバタバタとわずかに足を動かしただけで、ワシにつかまったスズメにもひとしく、たちまち気力を失って行く。

(それ、おとなしくなったな。いい子だ。じっとしていなよ。少しのがまんだ)

森助は勝ち誇って、——相手が絶息する一瞬手前、気を失ってはめんどうである。ちゃんと見はからっていたのだ——おし当てた手ぬぐいの上からもう一つの手ぬぐいで、すばやくさるぐつわをかませ、まだじゅうぶん意識のつかぬぐったりと重いからだを器用に扱って、たちまち手足を用意の細引きでしばり上げてしまった。ほんのタバコ二、三服の間である。

(女だぜ。——フン、やっぱりめろうとおいでなすった)

白々とたあいのないからだを式台の上にころがしながら、森助は悪魔のような醜いわらいをうかべた。

「——！」

ほっと正気に返ったらしい百合が、胸へ触れているぶしつけないまわしい手を払いのけようとするように、必死に身をもがき始めた。蒼白な顔、憎悪のこもった目——それさえすでに女らしく、どこか弱々しい。

「あばれちゃいけねえ。おとなしくするんだ。もうおまえ、あばれたってムダだからな。自分のからだが痛むだけだぜ」

森助がなだめるようにささやく。

「アッ！」

なにげなく出て来た善兵衛が、このありさまに思わずうめいた。ちゃんとカギの束を手にしているのである。

「北野さん、うまくいきましたぜ、半口乗せますよ。へへへ、お屋敷内を借りたんだからね」

のっそり森助が立ち上がった。百合の百合之助を自分の背にかばうように。——女であることを善兵衛に知らせたくないのだ。

「森助、きさま——！どうするのだ、ご家老の使いだぞ！　すぐ人が捜しに来るではないか！」

善兵衛はそれどころではない。伊織のいいつけで自分のもとへ使いに来た百合之助、帰りが

手間どれば、すぐだれか捜しに来るだろうし、たちまち露見することなのだ。さすがにあおくなってしまった。

「北野さん、そんなことをいちいち気にしていたんじゃ、なんにも仕事はできませんぜ」

森助はずぶとくせせら笑った。

「しかし、きさま、すぐ露見するようなまねをして——あとのしまつを、どうするんだ」

木戸のほうを気にしながら——今にもだれか百合之助を捜して来はすまいかと、ねこぜの善兵衛はいらいらしているのだ。

「なあに、だれか人が来たら、どなたもお見えになりませんて、しらをきっていりゃいいんでさ。玉の始末はあっしがする。こうなりゃ、どうせあっしは、もうここにゃいられねえんだから、いざとなったら、みんなあっしのせいにしておきゃいい」

「——」

なるほど、そういわれればそうだ。

「で、きさま、これからどうする」

「どうするって、きまってるじゃありませんか、半の字のところへご注進さ」

「あれは？」

善兵衛が無残に縛り上げてころがしてある百合之助のほうを、あごでしゃくる。

「ひとまず穴へでも運んでおきましょうよ」

森助はむぞうさに百合のからだへ手をかけようとしたが、気がついて、じゃまになる大小を腰から抜き取った。

「北野さん、役得にするんだね」

それを善兵衛に渡して、軽々と百合を右腕にかかえ込む。急に百合がもがきだした。

「フフフ、おとなしくしろってば——あきらめの悪い女郎だ」

思わず口にして、ハッと気がついたから急いでいい足した。

「まるで女郎のような陰間だぜ、こいつは」

「夜番に見つからんように気をつけろよ」

「がってん——！」

強力の森助はしっかり百合をかかえて、すばやく木戸を出ながら、——フン、まぬけだな。びくびくばかりしてやがって、なんにも気がつかねえんだ、と薄ら笑いをうかべていた。

さすがに覚悟したか、それとも突然襲った極度の絶望に気力を失ったか、百合はもうぐったりと動かなかった。

森助は注意深くあたりへ気を配りながら、明るい月かげを避けて物陰へ、ヒョイヒョイと魔のようにとんで行く。さいわい、夜番にも出会わず、裏門の近くの雑穀倉までたどりついた。そのまん中の倉が、かれらのいう穴になっているのである。

「ざっとこんなものさ」

錠をあけて、まっ暗な倉の中へはいった森助は、そっとそこへ百合をおろして、手さぐりで火打ち道具を持ち出した。ここまで来れば、もうめったに人に見つかる心配はない。やがてちょうちんに灯がはいると、中は四方へ俵を積んだなんの不思議もない平凡な雑穀倉だ。

が、森助はすみのところの、俵をかたよせてグイと床板を引き起こした。ポカリ四尺四方ばかりのまっ暗な穴が口をあける。階段で地下室へおりられるようになっているのだ。

「念には念を入れてって、いろはがるたが教えてらあ。うまいことをいいやがる。悪党の論語にできたようなもんだ——どうせすぐまた連れて行くんだが、油断大敵、おっと、こいつもいろはがるただな」

森助はひとりごとをいいながら、ちょうちんを片手に、百合を深い地下室へ運び込んだ。四方を石でたたんだ八畳ほどの板敷きである。ガランとして何もないのが、墓穴のようでいっそう無気味だ。

「ちょうちんだけは、つけといてやるよ。ネズミが来るといけねえからね。——そうだ、足のなわだけといてやろう。そのほうがいくらか楽

だ。フフフ、親切だろう、森助さんは」

百合は死人のように目を閉じて、冷たく身動き一つしなかった。

「じゃ、ちょいと行って来る。すぐ迎えに来るから、おとなしくしていなよ」

森助はさっさと階段を引き返していく。

「五十両ときやがった」

裏門から脱け出した森助は、ゾクゾクするような喜びに有頂天になっていた。当分かってなことをして暮らせるのである。うまい酒が飲めるのである。

「フフフ、ちょいと絞めただけで五十両か」

こんな楽な仕事は今までになかった。少し、はりあいがないくらいである。

「相手が女じゃなあ」

ふっと、ぐったりあおざめた百合の死人のような顔が目にうかんで来た。ふっくらとした胸、若さに張り切っているしなやかな肢体——その

むっちりしたからだが必死に身もがきして——まだこの腕の中にほのかな感触が残っている。

「いけねえよ、森助、商売物じゃねえか」

森助はいそいで首をふった。常泉寺のかどである。夜ふけて人っ子ひとり通らなかった。

娘は深い穴倉の中で、まだ死人のように気を失っているだろう。足の細引きをといていた時ちょうちんのにぶい光の中にチラリと浮いた白い脛、——その時は欲気いってんばりで何とも感じなかったが、

「畜生——！」

いつの間にか森助は立ち止まっていた。ほこりをまいて風が吹きすぎて行く。

（だれも知りやしねえんだ）

知っているのは、ねこぜの善兵衛だけだが、——それも女と気がついてはいないのだし、だいいち、ああビクビクしていちゃ、倉のそばへも近よれまい。

（どうせ半の字だって、女とわかりゃ、なにを

するか知れやしねえや）

一度燃え上がった煩悩が、消そうとすればするほど、いじ悪く炎となって、どうにもあきらめきれぬ。森助はゴクリとなまつばをのみこんで、駆けだしたのである。もと来た道のほうへ。

「すえ膳てやつよ。フフフ」

ワクワクと倉の戸口へしのびよって、森助はあたりを見まわした。お月様のほかにはだれの目もない森閑たる屋敷内である。ニッタリ笑って、すばやく中へはいり、うしろの戸をしめながら、

「アッ！」

森助はがくぜんと息をのんだ。たしかにしめて出たはずの穴の口があいている。下からポッとほのぐらい光がさしているのだ。

（逃げられたかな？——それとも！）

リスのように階段口へ飛びついてのぞいて見ると——意外にも、ねこぜの善兵衛なのだ！

足だけの自由を許された娘が、壁のいちぐうへ

追いつめられて、恐怖いっぱいの目を大きくみはっている。肩も胸もあらしのように波打って、くずれたえりからわずかにのぞくはだが、におうばかりなまめかしい。今にも飛びかかりそうな善兵衛だ。

（畜生、知ってやがったんだ、畜生！）

どうしてくれよう！　森助はカッとからだじゅうの血が燃え上がるような気がした。

（てめえはなにも手を下さねえで、人の物を横どりしやがる）

どうにも勘弁できない気持ちだ。いかりに身ぶるいしながら、——しかし、森助は用心深かった。うっかり飛びこんでいけば、相手は武士、刀を差しているのだ。やっかいである。

一度、そっと戸口まで引き返してわざと下へ聞こえるように足音をたてながら、森助は穴の入り口のほうへ歩みよった。

「——」

はたして、ギョッと善兵衛が見上げている。

きかぬからだ、もうダメだと思った。全身を無数のナメクジにはいまわられるような悪寒が走って、すでに気力がつきかけていたのである。

そこへ森助があらわれたのだ。

「どうしたんだね、北野さん」

森助は階段をおりきって立ち止まった。——その笑っている顔を、百合はあえぎながら、悪夢の中にいるような気持ちで見上げた。

「——」

善兵衛は答えない。こっちへ背を向けているから顔はわからないが、

「あっ、いけねえよ、北野さん！」

森助の顔から、スッとわらいが消えて、一足すざったのである。

「何も、何も、そんなおっかねえ顔をしなくたって。——知っているんだね、善兵衛さん。それならそれで話は早いや。ね、相談といきましょう。おまえさんとあっしふたりきり、だれも気のつかねえ穴倉の中だ」

「あ、北野さんか」

森助は階段に足をかけながら、

「びっくりしたぜ。しめておいた床が、開いている。あっしは、てっきり玉に逃げられたと思ってね」

なにげなく話しかけて、そのままトントンと降りて行くのだ。善兵衛は陰険な目を光らして油断なくむっつりとにらみつけている。

（助かった——！）

森助の顔を見た瞬間、それが決して本当の救いの主であるとは思いもおよばなかったが、とにかく寸前に迫った毒牙だけは危うくのがれたのである。百合はホッとして、思わずそこへフラフラとくずれるようにひざをついてしまった。

恐ろしいあの顔、あやしくギラギラと燃える醜い目、どす黒く厚ぼったいくちびる、善兵衛は一言も口をきかなかったが、ちゃんと自分を女と知っていて、ジリジリと迫るのである。あの野獣のような手に一度つかまれたら、自由のピタリと壁に身を寄せて、森助が哀願するようにいいたてた。

（ああ——！）

百合は耳をおおいたかった。予期はしていたが、これもやっぱりけがらわしいオオカミだったのである。陰険なヒョウと、どんらんなオオカミと、今は二匹にねらわれて、あぶないからだになってしまった。

「相談——？」

善兵衛がはじめて、低いしゃがれ声を出した。

「相談でさ。しかたがねえや、北野さんにそう見抜かれちまったんじゃ、あっしはあきらめる。そのかわり、女がはだに巻いている胴巻きを取ってください。しばる時ちゃんと当たっておいたんでさ。なわを解かなくちゃとれねえ。めんどうだから、あとにしようと思ってね。ふたりなら、そうさはねえ。あっしが手をおさえているから、ちょいとなわをゆるめて抜きとっておくんなさい」

「——？」

ついつられて、善兵衛がチラッとふり返ったほんのわずかなすき——実に驚くべきびんしょうさだった。あいくちを抜いたのと、足で背後の壁をけって、反動のついたからだごとぶつかって行ったのと同時。

「やろう！」

「ワーッ」

虚をつかれてよろめいた善兵衛は、ドスンとしりもちをついた。つきながら、それでも抜刀して

「おのれ——」

うめくように立ち上がったが、一突きにみぞおちのあたりを刺されて、森助の手をすべったあいくちが、まだそこへ深く、突き刺されているのである。

「ううむ！」

善兵衛はヨロヨロと二足三足、が、それがせいいっぱいでふたたび前へドッとのめって行く。

「どうしましょう！」

お俊は気が気ではなかった。ほの暗く障子にうつる居間の灯かげに、じっと沈思しているような桃太郎侍の白い横顔が、鋭くひきしまっている。ひいでた鼻筋、意思の強そうな男らしいくちびる——小鈴という女が大騒ぎしているようだけれど、この人にはたしかに女心をひきつける強い力があるのだ。そういえば、どこのお嬢様だか知らないが、昼間腰元ふうをして来て、小姓姿になって行った、あのゆいしょありげな娘も、たしかにこの人をおもっているに違いない。見る目、話す目に、おおいきれぬ思慕の情のこぼれるのを、お俊は女の敏感さから、ちゃんと見抜いていた。

今、せっぱつまったその人の激しい顔をすぐ目の前に見て、あのひとたちが夢中になるのも無理はないと思いながら——お俊はふっと、自分でさえこのたくましい強さにひきつけられるものを、ひそかに恥じたくらいだった。

「ざまあ見やがれ、どろぼうネコめ。てめえたちになめられてたまるけえ。だれだと思ってやがんだ」

すばやく元の壁へ張りつくようにじっと様子をにらんでいた森助が、もう動けぬと見てとって、悪魔のようにののしった。

「フン、そこでゆっくり見物していな。森助様の腕まえをな」

この悪党には、ちゅうちょというものがない。もうツカツカと百合のほうへ進み寄って来るのだ。

桃太郎侍はお俊の家の台所へ立ち往生をしたまま身動きができない。敵は人数を呼びに行ったから、まもなくここへ押しこんで来るだろう。しかも、話の様子では、路地口もみんなふさいでいるらしい。

（やっかいなことになった）

いささか当惑しているのである。

（おや、目をどうかされたのかしら）

はじめて気がついた。さっきから転倒ばかりしていて、何か妙だとは思っていたが、あんな大きな目おおいが、少しも目につかなかったのである。——が、今はそんなことを聞いていられる時ではない、なんとかして助けてあげるくふうをしなくては！

ゴーッと風が雨戸へ吹きつけて来る。

「お俊さん——」

桃太郎侍の片目が、ふっとこっちを見てわらった。何か決するところがあったらしい。もういつものあのおだやかな顔である。

「あんた、まだお針中だろうな」

「はい。小鈴さんとかいうかたの、もう少しで縫い上がりますので」

「それを続けていてください。まさか、台所まで見ようとはいうまい——来たら、隣はふたりで、なにか言い争いをして、いましがた出ていったらしいと、そういってください」

「でも、もし家さがしをすると申しましたら」

「まさか、そんな乱暴もすまいが、その時はその時で、臨機応変、ご迷惑はかけません」

「いいえ、迷惑などと、わたしは少しもかまいませんけれど」

「いや、心配しないでください」

わらっているのである。その静かな深いまなざしに、胸の奥まで見とおされているようなおもはゆさを感じて、

「では、おことばどおりに——」

お俊はそっと障子をあけた。

ほんの一瞬の違いで、お俊が縫い物の前へすわるかすわらないに、

「頼む。——ごめん」

トントントンと、もう表戸をたたくのである。

「はい——どなたさまでございます」

落ち着かなければいけない、——お俊はそう思って、なにげなさそうに立って行った。

「——？」

戸をあけると、浪人者ふうの大の男が五、六人、ジロリと家の中をのぞき込んで、中のふたりばかりが物もいわず押し上がろうとするのだ。

「アッ、何をなさいます、無礼な！」

お俊はハッと上がり口に立ちふさがった。無礼も無礼だが、それでは桃太郎侍が何をするすきもあるまいと必死だったのである。

「かまわん、両隣がいちばん臭いのだ。やれ！」

表のひとりがさしずする。

「どけ！　じゃまをすると、ためにならんぞ。物とりではない。静かにしておれ」

ひとりがムズとお俊を押えつける間に、ひとりがもうへやの中へ、——桃太郎侍の目算はみごとにはずれたのである。

「な、なにをなさいます！」

気丈なお俊だった。たかが女ひとり、——それもこんな裏長屋には珍しい、意外にも美貌の年増である。役得とでも思ったか、ニヤニヤ笑いながらむぞうさに押えつけようとする浪人者を、タッ！　と力いっぱい突き飛ばす。

「やっ、こいつめ！」

不意をくらって一度はよろめいたが、たちまち猛然とつかみかかって来た。

「無礼な！」

身をさけようとしたがまにあわない。大きな腕の中にムズと抱きすくめられて、

「どろぼう！——だれか来てください！」

「バカ、静かにせんか」

必死に争っている間に——ドヤドヤッと押し込んだ二、三人が、押し入れといわず、台所といわず、人の隠れそうなところは、かまわずあけひろげていた。

「おらんようだ」

「どこにもおらんな」

その声を聞いて、お俊は急に全身の力が抜けてしまった。——いなければ、うまく逃げてくれたに違いない。

「こわいよう、ワアーン！」

物音に目をさました仙吉が、突然ありったけの声をあげて泣きだした。

結局、この乱暴きわまる家さがしは、浪人者のほうの不覚であった。近所じゅうの者が起き出して。

「どろぼうだぞうッ——お俊さんの家だよう」

「押し込みだッ、みんな起きろ！　浪人者だ！」

一度に騒ぎだしたのだ。むろん、相手がぶっそうな連中なので、決してそばへは近寄らない。遠くからわめくだけだ。

「こら、静かにせんか！」

「騒ぐやつはかたっぱしからたたっ斬るぞ」

ろうばいした浪人たちは、中には抜刀しておどしにかかったのもいるが、——もういけない。騒ぎはそれからそれへ、金ダライをたたきだすもの、拍子木を打ち鳴らすもの、商売用の鉦太鼓まで持ち出して、一画五十軒のお化け長屋じゅうが騒然とわきたって来た。

その騒ぎを、桃太郎侍は引き窓から屋根へのがれ出て聞いていた。

（これじゃ手のつけようがあるまい）

見きわめがついたので、体を低く構えながらスルスルと、屋根伝いに裏手路地口のほうへ進んで行った。だれも上へ気のつくものはなかったのである。

「失敗だな」

聖天社のがけっぷちへ抜ける出口に立っていたひとりが、苦い顔をして舌打ちをしていた。黒もめんの紋付き、岡という剣客の卵である。

「なんていうバカ騒ぎだ」

ひとりは不安そうに、路地をのぞき込んでいる。ほかの者は応援に中へかけこんだのか、ここはふたりきりだ。

「青あざは逃がしたというし、——伊賀先生、は今夜は荒れるぞ」

「いったい、桃太郎侍ってやつはどうして斬らなけりゃならんのだ。ただの素浪人なんだろう」

「いや、どうも敵の息がかかっているらしいんだ。――それに、小鈴あねごな」
「ああ、あの代地の」
「あれが桃太郎侍にほれ込んでいる。いのちがけだ」
岡はニヤリと笑った。船宿田中屋の二階の様子を見ていたやつだ。
「大きな声ではいえんが、伊賀先生、どうも、あねごにおほしめしがあるらしい。いつもあねごにだけは少し甘いからな」
「つまり、早くいえば、恋路のじゃまというやつか？」
「そうとしか思えんのだ。あねごがきっと味方にするといって出たあとで、――めんどうだから、やってしまえ、ただし、小鈴に知られぬようにやれ、といいつけていた」
屋根の上の桃太郎侍、たいへんなことを聞いてしまった。
「こわいな。恋の遺恨だとすると、ただ失敗したではすまんぞ」
相手はまゆをよせた。
「いや、まだ失敗とはきまっておらんさ。――しかし、よく騒ぐなあ」
黒もめんの剣客の卵は路地をにらんだ。――あっちでドンドン、こちらでガンガン、長屋じゅうの騒ぎはおもしろ半分、ワーッ！　ワーッ！と、ときの声をあげている。
（そうか、ただそんなくだらん野心から向けられた人数か）
桃太郎侍はほっとした。臭いとにらんで少なくとも下屋敷とこの裏長屋へ何か糸をひいているらしいけはいでも想像しての討っ手ならどこまでも自重する必要があるが、ただ単に桃太郎侍一個をねらって来たのなら遠慮はいらない。
（手にあまったら斬って逃げるまで――九つにはまだじゅうぶん時間があるのだ）
そう思ったから、桃太郎侍は足場をはかってヒラリと屋根から裏道へ飛びおりた。

「アッ、何者！」
ひとりがぐんとふり返って、刀のつかへ手をかけようとするところを、
「エイ！」
むろん、峰打ちだった。右ひじがわずかに上がってあいたわき腹へしたたか抜き討ちの烈刀。
「ワーッ」
ドッとよろめいて倒れる。
「や、出たそうッ！　桃太郎侍だ！」
剣客の卵が絶叫しながら、夢中で抜刀した。
――その声は騒ぎに消されて、長屋の中の敵の耳には満足にとどくまいと思ったが、手間どってはめんどうである。
「――」
桃太郎侍は聖天社のがけにそって、いきなり駆けだした。
「逃げるか、こやつ！」
不思議なものである。相手が背を見せると急に強くなって、意気込みながら追って来る。――それが手だった。うまくつり出しておいて、勢いのついたところで不意に立ち止まりながら、クルリと向き直った。
「アッ」
驚いて踏み止まろうとしたが、勢いあまってトントンと二足三足、前へのめり出す体勢のくずれへ、
「エイ！」
迎え撃つような格好に、肩先へ撃ち込んだ。強打だ。
「ワッ」
そのまんまつんのめって、気を失ってしまったらしい。
（まず、これでよし）
前後に人のないのを見さだめて、桃太郎侍はさっさと山の宿のほうへ歩きだした。
（少し時刻が早いな）
百合との約束は九つ（十二時）である。早く行きすぎて待つのは大変だし、だいいち、うっ

かり裏門のあたりをうろついていて、もし敵の目にでもついては、それこそ危険である。桃太郎侍はちょっと思い迷った。

が、ちょうどその時はすでに、百合がカギをとりに行って、森助の毒手にかかったころであった。

さて、――悪党森助にとって、ねこぜの善兵衛が穴倉の中にしのび込んでいたことは、全く思いがけないことだったのである。しかも、どうかぎつけたか百合を女と知って、自分が伊賀半九郎のもとへ知らせに走っている留守に、かってなまねをしようとしているのだ。おそらく、あの陰険な男のこと、もし自分が途中から引き返さなかったら、うまうまと、したいことだけのことをして、黙って小屋へ帰って口をぬぐっている気だったのだろう。

（畜生――！）

森助はたあいもなくそこへうつぶしに息絶えている善兵衛の醜い死にざまをにらんでせせら笑いながら、その凶悪な目を、暗い一隅に顔もあげずおびえきっている百合のほうへ向けた。

陰々として物音一つ聞こえぬ穴倉である。しめった空気は血のにおいがよどんで、壁にかけたちょうちんの暗い灯が一つ、その灯のとどかぬすみずみを無気味なやみがうごめいていた。

地獄！　いや、百合にとっては、それよりも恐ろしい絶望の深淵だった。

「ねえさん――！」

つかつかと前へ寄って、森助が呼んだ。にごった声である。

「フフフ、こわがるこたあねえ。おれは考え直したよ」

「――？」

百合はチラッと目を上げた。――助けてくれるというのかしら？　そんなワラにもすがりたい心だった。

「かわいい目をしやがる。どうだ、おまえ、おれの女房にならねえか」

森助が醜い顔を近々と押しつけんばかりにしゃがみ込んだので、百合はハッと身をひいた。が、背後は冷たい石の壁である。

「いやか？　フフフ、いやだってしかたねえや、おれは気が変わっちまったんだからな。――半の字、知ってるだろう。伊賀半九郎って悪いやろうさ。国もとの殿様のご愛妾、お梅の方っていう、若殿万之助を生んだ鷲塚主膳の妹だ、いい女だぜ。おまえもいいきりょうだが、ちっとばかし色気が足りねえ。もっとも、まだ生娘だからな。そこがまた、いいところなんだが」

なめるようにからだじゅうを見まわされて、そのいやらしさ！　百合は身のすくむ思いだった。が、これは聞きずてならない。鷲塚主膳、――これこそこんどの陰謀の張本人なのだ。

「お梅の方は殿様が夢中になるくらいだから、そりゃ色っぽい。いってみりゃ毒婦ってやつだな。おれは主膳の家に奉公していたんだから、ちゃんと知ってる。半の字はそのお梅の方をたらし込んだすごいやろうさ。フフフ、万之助様だって、本当はだれの子だがわかったもんじゃありゃしねえ」

「――？」

「だからよ、おれは半の字に頼まれて、おまえをこんなめにあわしたんだが、その半の字におまえを渡すのが、急にいやになっちまったんだ」

森助はゆうゆうと構えこんでいる。だれも気のつかない穴倉の中だ、あわてることはないのである。――できるだけ獲物をたのしもうとする残忍性が、人ひとりを殺して、いっそう森助の胸をしめつけるようにくすぐっているのだ。

「約束どおり、おまえを半の字に渡したって、せいぜい三十両か五十両だからね。――そのうえ、おまえは半の字のおもちゃさ、つまらねえや。おれはねこぜの善兵衛を殺して、ふっと気が変わったんだ。ねこぜは食うものも食わずに金をためてやがった。その金と、おまえをさら

つて好きなところへ高飛びする。フフフ、どうでえ、うめえ知恵が出たもんじゃねえか」

「――」

百合は激しく頭をふった。聞くに堪えなくなったのである。だれが、こんなけがらわしい下郎などに、と思うと、かいがないこととは知りながら、身もがきせずにはいられなかった。

「ダメなこった！」

反抗されればされるほど、からかいたくなる森助だった。いきなりムズと百合の両肩に手をかけたが、

「おっと、金のほうが先だぞ、森助。あわてちゃいけねえ。屋敷じゅうのやつらが騒ぎだすと、肝心の金を貰いそこなうからな。――待ってな。フフフ、よく考えてな、人間はあきらめが肝心だ」

森助はせせら笑って、楽しそうに行きかけながら、

「こんちくしょう――！」

ふっと目についたねこぜの善兵衛の死骸をあしげにした。そのまま、穴倉を出て行ったのである。用心深く床板をしめて、その上へ俵を二、三俵積み重ねて――。

約束の時刻には早かったが――こういう時一応下屋敷の周囲を見ておくのも何かの便宜になろうと、桃太郎侍はまっすぐ小梅へ帰って来た。万一悪人どもの見張りがあるとすれば、それがどんなふうに網を張っているか、知っておくこともムダではないと考えたのである。

しかし、来てみると、それらしい様子はさらになく、下屋敷は青い月光の中にしんしんとふけていた。人影一つ出会わない。

（まさか、まだ迎えに出てはいまいな）

桃太郎侍はふっと百合の白い顔を思いうかべながら、裏門の重そうなとびらを押してみた。

（はてな――！）

キーッとかすかにきしんで、それが苦もなく

開いたのである。中へはいってあたりを見まわしたが、百合らしい者の姿も見えぬ。木立ちへサーッと強い夜風が吹きつけていた。

（百合のほかに、この門をあける者はないはずだが）

だれかほかの者があけたとすれば、それは自分のためにではなく、別に何か目的のある者の仕事だ。――あるいは裏切り者が、外の敵と内通するためにあけたのかもしれぬ。

（よし、見とどけてやろう）

桃太郎侍は暗い植えこみの中へすばやく身をひそめた。そして、ここまで来ればもう用はないうっとうしい目おおいと目の曇り――サカナのうろこを細工したもので、人には盲目に見えても、こっちからはよく見えるのである、それをはずして、ふところへ入れた。

ちょうど、そこからは左手に裏門、右手に沿った三棟の雑穀倉の戸がならんで見渡せるのである。

「アッ――！」

こんな物でも利用すれば、けっこう悪人の忍ぶ場所にも会合の席にもなるだろうと、――なにげなく倉の大きさを目測していた桃太郎侍は、意外の目をみはった。そのまん中の倉の戸が内からあいて、スッと出て来たやつがある。

門番中間の森助だ。そっとあたりをうかがうようにして、うしろの戸をしめると、スタスタ表門のほうへ歩きだした。用があって何か取りに来たにしては、その人目をはばかるようなそぶりが少し妙だ。

（夕方も、森の中をうろついていたやつ――）

いったい、何をしに、今ごろあの倉へ来たのだろう。

不審に思ったので、桃太郎侍は一度中を調べてみることにした。

が、戸をあけて、外の月あかりにすかして見たが、別に何も見当たらぬ。普通の雑穀倉だ。

（思い過ごしだったかな）

あるいは、ゲス根性、この倉の中の俵を持ち出して売って金にする。そのために、裏門をあけて外から来る買い手を待っている。そんなふうに考えられないこともない。

「それなら今騒ぐことはない。あとで係りの者に注意しておけばいいのだ」

二足三足中へはいった桃太郎侍は、壁ぎわに積んである俵をずっと見まわした。その一所、ポツンと三俵ばかり別に俵がよけてある。

「あれかな――？」

思わずツカツカと、進み寄った桃太郎侍、アッ！　という間に体が宙にういて、――おとしあなにかかったのだ。

「しまった！」

驚きながらも、とっさにグッと足を縮めて身構えたから、ドッと下へ落ちた時には二、三度反動が来ただけで、スッと立つことができた。思わず上を見上げると、相当高い天井が、もうちゃんと、もとのとおりにしまっている。回転式にでもなっているのだろうか？

それにしても、あたりに光がある。

「おお――！」

桃太郎侍はたちまち、そこに百合がしばり上げられて、無残にもさるぐつわまでかまされた顔を発見したのである。

醜い善兵衛の死骸と一つ穴倉にとじこめられているさえ無気味なのに、あの悪魔のような森助が帰って来たら、こんどこそ無事にはすむまい。百合は恐怖と絶望に身も心も疲れきって、すわっているのさえやっとであった。いっそこのまま死んでしまいたい気持ちである。

その目の前へ、不意に天井からドッと人が落ちて来たのだ。飛び上がらんばかり、ゾッと驚きの目をみはって、――それが夢にも思いがけないその人の姿だとわかった時の狂喜！

「――！」

不自由な身を、どう立って飛び込んで行ったか、百合は次の瞬間、まりのようにからだごと

桃太郎侍の胸の中へ倒れ込んでいた。

「百合――！」

しっかりと抱き止めて、――これも実に意外だったのである。一瞬ぼうぜんと信じかねるように腕の中の百合の顔を凝視した。

「どうしたのだ、この姿は！」

が、さるぐつわに気がついて、すぐそれを解く。からだの細引きは小柄を抜いて手早く切り捨ててやった。

「若様――！」

百合は自由になった身を放すまじとすがりつきながら、男のたくましい胸へ力いっぱい顔を埋めるように、ワッと泣き伏してしまった。死の恐怖にさいなまれつづけて来たおとめごころは、今突然恋しい人の手に救われて、あらしのような激しい感情を、われながら、どうしずむべくもなかったのである。

「――」

桃太郎侍はコトリのように身を震わしている双の肩を気のしずまるまで強く抱きしめてやりながら――しかし、目は忙しく八方へ働いていた。ここは深い倉の地下室である。四方は石の壁で出口は階段を通じて一つ、その階段の近くに何者とも知れぬ死体がうつぶせになっている。抜刀して倒れている格好は、殺されたものだ。しかも新しい血のにおいである。

「さあ、落ち着かなければいけません。われわれは悪人のわなにおちているのだ」

「はい」

百合はやっと弱々しい顔をあげた。泣きぬれた目が、任せきったように、そっと見上げて来る。

「あの死体はだれです！」

「北野善兵衛ですわ」

「お百合さんをこんなめにあわせたやつは、善兵衛か、森助か」

桃太郎侍は気軽に話しかけていく。まだじっと百合を抱いているのは、早く小さな胸を恐怖

から救って落ち着いてもらわなければならないからである。
「善兵衛のところへ、カギを取りにまいったのです。そしたら、森助がふいにうしろから飛びかかって来て――」
「グルだな。ふたりで、この穴倉へ運んだのか？」
「いいえ、森助ひとりです。その森助が伊賀半九郎のところへ知らせに行ったあとへ、善兵衛が――」
さすがに口ごもって、ハッと胸へ顔を伏せる。
「善兵衛は、お百合さんを女と知ってたんだな」
「ええ」
「森助も知っている。だから、森助が善兵衛を殺した。――なぜ、森助は穴倉を出て行ったのだろう？」
「善兵衛がためているお金をとりに行ったのです。それから百合をつれて逃げるのだと――」
「そうか。では、まもなく引き返して来るな」
桃太郎侍は、つと百合を放して、ちょうちんのそばへ寄るなり、その灯を消した。穴倉いっぱいに、うるしのようなやみが立ちこめる。
「あ――」
突然視界を奪われて、ハッと立ちすくむ百合のところへ、
「ここだ、お百合さん。――驚くことはない」
勘よくもどって来た桃太郎侍が、やさしい手を差しのべてくれた。
「こわい！」
百合は差し出された桃太郎侍の手を探り当てると、いきなりしがみついて行った。おびえきっている心に、突然訪れた地の底のやみは、やっぱり心細く不安だったのである。
「弱いことを――」
なつかしい人の声が耳もとで静かに笑った。
「森助にこっちの姿を見られては不利だ。こうして待ち伏せしてみよう。――で、森助は伊賀

半九郎に報告して来た様子だったろうか」
「いいえ、途中から気が変わって引き返して来たのですって」
「気が変わる――？」
「いや――！」
百合はゾッと身ぶるいをした。――口にするにさえたえないことであったばかりでなく、あの善兵衛のいまわしい顔、森助の凶悪な顔、それがやみの中へありありと具現して、寸前にまで追いつめられた恐怖の印象をあらたにさせられたのである。
「そうか、お百合さんを女と知って、急に悪心が起こったのだな」
「百合は生きていません。そんなこと、そんなこと――」
今はたくましい人の胸に守られて、夢のごとく甘えてもみたい百合を、
「シッ！」
桃太郎侍が不意に制した。森助の帰って来たらしい足音が、天井で止まったのである。
「――！」
その天井の一角、たぶん、おとしあなになっているところだろう、ギーッとかすかにきしる音がして、
「畜生、灯を消してやがる」
案外声が身近に聞こえるのは、のぞきこんでいるらしい。
（いかん！――もう敵は気がついた）
桃太郎侍はハッとした。――おそらく気がつかずに階段口からはいって来るだろう、そこに出口さえ開けば、こっちのものであると考えていたのだが、大きな誤算だった。
森助はしめて行ったはずの倉の戸があいているのを見て、早くも気がついたに違いない。はいればおとしあなにかかる。いやでも穴倉の中の秘密を見ることになると頭が働いているのだ。
「やい、だれかいるんだろう？　返事をしろ

よ」

用心深く声をかけるのである。

「気絶しやがったかな。高いからな」

じっと、けはいをうかがっているようだったが、

「それにしちゃ、灯の消えてるのが変だ。すみのほうにある灯が、あおりぐらいで消えるはずはねえや。知ってるぜ、おれをだまそうと思って、わざと灯を消したんだ。その手は食わねえよ。——おい、返事をしねえか」

「——」

悪魔のようなやみの声に、百合は息をのんで桃太郎侍の胸へすがりつく。

「返事をすりゃ相談に乗ってやるぜ。おれが栓を一つ抜くと、この穴倉へは表の堀の水が滝のように流れ込むんだ。どぶねずみになって死にたくなかったら、返事をしな。今のうちだぞ」

「——」

「やっぱり、気絶してやがるのかな。——いけねえよ、森助、念には念を入れよだ。いろはがるたを忘れちゃいけねえ」

床をふむ足音がして、倉のすみへ何か捜しに行ったようだ。

「若様、どうしましょう」

思わずいいかける百合の口をふさぐように、桃太郎侍はいそいで胸へ押しつけた。すぐに森助の引き返して来るけはいをさとったからだ。

火打ち石を鳴らす音がしだした。

(ぬけめのないやつ——)

灯りをつけて、一度穴倉の中を見ようとするらしい。あの悪魔に百合とのこんな姿を見せたら、それこそ、どんな凶暴性を発揮するかわかったものではない。

(気絶しているように見せてやればいい!)

とっさに桃太郎侍はそう思わぬでもなかった。が、百合のなわを解いている今、それをし

ばっている間があるまい。

(取る道は一つ——!)

覚悟をした時には、もうパッと燃え上がる火の光が天井にポカリとおとしあなの口を見て、——そこから乱暴にも突然燃える付け木を二、三枚ヒラヒラと投げ込んだのだ。

が、さすがの悪党にも不覚はあった。その光でよく穴倉をたしかめようと、うっかりのぞきこんで来たのが運の尽きである。と、見るなり、

「エイ!」

桃太郎侍の手から、流星のように小柄が飛んだ。

「ワーッ!——畜生」

一瞬凶悪な顔はひっこんだが、たしか、のどぶえへ突きささったらしい、のたうちまわる音がして、

「畜生、やりやがったな、畜生!——う、いてえッ! 殺してやる。——う、苦しい! 畜生、畜生」

ズルズルと重いからだをひきずって行くのだ。悪党の一念、仕掛けの水の栓を抜こうというのだろう。

「こわい!——若様」

「何をいう、この間だ」

付け木が燃えきって、ふたたびやみにのまれる寸前の光を利用して、桃太郎侍は百合の手をとるなり、しかりつけるように階段口へはしった。そして、わずかに一足掛けた瞬間、

ド、ドーッ!

不意に階段のいちばん上と思われるあたりから、滝のように水が奔騰しながら落ちて来た。

「アッ!」

危うく足をすくいとられそうになった桃太郎侍——この激しい水勢では、とても階段はのぼれぬとすぐに気がついたので、思わずやみの中を反対側のほうへ逃げて来た。

(のがれる道なし——!)

猛烈な水の音、しかも見る見る足をひたして行く水量の速度——さすがの桃太郎侍も、この時ばかりは絶望せざるをえなかった。

「——」

あまりの恐怖に度を失ったか、百合は一言もなくしっかりと胸の中へ顔をうずめて、ただ放すまじとしがみついている。

「落ち着いて、お百合さん」

桃太郎侍ははっきりと、快活にその耳もとでさけんだ。

「まだ絶望するのは早い」

たとえ死なねばならぬ運命にしても、最後の一瞬まで百合には死の恐怖を思い出させまいと思ったのだ。はじめて強くその双の肩をだきしめてやりながら、

「希望は最後の一瞬まで失うものではない」

あたたかい愛情で、絶望を押しつつんでやろうとした。

水はすでに、ひざを越して来る。

「若様——！」

百合が胸から顔を放して、案外、静かに呼んだ。

「こわいのか、お百合さん」

「いいえ、ただ、百合の愚かしさから悪人にはかられて、若様をこんなめに——」

「何をいう。苦難は初めから覚悟のうえでかかった仕事だ。こんなことではまだ、拙者は負けない」

「若様、たったひと言！」

「遺言ならまだ早いようだぞ、お百合さん」

「いいえ、百合はもう覚悟しました。——たったひと言、若様の妻だと」

「——」

ものすごい水勢である。悪魔のような水は、うずをまきながら、刻々に半身へせまって！

「若様！——若様、たったひと言！」

百合は狂わんばかりにすがりついて来る。

品川の宿

人の運不運というものは、どこにあるかわからない。

伊之助は小鈴のあとをつけて、難なく伊賀半九郎が吾妻橋の船宿田中屋にいることをつきとめた。小梅の下屋敷とは、つい目と鼻の間。

「なるほど、すごいとこに陣取ってやがる」

感心してしばらく見張っているうちに、小鈴はふたたび船宿を出て行った。半九郎との間にどう話がついたか、おそらく桃太郎侍を迎えに行ったのだろう。

きのどくだが、だんなはもういねえよ、——伊之助は物かげから見送りながら、ほんとうにそう思った。ほれるというものは、こんなにも人間をバカにするものか、小鈴ほどの女がこっちのからくりをなにも知らずにいると思うと、その心根が、ちょっと哀れだったのである。

伊之助は根気よく田中屋のまわりを見張りつづけた。今夜一晩でなにもかも調べ上げられるとは考えていなかったが、せめてあしたの朝桃太郎侍に会う時までに、何かいいみやげをにぎっておいて喜んでもらいたかったのだ。

（これもほれた口でね、小鈴のことばかり笑えない）

すると、しばらくたって、意外な人物が田中屋の表戸をたたいたのである。両国矢の倉にりっぱな道場を構えている今井田流の剣客、大滝鉄心斎であった。

（へえ、あの先生がねえ）

腕もいいし、当時江戸では下町で売れた名だが、やっぱり金で殺されたとみえる。もっとも、成功すれば若木家十万石の指南役に取り立てるという約束ぐらいはしているのだろう。人間だれしも欲のためには迷わされがちである。その迷わざるをだいじょうぶという。

（偉いな、うちのだんなは。——だんなのは同

じゃぶない橋を渡っても、決して欲じゃない。こいつらを退治しちまえば、もとの長屋へ帰って来て、子どもたちの先生になろうっていうんだ。まるっきり心がけが違うんだからな）

だからこそ、伊之助も骨身を惜しまないのである——田中屋の裏手へまわって、さっきから目をつけておいた二階のひじ掛け窓の手すりへ音もなくスルスルと、雨戸へ耳を吸いつけた。

「すばやいやつだな、では屋根へ逃げたのか」

「なんとも申しわけがない。長屋じゅうが騒ぎだしたものだから、つい屋根とまでは気がつかなかった。それに、相手はこっちが押し込んでから逃げ出したのではなく、押し込んだ時にはほんの一足違いで、すでに裏から家を出たところらしい。そこに手違いがあった」

ちょっとことばの切れたのは、半九郎が何か思案しているのらしい。

「ご苦労でした。大滝先生、これから道場へ帰られるか？」

「別にご用がなければ——」

「じゃ、いっしょにそこまでお送りしましょうか。もう今夜は拙者もここに用はあるまい」

伊之助が耳にしたのは、たったこれだけの会話で、——やがて、ふたりは舟を仕立てさせて、夜ふけの大川を両国のほうへ下っていった。舟ではちょっと、あとのつけようがなかったし、いずれ若殿が下屋敷にいる間は、ここを本拠に策動するだろうから、その人の出入りで、あしたはもっとくわしい様子がわかるだろうと思ったのである。

（まあ、仕事初めとしては、そう悪くないみやげができた）

いささか得意で、お化け長屋へ帰って来たのは、かれこれ九つ（十二時）過ぎだったろうか。そこに思いもかけない事件が待ち受けていたのだ。

珍しくお俊の家のかど口が開いている。家の中で夜業をしていることは珍しくはないのだ

が、若い後家暮らし、戸締まりだけはいつも用心のいいお俊なのだ。不思議に思って外から声をかけてみると、

「あ、伊之さん、お俊さんが大変なんだよ」

あたふたと中から飛び出して来た近所の女房が、顔色を変えているのだ。

「なにかあったのかえ、お松さん」

伊之助はドキリとした。

「あったどころの話じゃない。お俊さんが右の肩から背中へけさがけに斬られて、今七針も縫ったところさ」

「エッ！」

伊之助の顔色が変わった。

「だ、だれに斬られたんだ」

「それがね、さっきふいに、先生のところへ浪人者が五、六人押し込んで来てね」

桃太郎侍が留守だとわかると、女ひとりのお俊の家へあばれ込んだという。——どろぼう！だれか来てくださいという悲鳴に、長屋じゅうの者が騒ぎだしたものだから、その浪人者たちは驚いて逃げてしまったが、

「行きがけにひとりが、いきなり斬りつけたんだってさ。こっちも浪人騒ぎに夢中だったもんだから、仙ちゃんの泣き叫ぶ声に、はじめて気がついて駆けつけてみると、お俊さんが土間に血だらけになって倒れているじゃないか」

大さわぎになって、すぐ医者を呼んで来たが、どうにも出血がひどいので、この一日二日が峠だといって帰ったという。

「気丈なひとだねえ、七針も縫ったのに、泣いて心配する仙ちゃんをなだめて寝かしつけ、とんだお世話になりますってね、今しがたやっと眠ったところなんだよ。——もし伊之助さんがお帰りになったら、起こしてくださいまし。ひと言おことづてを申さなければなりませんから——と。伊之さん、今までどこへ行ってたのさ」

「すまねえ、ちょっとだんなに頼まれた用があったもんだからね」

「そのまた病気のだんなは、どこへ行っちまったんだろうね。——いったい、今夜の浪人者は何者なんだろう。心当たりはないのかえ。憎いやつらったら——」

看病に残っていたらしい女房たちが二、三人、かど口で伊之助をつかまえて放さない。

「ああ、そういえば、その医者騒ぎのさいちゅうにね、あのジャラジャラした小鈴とかっていう踊りの師匠が来て——」

お松が思い出したように薄笑いをうかべた。

「ちょうど表へ出たわたしをつかまえて、——桃さんはどこへ行ったんだろう、伊之さんは、留守かとか、何かふたりで争ったようなふうはなかったかとか、バカバカしい、目の色を変えているから、なんだか知りませんけれど、桃太郎侍だんなは代地へ行くとかいって、さっさとおでかけになりましたよ、といってやったのさ。フフフ、からかわれると知らず、いい気なもんだねえ、すっ飛ぶように帰って行ったが、——悪かったかねえ、伊之さん」

そんなところではない。だいいち、悪いといったところで、いまさらどうにもならないことじゃないか。

「もとはといえば、みんなうちのだんなから起こったこと、あとはあっしがきっと引き受けますから」

伊之助はとにかく、ひとまず女房たちに引き取ってもらった。

(畜生め、なんてひどいことを——)

お俊のまくらもとへすわって、そのげっそりと血の気のないあおい寝顔を見た伊之助は、カッと一度にからだじゅうの血がたぎって来た。

今にして思えば、あの船宿の大滝鉄心斎が、長屋じゅうの者に騒がれて逃がしたと伊賀半九郎に報告していたのは、ここのことだったのだ。

(なんの罪もねえ女を、いわばゆきがけの駄賃に斬っていくなんて、鬼だ、畜生だ!)

もう承知できないと、伊之助は思った。憎むべき鬼や畜生、てめえたちがそんな心ならこっちにも覚悟があると、はじめて押えがたい敵愾心が切実にムラムラッと燃えあがって来たのだ。

(だが、うまく助かってくれりゃいいが)

伊之助はすこし離れて、ぐっすり眠っている仙吉の子どもらしい寝顔を見て、急に涙がこみあげて来た。なんという不幸な親子、——そう思うと堪えられなくなって来たのである。

やがて夜明けに近いころだったろうか、しんと寝静まったお化け長屋はまだ物音一つなく、灯心が秋の虫よりかぼそく、ジ、ジとなった。

「——?」

そのかすかな音に魂をよびもどされたかのごとく、お俊がふっと、うつろな目をあけた。弱々しい視力をまじまじと見上げている。

「お俊さん、伊之助だ。わかるかね」

「あ、お隣のおじさん。——仙吉は?」

「そら、そこによく眠っている。動いちゃいけねえ、動いちゃいけねえ。——とんだ災難だったね」

「いいえ」

お俊はなにか思い出そうとするように、じっと残灯をながめている。

「おじさん、ひとりでございますか? どなたもほかに——」

「ああ、だれもいない。おれひとりだよ」

「では、申し上げますが、さきほど、先生が見えて、たぶん無事におのがれになったと思いますが、——わたしは大金を預かりました。このフトンの下に——」

「動いちゃいけねえってば。そんなことは、あとでいいんだ。気をしっかり持っていなくちゃいけねえよ、仙坊のことを思ってな」

「はい」

スッとお俊の目にいっぱい涙があふれた。

「先生のお役に、いくぶんでもたったのでございますから、——ただ、仙吉のことを思いますと、この子の父は、伊藤新十郎、——おじさん、

聞いておいてくださいませ」

「ああ、聞くとも。けれど、なんだ、今じゃなくともいいじゃないか。口をきくと、からだが疲れる。ね、あんまり気をつかっちゃいけない」

伊之助はなだめるように、そっと、あふれるお俊の涙をふいてやった。

「はい。口をきいていませんと、なんですか、気が遠くなるようで」

「いけねえ、いけねえよ」

どうも視力がないようなのである。伊之助は驚いて、きゅうすに冷やしてある薬湯をお俊の口へそそぎこんでやった。

「すみません。——父にそむいて、新十郎を望んだのが、わたしの誤りでございました。父がなくなりますと、新十郎は父が丹精しました道場まで売って武術修行をしてくるからと、十年前、この子が生まれてまもなくでした。捨てられたのでございます。それっきり、たよりもなく、風のうわさに一度、讃州丸亀にいるとも聞いたことがございますが——」

「お俊さんの父御は何とおっしゃる」

「中国の浪人田上仙左衛門、両国の矢の倉で篠崎一刀流の道場を開いておりました。今、大滝とかいう、今井田流の先生がいるところでございます」

はじめて聞く身のうえ話だった——その新十郎というやつは、師匠の娘を食い物にして、師匠が死ぬとすぐお俊を捨てたに違いない。伊之助が知ってからでももう四年、お俊は針一本で仙吉を育てている。

「だまされたのは、わたしの愚かさ、——ただそんな父とは知らず、いまにりっぱに出世して迎えに来ると思い込んでいる仙吉が哀れで、——お隣のおじさん、先生のご人格に甘えて、おすがりいたしとうございます。おじさんから、どうか仙吉を一人まえの男にして、田上の家名がつげますように、だんなさまに」

「なにをいうんだ、お俊さん。そんなことはいわれなくたって、きっとあっしが引き受ける。また、あの気性の桃太郎のだんなが、いやだというはずはなし、——気をしっかりもたなくちゃいけねえ。どこか苦しけりゃ、医者をよびにやろうか」

「いいえ。おじさん、仙吉はどこでございましょう、ちょっと抱かせてくださいませ」

動かせる左手でわずかに手さぐりするのだ。

「お俊さん、どうしたんだ！　しっかりしなくちゃいけねえ」

伊之助はそのうつろな目を見て愕然とした。

「仙吉、——仙吉、ここへおいで、先生によくお願いして、おじいさまの家名を——聞いておいでかえ、仙吉」

「お俊さん、お俊さん！　——あ、いけねえ、仙坊！　起きるんだ、仙坊」

呼びながら伊之助は、あわてて仙吉を抱き起こした。夜が明けかけたとみえて、屋根でスズメが鳴き始めた。

一方、暗黒の穴倉の中で水責めになっている桃太郎侍と百合は——？

うずをまいて落ちこむ冷水は、ついに全身をひたして足が立たなくなってしまった。桃太郎侍は左腕に百合をかかえて、見えぬ水を泳ぎだしたのである。いや、泳ぐというより狂いまわる水勢に押しもまれながら、一度まき込まれたが最後である、必死に水と戦っていたのだ。

たたかいながら、ふと気がついた。

（森助がさっきのぞいていたおとしあなの口をしめ忘れていたとしたら——）

こうして泳いでいさえすれば、やがては水は穴倉いっぱいになって、いやでもふたりのからだを天井まで運んでくれるだろう。ことによると、九死に一生を得るかもしれぬ。

だが、それまで、はたしてこっちの体力がこの冷水に耐えうるだろうか？　たとえおとしあなの口が開いていたとしても、この暗黒の中で

そうたやすく探り得られるだろうか？　考えてみれば実にはかない希望ではあった。しかも、高いところから落ちる水勢は、非常な力でふたりのからだをグングン押しまわしているのだ。

が、最後の一瞬まで絶望ということを知らぬ桃太郎侍である。

「お百合さん、眠っちゃいかんぞ！」

ともすればぐったりと弱りかける百合をはげましはげまし、そう気がつくともうすぐ実行に移して、必死に一方の壁のほうへ水勢をさけて行った。せめて壁につかまってなりと、できるだけ疲労を防いでおかなくては、その時になって体力が尽きるおそれがあるからである。

「どうした、お百合さん、こわいか？」

やっと石壁に手をかけた桃太郎侍は、ほっとして元気よく抱いている百合をゆすった。

「いいえ、――死んでも、死んでも若様とふたりですもの」

百合にはもうほかに何も考える力がなくなっているらしい。ただ放すまじと右腕を首にまいて、ひしとほおを寄せている。

「いや、死にはせん。われわれはきっと助かる。それ、手をのばして壁につかまってごらん」

「助かる――？」

「助かるとも。もう少しのしんぼうだ。この若様には知恵があるからな」

しかし、百合はそれがただの慰めだと思ったらしい。

「ほんとうに助かるでしょうか。――それより若様、さっきのこと、うかがわして、百合は死んでも死にきれないような気がいたします」

水量がまして、しだいに落ち着いて来ると、百合はまたそれをいいだしたのだ。

「死にはせんというのに、困ったお嬢様だな」

「若様は、――若様はそんなに百合がおきらいなのでしょうか」

恨むというより、世にもはかなげにすがっていた手が、力なくゆるもうとする。

「いかん、お百合さん！　死んでしまって、あんた、わしの妻になれるか」

「――――」

「わしはいくじのない女はきらいだ。わしの妻はどこまでも生きてお家の悪人を倒す、それだけの気概をもっていなければならん。このままここで死んでは、だいいち、親に不孝だ」

「でも、生きる道が――？」

「だから、さっきから、必ず生きてみせると申しているではないか。いつ拙者が、お百合さんをだましたことがある」

「申しわけございません」

「さあ、しっかりとつかまって。一念は岩をもとおすということがある。ふたりの一念をあわせれば二念になるのだ。今から、弱音や遺言は早い」

「生きますわ、わたし！　生きてきっとこの世で妻と――」

「そうだ。それでこそお百合さんだ」

冷水は容赦もなくしんしんと全身にしみとおって、しだいに手足の感覚がしびれて来る。

「寒いか、お百合さん」

桃太郎侍は絶えず冷たい水の中で手足を動かしながら、元気に話しかける。

「いいえ」

ものうげな百合の返事である。

「それはそうと、あんたご飯がたけるか？」

「――――」

「お嫁さんというものは、ご飯がたけないと困る」

「あしたから、きっとおけいこいたします」

「よろしい。それだけはぜひ、けいこをしてもらわなければなりませんな――そうだ、質屋というものを知っていますか？」

「いいえ、存じません。教えてくださいませ」

その実、桃太郎侍も質屋へはまだ行ったことがないのだ。品物を持って行けば、金を貸してくれると話に聞いているだけである。

「何かおっしゃっていてくださいませ」
「待った。——水が止まったようだ。お百合さん、手をできるだけ上へのばしてごらん」
「はい」
「そら、いいか」
桃太郎侍はグイと抱いている百合のからだを高くゆりあげた。
「どうだ、天井にさわるか」
「いいえ」
「もう一度、——そら！」
力いっぱい持ちあげてやったが、やっぱりなんの手ごたえもないらしい。——これ以上水があがらぬと、こうして壁につかまっているかぎり、溺れずにはすむことになるが、そのかわり、おとしあなの口を探り出すのは不可能だ。つまり、ほかからの救いを待たなければならないことになる。しかし、ここはめったに人の気のつかぬ穴倉だ。まして深夜のこと、この寒気に朝まで体力がつづくだろうか。かりに朝までどうにかつづいたとしても、その先必ず人がこの倉をあけてくれるという当てはつかぬ。
結局、自分から助かる道を講じなくては、死は時間の問題になるのだ。
（落ち着け、若様！）
桃太郎侍はまだ絶望はしなかった。忙しく頭を働かしているのである。
「そうだ。——お百合さん、わしの背中へつかまってごらん。あんたを抱いている手がちょっと入用なのだ」
「はい」
ちょうど背中へおぶさる形になる。両手が自由になったので、桃太郎侍は腰の太刀を抜いた。
「よし——！」
はたして、天井までは太刀だけの高さ、三尺とはなかったのである。
「いいか、お百合さん、生きてわしの花嫁になりたかったら、しっかりとつかまっておれよ。安心して、わしに生死を任せるのだ」
「はい」
今は死の沼のように深沈たる水の穴倉を、桃太郎侍は刀を口にくわえて、静かに泳ぎだした。
およその見当をつけて、ここと思うあたりを刀のきっ先で探ってみると、天佑とでもいうべきか、たしかにおとしあなの口はあけっぱなしになっているらしい。それらしい手ごたえが探れるのだ。
「しっかりとつかまっておれよ」
桃太郎侍は背中の百合に声をかけておいて、巧みに左手で泳ぎながら、
「エイ！」
右手の刀を力いっぱい、はっしと、床板へ斬りこんだ。グイと引いてみたが、じゅうぶんに打ちこまれたとみえて、びくともしない。
「お百合さん、手をかしてごらん」
百合の右手をとって、打ちこんだ刀の柄を握らせ、
「いいか、この柄を右手の力に頼って、できる

だけ上へ飛びあがるのだ。わしも下から押しあげてあげる。必ず左手が床へとどくはずだ。そうしたら、しっかりとそれへすがりついて、右手をそえる。できるだろう？」

かんで含めるように説明する。

「やってみますわ」

「武術の心得があるお百合さんに、そのくらいのことができないという法はない。両手が床にかかったら、右の足をこのつばにかけてあげるから、それを力にからだを持ちあげる。ただ、できるだけ、きっ先から遠く手をかけないとケガをするぞ」

が、長い間冷水につかって、疲労しきっている女の体力では、相当困難な仕事なのだ。しかし、やりとげてもらわなくては、百合を助ける道がないのである。

「できるな、お百合さん」

「はい」

「一度でダメなら二度、二度でいけなければ三度、いいか？」

「あの、もし上に森助がいたらどうしましょう」

「その心配はあるまい。まだ森助がいるとすれば、きっと死んでいる。生きていれば、このおとしあなの口をあけておくはずはないからな」

「では、やってみます。もし落ちたら、からだをつかまえていてくださいませ」

「だいじょうぶだ。たいせつな花嫁、こんりんざい放しはせん。落ち着いてやりなさい——いいか、それッ！」

疲れてはいても助かりたい一念である。二度三度、手がすべって、そのたびに危うく水中へもぐりこみそうになったが、悪戦苦闘、どうやら左手が床にかかったらしい。手がかりさえつけば、あとは簡単である。

「それ、こんどは足だ。——落ち着いて！」

絶えず下から励ましながら、右の足の指をつばにかけてやると、

「若様、あがれました！」

狂喜したような声といっしょに、百合の左足がスッと桃太郎侍の手から放れて行った。

「偉い、偉い！」

ほっとしたのである。百合さえあげてしまえば、体力のある桃太郎侍、おのれひとりがはい上がるのは、ぞうさもない。

「やれ、助かったな、お百合さん」

ぬれねずみになって、まっ暗な床の上へあがった時には、さすがの桃太郎侍も、全身の力が抜けてしまったような疲労を感じた。しばらくは動く気力さえ出ない。

「若様——！」

声をたよりにいざりよった百合が、感きわまって、前後もなくワッとひざへ泣き伏して来た。

「もういい。もういい。泣くことはない。われわれは助かったのだ」

神にも祈りたい気持ちで、激しく嗚咽する百合の肩をほうぜんと抱いていると、

ガラガラッ！

ふいに倉の戸が開いて、外の月あかりの反射が暗にいた目には真昼のごとく、

「——！」

桃太郎侍はがくぜんとして、われにかえった。

「だれだ、そこにおるのは？」

外の人は倉の中を透かして見るようにして、低く詰問した。——伊織の声である。

「あ、おとうさま——！」

百合はハッと走りよろうとしたが、もう疲れきって、からだの自由がきかなかった。

「おお、若様もか！」

伊織は思わず喜びの声をはずませたが、暗に慣れた目が、ふたりの世にもみじめなぬれねずみの姿を見ると、がくぜんとした。

「伊織殿、子細はあとで話す。人目につかぬうちに、茶室まで帰りたいが」

「承知しました。ご案内いたしましょう」

容易ならぬことと、伊織はすぐ見てとったのだ。

「お百合さん、歩けないな」
いいながら、わずかな休息で体力を取り戻した桃太郎侍は、軽々と百合を抱きあげた。
「あ、すみませぬ」
ぬれた衣類を通して寒気が迫るのだろう、たくましい腕の中に、ぐったりと目を閉じた百合は、しきりに胴震いを始めた。
物陰を縫うようにして三人がひそかに茶室へ戻りついたのは、やがて真夜中であったろうか。
「九つ(十二時)を過ぎてもお帰りがない。百合もおらぬし、気が気ではありませんでした。何度裏門まで見に出たか。——最後に倉の中の人声を耳にしましたのでな」
熱い茶をすすめながら、伊織は手早く若殿に早替わりした桃太郎侍の顔を見上げて、ほっとするのであった。——百合はもう次の間に寝かされている。
「伊織、あの倉の中には、下屋敷留守番北野善兵衛と、たぶん、門番中間森助も死んでいるであろう」
桃太郎侍は、ひととおり今夜のことを説明して、
「まだほかにも何人裏切り者がおるかわからんぞ。しかも、どこにどんな細工がしてあるか、とにかく、この下屋敷は危険だ」
「驚くべきやつら——」
伊織はいまさらのように驚愕していた。
「国もとへはいつ出発してもかまうまいな」
桃太郎侍が改めてきく。
「それは、いつにても、さしつかえはございませんが」
「不意にいいだして、一刻ほどの間に準備ができるだろうか」
「できるようにいたしおきましょう」
「そうしてくれ。わしは一睡して、はらをきめるから」
いうだけのことをいって立ち上がった桃太郎侍は、

「百合はあしたひそかに家へ帰して、一応医者にみせたほうがいい。非常に衰弱しているようだから」
と付け足すことを忘れなかった。
おもやの寝間へ帰った桃太郎侍は、金びょうぶに囲まれたぜいたくな寝具につつまれて、疲れたからだを横にすると、もうぐっすり深い眠りにおちこんでいた。
どのくらい眠ったころだろうか。
「若様——！」
静かに呼ばれて、ハッと目をあくと、まくらもとの絹あんどんのそばに、思いがけない昨夜別れたままの姿のお俊が、ひっそりとすわって両手をつかえている。
「どうした、お俊さん」
「お願いがございまして——」
青い顔、悲しげな目であった。
「仙吉のことを、くれぐれもお頼み申し上げたくて」
「それはよく承知している。しかし、改まっておかしいではないか」
「不幸な子、父とはかたき同士、あれは母ひとりの子でございました。かわいそうに、どんなにか悲しむことでございましょう」
日ごろは気丈でつつしみ深いお俊が、さめざめとして泣くのだ。どうも様子がおかしい。
「あ、仙吉が呼んでおります。もう、おいとましなければ。——若様も、どうぞ、ご道中お気をつけあそばしまして」
すわったままの姿がそわそわと影うすく——
「どこへ行く、お俊さん」
桃太郎侍は自分の声で目がさめた。
(夢か——)
夢にしては、あまりにもまざまざとしたお俊の姿、まだそこのあんどんの陰にいるかのごとく思われて、妙に心寒い。
(疲れているせいだろうか)
考えてみれば、ここは下屋敷の寝間、お俊が

来るはずはないのである。
それにしても、心のあることを夢に見るという。しきりに仙吉のことを頼んでいた。道中気をつけろともいっていた。
桃太郎侍は眠る前に、——江戸にいて敵の計るに任せているより、むしろ一刻も早く江戸を立つべきではあるまいかと思案していたのだ。
昨夜のようなこともある。じゅうぶん網が張られている江戸にぐずぐずしているより、にせ若殿本来の目的たる国もとの本拠を不意につく、そのほうが早そうだ。頼んでおいた伊之助がどんな報告を持って来るか知らぬが、万難を排して、きょう朝のうちに立つことにしよう。
——桃太郎侍ははらがきまった。
「おお、夜が明けたようだ」
庭でスズメが鳴きだしたのである。
夢のお俊のことも気にはなるが、はらがきまると一刻も猶予のない男だ。桃太郎侍は伊織と打ち合わすべく、身じたくをして寝間を出た。

しらじらと明けたばかりの庭に、けさはじめての霜が、きれいにおりていた。
「初霜だな。これがはたして吉兆になるか、凶に変わるか」
りんとさえた大気に、思わずからだが引き締まって来る。
「もうお目ざめでございましたか」
茶室へはいると、伊織がすぐに出迎えた。これはずっと寝なかったらしい。
(百合が悪いのか?)
桃太郎侍はすぐに察して、まゆをよせた。
「ハッ、少し発熱いたしまして」
「そうか。心を痛めたからだに水責めがさわったのだろう。わしでさえ少なからずこたえたのだ」
次の間に、百合は、ぬれ手ぬぐいを額に当てられて、こんこんと眠っていた。美しいほおが燃えるように赤い。
「なんと申しましても、女はやはり役にたちませぬ」
これがせがれだったらと思うのだろう、伊織は力なくつぶやいた。
「いや、それでもよくけなげに戦ってくれた」
いじらしいほどいっしょうけんめいになっている心だけはくめるのである。が、とうてい国もとへの道中には無理だ。置いて行くよりしかたがあるまいと、桃太郎侍も考えていたのだ。
「伊織、わしはきょう朝のうちに江戸を出発することにする。四つ(十時)までに供回りを人選して、道中の手配をしてくれぬか」
「おお、よくお覚悟くださいました。実はてまえも若様の頭と腕におすがりして、一挙に決行したほうがと、ただいま思案していたところでございます」
だれが考えても、それよりほかにないとみえる。
「うむ、上屋敷へ帰ると見せて、途中から品川へ向かう。品川で人選しておいた供回りに替えて、そのまま東海道を上る覚悟だ。百合はしばらくわしがみているから、早々手配をしてくれ」
「かしこまりました」
伊織はひそかに茶室を出て行った。
(あとでそれと知ったら、さぞ恨むだろうな)
あれほどいっしょに国もとへ行くと、ひとりできめていた百合、その百合は今、前後もなく熱にうかされて寝入っている。桃太郎侍はそっと、ぬれ手ぬぐいの裏をかえしてやった。火のように額が燃えているのだ。
「若様——どうぞ召しあがってくださいませ」
パッチリ目をあけて、不意にいいだしたのだ。
ハッとその顔をみつめていると、もうスヤスヤと目を閉じて、——飯をたけぬお嫁さんは困るといったあのことばの飯たきの夢でも見ているのだろうか? かわいくあけたくちびるのあたり、ほのかに微笑が漂ってきた。

小鈴は明けがたになってうとうとしたと思ったら、もう女中に起こされた。伊賀半九郎がたずねて来たのだという。

「二階へお通ししておいておくれ」

いつのまにか夜があけて、明るい朝の日ざしが寝不足の目にまぶしかった。洗面をして鏡台に向かったが、頭が重い。

「どこに行っているのだろう」

どうしても来なければならないはずの桃太郎侍が、まだ来ないのだ。小鈴にしてみれば——伊之助の家を出た以上、ほかには知り人のないあの人である。それに、きのうはあんなに自分を頼りにして心細がっていた病人だ。ここへ来なければならないものと、頭から信じているのである。現に、二度めにお化け長屋に迎えに行った時、近所の女房らしいのが、

「だんなはさっき、代地へ行くって出て行きましたよ」

自分の顔を見て、いやらしい笑いをうかべていた。——それじゃ、伊之さんの毒舌にいたたまらず、先へ家へ行ったのかしらと、飛び立つ思いで帰って来たが、

「いいえ、まだお見えになりません」

ねぼけ眼の女中の返事だった。

それから急に火をおこしたり、フトンを敷いたり、いまかいまかと明けがたまで待ちどおしていたのだが、

「どうしたっていうんだろう、病人のことだし途中で何かまちがいでもあったのかしら」

小鈴は冷たく鏡台にうつる自分のあおい顔をぼんやりとながめていた。そうとしか考えられないだけに、泣きたいような気持ちだった。

そういえば、——どこへ行くんだ、師匠と、あの時あの人は珍しくすがるような目をしていた。なぜ思いきっていっしょに連れて出てしまわなかったのだろう！　だれしも、からだの悪い時は気が弱くなるものなのだ。男だって口に出してはいわないが、きっとあの人だって、ゆうべはいっしょに連れて出てもらいたかったに違いない。

「そのくらいのことがわからなかったなんて！——堪忍してくださいよ、桃さん」

そう気がつくと、いまにもお化け長屋へ飛んで行ってみたい小鈴である。

「そうだ、伊賀さんの用がすんだら、とにかく、すぐ行って見て来よう」

小鈴は手早く化粧を刷いて、思いたつと矢もたてもたまらない。さっさと外出着に着替えてしまった。

「やあ、どこかへ出かけるのか、師匠」

二階にしばらく待たされていた半九郎が、うれいを含んで、ひときわ見まさる小鈴のよそ行きのあで姿に、思わず目をみはった。

「こんなに早くから、どうしたんです、伊賀さん」

小鈴はあんまりきげんがよくない、先がいそがれるのだ。

「急に頼みたいことがあってな。——それはそうと、師匠、桃さんはどうした。来ているのか」

「いいえ。正直のところ、それであたし急いで出かけなけりゃならないんですけれどね」

追いたてるようにいう。

「こりゃごあいさつだな。どこへ行くんだ」

「お化け長屋へ行くんです」

「桃さんを捜しにか？」

「いいえ、うちの人を迎えに、——あたしの行くの待ちかねているでしょうからね」

「おかしいな」

半九郎が小首をかしげた。

「何がおかしいんです、伊賀さん」

「桃さんはたしかにお化け長屋にはおらんはずだぞ。拙者は妙な話を聞き込んだので、それで朝っぱらから、ここへ駆けつけたんだが——知らんか、師匠？」

「話してください——お願い」

ひとたまりもなく、小鈴はもう目の色をかえ

ていた。
「ゆうべ、あねごは二度めにお化け長屋へ行った時、桃さんに会ったのか」
小鈴の顔色を読みながら、半九郎はわざと落ち着き払っていた。
「いいえ、それがね、行き違いになってしまって。——あの人はたしかにここへ来るといって出たんだというんですが」
「いくら待っても来なかったというわけだな」
「そうなんです。目が痛むというのに、どこへ行ってしまったのか、——病人でなけりゃあたしもこんなに心配しないんですけれど」
真剣な小鈴の顔だ。むっちりと、はだの白さ、なまめかしさを思わせる年増盛り、この伝法な女が、桃太郎侍のことになると、まるで小娘のように夢中になる。——いまに見ろと半九郎は、ひそかに悪魔的な心をたのしんでいるのだ。
「来ないはずだよ、あねご」
「何かあったんですか？」
「うむ。桃さんはゆうべ、たぶんここへ来る途中だったろう、さらわれて行ったらしい」
「さらわれて——？」
「昼間の伊織の娘があきらめきれず、カゴを持って迎えに行く途中で、ぱったり出会ってしまった。——どこへおいでになります？　代地の小鈴のとこへ、とつい桃さんが、正直にいったんだな。娘はカッとなって、いっしょに来てくれなければ死んでしまうと、懐剣をのどへあてて狂いだした」
「まさか！」
「ハハ、それは冗談だが、とにかく桃さんがけさ上屋敷の家老の家にいることだけは事実だ」
「ほんとう、伊賀さん？」
小鈴は半信半疑である。
「だって、あんなに娘をきらって、そのために伊之さんとけんかまでしていたんですよ」
「だから、拙者はさらわれたんではないかと思うのだ。人情をもってくどかれると、桃さんのような男らしい性格の男は、うっかり同情する気になるものだ」
「——？」
ありそうなことだけに、小鈴の疑惑は深くなる。
「それはまあとにかくとして、若殿はきょうの四つ（十時）に上屋敷へ帰るという報告が下屋敷の進藤からあったのだ。まもなく、こんどは上屋敷のほうから、今の桃さんの話と、——若殿はきょう江戸を出発するらしい、品川の宿へ昼までに、ひそかに供回りを向ける用意をしているという報告が来た」
「じゃ、上屋敷へ帰ると見せて、急に出発するつもりなのね」
「偉いな、さすがにあねごだ」
半九郎が、冗談ともまじめともつかずおだてる。
「で、桃さんはどうなるんです？」
小鈴にとっては、若殿のことなど、今ではどっちでもいいのだ。
「まあ、聞けよ、拙者の息のかかった下屋敷の留守番と中間が、ゆうべのうちに倉の中で妙な死に方をしていたという。その辺の事情から、若殿の江戸出発が急になったと思われるんだ——そこでな、あねご、いよいよ国入りとなると、敵のほうも桃さんのような腕ききがほしいのは当然だろう」
「いいえ、あの人はそんなこと、承知するはずはありません」
「そうかな。あねごがそういうんなら、まちがいはあるまいが、念のためということがある。ひとつ、品川の宿で待っていて、確かに桃さんが行列に加わっているかいないか見てくれんか。万一、加わっているようなら、あねごの力で引き抜いてもらいたい。ああいう男が敵にいては、ちょっとこっちも仕事がしにくいでな」
真顔になっている半九郎の話に、小鈴はつい

つりこまれてしまった。それに、桃太郎侍がゆうべ伊織の家へ泊まったとすると、案外情にもろい人、どうくどき落とされているかもしれないという疑惑もある。

「ようござんす。あたしこれからすぐ行きます」

すでに上屋敷へ帰館の時刻が迫っていた。にせ若殿の桃太郎侍は、あけ放した茶室の日なたにすわって、ゆうゆうと庭をながめている。

小だるまの杉田助之進、のっぽの大西虎之助、むっつり屋の上島新兵衛が、それぞれ庭の適当な位置に控えて、若殿のお立ちを待っていた。いや、お立ちを待つというより、——急病の百合之助をカゴにのせて、早朝上屋敷へ帰った伊織から、

「なるべくおそばを離れぬように、おまえがた三人のうちひとりは、必ず若殿の見えるところに控えていろ」

と、特に警護を申し付けられていたのである。

（さっきから、ああして、おひとりで庭をながめておられるが、何がおもしろいのだろう）

もうお時刻だというのに、さすがに悠長なものだと、せっかちな小だるまは、時々若殿のほうをうかがいながら、いらいらしている。

が、桃太郎侍は決して悠長に構えているわけではなかった。サルの伊之助の来るのを待ちかねているのである。

（まにあわぬかな）

上屋敷へ帰るのならとにかく、途中から品川へ向かって、そのまま江戸を立ってしまうのだ。それだけに、気が気ではない。

（朝という約束だから、もう来なければならんのだが）

あの男のことである、来ようがおそければおそいだけ、なにか糸をたぐりこんでいるのだろう。聞いておけばきっと役にたつのだし、今後の打ち合わせもしておかなくてはならないのだ。

（いよいよまにあわなければ、今夜の泊まりで

落ち合う手がないではないが）

出発の時刻は、ゆえなくそう延ばすわけにはいかぬ。品川で待ち合わせる時刻が、ちゃんと決まっているからだ。

（やむをえぬ）

こっちを見て待ちかねている小だるまの助之進のほうへ合図をしようとした時、おもやのほうから小走りにあらわれたひとりが、むっつり屋の新兵衛に何か報告するのが見えた。来たな、と思っていると、はたして新兵衛が小首をかたむけながら、飛び石づたいに進んで来た。

「申し上げます、ご家老様から伊助とかいう下郎が使者にまいりまして、じきじきでなければご用はいえぬ、と申しているそうでございますが」

中間や下郎は、若殿にじきじき物をいうということはできないのだ。

「会ってみよう。用心深い伊織のこと、何か考えがあって、わざわざ下郎をよこしたのかもしれぬ。案内せい」

桃太郎侍はうまくこじつけた。

「承知いたしました」

新兵衛は待たせてあった取り次ぎの者といっしょにおもやのほうへ去ったが、しばらく手間どって、中間姿の伊之助を庭のほうから案内して来た。

「下郎、ご前であるぞ」

新兵衛にいわれて、

「へえ」

伊之助はベタリと石の上へ土下座をする。

「伊織方中間伊助、召しつれましてございます」

「うむ、そちはさがっていよ」

桃太郎侍は新兵衛を遠ざけて、

「そこでは話が遠い。話すから、進め」

伊之助に声をかけた。

「へえ」

「遠慮には及ばぬ。面をあげよ」

「へえ」
おそるおそる頭を上げて、伊之助不思議そうな顔をしている。
「どうした、伊之助」
小声になって微笑して見せると、
「やっぱり、だんなでしたね。あぁ驚いた」
ほっとしたように、はじめてつぶやくのである。
「たいそうおそかったではないか」
姿は若殿らしくおうように構えて、ことばだけ桃太郎侍になる。
「だって、だんな、いまの侍に、まっ裸にされて調べられていたんでさ」
考え深い新兵衛のやりそうなことである。
「まあ、おこるな。何か危険なものでも持っていないかと――、つまり、わしをたいせつに思ってのことだ」
「おこりゃしませんがね、驚いたのなんの。――けど、だんな、だんなもそうしていると、なるほど、りっぱな殿様ですね。やっぱり、あっしはこうごさんしたよ」
サルの伊之助は感心するのだ。
「まあいい。――伊賀半九郎のことを聞こう」
「その前に、ぜひ耳に入れたいことがありますんで」
急にサルが悲痛な顔をするのである。そういえば、はじめて顔をあげた時から、妙にまぶたを赤くしていた。
「どうした、伊之助」
「けさ、夜明けごろに、隣のお俊さんが死にました」
「なにッ！」
がくぜんとする桃太郎侍！
「だんなの身代わりになったようなもんでさ」
「身代わりに――？」
「へえ。ゆうべ、だんなのところへ押しこんで来た浪人者のひとりが、帰りがけに一太刀斬って行ったんだそうで。畜生！　――そいつらは

だんな、やっぱり伊賀半九郎ってやつの回し者だったんでさ」
「その心当たりはわしにもあるが、――そうか、そんな乱暴を働いて行ったか」
許さぬ！　と桃太郎侍のほおから血の気がひく。
「あっしは明けがたまで看病して、死に水をとりました。お俊さんは死ぬまでね、だんな。――いくぶんでも先生のお役にたったんだから、わたしはかまわない。ただ、かわいそうなのは、ひとりで残された仙坊のこと。お隣のおじさん、どうか先生に頼んでください。仙吉を一人まえの武士にしてやってくれと――」
伊之助はたえきれず、握りこぶしを目にあてて、ウ、ウッと嗚咽する。
「――！」
桃太郎侍は歯を食いしばった。遠くから家来たちが見ているので、涙をこぼすわけにはいかない。
（あれは正夢だったか）
明けがた夢に見たお俊のふしぎな姿、くれぐれも仙吉のことを頼んでいたが――息を引き取ったのはちょうどその時刻だったのだろう。なんという不幸な女、しかも自分のために死なしたかと思うと、泣くよりつらく申しわけない。
「伊之助、死骸はどうした」
「まだそのままに。だんなとの約束があるんで、近所の人に頼んで、ちょっと抜けて来ました」
「早く帰ってやってくれ。わしも行きたいが、事情が事情だ。おまえ、わしにかわって、頼む。仙坊のことは命にかけて引き受けると、ひと言たむけのことばをいってやってくれ。万事おまえがさしずしてな、できるだけねんごろに、――仙坊はどうしておる」
「聞かないでおくんなさい、だんな。――ただね、お俊さんに、先生のいうことをよくきいて、りっぱな男にしてもらえっていわれたもんだか

ら、先生はどこへ行ったんだ、早く、会わしてくれろと」

「そうか。――お俊さん、仙吉の父親のことはなにもいわなかったか？」

「いいました。薄情なやろうで、あてにはならないが、なんでも讃州丸亀から一度たよりがあったとか。名まえは伊藤新十郎って剣術使いなんだそうです」

「何ッ？」

奇縁というおうか、その丸亀へ、きょう旅だたねばならぬ桃太郎侍である。

神田小川町の上屋敷へ帰るべき若殿の行列。その日の供がしら上島新兵衛のさしずで、途中から道筋が変わり、そのまま、品川の宿にはいってしまった。行列途上の責任はかかって供がしらにあるので、ほかの者は絶対に口が出せない。

それにしても、あまりに違いすぎるので、

「お供がしら、お道筋が違いはしませんか？」

そっと注意した者がないではなかったが、

「いや、これでよろしい」

新兵衛はがんとして受けつけなかった。

にせ若殿の桃太郎侍がひそかにその旨を申し含めておいたのは、新兵衛のほかに小だるまの助之進、のっぽの虎之助のふたりきりだった。カゴが品川の本陣へ着くころには、おおかたの者がもうその意のあるところを察してしまった。

（当分、江戸とも別れか）

桃太郎侍はカゴに身を託して、軽く瞑目していた。なによりも心残りなのは、自分のために不慮の死を遂げたお俊のなきがらに、一ぺんの回向さえしてやれずに旅立つことである。

くれぐれも伊之助にいいつけておいたから、ねんごろには弔ってくれるだろうが、――それにしても憎いのは罪もない女を斬って行った冷酷無残な大滝鉄心斎一味の悪浪人どもである。

（お俊さん、きっとかたきは討ってやるぞ）

今までは敵となるも、味方となるも、その時の人間の運、なるべく無益な殺生はしたくないと、できうるかぎり手加減をして来たが、――もう遠慮は無用、絶対に許さぬと、桃太郎侍は激しい憤怒を感じていた。

多難の旅はもとより覚悟の前。だが、今となっては仙吉のためにも、生きて帰らねばお俊にすまぬ。しかも、兄に毒を盛って生死の境におとし、父を幽閉して若木家を横領しようとしている極悪人、是が非でも負けてはならぬ旅だ。

それに聞きのがしできないのは、百合が門番中間森助から聞かされたといって、あの穴倉のやみで話していたことである。

「国もとの万之助様は、本当はお梅の方との間にできた伊賀半九郎のお子だというのですけれど、そんなことがあるものでございましょうか」

百合は信じかねるふうであったが、――これもないとはいいきれないことである。

小鈴を手に入れるためには、平気で敵とも味方ともわからぬ自分を暗殺させようとした半九郎だ。人間を人間とも思わぬやつ、おのれの才気と腕に任せて、なにをしているか、どんなことをするか、わかったものではない。わかっているのは、かれが尋常一様の悪党ではないということだけである。

（いよいよ知恵比べ、腕比べ！）

憤怒が加わって、桃太郎侍の闘志はいやがうえにも燃えあがる。

カゴが本陣へついたのは、やがて昼少し過ぎて、すでに伊織が上屋敷からさし回した旅の供回りが先着して、若殿のお着きを待ちかねていた。

そのころ――。小鈴はすっかり旅じたくをして、南品川の掛け茶屋、往来のよく見える床几に休んで茶をのんでいた。

桃太郎侍が若殿国入りの行列に加わっている――まだ半信半疑だが、多くの人を使って一から十まで報告を集めている半九郎のことばだ、

どうも信じないわけにはいかないのだ。万一、加わっているとすれば、まさかここでいきなりことばをかけるわけにはいかぬ。今夜の泊まりは神奈川か程ガ谷、そこまでついて行かなければならないし、それでもいうことを聞かなければ、丸亀までも追って行こうという、——相変わらず恐ろしいこの女の執念なのである。

（だれが、あんなしろうと娘なんかに！）

一晩でも伊織の屋敷へ泊まったとなると、泊まった桃太郎侍より、引き込んだ伊織の娘のほうが憎くってたまらない小鈴なのだ。

（おや——！）

もうやがて通るはずの若殿の行列ばかりを心待ちに、なにげなく表をながめていた小鈴は、うっかり見のがしてしまうところだった。——上り下りの人足絶えぬ街道筋、明るい秋の日ざしの中を、黙々とふたり連れの六部が上って行くうしろから、ふと通り過ぎて行く道中羽織り伊賀ばかまの旅の武士。その侍の左の目に、白い目おおいが掛かっている。見直すまでもなく桃太郎侍なのだ。

意外にも、たったひとり。——が、それを不思議がっているより先に、

「ねえさん、お茶代はここへおきますよ」

小鈴は、もうあたふたと茶店を走り出て、

「桃さん！　桃さんてば！」

「——？」

呼ばれてふり返った桃太郎侍は、そこに思いもかけぬ旅姿の小鈴を見て、さすがに目をみはった。

「やあ、師匠——！」

「知らない！　あたしを置いてどこへ行くつもりさ、桃さん」

ゆうべから押えに押えていた感情が、顔を見るなり爆発してしまったのだ。夢中で男のそでをつかんで恨みがましく見上げる目いっぱいに、われながらどうすることもできない涙が、急にあふれて来た。

「師匠こそ、どこへ行く」

桃太郎侍は、うっかり返事ができない。こっちは敵をあざむいて不意に江戸を立ったつもりでも、それがどう陰謀派のほうへ知れているか計り知れないのだ。大事の上にも大事をとって、行列より一足先に本陣の裏口から忍び出た桃太郎侍、まさかこんなところに小鈴が待っていようとは、夢にも思わなかった。いや、もし自分を待っていたのだとすれば、どうしてきょう自分が江戸を立つことを知ったか、まずそれから聞かなければならないのである。

「どこへ行くって、桃さん、そんなに桃さんはあたしがいやなの」

「まあ、歩きながらの話にしよう。往来の者が見て笑っている」

だれが見たって、しろうと女とは思えぬ、はでな年増が、道のまん中で若い侍のそでをつかんだり、涙をふいたり、——ちわげんかとしか見えないのだから、これは人目をひくのが当然である。

「笑いたい者には、笑わしといてください。あたしはそれどころじゃありません」

「わかった、わかった。もういいから」

「ちっともよかあないじゃありませんか。なにがわかったのさ、桃さん」

手がつけられない。

「あやまる。とにかく、歩いてくれ。これには子細のあることだ。それとも、どこかその辺で一休みしながら話そうか」

当惑して、肩をなでんばかりの男のやさしい顔を見ているうちに、小鈴は、少し気がしずまって来た。いや、こうしていとしい男からなだめられている自分に満足して来たのである。

「知らない！」

急に小鈴はそでをつかんだまま歩きだした。

「おいいなさいよ、どんな訳があるのさ」

「いいかげんに、そでを放してはどうだ。おかしいではないか」

「おかしかありません。だれが放すもんですか。それとも桃さんは、やっぱりご家老様の娘のほうが好きなの？　さんざん人を待たしておいて、ゆうべはあの娘のところへ泊まったんですってね。ほんとうなの？——おいいなさいってば」

いきなり肩をぶつけるようにして来るのだ。

「なんのことだ、それは」

桃太郎侍にはどうしてもげせぬ。げせぬうちは、うっかり口がきけないのだ。——口がきけないのはいいが、この姿、たぶんうしろから護衛役としてひそかについて来るのっぽの虎之助が、さぞ驚いているだろうと思うと、くすぐったくもある。

「師匠、まあ落ち着いて話してくれ。いったい、師匠はどこへ行くのだ」

桃太郎侍は改めて小鈴の旅姿を見直しながらきいた。道は左手に、冬近い品川の海がひらけて、よく晴れた水平線のあたり房総の山々が澄んだ大気に青い。——讃州丸亀までは陸路船路あわせてざっと百八十里、多難なるべき道中とは覚悟していたが、その振り出しの品川で、もうこんな予想外なはめに出会おうとは、いささか意外であった。

「きまってるじゃありませんか。あたしはどんなに薄情にされたって、一度自分で亭主ときめたら、死んだって離れやしませんからね」

ことばどおり小鈴は、いつしかつかんだそでを放そうとしない。

「しかし、わしがきょう江戸を立つということが、どうしてわかった」

「桃さんはゆうべ、あの娘にくどかれて、伊織の屋敷へ泊まったんですってね」

とんでもないことをいいだす。

「伊織の屋敷？」

「とぼけたってダメ。ちゃんとけさ知らせてくれた人があるんです。伊織の屋敷へ泊まったからには、きっときょう江戸を立つ若殿の行列に

加わって、いっしょに丸亀へ行くつもりなんだろうって」

「おかしいな」

国入りをするのは事実だが、それは若殿としてであって、そのにせ若殿の秘密がほかへ漏れるはずはなく、まして、桃太郎侍がゆうべ伊織の屋敷へ泊まったなどということは、ありえないのである。

（そうか）

ふっと頭にひらめいたものがある。若殿江戸出発は早くも裏切り者から伊賀半九郎の耳へはいった。これは予期していたことだから驚きはせぬ。半九郎は極力若殿の国入りを妨害し、あわよくばこれを途中で倒さなければならぬのだ。ところが、小鈴はすでにこの事件から興味を失っている。ただでは江戸を離れたがるまい。どうしても同行させるには、桃太郎侍が行列に加わっているといわざるをえなかった。

つまり、小鈴に野心のある半九郎が、小鈴を道中へひっぱり出すための口から出まかせが——偶然にも自分のとった手段と錯綜して、ここでバッタリ小鈴と出会うことになったのだろう。それよりほかに考えようがない。

（それにしても、厄介なことになった）

道中この調子で、小鈴につきまとわれたのでは、桃太郎侍としては、うっかりにせ若殿に早替わりもできないことになる。

「ちっともおかしかあないじゃありませんか。桃さんとうとうあの娘にくどかれて、あたしを捨てる気になったんでしょう。それでなけりゃ、こんな旅姿をして、今ごろここへ来るはずはないんです」

小鈴はすっかり桃太郎侍が若殿方になって国入りをすると信じているのだ。

「それは師匠、違う。拙者いまさら伊織の娘にくどきおとされるくらいなら、何もゆうべ伊之助とあんなけんかはせん」

「じゃ、どうして桃さん、ゆうべ伊織の屋敷へ

なんか泊まったんです？」

「いや、それがおかしいというのだ。わしは伊織の屋敷へなんか泊まったおぼえはないし、若殿がいつなにをするか、そんなことは少しも知らん。――わしは長崎に良い目のオランダ医者が来ていると聞いたから、そこへ行くつもりで出かけて来たのだ」

「うそ……そんなことをいって、あたしをだますんです。それがほんとうなら、ゆうべ、あんなにあたしがいっておいたのに、あたしの家へ来てくれないはずはないんです」

「その考えは違うぞ、師匠」

桃太郎侍はなにか含むところがあるように、りんとした声音になった。

「なにが違うんです、桃さん」

嫉妬が伴っているから、小鈴の心は容易に解けない。

「わしは浪人はしていても、武士のはしくれだ。――師匠がわしの目を心配してくれたゆうべの情、それはよく承知している。感謝もしている」

これはいつわりのない桃太郎侍の心だ。

「それほど、あたしの心を知っている桃さんが、なぜ待ちぼけなんか食わしたんです」

「それが少し違うのだ。われわれはまだ祝言の式をあげていない。心はどうあろうとも、ちゃんと道を踏まずに、男が女ひとりの家へ一夜でも泊まれるか。妻となり夫となることは人間一生の大事、この世ばかりの縁ではない、二世までも約束されることだ。わしは人目を忍ぶような軽々しい契りは結びたくない」

「――――」

ハッとして小鈴は急にうなだれてしまった。

この世ばかりではなく、二世までの約束、そこまで考えている男の深い、しかもりっぱな心に対して、二世が三世でも思う心は決して負けはしないが、あまりにも男女の道を簡単に考えていた、おのれのあさはかさが恥じられたのだ。

「それに、わしは今片目ですむか、両眼を失うか、不具になりかかっている人間だ。万一師匠の一生の重荷となっては申しわけない。まずこの目をなおしてからでなくては、軽々しいまねはできぬとも考えた」

「恨みます、桃さん。軽々しく事を考えたのは、そりゃあたしがあさはかでしたけれど、重荷だなんてあんまりです。あたしはそんなあだし心で桃さんを思っているんじゃありません」

小鈴はそっと涙をふいた。

「わかっているが、男としては女の一生の重荷となることは忍びないのだ。――とにかく、長崎から帰るまで、この話はあずけて、師匠は江戸で待っていてくれぬか」

桃太郎侍はさとすようにいってみた。

「いいえ、あたしは迷惑でもいっしょに行きます」

「――」

「やっぱり尽きない縁があるんですね。伊賀さんがあんな思い違いをしてくれなければ、あたしはこうして桃さんに会えないところだった。考えても恐ろしい」

こりゃいかんと、桃太郎侍は当惑せざるをえなくなった。話はうまくかたづいたが、ついて来られたのでは身動きができない。

「迷惑――？　桃さん」

小鈴は黙っている男の顔をおずおずと見上げるのである。

「あたし、決して、もういやらしいことはいいません。桃さんがいいというまで、きっと待ちます。――それに、お金だって用意して来たし、ただついて行くだけ。それならいいでしょう？」

実はそれが困るのだ。が困るといったら、よけいいじになりかねない女なのである。

「物好きだな、師匠も」

「だれがこんな物好きにしたんですかね」

「口ではそういっても、長崎までは遠いぞ」

「天竺よりは近いんでしょう？」

手がつけられない。

「江戸の家のほうはいいのか？　このまま行ってしまって」
「いいんです。ちゃんといいおいて来ましたし――家なんかどうなったって、好きな人にはかえられません。こんなこといって、またしからるかしれないけど、もし長崎で長びくようなら、あたし向こうで働いて、家を持ちます。どこへ住んだって、桃さんとならかまわないし、――向こうにだって、なこうどぐらいしてくれる人はいるでしょうからね」

第一夜

六郷の渡しの近く、油障子に「酒さかなあり」と書いたこぎれいな休息所の土間を占領して、十人あまりのいかつい浪人者がいずれも身軽な旅姿で――酒を飲んでいる者もあれば、渋茶で大福をほおばっている者もある。口数は少ないが、みんな目の色が妙に殺気走ってギラギラしているので、なにげなくのれんをくぐろうとする客が、逃げるように行ってしまう。
「おい、酒はいいかげんにしておけよ」
奥のほうから声をかけたのは、両国矢の倉に今井田流の道場を持つ大滝鉄心斎だ。四十五、六の総髪、あから顔の堂々たる体軀で、剣客者としてはいちばんあぶらの乗った年輩である。それを囲むように三人、大滝に比べて服装は貧しそうだが、他の一団と違って平然と落ち着いているのは、いずれも腕に自信があるのだろう。
「とかく若い者はすぐ血気に駆られるでな」
「いや、真剣勝負になれんうちは、だれでも酒の勢いをかりたくなるものだ」
「いざという時、息が続かんで困るのだがな」
この連中は静かに茶を喫している。ひとりは南部浪人木村勝次郎、ひとりは中国浪人林田治助、もうひとりは越後浪人川合芳之助、いずれもいなかへ行けばりっぱに一流の先生で飯が食える剣客だ。

「貴公たち、きょうはバカに神妙だな」
鉄心斎がひやかすように三人を見て笑った。
「きょうは大敵ですからな。われわれはこれでも、ちゃんと時と場合は心得ています」
南部浪人はもっともらしい顔をした。
「ゆうべの失敗を取り返さなくちゃ、伊賀大人に申しわけない。それに、きょうのは白昼戦だ」
額に古傷のある中国浪人がいう。
「いかに林田でも、あの女を斬るようなわけにはいかん。な、そうだろう」
南部浪人が笑った。
「それをいうな。あれが、酒の勢いというやつだ。考えてみると、かわいそうなことをした。多少寝ざめがよくない」
「かわいそうより、今考えると惜しくなったんだろう。裏長屋には珍しい美人だったから斬りたくなった、それがほんとうらしいな。どうだ林田」
越後浪人が皮肉な目をした。
「いや、酒の勢いだよ」
「そりゃ、酒の勢いには違いないが、あの、バタバタあばれて白いはぎがすそに乱れるのを、貴公すごい目をしてにらんでいたぞ。おれはあぶないと思った。自分のものにならんと思うと、急に、ムラムラッと斬りたくなる、あぶらの乗りきった大年増だからな」
「その話はよせ」
林田治助のほおが、スッとあおくなる、冷たい病的な顔だ。
「なあに、あのくらいの傷じゃ死にやせんよ。憎くって斬ったんじゃない、いわば、ほんのできごころというやつだ。――しかし、あののけぞった姿は見ものだったぜ。肩を押えた白い指の間から血を吹いてゆがめた顔、バラリと解けた髪が煙のように――」
「よせと申すに、――おい、ひやでいいから、酒を持って来い」
「ハハハ、とうとう先生たまらなくなったな」

越後浪人が笑いだした。このほうが人が悪いらしい。

「貴公は飲んだほうがいいんだ。酒がはいらんと、ほんとうの闘志が出ん、神経質だからな——大滝さん、敵の人数は、まだはっきりせんですか」

「うむ、もう知らせが来る時分だな。どちらにせよ、いくさは船だ。何人いたところで一艘にそうたくさんは乗れんから、勝負は案外簡単だろう。それに、敵はこの白昼、六郷川のまん中で襲撃をうけようとは考えてもいまいからな、——伊賀大人らしい戦法だよ」

鉄心斎がヒソヒソと説明している時、不意に表から駆けこんで来た者があった。

「やあ、大滝先生」

呼びながらはいって来たのは、同じような浪人者である。

「なんだ、古田さん」

「伊賀大人からの伝言です。襲撃は中止、すぐ川を渡って集まるんだそうです」

「中止——？」

居合わせた者が一様に伝令の顔を見た。中にはほっとしているらしいのもある。

「行列のカゴはからだそうだ。若殿もなかなか食えん。平侍に変装して、一足先に出たらしいという密報が来たんだそうです」

「たったひとりでか？」

鉄心斎があきれた顔をする。

「さあ、くわしいことはわからんのですが、近習たちの顔の中でひとり見えぬやつがあるというから、ふたり連れか、いずれにしても小人数でしょうな」

「また、ずいぶん思いきったまねをするではないか」

「とにかく、バカ殿ではないそうです。伊賀大人も、何をするかわからん殿様だといって、苦笑いしていました」

「その小人数のほうが始末がしいいぞ。だれか

顔を知っている者はおらんのか？」

南部浪人が一同を見渡した。

「人相ぐらいは聞いておるが、おそらく、ちょと見たぐらいではわかるまい。いずれ何か変装しているだろうからな」

鉄心斎は問題にしない。いちいち通行人を呼び止めて調べるというわけにはいかないのだから、やすそうで案外それはむずかしい仕事なのだ。

「なにか伊賀さんに策があるのだろう。とにかく、一同あんまり目だたんように、二、三人ずつ引き揚げてくれ」

浪人たちは思い思いに立ち上がった。

「惜しいな、顔を知っていさえすれば、逃がさんのだが」

「金百両の大将首だからな。そのうえ百石の新規お召しかかえだ。まず夢に近いほうだろう」

笑いながら三人一組、最初のが茶屋を出て——ちょうどその時、六郷へさしかかって来た桃太郎侍と小鈴を見かけたのだ。変装ということばが出ているから、桃太郎侍の、白い目おおいがすぐ目につく。しかも、この連中はあいにく、小鈴の顔を知らなかったのである。

「おい？」

ひとりが連れをこづいた。

「うむ」

こづかれたのがうなずく。

「しかし、女連れとは少し変ではないか。それとも若様、おめかけづれとしゃれたかな」

「まさか。——しかし、途中で道連れにするという手はある」

「それにしちゃ、あのご両人、仲がよすぎるぜ。見ろ、手をひきあわんばかりだ」

「そんなことをいっておってはかぎりがない。とにかく、茶屋へひきずりこもうじゃないか。あのべっぴんをからかうだけでもおもしろい」

「あさましいことをいうな。——だが、すごい美人だな」

これもまんざらではないらしい。
「おれに任せろ」
ひとりがツカツカと桃太郎侍の行く手へ立って、いんぎんに頭を下げた。
「失礼ですが、てまえ、ごらんのごとく道中の貧乏浪人」
「――？」
桃太郎侍は目ざとく、三人が何か耳打ちをしているのを見ていたので、あやしいやつらと、すぐにらんでいた。
が、けぶりにも見せない。
「貧乏浪人はご同様でござるが、――なにか用ですか？」
「いや、同じ貧乏浪人でも貴公などはどうして上等飛びきりのほうでござる。拙者などは全くのすかんぴん、ちとおりいってご無心があるのだが、あれなる茶店までお顔を拝借願えまいか」
「ここではいかんのですか？」
「それが、ちとどうも、――なに、決してお手間はとらせません。ご新造ですか？　うらやましいな。ご夫婦で道中、お疲れのようでござるから、ついでに一休みなすってはいかが」
こいつ、なかなか如才がない。
（どうする？）
と、いうように、桃太郎侍は小鈴をふり返った。――まさか、若殿として自分が疑われているとは思わない。弱い女連れと見ての金の無心、そんなところだろうと思った。
「休んで行きましょうか、あなた」
どうやら思いがかなってのうれしい旅、小鈴は夫婦と見られたのが楽しかったらしい、別にこの連中など物の数にも思っていないようだ。
「そうか。――では、お供いたそう」
「恐縮、――いや、恐縮」
浪人者は先に立って、チラッと連れのふたりのほうへ目くばせした。心得てふたりが退路を断つように背後へ回る。
「さあ、どうぞお先へ」

ガラリとあけた油障子、――中にいた十人近くの一味が、いっせいにこっちを見た。
（おや――？）
桃太郎侍ははじめて目をみはった。――あるいは行列を待ち伏せしている連中ではあるまいか。では、何のために自分を呼び入れる？
これは油断ならぬと思ったが、事に当たってあわてるような男ではない。
「だいぶ、たてこんでいるようでござるな」
なにげなく入り口に立ち止まって、障子に手をかけている案内の浪人の顔を見た。
「いや、奥があいております。どうぞ、ご遠慮なく」
「さようかな」
中へはいると、ピシャリと戸を締め切って、
「ご一同、こういう変装はござらんかな」
勝ち誇ったように、その浪人者がどなった。
一瞬、しーんと連中の顔色が緊張する。
「おや、大滝先生。大滝さんじゃありませんか」
事の意外に一度はハッと男の背へすがるようにした小鈴が、それと見てこんどは桃太郎侍をかばうように、いきなり前へ出た。
「おお、小鈴師匠！」
「どうしたんです、大滝さん。これはなんのこと？――あ、行列を待ってるんですね」
小鈴はすぐに気がついた。
「うむ。――師匠、その人は？」
鉄心斎も桃太郎侍の顔ははじめてだ。目おいを見て、これもあるいはという疑問がある。
「ああ、この人？　ホホホ、これはうちの人、伊賀さんからお聞き及びでしょうが、桃太郎って申しますの。あなた、矢の倉の大滝先生です」
さすがに小鈴はポッとほおを染めていた。人の前であなた呼ばわりは、はじめてである。
「大滝先生――？」
偉いことになったと、桃太郎侍は内心おだやかでない。ゆうべ伊賀半九郎のいいつけで、自分をお化け長屋へ襲撃した大将なのだ。が、け

ぶりにも見せず、
「はじめて御意を得ます。拙者桃太郎、なにかと小鈴がお世話になっておりますそうで」
わざといんぎんに頭を下げた——あるいは、この中にお俊を手にかけたやつがいるのではなかろうか、それとなく見渡すと、一癖も二癖もありそうな顔ばかり、妙に殺気だってこっちをジロジロにらんでいる。
「ほう、貴公が桃氏(ももうじ)——！」
鉄心斎は改めて目をみはった。
「どこへ行かれる？　お見うけすれば、旅じたくのようだが」
「長崎へ行くんです」
小鈴が引き取って答えた。
「あなた、掛けさせていただいたら？——実はね、この人、急に左の目が痛みだして、見えなくなってしまったんです。それで、長崎にいい目のオランダ医者が来ていると聞いたもんですから、これからみてもらいに行こうと思って」
「そりゃいかんな。どんなふうに見えなくなったのだな」
疑う余地はないようにも思えるが、念のためというように鉄心斎は持ちかけた。
「決して貴公を疑うわけではないが。師匠、知っているだろう？　問題の人物が行列のカゴから脱け出して、ひとりで歩いているという知らせがあったのだ。それで、この連中、桃氏の目おおいを見かけて、その問題の人の変装ではないかと思ったらしい。ハハハ。桃氏、ひとつ連中にその痛む目を見せてやってくださらんか」
その実、鉄心斎も半信半疑なのだ。
「まあ、うちの人が若殿に？　大変ですこと。——あなた、見せておやりなさいまし」
信じきっている小鈴は、平気で笑ったが、——もうそんなことまで知れているかと、桃太郎侍は、さすがに驚かざるをえない。こんどの供回りは、じゅうぶん伊織が人選してあるはずなのだ。しかも、まだ裏切り者がいる。

「ご覧ください」
いわれるままに桃太郎侍は目おおいを取って見せた。左の黒目にどんよりと白いカスミがかかって、これはだれが見ても眼病としか思えぬ例の巧みな細工である。
「なるほど、こりゃひどい。——よくわかりました。失礼失礼、もう疑う余地はない。若殿が片目のはずはないのだ」
が、これが桃太郎侍ときまると、かわいそうだがやっぱり生かしておけないのである。むろん眼病で長崎へ療治に行く男が今が今敵方につくとは思えないが、半九郎がこの男を斬りたいのは、恋のじゃま者になるからだと鉄心斎は知っていた。そのくすぐったさがあるから、昨夜の失敗はあまり責められずにすんだので、失敗をただ失敗ですませるような半九郎ではない。
それだけに鉄心斎としては、ここで桃太郎侍を斬って、半九郎の意を迎えておきたいところだが、少し厄介なのは小鈴に気がつかれないように斬る必要があることである。
「大滝さん、伊賀さんは？」
なにも知らぬ小鈴がきいた。
「伊賀大人はたぶん向こう岸だろうと思うが」
「じゃ、お目にかかれないかもしれませんね。お会いになったら、小鈴はお役目をすまして長崎へ行く、とおっしゃってください。おついでの時でいいんです」
小鈴にすれば、半九郎に頼まれた桃太郎侍引き抜きの役を、今こそりっぱに果たしたという誇りもあるのだ。
「あなた、そろそろ出かけましょうか。——とんだ人にまちがえられるところでした。きょうは少し早いけど、川崎泊まりにしましょう。行列といっしょになってはぶっそうです。この人たち、なにをしでかすかわかりませんからね」
男を男とも思わない女、あらくれ浪人たちの見ている前で、これ見よがしに、まるで手を取らんばかりの女房ぶりだ。

「さあ、大滝先生ほどの大先輩が悩んでいられる剣、若輩にはたして解けましょうかな」
答えながら桃太郎侍は、来たなと思った。
「いや、そのごけんそんでは恐れ入る。ちょっと裏へ出ましょう」
鉄心斎は気軽に立ち上がるのだ。
「では――」
誘われて腰をあげようとする桃太郎侍、
「あなた、いいんですか？　また目が痛みだすと困りますよ」
小鈴が心配そうにまゆを寄せた。
「なに、すぐ済む」
「師匠、心配せんでもいいよ。――ああ、貴公たち、伊賀大人が待ちかねているといかんから、一足先へ川を渡って、話しておいてくれ。一度に立つと目だつぞ。そうだ、貴公ら三人が先陣したまえ」
鉄心斎がなぞのようにさしずしたのは、南部浪人、中国浪人、越後浪人の三人一組、

「承知いたした。――行こうではないか」
南部浪人が先頭に立って表口から出る。
「では、桃氏」
見とどけて鉄心斎は裏口から先へ出た。
「気をつけてくださいよ、あなた」
「うむ」
桃太郎侍はうなずいて、やさしく笑って見せたが、――それが小鈴へのせめての別れのあいさつであった。
（こいつ、わしを引き出して斬る気だ）
むろん、桃太郎侍は知っていてこの手段に乗ったのは、剣を取って向かって来る敵は少しも驚かぬが、情にからんで来る敵にはかなわない。実は、どういうふうに小鈴と別れたものかと、ひそかに心を痛めていたのだった。
（いい機会である。かわいそうだが、このまま置いて行こう――許せよ、小鈴）
一方に、そんな覚悟をしていたからである。
「なるべく、人目のないところがいいな。河原へまいろう」
だましたつもりの鉄心斎は、枯れススキのむらがる堤を、河原のほうへずんずん降りて行った。秋日に明るい六郷川、広い河原には枯れたアシが火をつけたらたちまち燃えひろがりそうに密生している。
（なるべくではあるまい。絶対に人目につかんほうがいいのだろう。まして、小鈴にはな）
桃太郎侍はおかしかった。
「大滝先生――！」
河原へおりると、表口から出たはずの三人組の浪人どもが待っていた。
「てまえどもも後学のために、先生が疑問とせられる剣の型をぜひ拝見しておきたいのですが、お供願えないでしょうか」
南部浪人が、いんぎんに小腰をかがめた。
「さあ、――総じて奥義というものは、みだりに他人に見すべきものではないのだが」
当惑したように、わざと鉄心斎がむずかしい

「あ、桃氏――！」
鉄心斎が急いで呼び止めた。このまま立たれたのでは、身もふたもなくなる。
「ちょうどいいおり、ぜひ後学のために教えていただきたいことがござる。――師匠、ほんのしばらく、桃氏を借りてもいいだろう」
「なんです、大滝さん？」
「桃氏は小野派の達人と聞いている。お目にかかったのをさいわい、こんなおりはまたとない、型を一つ二つ、ぜひおききしたいのだ」
苦しい口実を考えだした。
「とんでもない。大滝さん、うちの人は病人なんですよ。こんな病人をつかまえて試合だなんて」
「違う、違う。口で教えてもらえばいいのだ。剣は死ぬまでの修業、まさか初心ではあるまいし、そうむやみに竹刀など振り回しはせん。――いかがでござろう、桃氏、拙者年来疑問として悩んでいる剣が一つ二つあるのだが」

顔をする。

「そこをなんとか、どうでしょう、われら三人ご承知のとおりの剣道執心――」

「どんなものかな、桃氏」

「かまわんでしょう。ご執心のかたがたとあれば、ともに学ぶのもこの道のためです」

桃太郎侍はあっさり承知した。不承知といったところで、おとなしく引きさがるような相手ではないし、伏勢となって不意に飛び出されるより、始末がいいのである。

「では、いっしょに来るがいい」

「かたじけない」

結局、先頭は鉄心斎、背後から無気味なオオカミ浪人が三人、桃太郎侍は前後をはさまれた形になって、茶屋から二、三丁ばかり、枯れアシにかこまれてどこからもちょっと人目につかぬあき地へ出た。敵にとっては絶好の暗殺場である。

「どうだろう、この辺では」

はたして鉄心斎が立ち止まった。

「そうですな」

あたりを見まわして、それとなく足場を計った桃太郎侍は、ちらっと空を見上げた。心を落ち着けるためである。

青く深い空だった。白いちぎれ雲がポカリと浮いている。

(白雲ゆうゆう――)

そんな句が心をかすめた。目を下界に移すと半円を描くように立った四人、おのずと殺気を含んだ目の色だ。

「この中に――」

桃太郎侍はおだやかに微笑しながら、まだなにも気づかぬような顔をしていった。

「ゆうべ、お化け長屋へまいって、帰りがけに隣の女を斬った人がいるはず、どなたかな」

「何ッ!」

がくぜんとなる四人の顔の中で額に古傷のある中国浪人林田治助が、思わず柄に手をかけた。

「貴公だな。罪もなき女を手にかけて、その妄念というものが女にあるものか、ないものか、うしろを見ろ!」

敵の心気を乱す舌頭だった。ハッとうしろを見たのは当の林田ではなく、他の三人。

「黙れッ!」

見なくとも、ゆうべから良心の呵責に責められている林田は、病的な顔を蒼白にして、その妄念を払いのけようとするかのごとく、カッと抜きうちに斬って来た。

軽く飛びのいて、

「お俊のかたき!」

飛びのきながら抜刀した桃太郎侍は、相手の剣が空へ流れて立ち直ろうとするすき、

「エイッ」

からだごとぶつかって行くようにたたきつけた一刀、燃えるような憎悪と、許すまじき悲憤がこもっているから、じゅうぶん肩を斬り下げて、

「ワアッ」

林田はドッと前へつんのめった。

「やった!――それ!」

「油断するな」

機先を制されて、ろうばいぎみに三人がいっせいに刀を抜く、中央が鉄心斎だ。

「人をだまして斬ろうとする、ひきょうだぞ、鉄心斎。小鈴がほしい男はだれだ。いってみろ!」

「なにッ」

「他人の色魔に追いつかわれるのら犬剣客――そんな邪剣でわしが斬れるか!」

「おのれッ、おのれッ」

激怒した鉄心斎は、かりにも矢の倉の大滝として江戸に知られた剣客、年輩からいっても、経験からいっても、じゅうぶんに自信がある。たかが白面の素浪人、なにほどのことがあるものかと、怒りにまかせて、

「オーッ」

一挙に地をけって飛び込んで来た。強引な捨て身の体当たり、意表に出て、相手が少しでもひるんで呼吸を狂わせれば、その虚へつけこんで一刀で勝敗が決するところだが、桃太郎侍はみじんもそのすきを与えず、がっきと受け止めたから、

「エイッ」

「オオッ」

青眼と青眼の太刀がかつぜんと鳴ってからんだまま、いわゆるつばぜりあいというやつ、——解いて飛びさがったほう、つまり、逃げたほうが斬られるとされている。

（しめたッ）

体力にすぐれている鉄心斎は、一気に相手を押しくずそうと、すかさず、力いっぱい、踏み出して来た。

その出ばな、変化の早い桃太郎侍は、軽快無比、受けて押し返すのが、普通の戦法であるところを、解いてはならない剣をサッと右へはずして横ッ飛びに飛んだのである。

「アッ」

虚をつかれてとっさに鉄心斎は追うように太刀をないだが、思わず腰が浮いて気抜けの太刀になった。その太刀が胴へはいるが早いか、

「トーッ」

桃太郎侍は無謀にも相撃ちのように、したたか烈剣を敵の肩へ——。

あまりの激しさに、どう手出しのしようもなくぼうぜんとしていたふたりが、「アッ」と息をのんだほど、それはものすごい一瞬だった。

「ワーッ」

絶叫したのは鉄心斎のほうだった。ほとんど相撃ちと見えたが、桃太郎侍のほうがわずかに早かったらしい。肩から血を吹いて大きくのけぞる鉄心斎、飛びさがった桃太郎侍の右そでは、半分まで切られてダラリとぶら下がっていた。

「くそッ」

「やれッ」

見るより南部浪人と越後浪人、蒼白にはなったが、さすがに逃げるようなひきょうはしない。どちらも腕には自信のあるやつ、左右から同時に青眼につけて、必死に迫って行った。

「——！」

無言で迎えた桃太郎侍、——ふたりまでは相手の心気を乱して、いわば奇計に倒しえたが、こんどは敵も死にもの狂い、しかも大事をとって両方から牽制しつつ迫って来るので、そう簡単にはいかない。とにかく、呼吸を整えながら、一応ピタリと押えた。あせるのは禁物である。剣先の間合い六尺ばかり。

（油断ならぬ腕だ）

おのずと相手の技量が心眼に映って来たのは、それだけこっちに余裕が出たので、ついにふたりのほうの目が血走って来た。

「エイ」

じりじりと右の南部浪人が間合いを詰めて来る、誘いをかけるのだ。桃太郎侍はきっ先をわずかに浮動させながら、動かなかった。へたに動くと左からつけ入られるおそれがある——乗らずと見て、右がスッとひくと、

「オーッ」

左の越後浪人がグイと出る。

「——！」

桃太郎侍は微動だにしない。相手がしかける位置まで出ればむろん敏捷な剣の持ち主、一挙に飛びこんで行くのだが、妄動はしない。

その落ち着きと、動ぜぬ気魄に、ふたりはしだいに圧倒されて来た。じっとしていると今にも飛びこんで来られそうで、双方から味方を頼りに牽制せずにはいられないのである。

「トーッ！」

ついにこらえきれなくなった右の南部浪人が、磁石に吸いつけられる鉄砂のごとく、サッと突いて出る。右足をひいてかわした桃太郎侍の背がちょうど半身に越後浪人のほうを向くので、

「オーッ」
しめたッと越後浪人が同時に斬りこむのへ、無声殺到！　とっさにひいた右足を大きく踏み出して横へ払ったのである。
「ア！」
迎え撃たれた形でたまげるやつ、――その間に危うく立ち直った南部浪人は、もう夢中だ。ネコをかむ窮鼠のいきおいで、乱車刀に息もつかず斬りこんで来る。
が、そう長くはつづかなかった。その無鉄砲さに一時はあとへすざりながら桃太郎侍、相手がちょっと河原の石につまずいた体のくずれへ、
「エイ」
これも正確な一刀だった。
「ウウム」
つんのめって行く南部浪人、――惨たる光景である。一瞬前までわめきどなっていた四人の人間が、今は白日のもとへ長々と息絶えて河原を血で染めている。

「お俊さん――！」
ほっと桃太郎侍は青空を仰いでつぶやいた。みごとにかたきを討ったのである。さっきの白雲が南へ流れて、青白いお俊の顔かとも見えた。汗ばんだほおにそよ風が涼しい。さすがに息がはずんで、やきつくような渇を感じていた。
「若殿――！」
枯れ葉をガサガサと分けて上島新兵衛が走って来る。さんざん捜しまわって、最後の乱闘を遠くから耳にしていたに違いない。息を切って駆けつけるなり、
「アッ、若殿！」
ハッとそこへ両ひざをついてしまった。
万一こういうこともあろうかとついている護衛役、この乱闘にまにあわなかったのは不覚と、上島新兵衛は目のあたり見る惨たる光景に肝が冷える思いだった。
「おケガはござりませぬか、若殿！」
「心配いたすな。どこもケガはせぬ」

桃太郎侍は刀をぬぐっておさめながら、もういつもの顔にかえっていた。さっそうたる若殿ぶりである。
「そ、その右のおそでは？」
「なに、承知のうえで斬らせて敵を斬ったまでのこと」
「新兵衛め、申しわけございません。裏口からとはつい心づかず、ぼんやり表にお待ちしておりましたため、思わぬ遅参――」
「大事ない。このくらいのことは、江戸を立つ時からの覚悟であった」
「しかし、よくお斬りあそばしましたな」
相手は四人である。日ごろ勇ましい若殿ではあるが、これだけ斬って平然としておられる、内心驚かざるをえないのだ。近習として、竹刀をとってお相手をしつけているだけに、いっそう不思議でもある。
「うむ、相手が弱かった。それに、わしをひとりと思って油断したのが、敵の不覚であった」
桃太郎侍はひやっとしながら、苦しいいいわけをする。こんなところから、にせ若殿が露見しては困るのだ――が、信じきっている新兵衛は、それを疑っているのではない。
「若殿、こういうことがございましては、なおさらのこと、替えがたい御身のことゆえ、なにとぞご自重くださいませ。万一まちがいがありましては、てまえどもの嘆きばかりではすまず、それこそ一藩の大事にござります」
若木家十万石がこの君ひとりの双肩にかかっているのだ。人間は困難に出会ってみなければ真価がわからない。お家の大悪伊賀半九郎が目通りするにいたって、にわかに器量英知一段とたちまさり、今またここに凡ならざる腕まえを見て驚嘆し、新兵衛は、この君こそ若木家の大黒柱と感激するにつけても、みずから危険な冒険に身をさらしてもらいたくないのだ。
「てまえども、一命にかけましても、必ずご身辺を警護つかまつりますれば、今後はぜひおカ

ほおがほてる。

「それはおあぶのうございました。道中ではえてして、そういうゴマノハエがつきたがるもの、ご油断はなりません」

新兵衛は真剣だ。——かわいそうに、ゴマノハエにされたかと、桃太郎侍は苦笑したが、

「新兵衛、裏切り者の面皮をはぐくふうを思いついたぞ」

澄んだ目をキラリと輝かした。

「また敵の裏をかくのだ。その辺で行列を止めて、このたびはカゴで堂々と川崎を通る。半九郎がどんな細工をするか、見ものだ」

「ハッ」

どこまで大胆なのか、この場になってもおうように笑っている若殿の顔を見上げて、新兵衛はいささかあきれている。

(どうしたんだろう)

すぐ帰るといった桃太郎侍が、なかなか帰って来ない。出て行ってからもう小半刻(一時間)近くもなるのだ。

「ねえさん、あたしちょっと、そこらへ出て来ますがね、もし留守へ連れの者がかえって来たら——知っているでしょう、あの目の悪い人」

小鈴は立ち上がりながら茶屋の女にいった。

「はい、だんなさまでございますね」

「ええ。もし帰って来たら、待っているように、そういってください」

「かしこまりました。おそうございますね、どうしたんでございましょう」

小女が同情するような口をきく。いらいらして待ちかねているのを知っていたのだろう。

「お願いしますよ」

小鈴は柄にもなくちょっとおもはゆい気がして、急いで裏口から外へ出てみた。小庭を通り抜けると枯れスキの堤で、すでに八つ下がり(三時)、六郷川を渡って来る秋風がサワサワと、冷たくおくれ毛を吹きすぎて行く。

(河原へでも降りたのかしら)

もしやそれらしい声でもと耳を澄ましながら、小道をたどって堤をおりて、道なりに歩いて行くと、気のせいかところどころに人の足跡があるような、——いつの間にか二、三丁。

ギョッとして立ち止まった。枯れアシの間から、向こうのあき地にだれか倒れている人かげが黒々と目についたのだ。

「アッ!」

小走りに駆けて行って、思わず足がすくんでしまった。ふたり、三人、四人、抜刀したまま斬られて死んでいる。

「桃さん!——桃さん!」

ひょっとして、この中の死骸の一つがあの人だったら!——なんども、なんども目で追ってみた。それらしい姿はない。やっと半ば安心してこわごわひとりひとりの顔を見て行くと、確かにさっき表口からいちばん先に出たはずの浪人者三人と、ひとりは意外にも桃太郎侍を連れ

ゴにてご道中——」

「新兵衛、そのカゴが危険だ」

「なんと仰せられます」

「六郷の渡しに敵の手配りがあって、舟が中流に出たところを、襲撃しようという手はずであった」

「アッ——!」

「しかも、行列の中にまだ裏切り者がおる。わしがひとりで先行したことが、早くも内通されたので、舟の襲撃は中止になった。半九郎は今、一味を川崎にあつめておる」

「では、こいつらは——」

「むろん、敵の一味だが、わしの身分を知って仕掛けたけんかではない。これは女連れと見て、やせ浪人ども、無心をいたしおった」

「若殿、して、あの婦人は——?」

「知らぬ。道連れになってくれと申すから、敵をあざむくにはちょうどよかろうと思ってな」

これも苦しいいいわけ、桃太郎侍もさすがに、

出した大滝鉄心斎だ。
（あの人はどうなったろう）
なんかの行き違いで、けんかになったのだ。それに違いないとすると、四人を相手にしてあの人も無事ではいないかもしれぬ。どこか傷ついて、その辺に倒れているのではあるまいか。
「桃さあん！――あなたあッ！」
小鈴は狂気のように、あたりの枯れアシをかき分けながら、駆けまわった。
いない！　どこにもいない！
半分泣きながら、もとのところへ引き返して来ると、ぬっとそこに旅姿の浪人者がひとり、惨たる死骸を見まわして立っていた。三十二、三、目の鋭い、これも一癖ありそうな男である。
「小鈴さんですな！」
こっちの顔を見るなり、その男がむっつりというのだ。
「どなた？　あなたは！」
自分の名を知っている男、小鈴はハッと蒼白の目をみはった。
「伊賀半九郎の使いの者です」
「伊賀さん――？」
小鈴の頭にたちまちひらめいたものがある。桃さんはここで、大滝らに一味するようにとしいられた。それを断わって斬り合いになる。四人までは斬ったが、ついに組み伏せられて伊賀半九郎のところへ運ばれたのではあるまいか？
「桃さんはどこにいるんです。あなたはそれを知っていますね」
小鈴はいきなり高飛車に出た。
「そのことについて、伊賀から師匠に話したいことがあるそうです。拙者は高垣勘兵衛という者、お供しましょう」
「じゃ、伊賀さんはあの人を縛って行ったんですか」
こうなると気の強い小鈴である。
「拙者は、ただ師匠を案内するようにといいつけられただけで、ほかのことを口にする自由を

許されていません」
高垣勘兵衛と名のる男は、ニコリともしないのだ。冷たいぶあいそうな顔である。
「ようござんす。行きましょう」
だれがおまえなんかにきいてやるもんかと、小鈴はいじになった。半九郎にきけばわかることである。そのことについて話があるという以上は、桃さんはまだ生きているのだ。あるいは縛られて行ったのかもしれない。一度敵にまわると、どんなまねでもしかねない半九郎である。
（畜生、もしあの人をそんなめにあわせていたら伊賀さんだって承知するもんか。覚えておいで、小鈴はカミソリという肩書きがあるんだよ）
憤怒に狂って、小鈴は急に野性を呼びさまされたのだ。
「どこにいるの、伊賀さんは」
「川崎の宿」
むっつりと答えて、勘兵衛が先に立った。これも奥底の知れない無気味な男である。
それっきりひと言も口をきかず、堤の上へ出ると、そこから見渡せる六郷の渡しを、ちょうど若殿の行列が船に乗って、中流へ出たのが、絵のように見えた。
（ふん、あんなバカ殿ひとりをやっつけるのに、大の男が幾人もかかって、なんてだらしがないんだろう。あたしならカミソリ一丁ありゃ、ひとりでも片づけてみせる）
小鈴ははらの中でタンカをきっていた。何もかもしゃくにさわってたまらないのである。
（かわいそうに桃さん、待っててくださいよ。無理してまた目が痛みだすんじゃないかしら）
その憤怒の底からいとしい男の顔がチラッと浮きあがる。いっそこの川を飛び越して駆けて行きたいような恋しさ、もどかしさ！
見ているうちに、行列はやがて向こう岸へついて、カゴが船から上がった。やや傾いた秋の日が、キラキラと川波に散っている。
こうして、――小鈴より一足先に六郷を渡っ

た行列は、川崎の宿へ進んでいった。

なにごとかあるべきはずの川崎、――が、無事に通過して、川崎から神奈川まで二里半、若殿国入りの第一日の旅程はここで終わる予定になっている。日本橋からかぞえれば七里の道だ。

秋の日の暮れやすく、途中で半刻ほど予定外の休息をとった行列は生麦へかかるころからたそがれて――この分なら、どうやら無事に本陣へつけそうだと思った宿場に近いマツ並み木、夕やみに風渡るササむらかげへさしかかった時、

ダーン！

不意に右手の小高いヤブかげから一発。アッ！　という間に、つづいて左手の深いササヤブの中からも同時に若殿のカゴをねらって、

ダーン！

「ウウム」

たしかに、カゴの中から絶叫がもれた。

「くせ者だッ！」

「それッ、おのおの！」

バラバラッと身をもってカゴを取り囲む家来たち、くせ者を追って逆襲に出るかと思いのほか、ただ一団となって一散に駆けだしたのだ。

銃声もその二発かぎり、別にあとから襲撃する様子はなく、

「フフフ、ただ逃げる一手か。さすがに考えたものだな。ここでけんかをすると全滅になる」

のっそり右手のヤブから街道へ出た伊賀半九郎が、夕やみのかなたへ走り去る行列を見送りながら冷笑した。

「どうだった、伊賀」

左手のササヤブから出て来たのは、いつの間にかけつけていたか、例の高垣勘兵衛である。

「手ごたえはあった。たしかに絶命している」

「そりゃよかった。おれのは少し天井へそれたかもしれぬ」

「そうか。きさまでも失敗することがあるかな。じょうずの手から水が漏れる口か」

かえって半九郎は上きげんである。

事実、生麦の狙撃は、一発は天井へそれていたが、一発は背から胸へ斜めに命中して、神奈川の本陣へついた時には、すでにカゴの主は絶命していた。

が、むろん絶命したのは若殿ではない。

六郷の渡しへかかろうとして、一時休息所へ行列を止めさせた桃太郎侍は、急にここからカゴで行くといいだした。はたして、すぐ裏切り者に手紙を託された小者が、ひそかに休息所を出たのである。途中で見張っていた上島新兵衛がそれを捕えて、金で様子を聞きだし、手紙はそのまま伊賀半九郎のもとへ届けさせた。

その小者の口から、裏切り者は進藤儀十郎とわかった。かねて桃太郎侍があやしいとにらんでいた男である。――一度小鈴にうばわれた国もとからの密書が、無事に伊織の手に届いたのは、脅迫されたか、買収されたか、必ず半九郎の手が働いていると見ていたのである。

が、人選された供回りの中から裏切り者が出たとなると、味方に疑心暗鬼を起こさせるおそれがある。休息所出立のまぎわに、

「神奈川の宿まで若殿の身代わりをつとめるように」

不意にこういいふくめて、進藤をカゴにのせ、桃太郎侍は上島新兵衛の小者となって行列のいちばんうしろについていたのだ。

「やはり、天のさばきでございますな」

本陣の奥の間へ落ち着いた時、口数の少ない新兵衛がモソリといった。

「天意か、人意か、とにかく、悪人は悪人の手にかかった。――しかし、飛び道具とはぶっそうなものをもち出したな。江戸を離れると、思いきったことをいたす」

若殿の身代わりと聞いて、一瞬色を失った進藤の顔を思い浮かべながら、桃太郎侍は放心したような目を、明るいあんどんにむける。ひとりの悪人のために、まだこれから、いくつかの人

命を失わなければならぬと思うと、やはり気が重いのだ。——悪は悪を語らう。が、語らわれた悪は、決して悪心のみを持ち合わせた人間ではあるまい。善に語らわれれば、善にもなりうるのだ。それが悪に語らわれたのは、心がけとはいえ、一つは不幸なその人間の運、進藤なども、そのひとりだったにちがいない。

「申し上げます」

小だるまの杉田助之進が興奮しながら、それへ両手をついた。丸い目玉をギラギラさせている。

「どうした、助之進」

「ハッ。けしからんやつ！　伊賀半九郎めが、ぬけぬけと、ごきげん伺いにまかり出たそうでございます」

なるほど、これは興奮するわけだ。自分が狙撃した若殿の生死を確かめに出むいたのだろう。大胆というか、不敵というか、これこそ人を人とも思わぬ悪玉である。

「ほう、半九郎のいたしそうなことだな」

「若殿、てまえに討っ手を仰せつけてください」

短気な小だるまは、食いつかんばかりの形相だ。

「なかなかその手には乗るまい」

「いや、刺し違えてもてまえ、必ずしとめます」

「まあ、急ぐには及ばぬ。せっかくの好意じゃ、新兵衛、そち案内してつかわせ」

助之進では何をやりだすかわからぬと見たのだ。

「若殿、それはちとご油断のようにも——」

「大事ない。そちたちのように、そう今からビクビクしていては、これからどうして国もとへ乗り込む」

「ハッ」

一言もなかった。国もとは悪人の本拠だ、あえてその危険を冒そうとする若殿なのである。居間には小だるまの助之進、のっぽの虎之助、国もとの橋本五郎太が、いずれも身をもって若殿を守る覚悟だから妙に気色ばんでつめかける。

「ハハハ、一同、そう力むな、半九郎にわらわれるぞ」

桃太郎侍はおうようにわらっていた。

意外にも、若殿が目通りを許すというのである。上島新兵衛のうしろから廊下をいく曲がりかして行きながら——はてなと、伊賀半九郎は自問自答していた。

夕方の狙撃は失敗に帰したのだろうか？　そんなはずはない、たしかに手ごたえがあったのだ。カゴから絶叫の漏れるのを耳にしたような気さえしている。

が、会うというからには、生きているのだ。カゴの主は替え玉だったのか？　それとも、案外軽傷で若殿らしい負け惜しみ、その傷を押して会って、こっちをおどろかそうというはらか、とにかく生きているとは意外である。

「ご前でござる」

新兵衛に声をかけられて、半九郎はハッとそこへ平伏した。

「伊賀半九郎、まかり出ましてございます」

声と同時に、目の前のふすまが左右に開いた。正面の若殿の白い顔が微笑をふくんで、じっとこっちを見ている。近習たちの目が、これは敵意に燃えて、にらみつけているのだ。

「旅中ゆえ、略儀ご無礼の段、いくえにもおわびつかまつります」

ことばだけはいんぎんだが、半九郎は例のつらだましい、近習たちなどもののかずとも思っていない。

「旅中はたがいじゃ。許す、近く進め」

「ハッ」

「そこでは話が遠い、遠慮いたすな。——つごうが悪ければ、人ばらいをしてつかわそうか」

家来たちがこわければ、といわぬばかりなのである。

「どうつかまつりまして。——ごめん」

それと気がつくと半九郎はいじになって、近習たちがはっと顔色をかえたほど、スルスルと膝行した。

「若殿には道中つつがなく、ごきげんの体にはいし、半九郎恐悦にぞんじます」

ジロジロとぶしつけに若殿の顔を見あげる。傷を押しかくしているなら、どこかに、そのけはいがあらわれるはずだ。

「半九郎、きげんうかがいか？」

「ハッ」

「この夜中わざわざ大儀である。――見るとおりわしはしごく元気じゃ。もっとも、夕景、宿はずれのマツ並み木あたりで、花火がわりのあいきょう者が二発、カゴへ飛びこんで来た」

若殿の目がいたずらそうに笑っている。

「ほう、何者のしゃれでございましょうか。心憎いおなぐさみを差しあげたものでございますな。して、別におケガは？」

「それが、未熟者ではまぐれ当たりということもあろうが、さすがは達人のしゃれ、ちゃんとからだだけはよけてあった」

「それはそれは、けっこうな旅のうさ晴らし」

「そちは江戸の用が片づいたのか？」

「は、片づきましたような、片づきませぬような」

「そうか。それはちと、うっとうしかろうな」

いささか受け太刀の半九郎、

「おことばではございますが、どうせ近いうちには片のつきますこと、まあ、ご用の残っています間が、人間の生きがいとでも申しましょうか」

挑戦するように不敵の胸をはって見せた。

「そう申せば、そのほう、このたびの道中には両国矢の倉の大滝鉄心斎とか申す剣客とみちづれだそうだな」

「――？」

「あれには惜しいかな剣難の相がある。注意してつかわすがよいぞ」

「ハッ」

さすがの半九郎が思わず絶句した。鉄心斎は六郷の渡しで、他の三人の浪人者とともに桃太郎侍に斬られている。品川の宿から小鈴のあとをつけさせておいた高垣勘兵衛が、ちゃんと見とどけて来たというのだから、まちがいはない――その斬られたのを、すでに知っているらしい若殿の口ぶりなのだ。

この勝負、どう見ても勝ちみがない。負けとわかったら、いさぎよく引き下がるにかぎると、半九郎は早くも度胸をきめた。

「ご懇切なるおことばをいただき、恐れ入りましてございます。若君にも今後のご道中、じゅうぶんお気をつけなさいますように」

「もう帰るか」

「ハッ。お疲れのところ長座もいかが、改めてまた、ごきげんうかがいにまかり出ることもございましょうから」

「そうか。今宵は見送りにも及ばんようだな。そちはたのもしい味方を懐中しているようだ」

まさに、とどめの一本である。が、半九郎は少しも悪びれない。

「御意、オランダ渡りのあいきょう者、いずれおなぐさみまでにお目にかけることもございましょう」

バカ丁寧におじぎをして、ゆうゆうとたちあがった。近習たちなど、てんで眼中にない、ごうぜんたる態度である。

が、人一倍奸知の働く半九郎、その近習の中に進藤儀十郎のいないのを見て、これはただごとでないと感じていた。無事でいれば、たとえ席にいなくても、必ず顔を見せるはずだし、――だいいち、自分がここへ乗り込む前に様子を知らせてよこさなければならない男なのである。

もう一つ、意外にも若殿が大滝鉄心斎の斬られたことを知っている。斬った桃太郎侍の口から耳にはいったとみるべきではないだろうか。つまり、桃太郎侍を若殿方の一味と見るのだ。

（そう見てこそ、桃太郎侍が偶然に若殿の行列と、日も時刻もおなじく江戸を立ったということがうなずける）

もう一歩進めれば、きょう品川の宿から六郷までひとりで先行したという若殿の護衛役こそ、桃太郎侍であったに違いない。

そこまでは考えてみた半九郎も、さすがにまだその若殿と桃太郎侍が一つ人間であるとは思い及ばなかった。

半九郎が宿はずれに近い旅宿に引き揚げて来ると——一足おくれて川崎からついた小鈴が、高垣勘兵衛と一つへやににらめっこをしていた。口数の少ない勘兵衛は、むっつりと杯をなめている。

「伊賀さん、桃さんはどこにいるんです？」

いきなり小鈴は、くってかかるように詰め寄った。いちずに半九郎が大事な男を捕虜にしていると思いこんでいるのだから、すっかりおかんむりをまげている。まだ旅装さえ解いていないのだ。

「あねご、だまされたな」

半九郎はちらっと笑いながら座について、

「おい、われわれもいっぱい食わされたぞ」

と、勘兵衛に話しかけた。

「——？」

「カゴの中は身代わりが乗っていたらしい。若殿は至極ごきげんうるわしくいらせられおった」

勘兵衛は別に顔色一つ動かさぬ。

「だれにあたしがだまされたんです？」

小鈴はそれどころでない。

「だれにって。——あねごはたしか、役目をはたして長崎へ行くという伝言をよこしたはずだな。その桃さんはちゃんと本陣の行列の中にいるぞ」

「そんなはずはありません」

「ないといっても、いるんだからしかたがない」

「いいえ、伊賀さんはけさもあの人が行列へ加

わって、国入りをするっていいましたけれど、——あの人は初めっから、そんな気持ちは少しもないんです。あの人はただ目をなおしたいばっかりに、長崎のオランダ医者のところへ行きたかったんです。それを大滝先生が、むりにひっぱり出して斬ってかかるなんて」

「まあ、そうひとりでおこらずに、拙者のいうことも聞くものだ」

半九郎は冷静な顔に苦笑をうかべるのであった。

「おこりますとも。あたしはほんとうにおこってるんです」

小鈴はほんとうに目をつりあげていた。顔ばかりでなく、からだじゅうでおこっているのである。それは娘などには見られない野性的な、いきいきとした美しさであった。

「だれをおこってるんだ、あねご」

半九郎はそのいじの強さをひそかにたのしんでいる。そばで、勘兵衛が黙々とひとりで杯を運んでいた。

「あの人をいじめる人をです」

「ハハハハハ、あねごの目から見ると、桃さんもまるで子どもあつかいだな。その子どもの桃さんが、大滝をはじめ一流の達人を四人まで一度に斬ったのだからものすごい」

「そりゃ大滝さんたちが悪いからです。あの人にはなんの罪もありません。いやがる病人をむりにひっぱり出して」

「まあ聞けよ。よい悪いは別にして、大滝などを斬った桃さんは、こっちの襲撃が変更されたのを知った桃さんは、すぐに若殿を、こんどは急にカゴへ乗せることにした。——つまり、桃さんは品川の宿から微行される若殿の護衛役としてついているところを、あねごに見つけられたのだ。途中あねごとの間にどんな話があったか知らぬが、ちゃんと自分の役目を果たして、今本陣にいる。それでなければ、今夜の若殿が大滝の斬られたことなど知っているはずはない。

だいいち、六郷から急に若殿がカゴへ乗ることになったのは、桃さんを通じてこっちの計画が知れたと見るよりほかに考えようがないのだ。——あねごはどう考えようとかってだが、拙者はそう見る。うそだと思ったら、あしたの朝、もう一度よく行列を見るがいい」

「そんなバカなことありません。ちゃんと堅い約束までしたあの人が、あたしをだましていたなんて——」

「信じないというなら、信じないでもいい。ただひと言いっておくが、われわれにとっては桃さんはいよいよ敵方にまわったことになる。しかも、味方を四人まで斬っているのだ」

伊賀半九郎の強い目がキラリと光った。

「いいか、あねご、われわれは敵味方になったのだ。だが、その男はほかならぬあねごのたいせつな男だという。もう一度だけ、——もし、あねごの手でどうにかなるものなら、つまりこっちの味方になる、あるいはこの事件から全然手をひくか、どっちかに決まった確かな証拠を見せてくれたら、われわれは過去を問わぬことにしよう。こんどだけ、もう一度あねごに免じて約束をする」

こう強く出られては、さすがの小鈴も考えざるをえなかった。むろん、自分としてはあの人が自分を裏切って、敵方についているとは思えない。が、半九郎にはまた半九郎で、何か見るところがあるから、はっきりと敵と認めているのだろう。このうえ争ったところで、当人がここへ出て来ぬ以上は水掛け論だ。

それに、もう一つは、あの人は半九郎がいうとおり敵方についているか、あるいは半九郎の手で捕虜にされているか、二つに一つ、ほかへは自分の目のとどかぬところへ、どこへも行く理由がないのである。

「ようござんす、あたしは女の一念で、どこにいたって、きっとあの人はさがしだします。もし、あの人がほんとうに行列の中にいたら、——

あたしは、あたしは、あの人を刺して、あたしも死んで見せます」

小鈴もいじになってしまった。命をかけてほれた男、その男が万一自分をだましているようなことをしているなら、もう生かしてはおかない。自分も生きてはいない。

「伊賀、いっそ火薬をしかけて、あの行列をひとり残らず吹き飛ばしてしまってはいかんのか」

ぽつりと勘兵衛が大変なことをいいだした。この男はまるでふたりの話など耳に入れていなかったらしい。

宇都谷峠

翌朝、神奈川の宿はずれ、よしず張りの掛け茶屋に陣取っている伊賀半九郎のもとへ、

「行列は今、本陣を立ちました」

見張りの者がこう報告して来たのは、すでに四つ（十時）に近かった。

「ゆうゆうたるものだな」

ひとり言のようにつぶやいたのは、昨夜地雷火をかけろと、むてっぽうな提議をもちだして半九郎を苦笑させた高垣勘兵衛である。この男はひさしく長崎に遊んで南蛮流の火術を研究してきた達人だが、——いかに半九郎が乱暴でも、地雷火は困るのだ。そんなおおげさなものを用いて道中を騒がせては、たとえ若殿はなきものにできても、かんじんの若木家十万石に傷がつく。策の上々なるものは、少しも世間に漏れぬように若殿を葬るにあるので、そこに半九郎の苦心があるのだ。

「あねご、よく首実検を頼むぞ」

半九郎は小鈴をふり返ってわらった。

「——」

そんなはずはないと思っても、さすがに小鈴は気が気ではない。それは半九郎の復讐がこわいのではなく、もし自分が裏切られていたらどうしようと思うのである。

なにかのつごうで、半九郎が捕虜にしておきながら自分には隠しておく、たとえば、ぜひ自分でなければならない仕事があって、いざという時の交換条件にする。それまで自分をひっぱっておくための口実——そう考えられないこともないのだ。そのくらいの策謀はしかねない半九郎である。

今となっては、むしろそのほうがいい。それならそれで、いつかはとりかえせる希望が持てるが、万一けさの行列の中にあの人の顔があったとしたら、——あんなにきのう真実らしく自分と約束しておきながら、それがうそだったとしたら、あの人は初めから自分といっしょになりたくない心と見なければならないのだ。女のいじとしても、生かしてはおけない。

あの人を殺して、自分も死ぬ。なんという悲しい因果だろう。小鈴はゆうべ一晩じゅう、おちおちと眠れなかったのだ。——その行列が、今目の前を通るのだという。

（どうか、そんなことのありませんように）

祈らずにはいられなかった。激しい動気を感じて、われにもなく帯の間からじっと胸を押えている。

きょうも旅には好つごうの上天気であった。

やがて、行列の先頭が掛け茶屋の前へかかって来た。供の侍は一様に笠をかむって、微行だから人数は多くない。小者や人足を加えても三十人たらず、カゴを囲むようにして、さっさと足早に通り過ぎて行く。

（いない！）

よしず張りのすきまから、必死に息を殺して見つめていた小鈴は、全身の力が一度にぬけたようにほっとした。——一様に笠をかむっていたとはいえ、背格好、歩き癖まで知りつくしている恋しい男、しかも肩書きの手前にかけても、めったに狂ったことのない目で、二度も三度もひとりひとり見直したのだ。

急に汗ばむほど、小鈴はうれしさに、からだ

じゅうの血が燃えて来た。

「どうだった、あねご？」

半九郎が緊張した顔を向ける。これはただならぬ目の色だ。

「やっぱり、あたしが思ったとおりです」

「いなかった、そうだろう？」

「——！」

小鈴が、勝ち誇ったようにうなずいて見せると、

「そうか、畜生！——勘兵衛、まただしぬかれたぞ」

持って行き場のない憤怒に、みるみる半九郎の額に青筋があらわれた。しばいではないらしい様子である。

「だしぬかれた？」

高垣勘兵衛は不思議そうである。

「行列の人数が三人足らぬ。思いきったことの好きなやつだ」

半九郎は吐き出すようにいった。

「じゃ、また先行したとでもいうのか！」

「うむ。しかも、ゆうべだ」

「しかし、ちゃんと見張りがついていたんだろう、本陣の裏表に」

「むろん、つけておいた。が、それはおれが旅籠へかえってから、万一と思って出したので、やつらはおれが表口から出ると同時に裏口から出たに違いない」

「そう思わせておいて、あとからという手もあるぞ」

「いや絶対にゆうべだ。あとからなら、行列があんなにけさ、ゆっくりたつはずがない。だいいち、露見した場合かえって不利を招くおそれがある。——あねご、すごいのにすごいのが一味したものだな」

「おや。じゃ、伊賀さんはまだあの人を疑っているんですか？」

小鈴がおこったように目にかどをたてた。

「疑っているんじゃない、事実だ。こんな離れ

わざが、宮仕えになれた腰抜け侍などに思いつくものか。たとえ思いついたって、実行はできない。自分の身があぶないからな。身の軽い素浪人でなければやれる芸当ではない」

「あねご、ゆうべの約束は約束として、こうなってはあねごのほうが手おくれになると、万やむをえない仕儀になるかもしれん、その覚悟でいてくれ」

早く桃太郎侍を引き抜け、そうでないと斬るかもしれないという意味なのだ。半九郎はほんとうに腹を立てているらしい。

(斬らせてはならない)

そういわれると、やっぱり心配になって来る小鈴だった。事実、にせ若殿の桃太郎侍は、そのころ、行列は上島新兵衛に任せ、小ダルマの杉田助之進、のっぽの大西虎之助、国もとの橋本五郎太を供にして、神奈川から六里あまり平塚のあたりを道中カゴに揺られていた。

「それはちと、どうも無謀――」

新兵衛がしきりに心配して止めたが、一日でも半日でも、先へ先へと出れば、悪党どものこうるさい小策も及ぶまいと、若殿は断然敵の意表に出て、半九郎が去るやいなや、ひそかに本陣を出発したのである。

夜どおし歩いて、藤沢で朝食をとり、ここから小田原まで九里、カゴを乗りついで睡眠をとっておいて、その日のうちに箱根の関所を越えたい考えである。小田原から箱根までは四里八丁、関のとびらは明け六つ(六時)に開いて、暮れ六つにはしまる。これさえ越してしまえば、たとえ敵が気づいたとしても、その夜は追い越される心配なく箱根でゆっくり眠れるのだ。

翌日は吉原泊まり、その翌々日には宇都谷峠を前にひかえた鞠子の宿へはいった。江戸から四十六里、京へは七十九里の道程である。

「どう少なく見積もっても、一日は早くなっているはずと思うが」

旗本相沢頼母主従と偽名して宿についた桃太郎侍は、奥の間にくつろいで、いささか得意であった。

「はっ、行列よりは二日先行しているでございましょう。しかし、若殿のご健脚には驚き入っております」

小ダルマの助之進が感心する。一同意外な強行に多少参っているのだ。

「いや、わしも疲労はしておる。無理な旅、そちたちにも苦労をかけるな」

若殿はねぎらうことを忘れなかった。

そこへ宿の女中が思いもかけない取り次ぎに来たのである。

「ごめんくださいませ」

次の間のふすま越しに宿の女中の声がした。

「おお」

気軽な小ダルマがすぐに立って行った。ちょうど夜食が終わって、連日の無理な旅、こよいは早寝にしようと相談していた時である。

「何か用か?」

「はい。ただいま玄関へ旅の女のかたがお着きになりまして、――お供のかたの中に、たしか桃太郎様というおかたがおいでのはず、ちょっとお目にかかりたいと申しておりますが」

「――――」

にせ若殿の桃太郎侍はギクリとした。桃太郎といって尋ねて来るからには、小鈴よりほかにないのである。

「桃太郎――? そんな者はおらんぞ。鬼ガ島へでも行って聞いてみろといってやれ」

小ダルマの冗談にして笑う声がした。

「その女のかたもそう申しました。ことによると、お名をお隠しになっているかもしれないから、もしいないとおっしゃったら、神島百合が父の申しつけで尋ねてまいりました。お供のかた、どなたにてもお目にかかりたいと取り次いでくれと――」

「神島百合――?」

「はい、二十一、二のそれはお美しいかたでご

ざいます」
「ちょっと待て」
小ダルマが意外そうな顔をして引き返して来た。
「若殿、伊織殿の娘百合が尋ねてまいったそうでございますが」
「うむ」
桃太郎侍はうなずきながら——百合が来るはずはない。やっぱり小鈴だ。百合といえば、だれかが会うだろう、会ったうえで桃太郎侍の様子が聞きたいのだと、早くも推察はついた。
むろん、桃太郎侍の存在など知らぬ助之進か虎之助に会わせれば、とりつく島のない小鈴である。が、小鈴の背後には必ず伊賀半九郎がいる。一日はたしかにだし抜いていると思った半九郎だが、小鈴がここへ来る以上、もう身近に迫ったと見なければならないのだ。
「百合殿がどうして、われわれの先行を知ったのでございましょう」
小ダルマはいかにも不思議そうだ。
「それは行列に追いついて新兵衛に聞けばすぐわかることだが。おそらく、百合ではあるまい」
「と、申しますと？」
「半九郎の回し者であろう」
「すると、半九郎がもう若殿のご先行を見抜いたと仰せられるのですか？」
「どうも、そう思われるな」
「憎いやつ。しからば、その女ギツネめをひっ捕えて一責めつかまつりましょうか」
「いや、待て。わしに少しく考えがある。とにかく、百合として目通り申しつけてみよう。知らぬ顔をして、そち案内してみよ」
結果はどうなるか、半九郎のはらを知るにはどうしても会っておいたほうがいいと、桃太郎侍は覚悟したのだ。
「はっ」
助之進は女中といっしょに出て行った。
ここでにせ若殿がばくろするようなら、また考えようもある。それにしても、いきなり目のなおっている自分を見て、もし小鈴だったらどんな顔をするか、——もう一つ、橋本五郎太は小鈴を知っているはずだ。天王橋で進藤といっしょに小鈴をつかまえているところへ、自分が飛び出して、たしかその時はじめて桃太郎侍と名のっている。いわば腹背に敵をうけた危険に身をさらすようなもの。だが、あえてその危険に身をおいて大しばいを打たなければならないのだと思うと、桃太郎侍もおのずと身内の引き締まるのを覚えた。
次の間に女らしいきぬずれの音がしたと思うと、やがて小ダルマの助之進が静かにふすまをあけた。
「若殿、神島伊織娘百合、まかり出ましてございます」
見ると、白々とあだっぽいえりあしを見せた小鈴が神妙に平伏している。だれが見ても大家の武家娘とは思えない伝法な装いだ。それでも当人は若殿がじきじき会うと聞かされて、せいぜいつつしんでいるのだろう、そろえた両手の上へ、額をつけんばかり、まだ顔を上げようともしない。
「旅先である、遠慮なく進むがよい」
「はい」
「おことばでござる、お進みなさい」
助之進が口を添えたので、小鈴はおずおずと少し顔をあげて、上目使いに、はじめてそっと若殿を見上げた。
「アッ」
びっくりしたらしい。涼しい、目に鈴を張って、まじまじとみつめたが、その目に疑惑の色がおおうべくもなく、ハッと思わず面を伏せてしまった。
「いかがいたした。なにも恐れることはない。ずっと進め」
おうように笑っている若殿ぶり、サルの伊之助でさえ、そのおのずと備わる気品にうたれて

めんくらったのだ。まして、目をわずらっているとばかり思いこんでいる小鈴に、これがすぐ桃太郎侍とうなずけるはずはない。

「は、はい」

どぎまぎしながら膝行する。

「――？」

橋本五郎太はと見ると、これは天王橋の小鈴を見忘れるはずはなく、意外な女の出現にあっけにとられている顔だ。のっぽの虎之助、小ダルマの助之進は、百合などといつわって御前へ出た女、あやしいやつと思うから、油断なく小鈴の一挙一動に目を配っている。

「そちたちはしばらく遠慮いたせ」

小鈴の当惑している様子を見て、若殿は左右に命じた。この三人の見ている前では、桃太郎侍も仮面をぬぐわけにはいかないのだ。

「若殿――！」

女とあなどってはなりませぬと、いいたいのだろう。小ダルマがきっと大きな目を向けた。

「いや、伊織からの使者、なんぞ子細があろう。百合は申しかねているようである。――さがっていよ」

「はっ」

「そのふすまは、しめるに及ばぬ」

立ち聞きされてはつごうが悪いからいいつけた。三人はかしこまって、へやの外へさがって行く。

「百合、そこでは話が遠い。ずっと進め」

「はい」

半信半疑の小鈴はおそるおそるひざを進めて、もう一度そっと若殿の顔を見上げた。

「そちは百合ではないな」

若殿の顔が急に引き締まって、きっとその目を見返す。

「はい」

小鈴にはやっぱり見つめきれなかった。まぶしそうに顔を伏せる。

「何の用があって、これへまいった、申してみよ」

「尋ねる人がございまして」

「そちはわしの顔を見て驚いたようだが、その尋ねる人にでも似ているか？」

「は、はい」

「遠慮なく面をあげよ。尋ねる人とは、だれのことか」

「――――」

小鈴は覚悟をきめたように顔を上げた。声といい、顔といい、どうしてもあの人としか思えないのだが、――これが若木家十万石、江戸の若殿だという。そういわれれば他人のそら似ということがあるし、おかすべからざる威厳も感じられるのだ。

広々としたふたりきりの座敷の灯かげに、じっと見かわした顔、――相手が身分違いの若殿だけに、さすがの小鈴も、うかつな口がきけないのである。

もうこの辺でよかろうと桃太郎侍は思った。

「そちは代地の小鈴だな」

小声にいって、わずかにわらって見せた。

「あ、やっぱり、やっぱり桃さん？」

その顔に、語気に、小鈴は命を削るほど求めに求めていた恋しい男をはっきり感じた。目がなおっている不思議などは通り越している。かっとからだじゅうの血が燃えあがって、前後もなくすがりつこうとしたが、

「控えよ！　わしは若木家の若殿」

桃太郎侍は静かに制した。

「そちの尋ねる桃太郎は当分神隠しにされておる。わしは若殿として、そちに聞きたいことがあるし、いわねばならぬこともあるので、目通り申しつけた。今は家来どもにさえ知らしてはならぬわしの身分だ」

さとすような男のことばである。

「いやです。あたしまで、あたしまでだますなんて、くやしい。あたしは、もしだまされていたら、桃さんを殺して、自分も死ぬつもりで、

今夜ここへ来たんです」

小鈴のいっぱいに恨みのこもった目から、ポロポロと涙がこぼれ落ちた。やっぱり裏切られていたくやしさ！——が、それにしてもこの人が若殿になっていようとは、あまりにも意外であった。口では殺すといっても、何か殺す以上の重大さを感じないではいられない。

「そうか。では、しかたあるまい。わしは桃太郎ではないのだ。そちも百合としておとなしく引き取ってくれ。家来どもにもそう申しつけてつかわそう」

若殿は脇息にもたれて、冷静な顔になった。

——男のそんな冷たい顔を見るのはいやだ。つらい。悲しいが、小鈴にも女のいじがある。

「ようござんす。帰れとおっしゃるなら帰ります。そのかわり、あたしを無事に帰すとどんなことになるか。——あたしは敵の女なんですよ」

「承知して目通り許したのだ。さしつかえない」

「じゃ、あれはにせ若殿だといいふらしてもいいんですね」

「悪いと、ここで、わしが力んでもいたしかたあるまい」

「お手討ちにしてしまえばいいじゃありませんか。あなたは若殿様だもの」

「若殿は寛仁大度、伊賀半九郎とは違う。そんなひきょうはせぬ」

「まあ、おりっぱな若様ですこと。そんな男らしい若様が、なんだってあたしのような女をだましたんです。それでもひきょうじゃないんですか」

「誤解してはいかんぞ。わしは若木家の若殿、そちをだますはずはないではないか」

りんとしてみつめている顔、なるほど、どこから見ても非の打ちどころのない若殿である。

——奸知ながら手腕度胸、あのすごいまできれる半九郎が舌をまいていたが、この人なら別に不思議はないのだ。そう思うと女心の、根がほれきっている男だけに、もうかなわなかった。

「お願い、——ね、桃さん、なぜひと言このあたしにうち明けてくれられないの。そんな、そんな他人行儀な」

つい、ぐちが出る。小鈴はひっそりとうなだれて、われにもなく涙声になっていた。

「ほう。そちはもっと苦労している女と思っていたが、案外たあいがないな。わしはまだ話したいことも、ききたいことも口にはしておらぬ」

「——？」

「真偽の詮議だてなら、改めて聞かずとも、そちはもうちゃんと知っているではないか。まるで子どものようなことを申して、そちはひとりで騒いですねているのだ」

要するに、桃太郎侍としては話ができぬという。そういえば先刻の家来たちは、みんな若殿として信じきっているように見た。そんなことがありうるのだろうか？——小鈴は新しい好奇心を感ぜずにはいられなかった。

「だれがあたしをこんな子どもみたいにしてしまったか知ってますか、若殿」

小鈴はつんと、すねたような目を上げた。

「——」

若殿は答えない。が、その目が親しみ深くわらっているのである。

「若様のことを、あたしのように知っているのは、だれとだれ？」

「だれも知らぬ」

「うそ。あの百合とかいう娘に頼まれたのでしょう。若殿はあのひとが好きなんでしょう？」

「——」

「好きでなければ、だれがこんなあぶない仕事、引き受けるもんですか。——憎らしい！　あたしは負けたんです、きらわれたんです」

むろん、きらいな女なら、しかも敵方に回っている危険な女に、口でこそいわないまでも、平気で素性を明かして、命の綱を預けるも同じようなまねをするはずはない。それは小鈴にもわかっている。わかってはいるが、百合のこと

を考えると、やっぱりムラムラッと嫉妬の炎が燃えあがるのだ。

「そちは桃太郎侍とかいう者にだまされているより――」

きりのない小鈴の恋慕狂いを押えるように、若殿はゆっくりと口をきった。

「むしろ、伊賀半九郎にだまされているらしいな。桃太郎侍が六郷川で大滝らを斬ったことを、そちは存じているか」

「知っています。あんなことさえなければ、あたしはあの人と死んだって別れ別れにはなりはしなかったんです。――もっとも、あの人は別れたがっていたかもしれませんけど」

せいいっぱいの恨みが目にこもる。

「まあ聞くがよい。――伊賀半九郎は若殿を敵にすればとて、何の関係もない桃太郎侍を斬る必要はないはずだと思う。それを、あの夜そちがお化け長屋へ二度めに桃太郎侍を迎えに行く前に、半九郎は大滝一味にいいつけて桃太郎侍を襲撃させている。それがあるから大滝は六郷川でこれが桃太郎侍だとそちに紹介されると、河原へ引き出してだまし討ちにしようとした。何のために。つまり、半九郎はそちの美貌を自分のものにしたいのだ。そちがどうも桃太郎侍のほうへ行きたがりすぎるので、桃太郎侍がじゃまになるのだ」

「――――」

意外な話である。が、何かそんなけはいを女の敏感さから感じさせられて、それとなく警戒していたこともあるので、面と向かっていわれると、小鈴は思わず顔があかくなった。

「もう一つ申してみよう」

若殿は人ごとのように、おっとりとこっちを見つめている。澄んだ目だ。小鈴はまぶしい。

「そちは若木家の事件から、手をひくと申したな。が、半九郎はそちを手放したくない。そちをこの道中へ引き出すには、桃太郎侍が行列に加わったというのがいちばんいい。それが偶然にも、品川でそちと桃太郎侍と出会うことになったのだが、半九郎は決して桃太郎侍が初めから行列に加わっているとは考えていない。だいいち、桃太郎侍などというものは、品川から六郷までのほかは、この道中に存在しないのだ。そこで、こよいもそちがここへ、その存在しない桃太郎侍をたずねて来たのは、おそらく、伊賀半九郎のさしずと思うが、――いったい、半九郎がそちになんといっているか、わしはそれが聞きたいのだ」

話が急所へ触れて来た。小鈴の返事一つで、若殿は覚悟しなければならないことがあるのである。

「いいえ、伊賀さんはちゃんと見当をつけたんです」

自分のことだけに、小鈴はつい、つりこまれてしまった。

「神奈川の本陣へごきげんうかがいに出た夜、――若様は六郷川で大滝さんたちが斬られたことを知っていた。斬った桃さんから聞かなければ知るはずがないのだから、品川から六郷までご微行の若様のお供をしたというのが桃さんに違いないというのです」

「ほう。それで――！」

若殿は顔色ひとつ動かさない。

「翌朝、神奈川の宿はずれで、行列を見張っていました。桃さんはいませんでしたけど、お供の人数が三人足りない。若様はまたきっと先行されたのだ。そんな大胆なことをすすめる者は桃さんよりほかにない。桃さんはきっと先行したお供の中にいるというのです」

「つまり、半九郎の当て推量なのだ」

「ええ。あたしにもう一度だけ桃さんに忠告しろ。そして、この事件から手をひくようなら許してやるけれど、ぐずぐずしていれば、あしたいっしょに峠で――」

ハッと小鈴はことばを切った。うっかり味方を裏切ろうとしているのである。

「いかがいたした」
若殿の桃太郎侍は何くわぬ顔をしている。
「若様には申し上げられません。桃さんじゃないんですもの。——いくらあたしがいやしい女でも、味方は裏切れないでしょう？」
が、それをいわなければかわいい男をみすみす死地へおとすのだ。小鈴は当惑してしまった。
「むりに申すには及ばぬ」
若殿はにっこりして、
「ただそちが、半九郎にだまされて道中へ連れだされたことがわかればよいのだ。半九郎は桃太郎侍という者を口実に使って、そちを国もとまでつれて行こうとしている」
「——」
聞かされてみると、それは小鈴にもいなめないことであった。
「それが納得できれば、——半九郎がどんな人物だか見当がつくはず。おのれの野心のためには平気で人を殺し、どんな悪事でもしかねないやつだ。——わしはそちに、悪について身を滅ぼしてもらいたくない。まして、そちはすでに若木家のことについては一度半九郎に断わった者、今夜のうちにも江戸へ引き返すがよい。それがすすめたかったので目通りを許したのだ」
心から自分の身を心配していてくれるのである。小鈴はうれしかった。うれしいにはうれしいが、やっぱり物足りない。小鈴にしてみればたとえ危険であろうと裏切り者になろうと、桃太郎侍と離れては、なんの生きがいもないのだ。
「では、若様のお考えで、——もし、あたしが江戸で待っていたら、あの人はあたしのところへ来てくれるでしょうか」
きわどい逆襲である。
「無事に生きてさえすれば、必ずまいるであろう。約束を守らぬような男ではない」
「では、きっと夫婦になってくれるんですね」
「さあ、それはその人に会って聞いてみねばわからぬ」

「会いたくったって、神隠しになっているんでは、会えやしません」
小鈴は恨めしそうににらみながら、
「ようござんす。あたしはここまで来たついでに讃岐の金毘羅様へあの人の無事を願掛けにまいります。——若様のお国の金毘羅様は、たいそうご利益があるんだそうでございますね」
たいへんなことを言いだした。
「そちは強情なおなごだな。しからば、つかわしたいものがあるによって、しばらくそれに待っていよ」
若様は苦笑しながら、気軽に立ち上がった。
（あした、峠で——）
チラリと漏らした小鈴のことば、桃太郎侍はそれだけ聞けばたくさんであった。
伊賀半九郎は若殿が四人で先行したのを突き止めて、この宿へ一味を集めている。あしたの朝、宇都谷峠に待ち伏せて不意に襲撃の計画を立てていることは明らかだ。
しかも、前夜の失敗があるから、敵はすでに旅宿へ見張りをつけて、厳重に出入りを監視させているとみるべきである。その目をくぐって敵を出し抜くには、単身即刻、小鈴がまだここにいる間に出発するほかはない。そう考えたから、なにげなく座を立ったにせ若殿の桃太郎侍は、三人の待っている別室へはいるなり、
「助之進、そちの衣類をわしに貸せ」
やぶからぼうに小ダルマに命じた。
「何となされます、若殿」
三人は驚いて目をみはった。
「半九郎はやはり、この宿へ一味を集めておる。明日、峠で待ち伏せる計画であろう」
「——？」
「わしは即刻平侍になって、ひとりで出発する。そちたちは、どこまでもわしがここに滞在しているように見せかけて、行列の追いつくのを待って、行列がついたら、予定どおり道中をつづけるがよい」

「しかし、しかし若殿、おひとりでは、あまりに――」

助之進が顔色を変えた。

「いや、ひとりだから敵の目をくぐることができるのだ。この家にもすでに監視の目があると思わねばならぬ。あとのことは、おってなんらかの方法でさしずをする。寸刻を争う場合だ。とめだては許さぬぞ」

断固たる若殿の一言である。その非凡な英知手腕はじゅうぶんに信頼しているので、こう命じられると三人とも返すことばがない。

「若殿、あの女は――？」

橋本五郎太がわずかに顔をあげた。――死んだ進藤儀十郎から密書を抜いた女、進藤が裏切り者だったと聞かされて、その原因があの女にあるとは想像がつくらしい。妙に憎悪のこもった目だ。

「あれか――？　あれは品川から六郷まで道づれになった女、何か今まで半九郎にだまされていたらしい。深い詮議には及ぶまい」

桃太郎侍は軽くうけながして、

「虎之助、そちに申しつけよう」

のっぽの大西虎之助のほうを向いた。

「わしが出発いたしたらすぐ、この紙包み、中は金子だ、これを女につかわして、――必ず江戸へ帰っておれ、わしのことばだといいつけよ」

「ハッ」

「他のことは何をきかれても申すに及ばぬ。――そうだ、この目おおいを、左の目へかけてまいれ。宿はずれまで送って行けといいつけられたと申せば、すぐ納得いたすであろう」

取り出したのは眼帯である。……目から鼻へぬけるような小鈴のこと、これですべてを察するだろうと桃太郎侍は気がついたのだ。

「承知つかまつりました」

「ほかの者は決して外出してはならぬぞ。万一、わしをたずねて来る者があったら、所労にて目通りならぬと申しておけばよい」

「ハッ」

「如才なくいたせよ。そちたちの役目は、どこまでもわしがここに滞在しているように見せかけて、できるだけ悪人どもの目をここへ引きつけておくことだ」

「はい。若殿には、なにとぞご道中じゅうぶんにお気をつけくださいますよう」

三人が三人とも、悲壮な顔だ。

「その儀は心配するな。すぐにたよりをつかわす」

若殿は手早く助之進の衣類に着かえた。はかまはからだに巻いて隠して、平侍がひそかに旅遊びに抜けて行くといった着流し姿だ。

「見送りには及ばぬぞ」

気軽に玄関へ出て、宿のゲタをつっかけた。

「お早くおかえりなさいまし」

番頭に送られて、ふところ手のままフラリと外へ出た桃太郎侍、――まだ宵の口の宿場である。おそく着いた旅人や、すでに晩酌をすませて一夜の旅のうさ晴らしを求めるらしい浮かれ客など、にぎやかな街道筋。

（いるな――！）

それとなく見まわす目に、早くもあやしい浪人者の姿が、ふたり、三人、てんでんばらばらに、立ったり、歩きまわったり、――じっと宿の出入りを見張っているのだ。その三人が三人とも、玄関を出た桃太郎侍をジロリとにらんだが、いかにも身軽な姿、ちょっとその辺を一回りして来るとしか見えない。さすがに見のがしてしまった。

「あねご、だいぶおそいな」

ひとりが物陰に立っているのへ声をかけた。

「くどいているんだろう」

声をかけられたのが笑ってみせる。

「フフフ、くどき落として、ふたりで出て来るとちょいとめんどうだが」

「いくらなんでも、そんなことはあるまい。かけおちは夜半ときまったものだ」

「そういやそうだが、——ありゃだいじょうぶだろうな」

あごでしゃくった峠のほうへ、桃太郎侍がブラブラと歩き去るのである。

「まさか、たいせつな若殿をおいて、ひとりで遊びに出るやつもあるまい。のんきに、おしろいのにおいでも、かぎに行くやつさ」

「うまくやっていやがる。——うまいといえば桃太郎ってやつも果報な男だな。あれだけの女に命がけでほれられりゃ文句はなかろう」

「だから、命をねらわれるようになるんだ。好事魔多しといってな」

「畜生。われわれは、その魔のほうへ成り下がってやがる。罪な話さ」

ふたりは顔を見合わせて苦笑した。

そのころ、——小鈴は眼帯をした大西虎之助をにらみつけて、まっさおになっていた。みごとにまた、だしぬかれてしまったのである。

「じゃ、若様はあたしに江戸へかえれとおっしゃるんですね」

「さよう。拙者に宿はずれまで見送れというお申しつけでござる」

のっぽの虎之助は心形刀流の達人、武骨な肩を張って、冷静な目を小鈴にむけていた。

「ご親切ですこと。で、若様はどうあそばしたのでございましょう」

「もう、おやすみなされた」

うそばっかし！——小鈴は震えるほどくやしかった。さんざん待たしておいて、あっけらかんと待っていた自分もおめでたいが、今ごろあの人は峠へ急いでいるに違いない。

（どうしてやろう）

それほどあたしをじゃまにするなら、いっそ追いかけて行って殺してしまいたい。

たとえ裏切り者として伊賀半九郎にどんな復讐をうけようと、あの人のためならしかたがない。ほれた男への心中だて、隠密の役でも、間者でも、それがあの人の役に立つことなら喜んで死ぬのが女のまごころと、今も今覚悟していたところなのに、まだこっちの話を半分も聞かず、だますようにして行ってしまうなんて、あんまりひどすぎる。

（だれがこんなお金なんか、——お金であたしの口を封じるつもりなんだろうか）

重そうな紙包みをながめながら、小鈴は泣きたくなって来た。それにまたこの男は、なんてぼくねんじんなんだろう。黙って人の顔ばかり見ている。

「あたしね、若様とは堅い約束があるんですけれど、あなたご存じ？」

何もかもぶちまけて、びっくりさせてやりたい衝動にかられながら、ふっと小鈴は男の白い眼帯に気がついた。

「おや、あなたお目が悪いんですか？」

「いや、若殿のお申しつけにて、この目おおいをして送るように、いいつけられたのだ」

のっぽの虎之助はぶっきらぼうに答えた。

「その姿で——？」

小鈴は改めて男の長い精悍そうな顔をみつめた。むろん、あの人には比ぶべくもないが、白い眼帯は桃太郎侍の変装である。わざわざこんな姿をさせて、——宿はずれまで見送れといいつけたという。

（なぞがある）

ふっと小鈴は気がついた。

この宿屋に半九郎の見張りの目があるとしたら——いや、あのぬけめのない伊賀さんのこと、必ず自分にもあの人にも監視の目があると見るのが当然だ。そこを、あたしが桃さんを連れて出れば、その目は、一時でもあたしの行くほうへ集まる。あの人はその間に、なにか仕事がしたいのではあるまいか？

「大西さんとかおっしゃいましたね。——ぶしつけですけど、ちょっと失礼しますよ」

小鈴は重い紙包みを取って、念のために、たんねんに上封を解いてみた。はたして、その包

み紙の裏に、――こころあらば――と、かな文字に書きすててある。

こころあらば助けてくれとも取れるし、こころあらば江戸へ帰って、時を待てとも取れる。

（へたななぞ――！）

小鈴はじっと、そのかな文字に見入った。――あらばというのが気に入らない。こころあるからこそこんなに思いこがれて身を細らせているのに、まだこんな水くさい文字を使っている！

が、今の今まで殺してしまいたいほど怒っていた心が、いつとなく解けてきた。われながら、そのたあいなさに少し腹がたつけれど、

（そうじゃない。あの人はあたしの心をちゃんと信じていればこそ、安心してだれにもいえない秘密まで明かし、こんなわがままな、なぞなんか書けるんだ。憎らしい人！　甘ったれているとしか思えやしない）

けろりと小鈴のきげんは直っていた。さもたいせつなもののように、その紙だけをたたんで胸深くしまいながら、

「せっかくですけれど、このお金は若様にお返ししてくださいな」

わざと冷淡に、金包みを虎之助のほうへ押しやった。

「いや、それはおおせつけの金子だから――」

虎之助が変な顔をする。

「仰せつけでもなんでも、いりません。お金なら、あたし、いただかなくても小判というものをたんと持っているんですもの。――それより、大西さん、若様がお選びになったんですから、だいじょうぶでしょうけど、お見送りの役目、ちょっと大役になるかもしれませんよ」

半九郎が自分をねらっているとすれば、この身代わり桃太郎、あるいは無事にすまないかもしれないのである。

「おしたくがよろしければ、そろそろまいりましょうか」

「したくはいい。が、とにかく、この金子――」

律儀な虎之助が当惑しているのを、小鈴は見向きもしないで廊下へ出た。

玄関に立って待っていると、はたして捜すまでもなく、顔見知りの浪人者が三人、あっちこっちから、じっとこっちの様子をうかがっている。

「大西さん――」

小鈴は並んで玄関を出ながら、親しそうにそっとその耳へささやいた。

「あなたは、かまわず知らん顔をして先へ行ってください。そして、あたしたちが見えないところへ行ったら、その目おおいを取って、どこへでも隠れてしまうのです。ようござんすね」

「なに、小鈴が桃太郎侍を連れ出したというのか？」

峠に近い旅宿の奥に陣取っていた伊賀半九郎は、見張りからかえって来たひとりの報告を聞いて、キラリと冷たい目を光らせた。

「は、約束どおり江戸へいっしょに連れて帰ることになったから、伊賀先生によろしくいってくれというのです。それは困る、われわれはそんな権限を許されていないのだから、直接先生に話してくれと、――とにかく、師匠をなだめて連れて来ました」

「桃太郎侍はどうした」

「ひとりでズンズン宿はずれのほうへ行ってしまうので、これは斎藤たちがすぐ追って行ったはずです。師匠はしきりに先を急いでいますが――？」

「うむ」

半九郎は何か考えている。

「そのほかに、だれか宿を出たものはないか」

「別に、あやしいと思う者の出入りはありません」

「バカをいえ。そのあやしくなさそうなやつが、往々にしてあやしいのだ。たしかに、だれも出ないのだな」

「そういえば、ひとり、着流しで宿のゲタをつっかけた若い侍が、ひやかしにでも行くような格好で出かけましたが」
「ふうむ。それはいつごろだ」
「師匠が、桃太郎侍を連れて出るちょっと前です」
「ひとりでか――？」
「たったひとりです。おしろいのにおいでも、かぎに行くのだろうと思って、だれも、あとをつけませんでした」
「それが油断だ、ひやかしならなおさらのこと、そう遠くへ行くはずはないのだから、なぜ一応行く先をつけてみないのだ」
「――」
そういわれれば、たしかにそうである。報告に来た男は、思わず頭をかいた。
「伊賀さん――！」
待ちかねたらしい小鈴が、廊下から呼ぶ。
「あたし、急いでいるんですけれどね」
「まあ、はいれ」
半九郎は答えながら、男にさがっているように目くばせをした。
「ごめんなさい。この人がどうしても一応伊賀さんに自分でいってくれなけりゃ困るっていうもんだから、あたし急いで来たんです」
小鈴は出て行く男を見送りながら、すわるなりいった。
「おや、伊賀さん、どこかへでかけるところですか？」
半九郎は、わらじをはくばかりの旅じたくをしているのである。
「うむ、今夜は拙者もいそがしい」
「じゃ、何か吉報があったんですね」
小鈴は内心ドキリとした。それに、気のせいだろうか、今夜の半九郎はむっつりと、何もかも見とおすような鋭い目を向けている。
「あねご、桃さんをくどき落としたそうだな」
「ええ。やっと、命がけで――」

「なぜ、いっしょにつれて来なかったんだ」
「あの人、恥ずかしがって、伊賀さんには会いたくないっていうんですもの」
どぎまぎとあかくなる。激しい動気だ。
「桃さんほどの男が、女にくどかれて途中から味方を裏切る。そりゃ恥ずかしいだろう」
「――？」
「ほんとうに、いっしょに江戸へ帰ると承知したのか？」
「承知したから、いっしょに宿を出たんじゃありませんか」
「よく向こうの連中が黙って出したな。すくなくとも、あねごは伊賀半九郎の一味とわかっているはずだぞ」
「――」
なるほど、そういわれてみれば一言もない。小鈴は残忍な目に見すえられて、ぞっと悪寒を感じた。
「だって、あたしたちはもうこの事件から手を引くんですもの、しかたないじゃありませんか」
苦しい言いわけである。
「拙者はそうは思わん」
半九郎は皮肉にニヤリとわらった。
「桃太郎侍たる者が、いかにあねごと約束があればとて、そう簡単に味方を裏切るはずはない。それをあねごの口に乗ったように見せたのは、あねごを利用したのだ」
「利用――？」
「利用だ。あねごが桃さんをたずねて行く。桃さんはあねごの裏にわしがいることを知っている。つまり、だしぬいたと思った敵が近くにいることを感じた。あるいは、ほれた男のこと、あねごはうっかり、こっちの計画を口にしたかもしれぬ。で、いっしょに江戸へ帰るといって、その間に若殿を逃がした。途中であねごをまいて、その、若殿のあとを追う。まず、その辺の筋書きだな」
「そんな、そんなことはあるもんですか」

躍起になって否定したが、——小鈴は驚くべき半九郎の奸知にあおくなってしまった。

「そんなことがあるかないか、今桃さんの消息が来るだろうから、待っているがいい。拙者は、あねごを桃さんのところへ差し向けた時から、若殿の出発は今夜とにらんで、峠に網が張ってある。あねごにはきのどくだが、今夜は拙者もあねごを利用したのだ。——はたして、あねごが桃さんを連れ出す前に、若い侍がひとり、夜遊びのような格好で峠のほうへ出て行ったということだ。これが若殿なら、桃さんは必ずそのあとを追うだろう」

「いいえ。あたしが、あたしが、そんなことをさせません」

小鈴はハッと立ち上がった。

「どこへ行く、あねご」

「桃さんをつかまえて来ます」

「それならあわてなくても、もうちゃんと手配がしてある」

「じゃ、伊賀さんはあの人を、あの人を殺させるんですね」

にせ桃太郎侍のほうではない、小鈴にとっては峠へかかったという若殿を殺させてはならないのだ。早く追いかけて行って知らせてやらなければ——！

「いや、そう簡単に殺されるような桃さんではあるまい。とにかく、今夜の秘密を打ち明けた以上、疑うわけではないが、結着がつくまで、あねごの自由は許さぬ」

「だって、桃さんがほんとうに江戸へ帰るんなら、いいじゃありませんか」

「むろん、それならまもなく、桃さんはおとなしく、ここへあねごを迎えに来るだろう」

うそばっかし！　その桃さんを殺したがっている半九郎ではないか。

が、おそらく、にせ桃太郎侍のほうは、つかまるはずはないのだ。何も知らぬ若殿のほうがあぶない、どうしようッ！

「峠の大将は高垣さんですか？」

「うむ」

「じゃ、地雷火——？」

「フフフ、それには及ぶまい。若殿ひとりなら南蛮渡りの短筒一発でたくさんだろう。勘兵衛はその道の達人だからな」

半九郎は落ち着きはらっている——いっそ、峠へかかったのが桃さんだといって、助けてもらおうか。この身を任せて頼みこめば、桃さんにはなんの恨みもない半九郎なのだ。

（死んだってそんなこと——！）

思っただけで、小鈴は総毛立ってしまった。

でなければ最後の手段、油断を見すまして殺して逃げる。そううまくいけば文句はないのだが。

「伊賀先生」

ふっと廊下から呼ぶ野太い声がした。にせ桃太郎侍のほうの消息を持って来たに違いない。

桃太郎侍は、みごとにだしぬいたつもりだった。上り下り一里の宇都谷峠、これが無事に越えられるようなら、敵はまだ若殿が鞠子の宿に滞在していると見て、少なくとも行列が着く一日か二日は気がつくまい、その間にできるだけ先へ出る。ひとりで丸亀へ渡ってしまうのも一策だ。まさか十万石の若殿が、ひとりで道中をするとは、夢にも思うまい。

明るい月夜だったが、むろん峠へ夜道をかけるような物好きはいない。ふもとの立て場あたりですっかり旅じたくになった桃太郎侍は、木の下やみの峠道へかかった。

登るにつれてひえびえと、山気がはだに寒かった。高いこずえで時おりフクロウが鳴いている。ザーッと風が立ち木を鳴らして行く。すごいといえばすごい。

登りつめた頂上はちょっとした広場になっていて、そこに小さな観音堂があった。人っ子ひとり、犬一匹にも出会わない。

いよいよ下り坂だ。時刻は四つ（十時）を少し過ぎたころだろうか。道はひとうねり。右手は立ち木がおい茂り、左手は深い谷、道なりに山の端を回った桃太郎侍は、

（アッ！）

思わず立ち止まろうとした。前方三、四十間のあたり、道を擁するようにして立ち木のそばでたき火を囲んでいる七、八人、——山賊というご時世ではなし、いずれも、ちゃんとした旅じたくの武士である。もう火の恋しい時刻ではあるが、この夜ふけ、何も好き好んでこんな場所でたき火をしているやつはあるまい。用があって、だれかを待っているのだ。

半九郎の一味と見るのは早計だろうか。

（では、どうして今夜わしが立つと見抜いたろう！）

が、考えてみれば、ありそうなことだった。小鈴をよこした時、半九郎ほどの悪党、当然こうあるべきを予期していたに違いない。つまり、裏の裏をかかれていたのだ。

（神奈川の宿の例もあるではないか）

同じ手を使ったのが、われながら、いささか不覚だったのだ。大事を取るなら、このまま引き返すという手がないではないが、おそらく、物見が出してあったのだろう。すでに、相手はこっちの姿を見つけて、じっと待ちうけるのだ。とうてい黙っては見のがすまいし、いまさら引き返せば、なお疑われるだろう。

（運を天に任せろ）

決断がつくといたずらに悪あがきをするような桃太郎侍ではなかった。知らん顔をして歩みよりながら、

「これはけっこうでござるな。ちょっと失礼」

自分からたき火の仲間入りをした。

こそこそと通り抜けでもすれば、たちまちかさにかかって来たろうが、平気で先を打たれると、さすがにかかってが違ったらしい。ただじろじろと見まわすばかりだ。

「貴公、おひとり旅か？」

やがて、ひとりがむっつりときいた。高垣勘兵衛である。

「ひとりでござる。貴公がたは大ぜいでおにぎやかでござるな。どちらのほうへの旅です？」

「いや、待ち人だ」

「ほう、まだお連れがあるのか？」

桃太郎侍はとぼけた顔をする。とぼけながら半九郎の顔の見えないのを見てとって、あの男さえいなければ、なんとかなりそうな気がした。

——が、勘兵衛は地雷火をかけろというような非常識を平気で口にする男。

「いや、連れではない。貴公たちを待っていたのだ」

急に挑戦的な目をギロリとさせた。

「拙者たちを——？」

「さよう。貴公を若木家に関係のある男と見て一時捕虜にする。申しわけなら、まもなく伊賀という男が来るから、それにいってくれ」

有無をいわせない勘兵衛の高飛車な出方である。

「それはちと乱暴でござるな」

桃太郎侍はあきれて苦笑した。

「乱暴かもしれん。が、この夜ふけに、わざわざ今夜峠を越える者は、若木家に関係のある者と拙者のほうでは決めてかかっている。あしからず思ってくれ」

乱暴ではあるが、なるほど、そのくらいの覚悟をしてかからなければ、こんなところへ網を張っている必要もないし、かいもない。敵ながらその心がけはあっぱれである。

「驚きましたな。しかし、おもしろそうだ。いったい、その若木家というのは何です」

そらっとぼけて、きいてみた。

「それも、伊賀が来たら聞いてくれ」

「伊賀とかいう人は、すぐ来るんですか？」

「まもなく来るはずだ」

来られてからではまにあわないが、桃太郎侍

はのんびりと、

「よろしい、待ちましょう。別に用もない浪人者の気まぐれ旅、おもしろそうな話だ。子細によっては、ぜひ仲間入りをさせていただきたい」

物好きそうな目を一同にむけた。その実、人数や地形を目測しているのである。——たき火を囲んでいるのは七人、一時はじっとこっちをにらんでいたが、案外平気な態度に拍子抜けがしたらしい。もうすっかり人違いにきめて、油断しているようだ。油断しているようで油断なく気を配っているのは正面の口をきいたやつ、すなわち高垣勘兵衛だけである。

しかし、さいわいにも桃太郎侍はその男と正反対の道のほうに立っているので、左に並んでいるひとりを突き飛ばして不意に駆けだせば、逃げられないことはない。道は下り坂で、月夜といっても木の下やみ、しかも道幅がせまいから三人と並んで駆けるのは少し無理のようだ。

（よし——！）

はらをきめて、わざとぼんやりたき火を見おろすと、ちょうど足もとへ出ている太い枯木のよく燃え盛っているやつ、元のほうを力いっぱい踏めば、その木を中心に組み合わせてあるマキ木が、反動で一度にはねあがるに違いない、——と見たから、なにげなく足をかけて思いきりグンと踏みつけると、はたしてバチバチと火のくずが八方へ飛び散った。

「アッ」

不意をつかれて一同が身をひきながら、思わずそれに気をとられたすき、豹変した桃太郎侍はタッと左のやつを突き飛ばして、一挙に風のごとく駆けだした。

「やっ、あやしいやつ！」

「逃がすな」

ろうばいして一同が口々にわめいたときには、もう十間あまりも駆けている。計画はみごと図に当たったかに見えた。

が、いけない！　敵はたき火を囲んだ七人だけだと思っていたが、まだ、ほかに伏勢があったのだ。声を聞きつけて、たちまち行く手の木陰からおどり出した四、五人。

「こしゃくな——！」

こうなっては斬り抜ける一途よりない。桃太郎侍はとっさに抜刀して、まっしぐらに飛び込んで行った。

「それ、おのおの！」

口ではいっても、その勢いに敵は思わず道を開きながら、しかし夢中で斬りつけて来る。

「エイ、——トウ！」

物ともせず右をはねあげて左へ斬り返す。気をのまれている敵の刀が届くはずはなく、左のやつは空を斬った肩先へサッと一太刀浴びて、

「ワーッ」

のけぞったのと、——ダーン！　追い迫りながら勘兵衛が短筒をねらい撃ちにしたのと同時、

「アッ」

不覚にも桃太郎侍はヨロヨロとのけぞった男に突き当たりながら、——そこがちょうどがけっぷち、一つになって、ド、ド、ドッと谷へ転落して行った！

船番所

室の津から讃州丸亀へ海上二十七里、毎日金毘羅船が出る。当時金毘羅船は大阪からも出たし、播州では室のほかに高砂、赤穂、備前では出の口や下村などからも毎日出た。昔からいかに讃岐の金毘羅様が有名であり、繁盛したかがわかるのである。

室を曉前に出た船頭大黒屋清兵衛の船は、日の出ごろから追い風に乗って、急に船足が早くなった。それだけに相当波が荒く、あたりを通る船はいずれも帆を半分おろして、その帆だけしか見えぬくらい、船は波に浮きつ沈みつ走っている。こうなると、乗り合いの人たちも、あ

まりお国自慢や冗談が出ず、ことに船に慣れない者は、たいていあおい顔をして寝ころんでいるしまつだった。

「お嬢様、気持ちが悪いんじゃありませんか？」

巡礼の男が、つれの巡礼の娘に、そっと声をかけた。平凡な顔だが、よく見ていると、時々びんしょうそうな鋭い目をする中年者、根を洗えばサルの伊之助である。

「いいえ、がまんできます」

チラッと浮かぬ顔をあげた巡礼娘は百合だ。例の伊之助の細工で涼しい両眼を盲目にされているが、むぞうさにたばねた黒髪、端麗なおもわ、自然に備わる気品はおおうべくもなく、その美貌は乗った時から船中の人の目を集めていた。しばいで見る朝顔日記の深雪——伊之助でさえほれぼれとして、（こういうときにも美人なんてものは、どうにもしようのねえもんだな）と、ひそかに慨嘆したくらいだから、なにかにつけて男に目をつけられるのはしかたがない。

しかも、この世間知らずのお姫様は、つややかな娘姿のまま、たったひとりで家を飛び出したのだから、大胆千万、今考えてもゾッとさせられるのである。

伊之助が哀れなお俊の葬式をすませ、桃太郎侍の手紙をそえて一時仙吉を神島伊織のもとへあずけて行列のあとをおったのは、——にせ若殿が江戸を立った翌朝であった。鎗ガ森へかかると、雲助にカゴをしいられて困っている武家娘がある。それが百合だった。

「どこへ行くんです、お嬢様。まだお加減がよくなさそうじゃありませんか」

伊之助は百合のあおい顔を見て、目をみはった。まだ足もとがフラフラしているのである。

「仙吉から聞きました。若様は、若様は百合を置いていってしまったのです」

「そりゃ無理だ。お百合様は病気だったのだし、だいいち、若様は悪人と戦いにいったんですぜ」

「いいえ、百合はぜひお供をさせていただきま

す。そういうお約束だったのですもの」

「だって、お嬢様はご家老様に黙って出て来たんでしょう？」

「書き置きをして来ました。百合がおそばにいなければ、若様はきっとお困りになります。おとうさまだって、許してくださるに違いありません」

何と言っても承知しない。たっていけないといえば、むろん、そのままひとりで道中をする気だったろう。

（よけいなことをしたと、だんなにはしかられるかもしれねえが——）

いちずに慕う娘心の強さに、ついに伊之助は負けてしまった。

が、百七十里の長い道中、こんな人目につくお姫様を連れて歩いたんでは、危険でしようがない。その夜の泊まりの程ガ谷の宿で、ふたりとも巡礼姿になり、百合をめくら娘に細工したのだ。泊まり泊まりもそれらしく安旅籠を選んで、半日歩けば半日カゴと、——ひとりなら一日か一日半で行列に追いつけると思ったのに、旅なれぬお姫様連れではそうはいかぬ。先を急ぐ伊之助にとっては、もどかしいかぎりであったが、同じ思いがあればこそ、びっこをひきながらも、歯を食いしばって、つらいとひと言のぐちさえこぼさぬ百合、ついいたわらずにはいられなかった。

こうして、やっと行列に追いついた鞠子の宿で、意外な話がわかったのである。

行列に追いつきさえすれば恋しい人に会えるとのみ、単純に思いこんでいた百合は、鞠子の旅宿にひそかに上島新兵衛にあい、——若殿は二日前に単身先行して、それっきり消息がないと聞かされ、色を失ってしまった。しかも、六郷での危難、神奈川の宿はずれで飛び道具で襲撃、それだけ聞いてもいかに危険な道中であるかわかるのに、その夜は敵の監視の目をくらまして、ひとりで出ていったのだという。

「虎之助の考えでは、——どうせ旅じたくをして出たからだ、若殿は決して旅宿を離れるな、行列がつくまで敵に、いかにも若殿が滞在しているように見せかけるのが、そちたちの役目だ、と申しつけられてはいましたが、なんとしても、おひとりでの峠越えが気にかかる。たとえ、あとでおしかりをこうむってもいいから、その足でお跡を慕う覚悟を決めた、というのです」

で、その四、五人の男連れ、てんでんに小荷物を首ったまに結びつけたり、大きい包みを持ったやつは背中へ背負って、バカっ話に興じて行くあとからついて歩きだすと、——宿場のほうから旅じたくの浪人者らしいのが五、六人、大急ぎですれ違いながら、

「目じるしは白い目おいだな」

妙に殺気だってささやき合っていたのが目についたという。

「拙者の考えでは」と、新兵衛が注を入れた。

「若殿は品川から六郷までのご微行に、やはり

「実は拙者も、夕方からの行列といっしょに当地へ着いて、今、大西虎之助から報告を聞いたばかりなのですが——」

新兵衛は不安そうに物語るのである。

その夜、のっぽの虎之助は、百合と名のって若様を尋ねて来た女といっしょに、若殿が立つとまもなく宿屋を出た。それは品川から六郷まで若殿の道連れになった女で、江戸へかえることになったのを、宿はずれまで見送れと若様に申しつけられたのだという。

女は玄関を出ると、見張りの浪人者と何か話していた。虎之助は女との約束で、かまわず先へ歩きながら、それまでしていた目おいを取る。目おいをとったら隠れるようにという意味ありげな女のことばだったので、——ちょうどその時四、五人の男連れが声高に話しながら鞠子の宿へかかって来たのをさいわい、そのあとについて道を引き返すことにしたのだという。

白い目おいをなさいましたので、何かそれに関係があると思われます」

とにかく、敵の襲撃をのがれた虎之助が、旅宿のあたりまで引き返してみると、別の見張りは立っているが、女の姿はない。

さいわい前の一行は話の様子で旅役者の下っぱらしく、今夜のうちに峠越えをして岡部の宿へ行くらしい。そのままあとについて宇都谷峠をのぼりつめ、下りにかかって第一の山の端を曲がろうとすると、

「待てッ」

不意に木陰から浪人者が三人飛び出した。

あやしいと思ったから、虎之助はすばやく物陰へ身を隠した。はたして、敵の一味だったのである。山の端を曲がった三十間ばかりのところに、たき火をして十人近くの人数がいた。旅役者どもはそこへ連れて行かれて、裸にされんばかりにして調べられたという。まもなく、意外にも伊賀半九郎が例の女を連れて来合わせて、役者どもはすぐ許されたが、——ひとりの浪人者が短筒を出して、しきりに半九郎に説明しながら、谷の底を指さしているのが見えた。

「遠くて話し声は聞くことができなかったそうですが、斬り合う形をみせたり、谷をのぞき込んだりしているところをみると、たしかに、だれかが撃たれたか、斬られたかして、谷底へ落ちこんだらしいというのです」

「それが若様とおっしゃるのでございますか」

百合は新兵衛の顔をみつめて、わなわなと震えてしまった。

船は大きな波のうねりを乗り切りながら、激しく揺れて走る。このあたり大島小島を迎え見送って海青く佳麗な風光だが、それどころではない、にせめくらの百合はムカムカと胸へこみあげそうになるのを、さすがに武士の娘、じっとがまんして行儀よくすわっていた。ともすると、額にじっとりとあぶら汗が浮いて来る。

「巡礼のご家来さん」

伊之助の隣にすわっていた江戸の俳諧師だという男が、とぼけた顔をあげた。ゴマシオまじりの天神ヒゲ、鼻の下にもたれ下がった安っぽいヒゲをはやして、旅によごれた宗匠頭巾十徳姿、シミだらけの浅黒い顔が四十年輩にも見えれば五十とも見える。いつもダラリと口を半分あけているのが、いっそうこの男をのろまげにして、どう見てもたいした宗匠とは取れない。

「用かね、梅月さん」

伊之助がぶあいそうににらんだ。頭からこの男をけぎらいしているのである。

「この薬を巡礼のお嬢さんにさしあげたいんじゃがな、——だいぶ苦しそうだ」

手へ金色の小さな丸薬を三粒のせている。

「いらねえ。薬ならおれだって用意している。——お嬢様、薬をのみますか」

「伊之助、人さまに、そんな口をきかないでください」

百合は悲しくたしなめた。自分には人一倍親切な伊之助ではあるが、どうかすると人と口争いをしたがる。その荒っぽい気性が心配なのだ。

「せっかくのご親切、そのかたの、お薬をいただいてください」

「へえ」

百合の沈んだ顔を見ると、伊之助は一言もなかった。

「いただくとさ、梅月さん」

「それがよろしい。これは天竺伝来の大妙薬だでな。食当たり、船酔いはおろか、アホウが用いればアホウがなおる、バカにつければバカがなおりますじゃ」

本気なのか、そらっとぼけているのか、梅月宗匠はもったいらしく伊之助の手に丸薬をころがした。——うそをつけ！　そんなにきくんなら、てめえがのんで、まずそのまぬけっつらをなおしやがれと思ったが、

「水でのむのかい？」

伊之助はじっと虫を殺した。

「いや、ただかんでおのみなさい」

「ちょうだいいたします」

百合は会釈して、手に移してもらった薬を口に入れた。なるほど、ふくいくたる香気が口中に満ちて、重苦しい心気を、軽くしてくれるような気がする。安価な売薬などではないらしい。

（不思議な人——）

湯気をとおして見るような視力で、梅月のとぼけた天神ヒゲの顔をそっとながめながら、百合はあわてて目をとじた。梅月がじっと自分の顔を見ているような気がしたのである。

この男にはじめて出会ったのは、たしか岡部の宿であった。忘れもしない、鞠子の宿で上島新兵衛から、世にも悲しい報告を聞かされた翌日である。

その夜、大西虎之助は事態の容易ならざるを知って、ひとまず旅宿へ引き返し、宿の者を頼んで改めて様子を探らせたのだという。すると、敵は宇都谷峠の下り道にある横倉村の百姓を狩り出して、夜から朝にかけて谷中を捜しまわらせたことがわかった。が、二つあるべきはずの死骸が二つともない。たしかに血の跡が残っているのに、そのほかは何一つ証拠になるべき物さえ落ちていなかったという。

「で、万一谷へ落ちられたのが若殿であったとしても、必ず若殿は生きていられるものと判断はされるのですが——」

あの夜は、さすがに新兵衛も話しながら、蒼白な顔をしていた。

「畜生！　畜生！」

安旅籠に待ちかねていた伊之助は、百合から若殿の消息の絶えたことを聞かされると、血相を変えてうめきだした。

「二本差しが大ぜいついてやがって、なんてえざまだ。三日もあっけらかんと指をくわえて見てやがって、それで家来の役目がすむと思ってやがるのか」

むやみに腹がたつ。が、ゆっくり腹をたてている暇はなかった。

「どうしましょう、伊之助」

なれぬ旅に病後のからだを無理をして、ただその人に会える喜びを気の張りにここまでたどりついた百合である。その希望を失って、極度の不安に追い込まれた百合には、ともすると谷底へおちた若殿の血みどろの姿が思い描かれて、

「若様――！」

そのおもかげをかき抱くように、クラクラッと自失しながら、のけぞっていた。

「いけねえ、お嬢様！」

伊之助はろうばいした。今ここで百合にまで倒れられては手も足も出ない。

「しっかりしてくださいよ。なあに、話の様子じゃ、死んだときまったわけじゃない。また、めったに死ぬようなだんなじゃありません。――あっしはただ、能なしの家来のやろうがしゃくにさわったから、おこったんでさ」

それからサルの活躍が始まった。どこをどう歩きまわって来たか、風のように出ていった伊之助が、風のように帰って来たのは、真夜中ごろである。

「お嬢様、だんなはきっと生きていますぜ」

翌朝、宇都谷峠を越えながら話してくれた。

「あっしはゆうべ、横倉村の百姓をたたき起こして様子を聞いて来ました。それで判断すると、谷へ落ちた敵のほうは若様に斬られている。若様は飛び道具で撃たれた。血の跡が残っているくせに、その二つの死骸が見えないというんでしょう。トラやオオカミの出るような場所じゃなし、そんなはずはありません。で、あっしの考えじゃ、ケガぐらいはしたかもしれないが、だんなは運よく助かった。が、その助かった事を敵にごまかすために、手早くいっしょに落ちた悪人の死骸を人に気づかれないところに埋めるか、隠すかして、証拠を残らないようにしておいて、谷を抜け出したんだ。どうも、そうとしか思えません」

「では、どうして家来たちのほうへ、なんとかおことばがないのでございましょう。若様は、生きていれば必ず行列のさしずをする、といいおかれておいでになったのだそうでございます」

「ところが、伊賀半九郎はやっぱり若殿が生きているとにらんで、翌日すぐあとをおっているが、ああいうだんなのこと、ことによると案外ひょっこり行列のほうへ帰るかもしれないという見込みもつけたんですね。一味の半分を高垣勘兵衛という、こいつが峠で若殿を撃ったやつなんだが、そいつにあずけて、宿屋のほうを見張らしているんです。だから、だんなもうっかりしたことができなかったんでしょう」

「それがほんとうでしたら――」

百合は一瞬ほっと心が軽くなったが、――やっぱり、生きている若様を見ないうちは、安心できないのである。

「とにかく、こっちはこっちで、道々若殿をさがしながら、丸亀へ乗りこんでみましょう。生きていさえすれば、必ずそこへ行くだんななんだから」

伊之助は自信あるようだった。

こうして、執拗な勘兵衛一味につけられながら、行列が進むうしろから、ふたりはゆっくりと峠を越えて岡部の宿へはいった。ちょうど昼どきである。

「ここで昼食にしましょう。あっしは少しこの宿に用があるから」

わざと選んだ町はずれの一膳飯屋、そこでこの天神ヒゲの梅月宗匠に出あったのである。

「ねえさん、この土地へ旅しばいがかかっているそうだね」

昼食をすませた伊之助は、一服やりながら、なにげなく飯屋の少女にきいた。

「ええ、それはゆうべで、おしまいになりました。江戸の嵐鶴十郎一座のことでしょう？」

少女が百合のきりょうを横目にかけながら、

自分の考えにばかり気を取られていた伊之助が、ハッと気がついて、へたな返事をする。
「ああ、それじゃ娘さんのほうか」
「冗、冗談いっちゃいけません。昔はとにかく、今じゃこのとおりのにわかめくら、しばいどころじゃありません。ね、お嬢様」
「――――」
百合は人目を恐れるように、身を堅くしていた。
「ほう、急に目がな。きのどくに。お嬢様というところをみると、おまえさんのお主筋にでも当たんなさるおかたかな」
「そうですよ。このかたは江戸でちっとは名を知られた呉服屋さんのお嬢様だが、おかわいそうに急にこんなことになってしまって、これも何か前世の悪業だろう、せめて諸国の神仏を回って後生を願いたいとおっしゃるので、こうしてあっしがお供して歩いているんです」
伊之助はもっともらしい顔をして説明した。

妙な顔をする。
「やれやれ、それは惜しいことをした。たいそうじょうずな一座だってうわさに聞いたが、こんどどこへかかるか聞かなかったかい？」
巡礼がしばいのうわさ、しかも連れの娘はめくらだ。少女が妙な顔をするのも当然だが、伊之助は気がつかない。――あの夜、峠で勘兵衛一味に調べられたという下っぱ役者、それを捜し出して聞いてみたら、何か手がかりにならないかと考えているのだ。
「そうですね、どこへかかるかあたしは知りませんが、この先の紺屋さんで聞いたら知っているかしれませんよ。そこの広場を借りて、しばいをしていたんですから」
「巡礼殿、しばいがお好きかな」
食後の茶を飲んでいた天神ヒゲの男が、ふっとまのびた顔を向けてニヤリと笑った。さっきから時々ジロリとこっちを見ていた男である。
「なあに、あっしが好きってわけじゃないが」
「それはそれは。そのきりょうで、きのどくじゃな。わしは江戸の俳諧師で梅月という者だが、これから長崎へ行きます。どうだな、あんたがたが、いっしょに長崎へ行ってみぬか」
たいへんなことをいいだすのだ。
「長崎――？」
「そうじゃ。長崎にはいいオランダの目医者があるそうだ。それにみてもらえば、きっとその目はなおる。首にかけて、わしがひきうけてもいい」
無気味なことをいうやつである。
「まあ、考えておきましょうよ」
伊之助は急に冷淡になった。
「さようかな。何も考えることはないと思うが――その目が見えるようになるのですぞ」
「お嬢様、そろそろまいりましょうかね」
伊之助はかまわず金を払って、百合の手をひいて飯屋を出た。
「畜生、いやなやろうだ。ありゃお嬢様、ただのタヌキじゃありませんぜ。あんなとぼけた服装をしているくせに、相当ふところに金を持っている」
まもなく、そのタヌキがあとから追いついて来て、
「にわかめくらと聞いたが、娘さんなかなか勘がいいな。その歩きつきは、まるで目が見えるようだ。にせめくらとまちがえられますぞ」
ニタリとふり返って、足早に行きすぎる。
「やろう……」
思わず伊之助が追いかけようとするのを、
「いけません、伊之助」
百合があわてて引きとめた。全身ひや汗を感じながら。
日を重ねて、からの行列はついに室の津へついてしまった。が、依然として若殿の消息はない。海一つ越せば丸亀の城下だ。さすがに主のない行列を城下へ進めるわけにはいかないのである。思慮も気性も衆にすぐれた若殿のこと、

どこでひょっこり無事な姿を見られるかもしれない。きょうわかるか、あしたは知れるかと、それのみ心頼みにしていた近習たちも、今は全く進退きわまった形で、身動きができなくなってしまった。

「とにかく、こっちは丸亀へ渡ってみましょう」

伊之助がすすめるので、けさ夜明け前にこの船には乗ったが、百合はすでに覚悟していた。人なみすぐれた伊之助の勘をもってしても、ついになんの手がかりも得られなかった今、単身若殿が丸亀へ渡っていようとは思えない。まして、土地不案内のにせ若殿の身である。

（やっぱり、宇都谷の谷底でおはてあそばしたのがほんとうなのだ）

もう、そうとしか思いようがない。

「そんなはずはない。あのだんなが、めったに死んでたまるもんか」

百合の前では、つとめてがんばっている伊之助でさえ、このごろは暗く黙りこんでいる時があるのだ。

（丸亀へ渡って、それでも手がかりがなかったら、百合はもう一度、宇都谷へ引き返そう）

その人なくしては、この先、生きて何の希望も持てないからだ、せめて同じ土地の土にと思いつめている百合である。こんなことなら、いっそ、あの下屋敷の穴倉のやみで、その人のたくましい胸に抱かれながら、いっしょに死んでいたほうが、どんなに幸福だったろうとさえ思うのだ。

こうして、今は望みのすべてを失いかけて、伊之助任せに乗り込んだ金毘羅船、それにこの天神ヒゲの梅月が偶然乗り合わせていようとは意外であった。しかも、あの時はたしか長崎へ行くといっていた梅月である。

伊之助も警戒しているらしく、知らん顔をしていたが、——

「おまえさんとは一度、どこかで会ったことがあるような気もするね」

持ちまえの皮肉な目を光らせた。

「そういわれれば、そんな気もするな」

「たしか、おまえさん、長崎へ行くとか言っていなかったかね」

「あれはやめましたじゃ。急に金毘羅様に頼まれた仕事ができたでな」

「——？」

「句を作って、額に奉納しますのじゃ」

天神ヒゲはけろりとして笑っている。

「そうそう、そういえばご家来さん、あんたの捜していた旅役者は見つかりましたかな」

「——？」

伊之助はギクリとした。畜生、そんなことまで覚えているところをみると、どうしてもこのやろう、ただのタヌキじゃない。ことによると、半九郎のほうの回し者、あの時もたしかお百合様のにせめくらを見抜いているような口ぶりだったのだ。

「冗談いっちゃいけねえ。巡礼が旅役者なんかに用があるもんか」

「ほう。では、わしの勘違いだったか。——おや、高松のお城下が見えて来た」

船は帆いっぱいに風をはらんで、高松の沖を過ぎて行く。讃岐富士を背景にして、西日を浴びた四国の津々浦々が絵のように明るい。

「梅月さん、今夜は丸亀泊まりかね」

伊之助には、けしきどころではなかった。なんとかして、このタヌキのしっぽをつかんでやろうと、考えているのだ。

「まあ、そうなりますかな」

「うわさに聞くと、丸亀の船着き場には人改めの船番所ができたっていうが、ほんとうだろうかね」

なにくわぬ顔をして持ちかけてみた。

「そんな話も聞きましたな」

天神ヒゲはちらっと百合のほうを見ながら、

「なに、わしはこれで、顔が広いから、だいじょうぶじゃ。江戸の梅月といえば、知っている

者はみんな知っていますでな、——なんなら道連れになってあげてもよい」

恩にきせるような口ぶりである。

「おまえさんの連れになれば、船番所がめんどうなく通れるのかね」

「そりゃ通れますじゃ、顔が広いでな」

「つまり、お役人と、顔見知りというわけなのかね」

「いや。わしも丸亀ははじめての地、知り人があるというわけではないが、ありがたいことに、名が聞こえていますのじゃ、江戸の梅月といえば」

「——？」

正気なのか、ちゃかしているのか、ちょっと判断がつかない。

「——？」

（どっちみち、金毘羅詣りの者といえば、無事に通すだろう。それからの仕事は、日が暮れてからだ）

三の丸内にあるという城代家老右田外記の屋敷へ、無事百合を送り届けてしまえば、もうこっちのものである。伊之助はそう覚悟したので、天神ヒゲの相手になるのはやめた。

やがて船が丸亀の沖へかかったのは夕暮れごろであった。

「お客さんがた、船が着いてもすぐ立たないようにしてくださいよ。この港は、このごろ少しやかましくなって、お役人の船改めがありますでな」

船頭が注意してまわる。

「船頭さん、その船改めっていうのは手間取るのかね」

ひとりが心配そうにきいた。

「なあに、自分の出て来た国の名と行く先を調べるだけです。心配することはありません」

はたして、船着き場へ着くと、書き役と下役を従えた役人が、ドカドカと船へ乗り込んで来た。いちいち住所と行く先、用件などをきいて、

書き留めている。

（なるほど、こりゃ厳重なものだ）

伊之助は内心おだやかでない。無事にすんでくれればいいがと、そっと百合のほうを見ると、これは行儀よくすわってうつむいている。

（町人の姿にしては、どうもあの気品てやつがな）

口をきかせると、なおいけないのだ。

「そのほうはどこの者だ」

役人はついに天神ヒゲのところまで来た。

「江戸湯島に住居いたします島梅月と申す俳諧師でございます」

「どこへまいる」

「象頭山金毘羅大権現の額堂へ句額を奉納にまいる者でございます」

「江戸の者だな」

「はい。江戸の梅月と申せば、少しは知られた俳諧師——」

「むだ口はいらぬ。待っておれ」

役人は耳にもかけない。——このやろう、やっぱり半狂人だったと、伊之助があきれていると、次はいよいよ自分の番だ。

「そのほうはどこの者だ」

「へえ、江戸神田三河町の呉服商伊勢屋久右衛門下男伊之助、これは主人の娘お久様と申します。へえ。ご覧のとおりお嬢様が眼病で、あんまりお嘆きなさいますんで、八十八カ所参りにお供してまいりましたんで」

「そのほうたちも江戸の者だな」

「はい」

「この者とは連れか？」

梅月のほうをあごでしゃくる。

「いいえ、この船ではじめて会いましたんで」

「そうか。そのほうたち三人は、ちょっと船番所まできてくれ」

「へえ、てまえどもは別にあやしい者では——」

「それはわかっている。が、江戸の者は子細あって一度番所まで来てもらうことになっている

のだ――。船頭、ほかの者は陸へ上げてよろしい。――まもなくお奉行様のお調べがあるから、しばらくこれに待っていよ」

船番所へ連れて行かれた江戸の三人は、そのまま座敷牢へ入れられてしまった。まるで罪人扱いである。

「お役人さん――」

牢格子の錠までおろして立ち去ろうとする先刻の下役に、伊之助はあわてて声をかけた。

「そのお調べってのは、すぐあるんでしょうね」

「それはお奉行様のごつごうだ」

「お奉行はなんと申し上げるおかたです！」

「鷲塚大学様とおっしゃる」

「ああ、すると、鷲塚主膳様のご一門のかたですか――」

「――？」

若い下役はジロリと伊之助の顔をにらんだ。他国者の巡礼ふぜいが、家老の名を知っている。不審に思ったらしい。

「ご城内に、伊藤新十郎様ってかたが、おいでになるでしょう」

ハッとして伊之助は、追いかけるようにきいた。これはお俊を見捨てた男、丸亀から一度たよりがあったと聞いていたのを思い出したのだ。はたして、今でもいるのかどうか、それはわからないが、もしいてくれれば仙吉の父親だ、なんとか便宜を得られるかもしれないと考えたのである。――が、下役は冷淡であった。

「そんな者は知らん」

「へえ。なんでも丸亀のご城内にいると、江戸を立つ時、主人から聞いて来たんですがね。そのおり、丸亀のご家老様は鷲塚主膳様とおっしゃるかただと、話のついでに、聞いていたもんですから」

「そうか。大学様はそのご家老のご舎弟だ」

「ああ、ご舎弟様なんで。――どうか早くこんなところから出られるようにしておくんなさい。罪もない人間を、こんな牢屋みたいなとこ

ろへ入れると世間に知れたら、土地の人気にもかかわると思うんでございますがね」

伊之助はうまいところをつく。

「いや、すぐらちがあくだろう。しばらく待っておれ」

下役の者は、きのどくそうに、そそくさと去っていった。

鉄格子のはまった高窓のあたり、日はすでにたそがれて、牢内にはお互いの顔がわずかに見分けられるほどの薄やみがこめている。強いいそ風が樹木にサッサッと鳴っているのが耳についた。

「チェッ、梅月さん、おまえの名まえも、あんまりあてにならなかったね」

ボカンと半分口をあけている天神ヒゲをにらみながら、伊之助はずけずけといった。

「いや、どうも。――縁なき衆生はどしがたしというてな、相手に風流気がないのだから、しかたがありませんわい」

天神ヒゲは平気で笑っているのだ。

「巡礼のお嬢さん、気分はどうかな」

「おかげさまで、――ありがとうございました」

百合は丁重に頭を下げた。

「それはけっこう。わしの妙薬は、自慢だけに、ききますでな」

何をぬかしやがると、伊之助はやけっぱちだ。船酔いはだれだって陸へ上がりさえすれば、ケロリとなおるにきまっているのだ。

が、こんな半狂人の相手になってはいられない。

「お嬢様、しっかりしていてくださいましよ。どんなことがあったって、伊之助がちゃんとついているんですからね」

旅やつれというより、恋にやつれた百合がじっと思い沈んでいる姿を見ると、――こんなめにあわされてしまった今、伊之助にはいっそうふびんでたまらなくなるのだ。

「伊之助、あのかたはここにもいませんね」

その百合が案外しっかりした顔をあげた——江戸の者だけをこんなに厳重に警戒する。まだ若殿が着いていない証拠だと、百合は取ったのだ。いまだに着いた形跡がないとすれば、いよいよ悲しい推定を事実と判断するほかないのではあるまいか。

「だって、お嬢様——」

伊之助は百合の寂しい顔を見て、早くもそれと心の中を察したが、そばにえたいの知れない天神ヒゲがいうっかりした口はきけないのだ。

「あっしはかえって安心しているんですがね。こんなふうだから、きっとだいじょうぶだと」

警戒が厳重なだけ、敵にはたしかに若殿が生きているというめぼしがあるのだ。勝負はおそくもこの二、三日と、伊之助は考えるのである。——どうしてこの厳重な警戒線を突破するか、おそらく、桃太郎のだんなは、そのくふうをしているのに違いない。

「あっしたちには、別に何の罪があるわけでもありません。お調べは簡単にすむと思います。そのうえで、伊之助にはまた考えがあるんですから、まあ気を大きく持っておいでなさいまし」

「そうでしょうか」

百合も他人をはばかって、それ以上は何もきこうとはしなかった。その天神ヒゲはと見ると、いつの間にか行儀よくうなだれている。居眠りをしているらしい。

(こん畜生、ほんとうに眠っているんだとすれば、よっぽど後生楽なやつにできているんだ)

伊之助はあきれてしまった。

それにしてもバカに手間取る。やがて日はとっぷりと暮れて来たのに、何のおとさたもないのだ。罪もない者を一晩泊めておくはずはないし、出してくれるつもりがあるのなら城下町の旅籠屋が起きている間にお調べがなくてはならない。

「お嬢様、眠っちゃいないでしょうね?」

顔も姿も、やみ一色に塗りつぶされて来たので、伊之助はなんとなく声をかけずにはいられなかった。

「ええ」

「眠っちゃいけませんよ。カゼをひくといけませんからね」

「眠りはしません」

むろん、眠れといったって眠れはしないのはわかっているが、さぞ心細かろうと思っての、せめてもの慰めだ。顔が見えないだけに、なんだか泣いていそうな気がしてならない。

スッとふすまの開く音がして、急に灯の光が流れこんで来た。さっきの下役侍が手燭を持って、はいって来たのである。

「伊勢屋久右衛門娘久、お調べがある、これへ出なさい」

「ハイ」

百合がハッとしたように伊之助の顔を見上げた。

「お役人さん、お嬢様ひとりだけでございますか?」

伊之助もドキリとしたのである。

「そうだ。ひとりずつというお奉行様の仰せだ」

「それはいけません。お嬢様はご覧のとおりのにわかめくら、ひとりでは満足に歩くことさえ、できかねますので」

「わしが案内するから、さしつかえない。早くせい」

「いいえ、そいつは困ります。主人から預かりましたたいせつなお嬢様、どうか、あっしもいっしょにお調べくださいますよう、お奉行様にお願いしてくださいまし」

「ならん。たって否やを申すと、おまえがたのためにならぬぞ」

「そりゃあんまりだ。それじゃまるで、あっしたち罪人扱い——」

「伊之助——」

いいつのろうとするのを、百合が制した。

「お奉行様のおいいつけです。そむいてはなり

ません。わたくしは、ひとりでまいりましょう」
「だって、お嬢様――！」
「いいえ、身になんの覚えない者、心配はありませぬ」
ここでさからって、いじ悪く出られては、かえってめんどうと、百合は覚悟したのだ。手さぐりをして静かに自分から立ち上がる。それでもと、引き止める口実は、伊之助にもない。
「だいじょうぶですか、お嬢様」
しかたなくその手を取ってやりながら、伊之助は悲痛な顔をした。
「神妙にしておれよ」
うしろの錠をピンとおろして、下役の男は百合を連れ去った。
ふたたび、やみになる。見送っていた伊之助の目から、あお白くうなだれて連れ去られた悲しい百合の残像が消えると、急に不安が大きくなって来た。
（やっぱり、ひとりで手放すんじゃなかった）
むろん、いっしょに調べてくれといったところで、通らなかったかもしれない。が、それだけに、よけい不安なのだ。
しかも、調べるやつは陰謀派の親玉鷲塚主膳の弟だという。うまく百合にごまかしきれるだろうか。万一、ここで素性が露見でもするようなことになったら、――いや、そんなことはあるまい。百合の顔を知っている者はないはずだし、あのめくらの細工は、めったに見破られる心配はないのだ。
そうは思っても、妙に落ち着かないのである。伊之助は、われにもなく重いため息が出た。
「巡礼のご家来さん」
やみの中から、天神ヒゲが声をかけた。
「なんだね」
「おもしろくないと、わしは思いますのじゃがな」
「なにがだい？」
「おまえさんがた主従を、ひとりずつ離して調べる。ひとりずつというのが、気に入りませんな。なにか嫌疑をかけられたのじゃ」
「そんなバカなことがあるもんか。おれたちはなにも悪いことをした覚えはないんだ」
「だとすると、いよいよおもしろくない」
「なんだと？」
伊之助は、つっかかるように声のほうをにらんだ。
「お嬢さんは少しきれいすぎるでな。それに、目が見えない。とんだいたずら者がいなければいいが――」
「黙らねえか、畜生！　かりそめにも、ここは船番所だぞ。役人がそんな、そんなまねを」
「いや、船番所には違いないが、ここはただの船番所ではないようだ」
天神ヒゲはいやに落ち着いている。――そういわれれば、ただの船番所ではない。悪人どもの巣窟なのだ。
「どうして、おまえさんにそれがわかるんだ」
「そのくらいのことは、すぐわかりますじゃ。――船着き場から城下町にはいるところに、新しく大木戸ができていた。そばには番小屋がある。夜になると、あの木戸がしまって、不寝番が立つのだろう。つまり、この藩では外から入れたくない者があって、用心しているに違いない。入れたくない者、それは江戸の者だ」
「うむ」
「この番所の門をはいったところに、うまやがありましたな」
「あったよ」
「三頭のウマに、みんなクラがおいてあった。はいっては困る江戸の者が、むりに木戸を破ろうとすると、そのウマがいつも城内へ駆けつける伝騎となる。してみると、そのはいりたがっている江戸の者というのは、相当、大きな力を持っているやつだ」
「なるほど」
「こんなに用心をしなければならないのは、

この藩が、謀叛をたくらんでいるか、お家騒動でもあるか——謀叛なら江戸公儀の隠密がこわい。お家騒動なら江戸屋敷の反対派がこわい。どっちみち、こわがって用心しなければならないのは悪人にきまっていますじゃ」

「——？」

「その悪人の玄関番ども、おもしろ半分に、どんな調べ方をするかわかったものではない。番人というものは、とかく退屈しますでな。どうも、娘さんは少しきれいすぎる」

「おい、おまえはただのネズミじゃないな」

うすっとぼけたつらをしていながら、よく目が届いている。柄にもない大金を持っているし、こいつ、たしかに肩書きのあるやつか、でなければ、自分で今いった江戸の隠密と、伊之助は天神ヒゲのすわっているあたり、じっとにらみながら、やみに心耳を澄ました。

「わしも、おまえさんを、ただの巡礼さんとは見ていなかった」

相手がニヤリと笑ったらしいのを、伊之助は語気で感じる。

（こんちくしょう、おれたちを何と見たろう？）

が、それより、天神ヒゲが何をしたがっているのか、できるだけ相手にしゃべらせて、その素性をかぎ出す必要がある。

「よし、話は早いほうがいい。おまえさんの考えを聞こうじゃねえか」

伊之助は意気ごむように、ひざをすすめた。ゴトゴトといそ風が雨戸を鳴らしている。

「まず、この座敷牢を一刻も早く出ることだな。おまえさんとふたりならぞうさもあるまいが、あの娘さんは藤四郎らしい」

「うむ」

「おだやかに調べられている間はいいが、なにかいたずらでもされるようだと、転倒して、うっかりにせめくらがばれる恐れがある。そうなると警戒が厳重になってしまうから、その前に仕事をしてしまわなければなりませんて」

「——」

恐ろしいやつ、いうことがいちいち急所をついて来る。そのくせ、相変わらずのんびりと茶飲み話でもしているような調子だ。よっぽど、はらのすわったやつらしい。伊之助はゴクリとなまつばをのみこんだ。

「この船番所には万一に備えて、相当の侍どもが詰めているが、見えない敵に備えているのだから、退屈する。ことに、夜は船が着きませんからな。たぶん台所へ行くと、酒が隠してあるじゃろう。おまえさん、ここを出たら、台所へ行きなさい。一服盛っておいたほうがつごうがいい。薬は持っていなさるだろうな」

「そりゃ持っている」

「それが済んだら、船着き場、つまり木戸の外へ出て、船のほうへちょうちんで三度丸を描いてもらう。わしの子分どもが四人出て来るはずじゃ。それを案内して、ここの玄関で待っていてもらいましょうか。ちょっとむずかしい仕事だが、おまえさんなら、できますじゃろう」

「たぶんね」

伊之助はムカッと来た。人を子ども扱いにしやがると思ったのである。が、百合を助け出すまでは、けんかもできない。

「で、おまえさんはどうするんだね」

「わしは娘さんを引き受ける。ちょうどおまえさんがたが玄関へ忍び込んだころ、娘さんを連れて出るようになると思うから、うまやのウマを用意しておいてもらいましょうかな。その辺のところは、わしのやり口を子分どもはよく知っていますで、如才なくやってくれると思いますじゃ」

しごく簡単に、ひとりできめている。

しかし、こんなおおざっぱな打ち合わせで、はたしてうまく事が運ぶだろうか？　たとえば、夜番の侍たちが酒を飲まなかったらどうなる。こっちが玄関へ忍び込む前に、百合の身に危険が迫ったらどうする。そう疑って来ると限りが

ない。
「おまえさん、きっと娘のほうは引き受けてくれるのか」
念を押さずにはいられなかった。
「まあ、おまえさんの腕から見せてもらいましょうよ」
天神ヒゲはけろりとしている。こっちが疑うなら、そっちこそあやしいものだといわぬばかりだ。いわれてみると、なるほど、どっちが失敗しても命がけ、信じ合わなければ、いっしょに仕事はできない。伊之助は一本やられた形である。
「よし、じゃ始めるぜ」
こうなれば度胸くらべ、腕くらべだ。こんちくしょう、驚くな——伊之助はえりに差してあったつまようじを抜きとって、たちまち牢のとびらの錠に手をかけていた。コトリとも音をたてない。
(ふん、どんなもんでえ)

錠をはずしてスルリと座敷牢を抜け出したサルの伊之助——だが、これからが、ちょっとめんどうだ。まるっきり、かってを知らない家なのである。

そのころ——
小鈴は国家老鷲塚主膳の寮へ呼ばれて、老梅を踊っていた。
国もとの実権をひとりで握って独裁している主膳は、夜は城内の窮屈な自邸より、たいていこの町方の寮へ寝泊まりしている。自由でおもしろいからだ。権勢にこびようとする藩士たちが、ちゃんと心得ていて、町方からより抜きの美妓を集め、毎夜酒池肉林の宴を張って、あたかも家僕か幇間のごとく、ごきげんを取ってくれるのである。
美妓たちはどうしたらこの人の寵を得られるかと妍をきそい、取り巻きの侍はなんとかしておのれの才能を認めてもらおうとしておヒゲのちりを払うのだ。おもしろいわけである。
が、主膳はいつもおもしろくなさそうな顔をしていた。そのほうが、いっそうおもしろがってもらおうと人々がいっしょうけんめいになるからである。
(いやなやつ)
小鈴は踊りながら、もうすっかり主膳のはらを見抜いていた。
伊賀半九郎の口車に乗ったと見せて、小鈴がいっしょに丸亀へ着いたのは一昨日だった。
——宇都谷峠で大西虎之助のにせ桃太郎侍を追った一味の者が、面目なげに見のがしたといって引き返して来た時、半九郎は、
「それ見ろ、やっぱり江戸へ帰ると見せて桃太郎侍は峠の若殿を追ったのだ」と主張し、いよいよ谷底にそれらしい死骸がないとわかると、
「桃太郎侍が、ひそかに助けて逃げたに違いない」と、断定した。
「きのどくだが、あねご、こうなってはもう許せぬ。目につき次第斬るから、そう思ってくれ」
半九郎から改めていい渡された。おそらく、そういえばきっと丸亀までついて来るという半九郎のはらだったのだろう。
「ようござんす、女の真実をふみにじった憎い男、伊賀さんの手は借りません」
承知で小鈴がその手に乗ったのは、——どうしてもあの人が死んだとは思えなかったからである。生きていれば必ず丸亀へ来なければならぬ若殿なのだ。いっそ、あの人のために、乗ったと見せて一味の陰謀をできるだけ探り出しておいたら、万一の時の役に立つだろうと考えたのである。
(頼まれもしないのに、命がけの隠密役をかって買って出るなんて)
いや、買わずにはいられない自分のいちずな恋心が、われながら小鈴にはいじらしかった。どんなにかってなまねをされても恐れない心、——そのかわり、あたしはあの人をほかの女に

とられたら、かわいさ余って殺さずにはいられないかもしれないと思うと、時々恐ろしくなることさえある。そんな思い詰めた気持ちで丸亀へ着いた小鈴だから、

「一度主膳に会っておいたほうがよかろう」

今夜半九郎にすすめられた時も、おとなしく承知したのだ。

半九郎は、

「江戸の踊りの師匠、坂東小鈴です」

と、主膳に紹介した。

「うむ」

主膳はうなずいたきりである。小鈴は土地の女たちのように酌をしたり、おせじを並べたりはしなかった。

初老を過ぎたばかりのあぶらぎった顔、心おごって人を人とも思わぬおうようぶった態度、ことに、おもしろがっているくせに、わざとおもしろくなさそうな顔をしているろうかいさが、かんにさわるのだ。

小鈴は末席にすわって、そっぽを向いていた。寄ってたかって主膳を喜ばせようと必死になっている中で、たったひとりそっぽを向いている小鈴のいじっぱりな姿は、明るい灯かげを受けて、いっそう目につく。

「伊賀、踊らせろ」

ついに主膳が、ふきげんそうに、あごをしゃくった。

「ハッ」

人の悪い半九郎は答えながら、——ヒヒおやじめ、とうとう負けたなと思った。

権威と金にあかせて選んだ美妓たちである。土地の芸者も美しくないことはない。

が、江戸好みのいきいきと、みがきのかかった小鈴の美貌は、だれの目にも群を抜いていた。ことに、女としてはうれきった膚の白さなめかしさをおもわせて、洗練された着こなし、いきな髪形、いじになってそっぽをむいている姿は、ごきげんとりに恐々としているようなおしろいの濃い女たちにくらべて、生きた女の新鮮さを感じさせるにじゅうぶんであった。

おもしろくなさそうな顔をしていながら主膳が一目で強く心を引かれているのを、半九郎はちゃんと知っていた。知っていて、お酌をしろとも、踊りをお目にかけろとも、あえてきげんをとるようなまねはしなかった。さんざんじらしておいたほうが、つごうがいいのである。

土地の美妓たちの地方で、小鈴の踊りが始まった。

女にはまた女たちのいじがある。

(ふん、渡り芸人のくせに、いやにお高くとまっている女)

ひき負かしてやろう、うたい負かしてやろう、何かわらってやるところでも見つけたらというはらがあるから、地方は気をそろえて、いっしょうけんめいだ。

(おや、張り合うつもりだね)

小鈴は胸の中でせせらわらった。が、一度踊りにかかると、根が好きで血の出るような修業が苦にならなかった女である、すぐいっさいを忘れて、踊りそのものになりきってしまうのだ。自然に手足が動く。差す手引く手、姿態いっぱいに流れて移りかわる艶冶な生きた線の躍動、技神に入るとでもいうのだろうか、急所々々を踊り込まれて、まず地方たちが引き回されて来た。

取り巻きの侍はわかるもわからぬも、初めから目もあやな美女の舞い姿にうつつをぬかしている。

おもしろくなさそうな顔をして、見るでもなく、見ないでもなく、脇息によりかかっていた主膳さえ——いや、その主膳がいちばん引きつけられているのかもしれぬ、時々見上げるどんらんな目が、火のように燃えているのだ。

(フフフ。さぞ、あとがうるさかろう)

冷静なのは半九郎ひとりだ。——行列が室に泊まって動けないのは、若殿の生死が知れない

証拠だ。その生死は、半九郎にも今のところまだ疑問だが、この二、三日のうちに行列が動かなければ、十中の八、九まで若殿は死んだか、大ケガをしたか、とにかく、無事ではいないと見ていい。万一、無事で単身乗り込んで来るようなことがあっても、江戸の者はいちいち自分が調べてからでなくては入国させないようにと、番所々々へ厳重に申し渡してあるから、必ず見破らずにはおかないのだ。

が、なんといっても、その生死のほどをこの目で見届けられなかったのは、あれだけ手を尽くしておきながら、やっぱり不覚であった。主膳のきげんがよくないのである。そのふきげん封じに、今夜小鈴を利用したのだ。

むろん、半九郎が一度こうと思った女、主膳などにゆずろうとは毛頭考えていない。ただ二、三日の間、主膳の心を若殿から小鈴のほうへ移させておけば目的はたりるのだ。

どうやらそれが思うつぼにはまったらしい。

（美人というものは、まるで毒薬のようなものだな）

半九郎は感心して、ひそかに小鈴と主膳を見比べていた。

「伊賀先生――」

背後からそっと呼ぶ者がある。

「番所から調べ書が届きましたが」

「うむ」

半九郎は人目につかぬように、脂粉と酒の香の濃い広間をすべり出た。

「――？」

ジロリと主膳が見たようだが、別に声はかけぬ。刻々に届く番所々々の江戸の者調べの報告書を、いつもは自分も見なければ承知しない用心深い主膳だが、今夜はすっかり小鈴に魂を奪われているらしい。

百合は港奉行鷲塚大学の前へひきすえられていた。公式の場所ではなく、奥まった居間だ。

奇怪にも大学は中間に酌をさせて杯をあげている。酒を飲みながら人を調べるという法はない。しかも、大学はまだひと言も口をきかぬ。

ジロジロとあやしく、百合のからだじゅうを見まわしている。色彩にとぼしい巡礼姿だが、おのずとみなぎる若さはおおうべくもなく、伏せた顔の端麗さ、ぶしつけな視線を恥じて困惑している処女のふぜいは、世にも不思議ななまめかしさである。

（これで目があいていたらな）

大学は思うのだ。いや、めくらでもこれに比べるきりょうはちょっと類がない。なによりこの娘には、におうばかりの気品がある。ともすれば気品には冷たさがともなうが、これは真夏に咲きほこる谷間の白ユリ、そういったゆかしい情熱を深沈とたたえて、見れば見るほど輝いてくる美しさだ。

「ねえさん、名まえはなんというんだね」

主人の気持ちをのみ込んでいるらしい中間がきながら、ニヤリと大学の顔を見た。

「久と申します」

百合の声は、細かった。単なるお調べではない。酒興のサカナにされているのだ。ジロジロとみにくい男の視線をうけているだけでも、深窓に育った百合には堪えきれぬ屈辱だ。それをじっと忍んでいなければならぬ立場が悲しい。

「お久さんていうのか。いい名だな。おまえさんは江戸の大店（おおだな）の娘さんだそうだが、何か芸事をやったことがあるだろう。ひとつ、歌でもうたって、だんなにお聞かせしねえか」

中間はまたしても主人の顔色をうかがった。大学は知らん顔をしている。それを望んでいる証拠だ。

「あの、お調べと申しますのは、よろしいのでございましょうか」

百合ははっきりと顔を上げた。軽く目を閉じた長いまつげ、とおった鼻筋、朱のくちびる、怒りをたたえて息づく胸乳のあたり、――相手

をめくらと思い込んでいるから、大学の凝視は露骨に燃えていた。

「なあに、調べなんかあとでいいんだ。だんなはご家老様のご一門、この番所のことは、だんなのツルの一声でどうにでもなるんだ。御意にかなっておいたほうが身のためだよ」

「お調べがなければ、わたくし戻していただきます」

「そんな強情を張らずに、まあ一つお酌をして差し上げたらどうだね、だんなにかわいがっていただけば、またねえさんの気持ち次第で、どんな身分にでもなれるというもんだ」

「――――」

なんというけがらわしい！　百合は思わずくちびるをかみしめたが、――昔は知らず、たかが巡礼のかたわ娘と思い込んでいる下郎には、百合の悲しさは通じない。

「このご城内では、だんなに頭を上げられる人は幾人もないんだ。それほどのお家柄なんだぜ。おれは悪いことはすすめないよ。だんなはこれで少しお気が短いほうだからね、一度おかんむりを曲げてからでは、まにあわない」

「わたくし、戻していただきます」

もう、がまんができなかった。百合は前後の考えもなくつと座を立つ。こんなところにいるくらいなら、まだあの座敷牢のほうがましである。

「ああ、どこへ行くんだ！」

中間がオオカミのようにおどりかかって来た。

「無礼な！――伊之助、伊之助！」

「いくらわめいたって、だれが来るもんか」

背後から抱きすくめようとするのを、百合はとっさに投げ出した。

「アッ、このあま！」

その間にスルリと、ふすまの外へ脱けようとしたが、

「どっこい――！」

あけた廊下からまたひとり――多少体術の心得はあっても、非力の娘のやせ腕、大の男ふたりには敵すべくない。たちまち取って押えられて、うしろ手に縛り上げられてしまった。

「畜生、味なまねをしやがって」

甘く見て投げ出された中間が、憤慨しながら手荒くそこへ百合を引きすえた。引きすえられた百合は、なわ目に身の自由を失って、解け乱れた黒髪をあげるすべさえなく、がっくりうなだれて、あらしのような息を肩にはずませている。

「どうなさいます、だんな」

中間はむっつりと杯をあげている大学にきいた。

「助造、夜詰めの者どもにサカナをつかわしたか」

「へえ、みんな大喜びで一杯始めました」

答えたのは加勢に飛び出したやつである。

「そうか。きさまは奥へだれも通さぬように見張っておれ」

「へえ」

神妙に出て行くのをけはいで聞きながら、百合はもう生きたそらはなかった。

見張りまでつけて、初めからたくらんだ仕事なのである。なんという無法な鬼、いっそ今のうちに舌をかみ切って死ぬべきではないだろうか？

「糞造、そやつは多少体術の心得があるようだ。顔をあげさせろ」

「へえ。――やい、つらを上げろ」

投げ出されたやつが、じゃけんに髪へ手をかけてグイと引き起こした。

「おや、だんな、この女は目がなおりましたぜ」

「アッ」

急いで顔を伏せようとしたが、まにあわない。今の激しい争闘で、いつの間にか目の細工が取れているのだ――もうしかたがない、百合は涼しい目に恨みをこめて、じっと大学の酒にあか

らんだ顔をにらみつけた。
「さては、あやしいやつ――！」
両眼が生き返って、さんぜんと輝きを添えた美貌に、大学は思わずうめいた。むろん、あやしい素性より、類のない美しさに強く心をひかれているのだ。
「おまえは何者だ」
「――――」
百合は答えない、調べるのが目的でない男に口をきいても、ムダである。
「その目はどうしたのだ」
「――――」
「返事をせぬな。――よし、返事をしなければ、からだにきいてやるぞ。粂造、かまわぬ。その女を裸にして、持ち物を調べてみろ」
野獣のような大学の目がギラギラと輝く。
「無礼でしょう。お調べなら、なぜお調べのようになさいません」
「黙れ！　粂造、早くしろ」
「へえ」
下素下郎に人情などはない。おもしろ半分に、いきなり、えりへ手をかけて来た。
「あ、何をする」
百合は必死にもがきながら、――夫のほかに見せてはならぬ女のはだ、野獣のような人非人の目にさらされるくらいなら、いっそ死のうと、目のまえが急にまっくらになって来た。
「若様！――」
最後に出たことばはそれである。
突然、ガラリとふすまがあいた。
「これはなんのまねだ、大学さん」
伊賀半九郎である。――三人の調べ書の中に不審の点があったので、寮の酒席から馬を飛ばして来たのだ。
「――？」
半九郎の渋い顔ににらまれて、さすがに大学はうしろめたい。粂造は恐れて、コソコソすみのほうへかしこまった。

肩のあたり白々となかば衣紋をかきむしられた百合は、胸をかばうようにうつぶして、見るも無残な姿だ。畳に乱れた豊かな黒髪が、荒い息づかいのたびに、生き物のようにふるえている。
「大学さん、これは調べ書にあった巡礼娘のようですな。いったいこの姿はどうしたのです」
ひと目見ればだれにもたいてい想像のつくことだ。許すまじき半九郎の語気である。
「あやしいやつだから調べているのだ。さしつかえないではないか」
一時は醜い野心の不意をつかれてギョッとなったが、大学は日ごろ兄主膳の権威をかさに着て甘やかされつけている。急に太々しい横車を押して来た。
「調べる？――酒のサカナにですか」
半九郎は冷笑した。主膳をさえ一時の傀儡としか思っていないような男だから、はらのない無能の大学など、てんで頭から問題にしていないのだ。
「酒のサカナにではない。この女は、にせめくらを装っているのだぞ」
「にせめくら？」
「そうだ。だから、調べているのだ」
大学はどうだといわぬばかりの顔である。
事実とすれば、なるほど穏やかならぬ話である。半九郎はつかつかと百合のそばへ進んだ。半ばむしりとられてふっくらと肉づき、玉のごときあらわな肩、さすがにその衣紋を直してやって、グイと引き起こす。
なんという端麗な面だち！　思わず目をみはらずにはいられなかった。とり乱れたなわ目の姿を恥じながらも、すでに覚悟したまなざしを伏せて、キッとくちびるを結んでいる。清浄そのもののようなおもわに一点の曇りさえなく、これこそ教養ある処女の美しさの極致だ。とうてい小鈴には見られない気品をおのずと備えて、春のそよ風にもたとえたいゆかしさなまめ

かしさ。——無残にふみにじろうとした大学の分に過ぎた野心が、むしょうに腹だたしくさえなって来た。

それにしても、どこかで見た顔。半九郎は黙ってなわ目を解き始めた。

「伊賀、何をする！」

大学がわめいた。

「この娘が変装しているようでは、ほかのふたりもあやしい。拙者がつれていって調べます」

「ならん！　ほかのふたりはかってだが、その女はわしが調べているのだ」

「酒に酔っていては危険ですからな。まあ、任せていただきましょう」

「よけいなことをいうな。ここはわしが預かっている船番所だぞ」

「船番所は女をなぐさみ物にするところではありますまい」

半九郎はいじわるく嘲笑した。——無能なきさまなどにはこの女は過ぎ物だというはらがある。そういえば、あれほど執念だった小鈴のことを、いつの間にか忘れている半九郎であった。

「いったな、おのれ！」

そのけはいを自然に感じて、せっかく手に入れかけた珠を横どりされるような気がしたのだろう、大学は悪魔のごとくフラフラと立ち上がった。

「血迷ったな、大学さん！」

半九郎の目に冷酷な色がうかぶ。

「返せ！　その女を返せ！」

正気のさたではない。いきなり百合につかみかかろうとする大学の横っつらを、半九郎はピシリッとなぐりつけた。

「やったな、こいつ」

よろめいた大学はもう前後の考えもなく、カッとなって床の間の刀を取り上げた。

「大学さん、斬る気か？」

「斬る！　斬ってやる！」

が、腕まえでは足もとへも及ばぬ大学である。

柄に手をかけたまま、さすがに手出しはできない。半九郎の目に、無気味な殺気が漂っているのだ。ヘビににらまれたカエルのように、足が縮んでしまった。

「たいへんだ！　みなん来てくれ」

主人の大事と見た中間が、不意に飛びつくようにふすまへ手をかけたとたんに、そのふすまが外から開いて、

「ワーッ」

粂助は絶叫しながら、おおげさにのけぞったのである。

「半九郎、国もとにも、たのもしい味方がそろっているようだな」

醜い争い、濁った空気に身の置きどころもなく、じっとさしうつむいていた百合の耳へ、片時も忘れられないさわやかな声が聞こえた。思わず声のほうを見上げる。

アッ！　宗匠頭巾十徳姿の梅月、——が、天神ヒゲがない。浅黒い顔のしみも、いつの間にかぬぐわれて、白皙の面だち、おうような中にも強い意力を深沈とたたえている涼しい目、疑うべくもない若殿だ。十中の八、九、死んだとばかり思っていた若殿！　しかも、あの梅月が若殿の変装だったとは！　が、それを考えている余裕は、今の百合にはない。

「若様——！」

からだじゅうの血が一時に燃えて狂わんばかり、百合は飛び立つように駆けよって、その足もとへ身を投げ出していた。人目がなかったら、そのたくましい胸に顔を埋めて思いきり泣きたい。こんなに死ぬほどの苦労をしているのはだれのため、それならそれとなぜ船の中ででもたったひと言打ち明けてくれなかったのだろう？　恨んでやりたい責めてやりたい。いや、それにも増してうれしいのだ。もういつ死んでもいいと思う。知らず知らず涙があふれてきた。

「おお、若殿——」

一瞬半九郎はギョッとした。ずいぶん思いき

ったことの好きな若殿だが、まさかたったひとりで、こんなところへ現われようとは、さすがに思いがけない。——そうか、思い出したぞ、あの巡礼姿は伊織の娘百合、そういえば、小梅の下屋敷では百合之助としてついていたはず。

「これはこれは、ようこそご無事にてご入国、存ぜぬこととは申せ、お出迎えもつかまつらず、失礼いたしました」

半九郎はたちまち冷静に返って、いんぎんに座についた。——飛んで火に入る夏の虫、しかも二匹まで網にかかろうとは、意外なもうけものである。

「伊賀、だれだ、あれは！」

あっけに取られていた大学が、小声になってきく。

「江戸の若殿新之助君にござります。おすわりなさい、大学さん」

「なに、若殿——？」

ハッとして見直したが、おのずと備わる天稟の威にうたれて、大学はしぶしぶとすわる。すわりながら、

「すると、あの娘は——？」

まだ百合が思いきれぬらしい。

「江戸家老神島伊織殿の娘百合、あきらめたほうがいいな。お命がけの道中にさえ手放しかねてのお供、若殿のお情けがかかっていたのでは、家来の手はとどかぬ」

聞こえよがしに嘲笑する半九郎、——急に忿怒が燃えてきた。跡目さえこっちのものになれば、命までもとは考えていなかったのだが、百合を見てしまった今、どうもそうはいかぬ。激しいしっとを感じるのだ。

「若殿には、宇都谷峠以来おそろいのご道中でございましたか？」

「そんなことは、そちのほうがよく存じているだろう。宿場々々の手配り、さすがは半九郎の采配とほめてつかわす」

あざやかにかわされて、しかもその采配の裏をみごとにかかれているのだ。一言もない。

「いや、てまえどもがおケガのないようにと、陰ながら手配りつかまつりましたのは、若木家の若殿としてのお身の上、——まさかに、江戸の俳諧師梅月とにせめくらの巡礼娘が、ご当主様ご重体のお見舞いをかこつけて、みだらがましい旅寝の夢をたのしんでまいろうとは、思いも及びませんからな」

負け惜しみながら、思いきった憎まれ口だ。

「無礼でしょう、半九郎」

たまりかねて百合がすわり直った。身の恥ずかしさより、志すぐれた潔白の人に対して、不義の汚名は申しわけない。

「若様は若様、百合は百合、きょうまでずっと別々の旅です」

「さよう、別にだれも見ていたわけではありませんからな。——江戸家老神島伊織殿の陰謀がかく明らかになった以上、失礼ながら、お覚悟願わなければなりません」

半九郎は正面を切って、たいへんなことを言いだした。

「父の陰謀——？」

百合は目をみはった。

「さよう。ご当主様はお国もと万之助君にご家督ありたき旨、このほどより再三江戸表へ申し達してあります。ひとり伊織が反対しているのは、おのれの娘を若殿におしつけ、藩政を自由にしたい、そういう野心があった。——さればこそ、このたびのおふたりのご道中、伊織殿にとっては思うつぼだったでしょう。いや、親子なれあってのみごとなしばい、感服のほかござらぬ」

底いじ悪く冷笑をうかべながら半九郎はことさらにみずみずしい百合の姿を見まわすのだ。

「無礼な！　百合に、百合にそのようなよこしまな心が——」

思いがけない言いがかりである。正直な百合は何と答えていいのか、思わず絶句してしまっ

た。

父にも自分にも、そんな野心はむろんあるべきはずはない。自分がこうして慕ってきたのは、ほんとうの若殿ではなく、桃太郎侍その人だといえば、一言で明白になることだが、それがいえないのである。いえないとすれば、ほかに弁明のしようはない。つつましかるべき女の身で、ただ一筋に恋いこがれ、前後の考えもなくお跡を慕って来たのが悪かったのだ。自分ゆえに、あらぬ汚名をきせては、父にもこの人にも申しわけがない。

「若様、百合の心得違い、どういたしましょう」

つい、娘心の思案にあまって、泣き伏してしまった。

「なるほど、美人には、そういう手もありますからな」

半九郎は追撃の手をゆるめなかった。ここでふたりに不義陰謀の名を負わせられれば、これに越したことはないのである。

「半九郎、弱い女子など、そうひどく責めぬものじゃ」

若殿がおっとりと口を入れた。

「男は男同士ということがある」

「御意」

まさに一本である。半九郎は挑戦するように向き直った。

「江戸以来の道中すごろく、おもしろかったぞ。おかげで、退屈することもなく、どうやら上がりに近くなった」

「さようにござります。失礼ながら、このすごろく、半九郎の勝ちにござりましょうか」

「賽を振ってみねばわかるまい」

若殿は平然としてわらっている。死地に入りながら、こういうのを大名気質というのか、無神経というのか、半九郎はムラムラッと冷酷な敵愾心をあおられてきた。

「若殿がお待ちになっている賽の目というのは桃太郎侍のことでございましょうな」

「なんだ、その桃太郎侍と申すのは？」

「呉服商伊勢屋久右衛門下男伊之助と名のって座敷牢の錠を破った男、おおかたその辺に隠れているのでしょう」

「ほう。——まあよい。そちの賽の目は？」

「お目にかけましょう」

半九郎は堅くなっている大学に目くばせした。心得て大学が床の間の鈴を鳴らす。

「夜詰めの者を呼ぶのか？」

「御意。ご窮屈でも、しばらく楽屋入りを願わなければなりませんでな」

廊下に人の足音がする。

「若様——！」

ハッと百合はひざ立ちになって、われにもなく若殿のそでにすがりついた。

ふすまがあいた。

「アッ」

半九郎が驚愕の目をみはる。顔を出したのは意外にも、上島新兵衛と小ダルマの助之進であった。

「若殿、お申しつけのご乗馬のおしたくができましてございます」

飛び立つような喜びの目を輝かして、声さえはずんでいる。

「うむ。——半九郎、どうやらこの目はわしのほうへ出たようじゃ。いずれ改めて、上がりの賽を争おうぞ」

その若殿のおうような顔を、半九郎、無念そうにじっとにらんでいた。

虎穴

「ひでえや、だんな」

あとでサルの伊之助が恨んだ。

「江戸の梅月だなんて、それならそうと、なぜあっしにだけでも打ち明けてくれなかったんです。宇都谷峠の谷へ落ちたと聞いたんで、どんなに心配したかしれやしねえ。そりゃまあいい。

あっしはどんなことがあったって、だんなはめったに死ぬような人じゃない。きっと生きていなさると信じていたからいいが——はじめて会ったのは、たしか岡部の宿でしたっけね。いきなりお嬢様のにせめくらを見抜いたようなことをいわれた。驚いたのなんのって、あっしはてっきり敵の回し者か肩書きのあるぬすっとと思ってしまった。けど、お嬢様のにせめくらは役者がへただったが、だんなの梅月はうまく化けましたね。あっしでさえ、ちっともわかりませんでしたぜ」

「そうだろう。あれはほんとうの役者にくふうしてもらったのだ」

桃太郎侍はわらった。

「へえ、ほんとうの役者にね」

「きさま、岡部の宿で、旅役者のことをきいていたではないか」

「そうそう、あの晩峠越えをして、半九郎の網にひっかかったってえやつ」

「あれを捜そうとしたのは、さすが伊之助だ。——わしは斬った敵と重なるようにして谷底へ落ちたが、一度木の枝ではずんで落ちたので、かすり傷ぐらいしか負わなかった。で、急いで敵の死骸を人目につかぬ穴の中へ隠しておいて谷を抜け出した。そこへあの旅役者の連中がブツブツいいながら通りかかったのだ」

「わかった。その連中に頼んで、いっしょに逃げたんでしょう！　ことによると、そうじゃないかと、あっしも考えたんです」

「うむ。別に、たいした傷はないが、足が少し痛む。あとで調べてみると、右のふとももを弾丸でかすられていた。ちょうど、あの連中が岡部でしばいをしているというので、頼んでその小屋へ三日寝さしてもらったのだ。座がしらというのが江戸の男でな、すっかり長兵衛をきめこんで、よくせわをしてくれた」

「嵐鶴十郎とかいいましたね。なるほど、本職に習った変装じゃかなわねえわけだ。それから金毘羅船で出あって、座敷牢ときた。あっしが船着き場へ脱け出してちょうちんで合図をすると、船の中から出て来たのが上島さんたち四人でしょう、——いきなり、若殿はどこにおいであそばすと取り巻かれちまった。さあ、あっしにはわからねえ」

「そうだろうな。あの四人には、金毘羅船へ乗る前に、船頭に金をやって船底へ隠してもらえと手紙でいってやったのだ」

「そうなんですってね。だから、ちょうちんで合図をしろとおまえにいいつけたのが若殿だというんでしょう。それでも、まだあっしにゃよくのみ込めない。のみ込めねえがお嬢様のことが心配になるんで、四人を案内して木戸の番人を縛りあげ、船番所へ来てみると、夜詰めのやつらはうまく酒を飲んでくれたから、みんな伸びている。伸びていねえ下郎は四人のだんなが当て身を食わして、早いとこウマをぶんどってしまいました」

その中の一頭は、伊賀半九郎が主膳の寮から乗って駆けつけたやつで、——夜詰めの者は倒され、馬は敵にとられてしまう。その夜の半九郎はさんざんの敗北であった。

が、敗北と知って見苦しく悪あがきをするような男ではない。

「さすがに、おみごとでございますな。半九郎め、お玄関までお見送りつかまつりましょう」

あおくなって震えている大学をしりめにかけ、ゆうゆうと玄関まで送って出た。相手は百合に伊之助を加えて七人、——やるならやってみろ！　といわぬばかりの半九郎のつらがまえである。

「半九郎、見送り大儀」

若殿はおうように会釈して、——玄関先にひき出してあるのは、半九郎が乗って来たのを加えて四頭。これに七人が乗って、船番所から城内へ急報が届く前に、三の丸内の城代家老右田外記の屋敷まで駆けつけなければならない。

「百合、これへ」
ひらりと一頭にまたがって、上から若殿は百合のほうへ手を出した。
「はい」
恥じらいながらそばへ寄るのを、身をかがめてすくいあげるように軽々とくらつぼの前へ抱き上げ、
「五郎太、道案内いたせ」
りんぜんと命じた。
「ハッ」
答えて橋本五郎太が先駆する。
次は若殿と百合。
「駆けさせるから、落ちぬようにしっかりつかまっておれよ」
「は、はい」
百合はたくましい胸にすがって、人目を避けるように顔を伏せる。——半九郎がじっとその姿をにらんでいた。
続いて上島新兵衛と、のっぽの大西虎之助。

残りは小ダルマの助之進に伊之助だ。
「ねえ、だんな」
伊之助が助之進の腰につかまりながら呼ぶ。
うれしくてしかたがないのだ。
「どうも、たいした殿さんでござんすね」
「うむ。お勇ましくいらせられる」
「ただ勇ましいだけじゃござんせん。どうです、今夜の計略は。伊賀半九郎ってやろう、手も足も出なかったじゃございませんか。えへ、ざまあ見ろってんだ。——それに、だんな」
「うむ」
「お百合様の顔ってありませんでしたぜ。無理はありやせん。おひとりででもあとを追いかける、死んだってかまわない——」
「これ、若殿のおうわさは口にするな。恐れ多い」
「へえ、恐れ多うござんすかね。けど、ほめるんだからようござんしょう。どうもたいした大将だ」

「舌をかまぬようにしゃべれよ」
聞いていて助之進も決して悪い気持ちではないのだ。意外な若殿の出現、しかもみごと難関を突破して今や敵の牙城へ迫ろうとしているのだ。
（ただ少しご気性がすぐれすぎる）
やむをえなかったにせよ、とかく自分の力量に頼りすぎて、なんでもひとりでなさろうとするのが、家来としては心配の種なのだ。
こうして、夜の城下を疾駆した四騎七人は、無事に外記の屋敷へ着いた。それとわかると、今まで沈黙を守っていた忠義派の者が続々と右田邸へ若殿のごきげん伺いに出る。
二日、三日、四日と表面はまだなにごともないが、ここに国もとは確然と忠義派と陰謀派の二つに対立して、双方油断なく時機をうかがっている。
どっちからも思いきって手の出せないのは、——陰謀派は当主を擁して本丸を占拠している。若殿が病気お見舞いを申し出ても、むろん、ご重態と称して対面はさせまい。
（困ったものだな）
国もとへ乗りこんだうえは、一挙に悪人のしまつをつける気でいた桃太郎侍は、ちょっとあてがはずれて、ジリジリしてきた。
「若、ご短気はなりませんぞ」
おまけに外祖父にあたる外記が——この人のために自分は千代につけられて捨てられたのだが、にせ若様とは気がつかず、老人の大事取り、始終つきっている。少しも自由を許さない。
見ぬうちこそ、この老人を憎んでいた桃太郎侍だが、こうして会ってしまえばやはり肉親である。心から大事にされると、今までほかの者に対して取ったようなかってきままもできかねるのである。
若くて活動的な桃太郎侍にとって、窮屈なにせ若殿の生活は、どうも性に合わない。日ごとにゆううつになりながら、きょうも昼から泉水

のほとりのあずまやへのがれて来た。
さようしからばと、いちいちおじぎをしなければ物をいわない律義な家来たちに一日じゅう見張られていると、全く肩が凝ってくる。近習たちにしてみれば、むろん見張るなどという考えでは毛頭なく、むしろたいくつをさせないようにと、いっしょうけんめいいれかわりたちかわり、お相手に出るのだろうが、その近習たちの前ではうっかり冗談もいえないのだから、かえって迷惑千万である。
（なんとかならんものかな）
桃太郎侍はひとりになって、しみじみと思うのだ。早く片をつけて江戸へ帰りたい。お化け長屋の子どもたちが恋しいのである。無邪気で正直であけっぱなしで、——ずるいやつはずるいなりに、きかないやつはきかないやつなりに、みんなおもしろい、かわいい心を持っている。こっちの出よう一つですぐにその心がピンと相手に通じるのだからたのしい。

（わしのカゼを心配して、観音様へお参りにいってくれたというが）
こうして遠く離れてそれを思うと、胸が熱くさえなってくる。
結局、わしには大名は向かんのだ。氏より育ちというが、わしはやはり千代に育てられて幸福だった。——にせ若殿になってみて、桃太郎侍は心からそう考えるようになった。
「だんな——！」
ふっと、どこからか呼ぶやつがある。ここでだんなと呼ぶのは伊之助よりほかはない。
「伊之助か？」
「へえ。そこへいってもようござんすか。だれも見ちゃいませんか？」
「うむ、だれもおらん、さしつかえない」
返事を聞いて、中間姿の伊之助が横手の茂みの中からそっと出て来た。
若殿が中間とじかに口をきく。そんなことはできないのだ。だから、江戸から百合について

来た中間として一つ邸内にいても、伊之助はめったに桃太郎侍の前へは出られないのである。
「フフフ、若殿なんてものは、思ったより不自由なもんでござんすね」
伊之助は笑いながら、あずまやのすみへうずくまった。——だんながりっぱな若殿になっているのを見るのは悪い気はしないが、こう会うのに不自由しちゃつまらないと、いささか不満なのだ。
「不自由よりたいくつで困る。わしは今、ひとりで長屋の子どもたちのことを、思い出しているところだ」
「そろそろ恋しくなったでしょう、江戸が？」
「うむ」
「そう来なくちゃおもしろくねえ。若殿のほうがおもしろくなったなんていうようじゃ、あっしはだんなを、けいべつしようと思っていたんだ」
相変わらず愉快な男である。この男と話していると、桃太郎侍は不思議にたのしくなるのだ。
「けどね、だんな」
伊之助がちょっと真顔になった。
「あっしは少し心配なんだ」
「何が？」
「あの人は、どうも当分長屋のおかみさんにゃなれません。まあ、あっしがついているから、だんだんによく教えておくが、米の値段は知らねえし、質屋を知らねえし——このあいだなんか、もう一軒借りていただかないと、ばあやや女中のやすむところがありません、とおいでなすった」
「それは、だれのことだ」
「だれのことって、お百合様でさあ。おふろはどうするんだってきくから、銭湯へ行ってみんなといっしょにはいるんだというと、着物を脱いでですかって、変な顔をするんだ。どこの国に着物を着たまま銭湯へはいるやつがあるもんか。あっしのほうがよっぽど変な顔をしちまい

ましたぜ」
「なんで、お百合さんがそんな心配をするのだ」
桃太郎侍はまゆを寄せた。
「おや、変なことをいいますね、だんな」
伊之助が、顔色をうかがうように見あげる。
「だんなは、ちゃんとお百合様と約束したんじゃないんですか？　お百合様は、ほんとうにしてますぜ。江戸へ帰ったら、お嫁にゆくんだって」
「――――」
泉水でコイのはねる音がした。
小梅の下屋敷の穴倉で、そんな話に触れたことは事実だ。百合の心がわからない桃太郎侍でもない。が、いかに当人同士がそう望んでいても、お互いにはお互いの生活があり、境遇身分があるのだ。一生を陋巷に朽ちようと覚悟している自分に、一藩の家老の娘が嫁に来られるものではない。
だいいち、親が許すまい。かりに許したとしても、当人自身、伊之助がいうように長屋の生活になれ、満足して生きて行けるだろうか？　夢を追っているうちは、未知の世界にあこがれる、そんな気持ちで知らない長屋の生活がおもしろくも、美しくも見えるかもしれない。が、いざ実際に当たると必ず幻滅が来る。恋だの、好きだのということだけでは、なかなか実生活は乗りきれない。むしろ実生活はえて、恋だの好きだのという感情をすぐ破壊し去るものだ。
つり合わぬは不縁のもとという、できるなら武家生まれは武家へ――そう思っている桃太郎侍なのだ。百合自身の幸福のために、先の先まで考えている桃太郎侍なのである。
「あまりそんな話相手にはなるな。今から、まだ早い」
「へえエ、はようござんすかね。あっしはまた今から教えておかねえと、あとで当人がまごつくだろうと思いましてね。――それにお百合様、その話だと急に元気になるが、やっぱり心配しいやがる」
「うむ」
「そりゃあっしだが、何かご用でござんすかってきくと、そいつがこの手紙を出しましてね、これを若殿にさし上げてくれ、しかと頼むぞといって、名もいわずに行っちまったんです」
「ふうむ。――どれ、見せろ」
「あっしは、取り次ぎなんか頼むより、こいつは何かいわくのありそうな手紙だ、じかにだんなに手渡ししたほうがいいと思いましてね」
伊之助が差し出す白封筒を受けとって、桃太郎侍は静かに封を切った。
早速ながら坂東小鈴儀、このたび寝返り者と判明つかまつりそうろう条、今宵四つ（十時）を合図に成敗つかまつりそうろう。ご希望あらば生前一目お会わせつかまつるべく裏門よりお忍びなされたくそうろう。もっとも、たってとは申し上げずそうろう。
てるんでさ。家だって黙って出て来ちまったんだし、これからだんなの身はどうなる、事件はどう片づく、そんなことを考えると、ほかに話相手はなし、心配で心細くてたまらねえんでしょう。つい、あっしはかわいそうになって」
「いや、早くなんとか片づいてくれぬと、わしも少しかわいそうだ」
「おっと、いけねえ、肝心な用を忘れるところだった」
伊之助は、思い出したように懐中へ手を入れた。
「何だ」
「いいえね、妙なことがありましたんでね」
「妙なこと――？」
「けさ、あっしがお屋敷の門のそばに立っていると、浪人者らしいやつがそばへ寄って来ましてね、――きさまは右田家の中間かってきくんです。そうだというと、では、この屋敷に伊之助と申す江戸から来た中間がいるだろうってい

こいつは油断できないと、伊之助は思った。
手紙を受け取って読んでみると、簡単ではあるが、なるほど、たいへんなことが書いてある。
「半九郎のいたずらですね、だんな」
署名はないが、伊之助にもすぐわかった。
「うむ、半九郎だ」
「バカにしてやがる。だんなを呼び寄せようっていうんでしょう？」
「そうらしい」
「こんな子どもだましみたいな手に乗ると思ってるんですかね。小鈴を成敗する、——ふん、かってにしやがれだ。こりゃ口実ですよ」
「そうかもしれんな」
「だいいち、あのやろうに小鈴の成敗なんかできるもんですか。だんなに首ったけの女と承知で、わざわざ丸亀くんだりまでひっぱって来たんじゃありませんか。まさか、行きやしないでしょうね、だんな」
「伊之助。きさま、それはだれに来た手紙だと

達筆に書き流してはあるが、これにはあて名も署名もない。
「ふうむ」
桃太郎侍は何度となく、同じ文面を読みかえした。この手紙の裏に隠れているなぞを解こうとして——。
「だんな、なにが書いてあるんです。どこから来たんです」
いつまでも手紙から目を放さぬ桃太郎侍の鋭い顔を見上げて、伊之助は、がまんしきれずにきいた。
「うむ」
桃太郎侍はやっと顔をあげた。
「まあ、読んでみろ」
いきいきとして明るい顔である。何かを決断した時の、——いってみれば、よき敵を得て闘志にあふれて来た時にのみ見られる例のほれぼれとさせられる男性的な顔なのだ。

思うのだ」
桃太郎侍は、ふっと意味ありげにわらう。
「だれにって、だんなに来たんでしょう？」
「きさまは浪人者から、それを若殿に渡してくれと頼まれたと申したな」
「へえ」
「桃太郎侍にというのなら話はわかるが、若殿が小鈴にどんな関係がある。——しかも、こんな手紙をよこして半九郎が引き出したいのは若殿なのだ、桃太郎侍ではない」
「なるほど」
小鈴に何の関係もない若殿が、こんな手紙で引き出されるはずはない。では、なぜ半九郎がこんなものをよこしたのだろう。
「さあ、わからねえ」
伊之助は変な顔をして、もう一度手紙を読み返してみた。
「なるほど、こりゃ桃太郎侍に読ませるような文面でござんすね」
「そうだ。——まだわからんのか？」
「へえ」
「半九郎は若殿と桃太郎侍を同じ人間と見ぬいたのだ。にせ若殿が露見したのだ」
「エッ？」
「少なくとも、そうではないかという疑問を持ったことは確かだな。だから、そんな手紙を書いてみる気になった」
「つまり、この手紙でうっかりノコノコ出て来たところを、にせ者ッとしっぽをつかむ気なんですね」
「まず、その辺だろうな」
「あぶねえ！　けど、どうして、にせ若殿っていう見当がついたんでしょうね。それを知ってるなあ、あっしとお百合様——、そうか、だんな、ひょっとすると、小鈴かもしれねえ」
「いや、あれはそんな女ではない。たとえ拷問にかけられても、白状はすまい」
「あっしもそんな気がするんだが——」

あのお化け長屋で桃太郎侍をにせめくらにして、だましてすっかり本性を見せられて以来、小鈴を見直している伊之助である。やっぱり疑うのはかわいそうだと思った。

「でないとすると、どこからばれたんでしょう」

どこからわかったにしても、にせ若殿が露見したとなると、とうてい命は助からない。だいいち、味方が承知すまいと、伊之助はあおくなってしまった。

「これはわしの想像だが――」

桃太郎侍が英知に輝く目を静かにあげた。

(大将、落ち着いているぜ)

と、伊之助はたのもしくもあるが、事が事だけにやっぱり落ち着けない。なにをいい出すかと目をみはっている。

「半九郎は、百合のにせめくらの細工を見てしまった。あるいは桃太郎侍の眼病もそれではないかと気がついたに違いない。では、桃太郎侍はなぜそんなまねをする必要がある――一方、どうしてもあの晩船番所へ若殿といっしょに来ていなければならない桃太郎侍が、姿を見せなかったばかりでなく、きょうまで丸亀の地を踏んだ様子さえない。万一、鞠子の宿からほんとうに江戸へ引き返したとすれば、小鈴が黙っておとなしくついて来るはずはあるまい。――もう一つは、百合についていた伊勢屋の下男伊之助というのは、お化け長屋で、桃太郎侍の世話をしていた伊之助とわかった。半九郎ほどの奸知、そこまで考えて来れば、もしや若殿と桃太郎侍とは同一の人物つまりにせ若殿ではあるまいかと、一応は疑問を持ってみずにはいまい」

「なるほどね」

「そこで、若殿が桃太郎侍だとして、あらためて事件の推移をもう一度考えてみるのだ。若殿が毒に当たった朝、百合がお化け長屋に桃太郎侍を尋ねている。六郷の渡しでの早替わり、進藤儀十郎を裏切り者として身代わりにたてた細工、宇都谷峠をひかえての小鈴とのいきさつ、

桃太郎侍が若殿と二役つとめていたと見れば、全部のみこめてくるはずだ。――それがこの誘い状になったものだ」

「すると、だんな、半九郎のほうじゃ、まだおおかたそうだろうっていう想像だけで、ほんとうにそうだという証拠はつかんじゃいないんでしょう?」

伊之助が乗り出した。

「うむ。この手紙で判断するとそうだな。きょうまでその証言のできる者は、向こうには小鈴しかない。小鈴を責めてみたが、どうしても白状しないので、こんな誘いをかけてみた。これでつり出されるようなら、いよいよにせ若殿と断定するつもりだろう」

「だからだんな、それほど敵のはらがわかってるんだ、まさかつり出されやしないでしょうね」

「いや、わしはつり出されることにした」

こともなげに桃太郎侍はほほえむのだ。

「冗、冗談じゃねえ。何もこっちからにせ若殿でございと名のって、火の中へ飛び込まなくたって――」

「いや、小鈴を見殺しにはできぬ」

「え?」

「申してみれば、かってに自分から事件の渦中に飛び込んで来た女ではあるが、しかし、それは一つに、わしあるがゆえであった。危険だからといって手をつかねて見ていることは、わしの心が許さぬ」

「――」

その気持ちはわかる。その俠気があるからこそ、こうして桃太郎侍にほれ込んでいる伊之助なのだ。引き止める理由がない。

「畜生、あいつがよけいな心中立てをしやがるから、こんなことになっちまうんだ」

いまさら小鈴の女心が腹だたしくさえなる。

「それに、一度にせ若殿と疑問を持たれた以上、ぐずぐずはしていられぬ。敵がどんなわなをかけておくか、かかると見せて一挙に勝敗を決し

てみよう。成る成らぬは天命だ。虎穴にはいるのは、江戸を出た時からの覚悟だからな」

「だれとだれをつれて行くんです。大西さん、杉田さん、上島さん――」

「いや、ひとりで行くよ。味方にには若殿の仮面をはがれるところを見せて、失望させたくない。――伊之助、だれにもいうな」

「へえ」

「きさまには、あとで頼みたいことがある。にせ若殿と露見したあかつきの、お百合さんの身の上を考えておいてやらなければならんからな」

そうだ。たとえお家のためとはいえ、にせ若殿を承知で作りだした伊織親子、これも問題にならずにはいまい。伊之助は心が寒くなって来た。

その夜、早目に寝所へはいった桃太郎侍は、約束の時間まで短くはあったが、ぐっすりとよく眠った。

勝っても、負けても、おそらくこれが若殿としての最後の夜になるであろう。

勝てばその足でひそかに江戸へたって、伊織に委細を報告すれば役目が済むのだ。

負ければ、――むろん命はない。その時の用意に右田外記にあてた手紙を書いて、証拠の貞宗のわきざしといっしょに伊之助にあずけた。手紙にはおのれの出生を明らかにしてある。貞宗のわきざしは、外記が自分を千代に託したおり、せめてもの守り刀として、右田家重代の家宝の一つを添えてくれたのだという。

「夜明けまでにわしが帰らなかったら、これを外記にさし出せ」

と、伊之助にいいつけておいた。

自分の素性が知れれば、たとえにせ若殿が露見しても、伊織親子の責任が幾分かるくなるだろうし――なんといってもそこは外祖父のこと、手紙に書き添えたお俊の遺児仙吉の将来、伊之助の今後のことは、外記が相当の考慮をしてくれるに違いない。自分としては、ほかに何

も思い残すことはないのだ。

こうと覚悟がきまれば、すぐれた精神力の持ち主である。決して寝そびれたり、寝すごしたりするようなことはない。四つ少し前に、ちゃんと桃太郎侍は目をさました。手早く身じたくをすませて、そっと寝所を忍び出す。

外は初冬に近かったが、南国の暖かい星が美しく輝いていた。邸内はすでに寝入った時分、ひっそりと物音一つしなかった。

(ことによると、生まれた土地へ骨を埋めることになる。――いや、骨はさらされるかもしれん)

桃太郎侍は不思議な気がした。

若殿としてこの屋敷に生まれながら、この屋敷に成長することを許されず、一度は江戸の陋巷に捨てられた身が、意外な事情から、にせ若殿として故郷の地を踏み、この屋敷に起臥する身になって、いままたここを出る因縁の深さを思わずにはいられない。

(因縁といえば、――江戸の兄のその後の病状はどうなったであろうか)

ふと、自分と同じ顔の人を、まぼろしのように思い浮かべてみる。

きっと生きているに違いない。――なぜかそんな気がして来た。同じ母の胎内にあって、同じ魂と、同じ血とを分けて来た兄弟だ。双生児は一方の喜び、悲しみがすぐ通じるものだという。その弟の自分が、なぜか兄は生きているような気がするのだ。――必ず生きているに違いない。

(生きているとすれば、その兄のために戦いに行く。死んでも兄は残るのだ。このからだの一方が残るのだ。思いきって戦え)

喜びにも似た勇気が、闘志が、強く腹の中からわきあがって来た。

泉水の緑の植え込みを回って、やがて裏手の林へかかっていた。この雑木林の奥に裏木戸がある。伊之助がちゃんと錠をあけておいてくれ

たはずだ。
「――！」
桃太郎侍は、はっとそこへ立ち止まった。行く手の木陰に、ほの白い顔が立っている。
「百合――！」
どうして今夜のことを知ったのだろう。百合がただひとり、ひしと双のそでに胸を抱いて、こっちをみつめているのだ。星あかりにも白々としたあおい顔、気のせいか憔悴して、無言の目だけが火のように燃えている。
「若様――！」
激した感情のあらしを危うく制して、百合はやっと、あえぐように呼んだ。
「お恨みでございます、若様」
ほおへ、せきを切ったような大きな涙がスーッとあふれ出て、留めどなく――が、ぬぐおうともしないのだ。
「伊之助から聞いたのか、お百合さん」
桃太郎侍は静かに百合をみつめた――むろん、それに違いない。いわば死線へ飛び込んで行くかどで、百合をちゃんと自分に結びつけて考えている伊之助としては、一目別れを惜しませる、そんな気にならずにはいられなかったのだろう。
「若様は、若様は、そんなにたよりない百合とお思いになっておいであそばすのでございましょうか？」
「――？」
「伊之助が教えてくれなければ、黙って行っておしまいあそばす。そのお心が、悲しゅうございます」
こんなに身も心もささげているのに、まだ隠しだてをする、それが百合にはくやしいらしい。
「いや、よけいな心配をかけたくなかったのだ」
「いいえ、心配はいたします。心配はしても百合は若様の仰せにどんなことでも、さからいはいたしませんのに、――なぜ、打ち明けて心から心配させていただけないのでございましょう」

「わかった、お百合さん」
桃太郎侍は率直に百合の肩に手をおいた。――お姫様、今夜は案外強硬である。それだけ思い詰めているのだ。命にかけて慕ってきた深い娘心、それを無視して、黙って死を賭しに行こうとしたのは、あまりにも無慈悲であったかもしれぬ。
「わしが悪かった。今夜のことは江戸を出る時からの念願、伊織殿との約束を、果たしに行くのだ。決してお百合さんのことを忘れていたわけではないさ。――さあ、こう打ち明けたからは、もうそうすねないで笑って見送ってほしいな」
明るくいって、その肩をゆする。
「若様――！」
百合はいっぱいに涙にぬれた目を見上げて、
「わたくし、覚悟しております」
打ち明けられて気はすんだが、むろん笑うような軽い心にはなれようはずもない。
「覚悟――？」
「はい。若様に、もしものことがございましたら、百合も生きてはいません。お心のすみになりと、いれておいてくださいませ」
それがせいいっぱいの別れのことばなのだろう。そして返事を待っている。生きているうちにひと言呼んでもらいたいことば、それを待っているのだ。必死の目が悲しげに訴えている。
が、今それをいってはならないのだ。
「お百合さんは、まるでわしが死にに行くようなことをいう」
桃太郎侍はわざと軽くかわして笑った。
「わしはそんな弱い男ではない。安心して待っていてもらいたいな」
「でも――」
「でも、死ぬような気がしますか？　そんな不吉なことを考えるものではない。男のかどで、男が命にかけて戦いに行くかどでに、めめしく泣いてはすむまい」

「――！」

さすがに、はっと気がついたらしい。

ただ父伊織との約束を重んずる武士の心意気一つで、なんのゆかりもなく、生死をかけて戦いに行く人だ。泣いてはすまぬ。わがままをいってはすまぬ。それほどこの人を心から慕っているなら、黙って生死を共にすればいいではないか。それが武士の娘、侍の妻としての心がけではないか。――百合は心に恥じた。

「もう泣きませぬ、若様。百合は神かけて――」

ご無事を――といいたかったのだが、突然新しい涙が泉とあふれて来て、やっぱり泣かずにはいられない。われにもなくワッと男のたくましい胸の中へ顔をうずめてしまった。

「お許し、――お許しあそばして」

その嗚咽する肩をそっと抱いてやったのは、深い愛情へのせめてもの心やり、――が、いつまでそうしていたとて尽きる涙ではないのだ。

「いって来るぞ、お百合さん」

桃太郎侍はやがて、決然と身をしりぞいた。

地に泣きくずれた百合、その傷心の姿を強くふりすてて屋敷を出た桃太郎侍は、人足の絶えた侍小路をいくまがり、やがて鷲塚主膳の裏手へかかった。

ちょうど四つの鐘をつき始めている。

(時刻は敵の注文どおりだ)

さて、どんなわなが設けられているか、築地塀の上からうっそうと樹木の枝のおおいたれている邸内は、森閑として想像すべくもない。

どこかで犬のしきりにほえる声が、遠く耳についた。塀についてしばらく行くと、壁に切り込んだがんじょうな押しとびらが目についた。

手紙にあった裏口というのがこれなら、必ず錠ははずれているはずである。

(地獄の門――)

桃太郎侍は不敵な微笑をうかべて、なんのちゅうちょもなく押して、苦もなく内側へ開く。

雑木林が視界をさえぎって見とおしはつかぬ

が、あたりはひっそりと人のけはいさえない。

(珍客を出迎えぬとは、礼儀を知らぬ野人どもだな)

しかし、出迎えはなくとも、そこからつま先のぼりの小道が一筋、木の下やみを縫って、おそらく奥庭へつづくのだろう。遠慮は無用だ。

林を縫ってゆるい勾配を登りきったところで、小道がふたまたにわかれていた。

誘い状をよこすくらいだから、なにか道しるべがあるはずである。見まわす目に、ポツンと意味ありげな灯が右手の林の中にまたたいているのが見えた。

(ほう、味をやる)

小屋か、物置きか、いずれにしても裏切り者を監禁しておく離れ家、そこで対面させようというなぞの灯に相違ない。

なわ目にかけられた小鈴の、青め苦にやつれた姿が目に浮かんで来た。冷酷無残、鉄のごとき伊賀半九郎である。ほれた女であろうと、味方であろうと、意に従わなければ、どんな思いきったことをするかわからない。

しかも、相手はあのいじっぱりな小鈴だ。

せせらわらって、決してすなおに白状などするはずはないから、あらゆる拷問にさいなまれたことだろう。

どんな姿で一目会わせてくれようというのか?――さすが桃太郎侍はひきつけられるように足を速めていた。

(はてな――?)

近づくにしたがって、それは案外風雅に建てられた離れ家とわかった。ちゃんと柴折戸までつくられている。なるほど、ここは小高い丘の上だ。南に夜の海が一望に見渡せるのである。空一面に星が明るく美しかった。

(風雅のために建てた小座敷、――こんなところへ裏切り者を入れておくほど人情のあるやつではない)

いささかあてがはずれて、桃太郎侍は灯の明

小鈴にはわからない。——どうして若様が、いや桃さんが、自分からこんな敵の中へ飛び込んで来たのだろう！　しかも、たったひとりで。

若殿が伊織の娘百合をつれて、城代家老右田外記の屋敷へ着いたことは、小鈴もすぐ聞いていた。

ただ人に聞いたばかりでない。それとなく自分が調べて、——百合は伊之助につれられて、若殿は江戸の俳諧師梅月と名のって、別々に道中をして来たこと、外記の屋敷にあっても、若殿はめったに百合や伊之助をそばへ近づけない、そんなことまで知っていた。

それを調べなければ、生きている心のしない小鈴なのだ。

（ほかの女にあの人をとられるくらいなら、きっと殺して自分も死ぬ）

ちゃんと心にきめている小鈴だ。

「大事を果たして江戸へ帰ったら、返事をする」

品川の宿でも、鞠子の宿でも、そう誓ったあるい庭先のほうへまわっていった。

足音を聞きつけたか、スルリと障子が一枚あく。

「伊賀さん——？」

庭をすかして見るようにして、アッと一瞬立ちつくしたのは小鈴だ。無残なな わ目の姿ばかり想像して来た目に、——結いたての髪、薄化粧、湯上がりかと思う投げやりなふだん着姿の帯もゆるやかなまめかしさ。これはまた武家娘にはない不思議な魅力である。

「——？」

桃太郎侍も驚いたが、それより驚いたのは、むしろ小鈴のほうだったろう。

「いけない、桃さん！」

「シッ」

「いけません、若様！」

度を失ってあたりを見まわしながら、なつかしさもなつかしいというように、いきなり縁端へ走り出て来た。

の人のことば、——あの人は決して女をだます人ではない。また、女の色香におぼれて、身をあやまるような男ではない。それは、小鈴は堅く信じている。

それにあの人は、大事さえ果たせば、きっと江戸へ帰る人だ。大名の名や、富に執着のあるような人ではない。その男一匹が、

（こころあらば——）

と、鞠子の宿で書いて渡したなぞの文字、みすみす命の綱を自分にあずけるようなまねをして、平気でわらっていたではないか。つつましく口ではいわないが、心に女房ときめていなければ、できないことなのだ。

「だれがなんといっても、あたしの人！」

小鈴は安心しているのだ。

安心していればこそ、何かその人のためになるようにと思って、——今夜もここへ来たのだ。

「主膳が、師匠にぜひ用があるそうだ」

半九郎が迎えに来たのである。

むろん、主膳の心はわかっていた。あの夜寮で、意に従えば栄耀栄華は望みのままだといわぬばかりの口ぶりであった。

「江戸ご府内をあたしの庭に買ってくれれば」

しゃくにさわったから、大きく出てやった。

それっきり、何度迎えに来ても、

「あたしは土地の芸者とは違います。お酒の席のごきげんはとりません」

はっきりとつっぱねて、一度も寮へは顔を出さなかった。

「今夜は酒の席ではない。主膳自慢の屋敷の離れでゆっくり師匠と茶をのみたいといってる」

半九郎がそういうので、わざとふだん着のまま出向いて来た。ふたりきりの対座なら、何か意外なことが聞き出せるかもしれない、そう思ったからである。

まさか桃太郎侍が来ようとは、夢にも思わない。しかも、まもなく主膳と半九郎といっしょに、ここへ来るはずだ。顔を合わせたら、どう

いうことになる？　それを思うと、恋しさ、なつかしさにも増して、恐ろしい！

「どうして若様、かようなところへ――？」

小鈴は息をはずませながら、そこへ両手をささえて、じっと男の顔を見上げた。

「心配いたすな。わしは半九郎に招かれて来たのだ」

その若殿は、もういつもの落ち着きを見せて、おうように縁先へ立ちながら、目だけに桃太郎侍の親しみをこめた微笑をたたえている。

「招かれて――？」

「うむ。そちが裏切り者と判明した。今宵成敗するから希望とあらば一目会わせよう、裏門から忍んでまいれという、親切な書面であったのでな」

「まあ！」

わなだ。恐るべき半九郎だ。――小鈴の顔からサッと血の気がひいた。

「うそです。若様、早く帰ってください、早く！」

小鈴はあたりを見まわしながら、思わずすり寄った。

「軽はずみじゃありませんか。若様。たとえ、あたしが、あたしなんかが成敗されたって、おひとりでこんなところへ来るなんて、――帰ってください。もう主膳が半九郎といっしょに、ここへ来るころです――」

顔を合わせたらどんなことになる！　小鈴は気が気ではないのだ。

「そちは茶のしたくをしていたのか？」

若殿が妙なことをきく。

「は、はい」

「先刻そちは、わしの足音を伊賀と聞き違えたようだが、それは主膳と半九郎のために用意している茶と見えるな」

「はい」

「一服わしがちそうになっては悪いか」

「そんなのんきなことを――」

小鈴はあきれて桃太郎侍の顔をみつめた。め

ったに物に動ぜぬ度胸、――が、その度胸も時による。

「いや、あわてるには及ばぬ。そちはまだ気がつかぬとみえるな。わしは半九郎の招きに応じて来たのだ。生前一目そちの無事な姿に会わせてくれたのは半九郎の好意、おそらくその茶もわしのために用意させておいてくれたものと思われる。――せっかくだから一服所望しよう」

若様は気軽に縁へ腰をおろした。

「では、若様は――！」

そうか、半九郎に呼び出された人である。いまさら逃げようったって逃がす半九郎ではない。もうこの離れはすっかり取り囲まれているかもしれないのだ。それをこの人はちゃんと覚悟して出て来ている。だれのために――？　あたしが成敗されると聞いて、ただ助けたさに！

「若様は、――若様は！」

やっと事態がのみこめた。必死に見上げる目を桃太郎侍は静かに見かえして、そのりんとした目がいたわるように何かをささやいている――覚悟しろ、小鈴。そうも取れるし、死なばもろとも、そんなふうにも落ち着いている目だ。

「うれしい、若様！」

涙がぐっと込みあげて来た。小鈴はこらえきれずに、そこへつっぷしてしまう。――いやだ！　女のいじでも、この人は殺させない。どうしよう！

「いかがいたした。茶を持たぬか。――取り乱しては貴人に対して無礼、だいいちその辺にひそんでいるしばい好きの見物どもに笑われるぞ」

聞こえよがしに、若殿はたしなめた。

「大当たり――！」

はたして半九郎が暗い茂みの陰から、ヌッと嘲笑の顔を出した。

「半九郎、みごとな筋書きだな」

若殿はニッコリ笑った。別に立とうともしない。

「いや、貴公こそ千両役者だ。江戸の若殿、実

は浅草お化け長屋の浪人桃太郎侍、全くみごとなものだ」

「――！」

アッと小鈴は驚愕した。――そこまで露見してしまったのだろうか？

その小鈴の顔をジロリと見てとりながら、

「六郷の渡しの早変わりといい、宇都谷峠の度胸、船番所での大しばい、バカ若殿ではできない芸当だ。しかも、右手に百合、左手に小鈴、少し欲が深すぎるぞ。どうだ、その小鈴をおとりにしての筋書き、――これでも貴公、まだ若殿づらができるか」

半九郎は勝ち誇っている。むろん、じゅうぶんの手配りがあるに違いない。数々の失敗を一挙に取りかえす。そういった喜びに燃えている冷酷なつらがまえだ。

「ほう。わしが万一、その桃太郎侍とかいう者であったら、なんとするな」

その半九郎の顔をまともにながめながら、若殿は至極おうようなものである。――この場になって、まだあんなのんきなことを。どうする気でいるんだろう。小鈴でさえ目をみはらずにはいられなかった。

「さすがは天一坊。わかりが早いぞ」

半九郎はニタリと笑った。

「こうなれば、おれも伊賀半九郎だ。こめんどうなことはいわぬ。ここに金が百両、これを路銀に、小鈴の手をとって、今夜のうちに江戸へ立ってくれ。船はこっちでつごうする。どうだ」

ふところから取り出した切りもち四つ、これ見よがしにドサリと縁先へ投げ出した。一つの封印が切れてザラザラと小判がこぼれ散る。

執念の小鈴をあっさり捨てて、金までつけて敵を許す、それがほんとうなら、悪党ながら見上げたやつだ。が、そうではあるまい。万一承知してこの金に手を出せば、それ見ろ、にせ若殿とここで取って押えてなぶり物にするか、黙って船へ連れ込まれてから料理されるか、重な

る恨みをそうやすやすと忘れるような男ではない。

むろん、そんな手に乗る桃太郎侍ではないのだ。たとえ死んでも、ここは若殿として倒れなければ忠義派が総くずれになる。

「げすの知恵はどこまでもげす」

金には目もくれず、若殿は涼しく半九郎をみつめながら、

「主膳を呼べ、申し聞かせることがある」

毅然たる態度だ。

「なにッ！――きさま、この期に及んでもまだ天一坊をきめこむ気か？」

「口が過ぎるぞ半九郎。主膳を呼べばわかることだ。そちごとき新参者にわかることではない」

「――？」

勝ち誇っていた半九郎の顔に、一瞬疑惑の色が動いた。

「きさま、まこと若殿なら、なぜあの誘い状につり出されたのだ。若殿が小鈴の成敗などに命をかけて、そんな危険をおかすはずはない」

「わからぬ男だな。わしは若木家十万石を継ぐべき正統、おのれの居城へ立ち帰ってなにを恐れる必要がある。江戸表派、国もと派と二つに分かれても、皆わしの家来、主膳が何か心得違いをいたしておるようだから、誘い状をさいわい、こよいは所存をただしにまいったのだ。――主膳にいいなさい。わしはひとりで来ている、恐れるには及ばぬから、これへまかり出て、とくと所存を申すよう。聞いたうえで、正しい納得がいけば、江戸の新之助はあえて家督を固執する者ではない」

静かにさとすのである。りんぜんと姿をくずさぬ態度、若殿でなければいえぬことば、――明らかに問答は半九郎の負けだ。

が、ここで負けては半九郎、二度と浮かぶ瀬がない。先刻からの小鈴の様子で見ても、たしかに桃太郎侍に違いないのだ。どのみち生かしてはおけぬやつ、どんな顔をするか最後の手段

だと、はらをきめた。

「ふん、よっぽどにせ若殿に未練があるとみえるな。それほど気に入ったのなら、若殿のまま殺してやろう。——だが、今のうちだぜ、金のほうにするか、こっちがいいか？」

半九郎の右手がサッとあがる。短筒だ。

「アッ、いけない、伊賀さん！」

見ていた小鈴のほうが蒼白になって浮き腰を立てた。

「あおくなったな、あねご。——よかろう。もう一度あねごから頼んでみろ。桃さんと名のって、いっしょに逃げてくれとな」

「ひきょうです、伊賀さん。侍のくせに、飛び道具だなんて——」

小鈴のいえることは、ただそれだけだ。われにもなく男のほうへにじりよろうとするのを、

「動くな、小鈴！　ほれた男が助けたかったら、これが亭主の桃太郎侍だとひと言いえ。命だけは助けてやる」

あくまでも仮面をはごうとする半九郎、小鈴の苦痛にゆがんだ顔をしりめにかけて責めつける。あるいは、たまりかねて女が白状するかもしれぬと見たのだ。

「むだに夜がふける。いいか、五つ数える。白状しなければ、その五つめの声が今生の別れだ——ひとつつ」

半九郎はもう容赦なく数を取り始める。

「若様——」

いっそ素性を明かして、この場だけでものがれたら——せっぱ詰まった小鈴は、必死の目を桃太郎侍に向けた。

「ふたつ」

それをうながすように、半九郎が数える。

が、死に直面しながら、桃太郎侍はまっすぐに半九郎の目をみつめていた。振り向こうともしない。

「みっつ」

ここでよけいなことを口走ったら、それこそ、

この世の縁はおろか、二世も三世も見かぎられるのではあるまいか。短筒を胸に擬されて、烈烈たる闘志を失わぬ深いまなざし、あくまでも姿をくずさぬおおらかな気魄。

「ああ——！」

小鈴はおのれの心弱さ、未練をはじた。この人は、もうちゃんと死生を越えて、静かに天命を見守っている。なんというすぐれた天稟、ほんとうの若殿にしても、これほどの殿御ぶりが、またとあろうか？

「よっつ」

われにもなく、うっとりと見ほれていた小鈴は、冷酷悪魔のごとき半九郎の声に、ハッと胸をえぐられた。

殺せない！　殺してたまるものか！　だれが半九郎なんかの憎い筒先にかけて、——カッと逆上した手が、夢中で縁にこぼれた小判をわしづかみにして、

「いつつ」

と、いわせも果てず、

「——畜生！」

さんぜんと飛び散る黄金のつぶて！

ダーン！

同時に短筒が鋭く夜気をふるわせた。

「アッ！」

悲鳴をあげて倒れたのは、小判を投げながらとっさに死なばもろともと、桃太郎侍のほうへからだを投げかけて行こうとした小鈴だった。わずかにねらいのそれた弾に当たったのである。

「しまった！」

半九郎が一瞬動揺するすき、死中に活を得た桃太郎侍のからだが、タッと跳躍して、流星のごとくさや走った一刀、

「アッ」

あやうく飛びすざった半九郎は、体勢がくずれてドッとしりもちをついた。

「立てッ、半九郎」

むやみに飛びこめば、もろはぎを抜き打ちに払われる。踏みとまって桃太郎侍は、上段に振りかぶった。立とうとするからだのくずれを、一挙に斬って捨てる覚悟だ。

「うぬッ」

それを知っているから半九郎もうかつに立ちかねる。柄に手をかけたまま歯がみしている。

「立たなければ、行くぞ！」

怨怒に燃えている桃太郎侍、術をもってすれば斬れぬという体勢ではない。容赦なく拝み打ちに振り降ろそうとしたせつな、

「――――！」

「――――！」

タッと無言の槍先が横合いから走った。伏勢が立ったのである。

「たわけ！」

叫んだのと、流れる槍先を水もたまらず斬り払ったのと同時、

「逃げるか、半九郎！」

その一瞬のすきに、半九郎がサッと逃げ出したのだ。

ほかの者には用はない。第一に半九郎、第二に主膳、このふたりさえ斬ってしまえば、たとえ斬り死にしても男の約束は果たせるのだ。

「ひきょうだぞ、半九郎！」

追いながら、柴折戸を出ようとすると、

「オーッ」

「エイ」

左右から殺気をまいて白刃が飛んだ。

左右からふたり、同時に斬りこんだようでも、必ず遅速はある。

桃太郎侍は、ハッと身をひいて、右を片手なぎして、左へ猛然と体当たりをくれた。

「ワーッ」

「ウウム」

のけぞるやつ、けし飛んだやつ、振り向きもせず、

「止まれッ、半九郎」

一散にあとを追った。

が、先刻のふたまた道のあたり、ムラムラッと伏勢がたって、星あかりに白刃がきらめく。

「不忠者め、主に手向かいするか！」

桃太郎侍は叱咤した。狩りあつめられた浪人たちは知らず、藩士なら必ず動揺するはずだ。叱咤しておいて桃太郎侍は、面もふらず敵の中へ、――ただ一刀を右にたたきつけ、返して左へなぐ簡単な刀法だが、断じて行なえば鬼神もこれを避くという。

「逃げるやつがあるか、くそッ」

気勢をあげていた連中が、閃一閃、悲鳴をあげて倒れていく。

何人斬ったろうか、ふっと気がつくと、潮のひいたように、もうあたりは、ひとりの敵も見えなかった。

「半九郎！――半九郎！」

叫んでみたが、おのれの声が森にこだまするばかり、木々の枝がひっそりと、夜風に揺れている。

いつ敵が飛んだか、乱れかかる髪を汗といっしょに払いながら、桃太郎侍は立ち止まった。今の乱刃に衣類はズタズタに裂かれて、あらめのようにさがっている。

「残念だが、一時引き揚げるほかはあるまい」

これ以上深入りしては、犬死になるような気がする。小鈴の生死も気になるのだ。息があるなら、なんとかして連れて脱出したい。

「かわいそうに、――生きておれよ」

思い出すと、急に気がかりになって来た。死を賭してまで思いつめていてくれた女心、なんの報いるところもなく、ふびんである。せめて、心から感謝していたのだと、ひと言生きているうちにいってやりたい。

よろめく足を踏みしめた。さすがに激しい疲労を感じている。多少傷をうけているらしい。からだじゅうがズキズキする。

（まだ敵の中だぞ）

心を励まして柴折戸の前までたどりついた。中はひっそりとしている。一足はいったとたん、

「エイッ」

風を切ってピュンと物陰から飛んだつぶて、——決して油断していたのではない。ハッとかわしながら右手の血刀で払うと、カラカラッ！

「しまった！」

くさりがまだ。豆ぐさりが、分銅を払った刀身にからみついた。

グイと引かれて、思わず体勢のくずれたもろ足を、サッと背後から棒で払われたから、

「無念——！」

ばったりそこへ倒れる桃太郎侍。

「それッ」

声といっしょに、隠れていた人数が、ドカドカッと折り重なって、身動きもならず、なわをかけられてしまった。

「ハハハハ、やっぱり女には未練が残るとみえるな」

半九郎が立って、ぬけぬけと笑っていた。必ずここへ引き返すと見て、用意していた奸知、さすがに悪党である。

「伊賀、早く斬ってしまえ。こやつは尋常一様な男ではない」

高垣勘兵衛がくさりがまをしまいながら、冷たくいった。

「なんなら拙者が料理してもいい」

短筒を出す。こいつの短筒に出会うのはこれで三度め、どうも今度はのがれられぬらしい。

「まあ待て、勘兵衛」

半九郎はあわてて、その腕を押えた。——さんざん逆手をとられた恨み、ただ殺したのでは気がすまないだろう。

「いや、貴公は伊藤新十郎の昔から、その、まあ待てが悪い癖だ。自分の力を信じすぎる。始末すべきやつは、その場で始末せんと、この一瞬はこっちの機会でも、次の一瞬にはその機会が敵にまわらぬともかぎらんぞ」

「——？」

桃太郎侍はハッとした。寸前に迫った運命を恐れてではない。

伊藤新十郎！　その名こそお俊をもてあそんで捨てた男、仙吉の父、はたして伊賀半九郎がそれだろうか？

「わかっている、わかっている」

得意の絶頂にある半九郎は、勘兵衛のことばを簡単に聞き流して、

「おい、お茶番の若殿をこっちへお連れ申せ」

と、浪人どもに命じた。

先刻の庭先である。

障子があけはなされて、炉ばたに茶羽二重の着流し人品いやしからぬ年輩の男が立って、じっと足もとを見おろしていた。そこに小鈴がうしろ手に縛られて、ぐったりとつっぷしている。

（縛ったところを見ると、まだ生きている）

桃太郎侍は早くも見てとったが、考えてみると、同じなわ目をうけて、……勘兵衛がいうごとく、小鈴を助ける機会がうまく自分に回って来るだろうか？

「にせ者を召しとったようだな」

炉ばたの男が、ゆったりと縁先へ出て来た。これが陰謀の主謀者鷲塚主膳に違いない。そういえば船番所で見た大学の顔に似たところがある。

「ハッ。江戸の若殿と名のる不敵なやつ、お改めください」

半九郎が会釈をして、桃太郎侍の肩を突く。

「無礼であろう、主膳！　座が高いぞ」

相対してグッとにらみ上げながら、桃太郎侍は一喝した。

「ええ、いうな、河原こじき！」

タッと、半九郎が背後から腰をあしげにする。

「——？」

が、おうへいに見おろした主膳の顔に明らかに疑惑の色の動いたのを、桃太郎侍は見のがさなかった。

「不敵なやつ。とにかく、例のところへ入れておけ」

江戸の若殿とあまりにもよく似たウリ二つの顔、意外だったらしい。真偽を見分けかねて、万一これがほんとうの若殿だとしたら——いかに悪人でも、家来としてあまりいい気持ちはしなかったのだろう。主膳は桃太郎侍の目をのがれるように、つと玄関のほうへ出て行くのだ。

「待て、主膳！——なぜ逃げる！」

むろん、とどまるとは思わない。が、主膳にそうした疑惑がわいた以上、むざとは殺させまいと思ったので、桃太郎侍はかさにかかって浴びせかけた。

「伊賀、例のところって、また座敷牢か？」

勘兵衛があざけるようにささやく。

「うむ」

「いかんいかん、大事の前の小事だ。にせ者として始末しちまえ。この男が、あの女に離室へ呼び寄せられた。若殿であろうと、桃太郎侍であろうとかまわん。あいびきしているうちに火事になった。そそう火ということがあるからな。それで万事おしまいじゃないか」

悪魔！　こいつは半九郎以上の悪魔だ、恐るべきやつ、——桃太郎侍は、あぜんとして、ふたりの顔を見比べた。

「それとも、まだこの女に未練があるのか？」

「バカをいえ」

半九郎は苦笑した。

残忍な計画は、ついに実行に移された。たちまち、浪人どもの手によって雨戸がしめられ、いちいちクギづけにされて行く。

「しばらくしんぼうしていただきます」

炉ばたへすわらされた桃太郎侍は、そのすわったひざへも、足へも厳重になわをかけられた。これでは身動き一つできない。

「なかなか丁重だな」

すでに覚悟している桃太郎侍は、顔色一つ変えていなかった。

「さよう、ちと丁重すぎるようですが、これが半九郎の美点でしてな」

半九郎は愉快そうに愚弄しながら、——その自若とした相手の顔に、少しも絶望の色がなく、どんなささいのすきにも必ずはねかえしてみせる、そういった絶倫の闘志と、自信力を見せられたような気がして、急にカンにさわって来た。どうしたらこの男が泣きっつらになるか、それが見たいのである。

「どうだ、おい、もう一度だけ相談しようじゃねえか。いいかげんに、化けの皮を脱いだらどうだ。助けてやるぜ。白状しろよ」

「それには及ばぬ」

桃太郎侍の答えは冷ややかだ。まだどこにも若殿としての威容を失っていない。

「ふん、強情なやつだな。そんなに若殿に未練があるのか？——ああ、読めた」

半九郎はニヤリとして、

「伊織の娘に未練があるんだな。なるほど、あれはいい、たしかに美人だ。死ぬほどほれる、無理はない。せっかく命が助かっても、若殿でなけりゃ手にはいらないからな。そうなんだろう？」

顔をのぞき込むようにする。

「だが、きのどくだな。あの娘は、あしたからわしの女房にする。若殿の名をおとりにして引き出せば、わけはないからな。いやおうなしだ。どうだ、くやしいか」

「——」

桃太郎侍はあわれむように半九郎のいやがらせを聞いていた。

「まあ、若殿はこの女と心中するさ。少しすれっからしだが、これでも貴公のほかに男はないと思っている。まんざら悪い気持ちはしなかろう」

「伊賀先生、用意ができました」

次の間から呼ぶ声がする。

「よし、今行く」

半九郎は答えて、ついに何の表情も見得なかった桃太郎侍の顔をけわしくにらみつけた。
「では、火をかけることにいたします。ごゆるりとおやすみください」
急にバカ丁寧に一揖して、つかつかと小鈴のそばへ寄る。髪をつかんでグイと顔を起こしたが、
「やれやれ、ナムアミダブツか」
じゃけんに突っ放した。ぐったりと正気がないのである。
出がけに、もう一度ふり返ってニヤリと悪魔のようにあざわらった半九郎が、玄関のほうへ消えるとすぐ最後の雨戸へクギを打ち込む陰惨な音がしだした。
「くそッ！」
今まで冷静だった桃太郎侍の目が一瞬ギラギラと燃え上がる。満身の力を張ってみたが、とうてい、なわは切るべくもない。
（最後の一瞬まで――！）
だが、身動き一つできぬからだである。いや、たとえなわが解けても、クギづけにされた戸をどうする。
玄関口のほうから、パチパチという音がして来た。いよいよ火をかけたらしい。
「よかろう。あまりそばにいるなよ、火は風を呼ぶからな」
ドカドカと、人足が遠ざかる。
「万事休す、か」
桃太郎侍の目はじっと小鈴にそそがれた。
「許せよ、小鈴」
思わず声に出た。がっくりと根の落ちた黒髪、あおいえりあしを見せてくの字なりに意識を失っている女らしい肢体をみつめているうちに、桃太郎侍はふびんさがいっぱいにあふれて来たのだ。
自分は生死を覚悟してかかった仕事、一敗地にまみれて、ついに望みを果たしえなかったのは無念だが、死そのものにはなんの未練も残らぬ。
が、小鈴は違う。この女は自分ゆえに身を殺して、今焼き殺されて行こうとするのだ。その深い、執念にも似た思慕の情に、自分はなんの報いるところがあったろう。やさしことば一つかけてはやらなかった。いや、むしろ、ヘビのなま殺しのように、この女の愛情をかわしつづけ、時にはあざむきさえした。男として恥じなき態度といえるだろうか？
今にして思えば、自分はこの女の死ぬほどの恋に負け、ついにこの女のいじの強さに甘えすぎてきた。それが悪かったのだ、申しわけない。
「小鈴！――小鈴！」
せめてひと言いってやりたい、――わしはおまえに感謝して、いっしょに死んで行くのだと。スーッとすきまから煙がただよって来た。
「小鈴――！」
むろん、返事があろうとは思わなかった。ただ呼ばずにはいられなかったのである。
が、その小鈴が、ハッと身を起こしたのだ。
「アッ、桃さん！」
大きな目をみはっている。蒼白な顔、左の肩から腰へかけていっぱいの血だ。
「おお、気がついたか」
桃太郎侍はがくぜんとした。
「いいえ、さっきから、死んだまね、――でも、なんだかうとうとと夢を見て」
いいながら、あたりを見まわしていたが、
「ああ、桃さん――！」
急に身もだえを始めた。いざり寄ろうとするのである。
「いまあたしが、あたしがなわを切ってあげる」
この傷で、この出血で、今まで生きていたのが不思議なのだ。しかもうしろ手に縛られていて、どうして人のなわが切れる。――と、思っている間にバッタリ前へのめった。
「よせ、小鈴、――かいのないことだ」
「いいえ、死なせやしない！　桃さんだけは、

きっときっと、あたしの一念で」

あえぎながら、必死に身を起こそうとする。もう、ほとんど力が尽きているのだ。

「アッ、小鈴！」

見ていた桃太郎侍のほうが、絶望の声をあげた。半ば起きあがった小鈴が、うしろざまに炉の中へ倒れこんだのである。

「小鈴！　小鈴！」

目の前に見ながら、身動きできない桃太郎侍である。全身の血が逆流する思いだ。

「いいえ、わざと、わざと、――ウウム」

血の気のない顔が苦悶にゆがんで、半身がわずかにのけぞったと見る間に、クルリと炉の外へ寝返りを打って、人間わざではない。手首のなわを焼き切っていたのだ。

「桃さん――！」

恐ろしい女の一念、フラフラッと倒れかかるように、すがりついた。右手に、かみそりをつかんでいる。

「かたじけないぞ、小鈴！」

身の自由をえた桃太郎侍は、ぐすれようとする小鈴のからだを、ひしと抱き止めた。

「逃げて、――早く」

「よし、気をしっかり持っておれよ」

「あたしは、あたしは、うれしい――もう、あたしにはかまわずに、――あたしは、ダメ」

生命の尽きようとした目がうっとりと――自分の一念でその人のなわを解きえた喜び、そして、今その人の胸に抱かれている満足とに、明るくほほえんでみつめている。

「くそッ！――死なせはせぬ」

桃太郎侍は奮然と立ち上がった。が、すでにおそく、いっぱいにはい寄る煙！

一騎討ち

若殿を見送った百合は、それっきり居間に端座して、じっと瞑目していた。ひたすらその人

の無事を神仏に祈願しているのだ。その人が帰るまで終始祈りつづける心である。

前のふみ机の上に、桃太郎侍の差し添えと外記への置き手紙とが、きちんとそろえてのせてある。――必ず約束を守る、だれにも他言をしないと誓わされた伊之助から託されたたいせつな品だ。

「ようござんすか、お嬢さん。あっしはどうしても、だんなひとりを敵の中へはやれない。こっそり跡をつける考えだ。ことによったら、だんなといっしょに死ぬようなことになるかもしれない。もし、夜の明けるまでに、ふたりとも帰って来なかったら、この二品をここのご家老様に見せておくんなさい。これはあっしがだんなに頼まれた役目なんだが、今いったように、あっしは命に替えても、守れるもんなら、だんなのからだを守らなけりゃならない。頼みますよ、お嬢さん」

頼む伊之助も必死だったが――ふたりを敵の中へ送って、こうしてかえりを待たねばならぬ百合、待つ身の苦痛のほうが、百倍も千倍もつらかった。

祈っても、祈っても、不安が、恐怖が、あとからあとからと胸をえぐり、身を焼いて行く。（夜の明けるまでにお帰りがなければ、百合だって生きてはいないのだから）

いっしょに死んでしまうと覚悟していれば、――そうは思っても、生か？　死か？　その明け方までの思いがつらい。

いっそ、自分も今からあとを追って行こうとさえ、何度も思ってみた。が、女の身である。たとえ死んでからでも、あの人だけにささげている純潔なからだを、悪人のけがれた手に扱われてはならない。そう考えて、やっと思いとどまった。たびたび身の危機を経験させられている百合だったからである。

そして九つ（十二時）近く、百合はもうどうにもがまんができなくなってきたのだ。

敵の手に捕えられて、あらゆる残虐のかぎりを尽くされているその人の、血みどろの姿がまぶたについて、払ってもぬぐっても消えない。

（今なら助けられる。——おじさまに申し上げさえすれば）

そうだ、ここには忠義な人たちが、腕の立つ勇士がたくさんいるではないか。この手紙さえ外記に見せれば、なんとでも方法はつくのだ。

けれど、約束を破っていいものだろうか。

万一、武士の娘らしくもない不信の女とあいそをつかされたら、それこそ死んでも死にきれないし——。

百合はじっとりと、からだじゅうにあぶら汗を感じながら、身もだえせずにはいられなかった。

「神様——百合は、百合は、どうすれば」

思わず双のたもとにひしと胸を抱き締めて、

——百合は、はっとした。

「起きているようだな」

障子の外から、意外な外記の声が呼ぶのだ。

「は、はい」

何をするすきもなかった。

「今時分まで、何をしている」

サラリと障子が開いて、——見ると、外記もまだ寝間へはいっていなかったらしく、平服のままの姿だ。いや、それより眉間に深いしわをたたんで、なにかを求めている、そんな様子だった。鋭い目の色である。

「あの、わたくし、——あの」

「それは何じゃ」

百合がドキドキしている間に、早くもふみ机の上の二品に目をつける。

「アッ」

そこで隠そうとしたが、もう隠すべくもない。

「わきざしのようだな。これは手紙、——わしの名が書いてあるようだが？」

不思議そうに外記が手に取るのを見て、

「おじさま——！」

百合は、もう前後もなく、ワッとそこへ泣き伏してしまった。

「百合、これは若様のご手跡らしいな」

外記は急に泣き伏した百合の白いえりあしを見ながら聞いた。

（何かある。そして、この娘はそれを知っている）

と、直感したのだ。

外記は、すでに若殿の寝所を見まわって、そこにいないことを知っていた。なにか今夜は気になって、寝る前にそっと見まわってきたのである。寝具はからだった。

この夜中、どこへいったのだろう。もしやと思って、百合の居間へ来て見る気になった。江戸から危険な道中をわざわざ若様につづいて来た百合、若様のご希望だったか、伊織の考えからか、外記はまだ聞いてはいない。が、若いふたりの間に、恋かあるいはそれに近い感情が燃えているらしいことは、おおかた察していた。

百合のへやかもしれぬ。それならそれで、別にさしつかえないがと、念のために来てみたのである。

が、やはり若殿の姿はなく、ただならぬ百合の様子だ。道中でも、相当思いきったことをしたらしい若殿、どこか激しいところのあるおおしいご気性、それだけに外記はいよいよ不吉な予想に胸をつかれた。

「——！」

外記は黙って、明るいあんどんをひき寄せた。急いで手紙の封を切って、思わずアッと驚愕の声をのんだのである。読みくだしていくうちに、ワナワナと老いの手が震えてきた。

それは外記にとって、思いもかけなかった書き置きであった。

「取り急ぎ念のため一筆したためおき申しそうろう」

そういう書きだしで、——自分はほんとうの江戸の若君新之助ではないと、書いているのだ。

「神島伊織父娘のせつなる苦衷黙しがたく、にせ若殿承諾の覚悟せしも、これには、子細あることにござそうろう」

と、書いて、——自分は生まれたその夜、親に捨てられ、右田家の忠婢千代の手によって、江戸の陋巷に成長した新二郎、すなわち新之助とは双生児の弟であるとしたためている。

「一度は、今は何の恩怨もなき若木家のお家騒動、新二郎の知るところにあらずと存じそうろうも、再度思えば悪人輩の陰謀に苦しめられおりそうろうは、一つは父、一つは兄、いまだ相見ずといえども、骨縁の深き、血は血を呼び、父兄の苦しみおのずから新二郎の骨身にこたえ申しそうろう。父兄のために不要の生命を投げうつ、このことあるために天のわれに生命を与えしものならんかとも思い合わされ、意を決して伊織親子には素性を明かさず、あえて兄の身代わりに相立ち申しそうろう」

そして、素性を明かさずにすめば、黙って、元の陋巷へ帰る気でいたが、子細あって、そうはいかなくなった。この手紙が外記の手に開かれるような場合は、すでに自分の命はないと思うので、ここに三つの頼みを書き残して行く。

——と書いて、一つは決して伊織親子の取った手段に不純な動機はないのだから、あえてとがめぬこと、一つは仙吉、一つは伊之助の身の立つよう取り計らってもらいたい、としたためている。

「このほかに思い置くこと一つこれなくそうろう。兄上は必ず天の加護にて生命をまっとういたすべく、新二郎身代わりにあいはてそうろうえは、江戸表伊織と協力、若木家の万代をせつに頼みいりそうろう。なお、老齢の御身くれぐれもおいたわりなされたくそうろう。新二郎のことは死後といえども他言無用、決して悲しむべからず——」

一気には読みくだしえなかった。何度も涙をふかなければならなかった。読み終わってはさらに堪えがたく、ほうだとして流れる熱涙をとどめえない。

「若！——若！　外記の罪、じいの心得違い、申しわけない。許してくだされ」

殿のお胤とはいえ、おのれの娘に生まれた孫、外記はじっと懐紙を顔に当ててしまった。

外記は桃太郎侍を新之助君として、少しも疑っていなかった。毎日おそばについていた近習たちさえわからないでいるのだから、この三年ばかり江戸と国もとに別れていた外記に区別がつかなかったのも無理はない。

むしろ、三年前に見た若君より心ばえおおしく、人間に深みが出てきた。いってみれば、神経質なところが消えて、大度のふうが備わってきた。年のせいである。修業のおかげである。どこから見てもりっぱなお世継ぎになったと、外記は喜んでいたのだ。いや、この君こそあっぱれ名君になるだろうと誇りさえ感じていた。

が、それが思いがけない弟の新二郎君のほうだったとは、今にして思えば、なるほどとうなずける。

幼い時から陋巷にほうり出されて、ずっと世間を見てきた。相当の苦労をして来た。要するに、生きた学問をしてきたのである。天稟の英資にみがきがかかっているのだから、おそらく近習たちのだれかれよりずっと苦労もし、世の中も見てきているのだから、人を心服させるわけである。尊敬されるわけである。

とはいえ、さいわいにして千代の丹精と、新二郎君自身の恵まれた天分によって、あっぱれ男にはなったが、当然一藩の分家として、何不自由なくあるべき人を、だれがこんな日陰者にしたのだ。自分ではないか。娘が双生児を生んだ、ただその外聞を恐れただけの理由でひとりを捨てる、なんという無慈悲な祖父であったろう。

その天の罪が今自分に返ってきたのだ。

「——天が兄の身代わりになるべく、新二郎をしてこの世に生をうけさせたのだろう、自分は

喜んで死ぬ。決して新二郎の死は悲しむな」

おおしくもこう書き残している。——老齢自愛せよともこの無情な祖父をいたわっている。

面罵されるより、むち打たれるより、外記にはこの情のほうがつらい、悲しい、心苦しい。

が、取り乱している場合ではないのだ。

外記は気をとりなおして、ふみ机の上のわきざしを取った。抜いてみると、たしかに見覚えがある。無銘ではあるが、貞宗の名刀として折り紙のついた右田家の家宝、せめてこの子が成長した時の誇りにもと、千代に託してやった形見なのだ。

いったい、こんな書き置きまでして、どこへいったのだろう？

この手紙が自分の手で開かれる時が来れば命がないと書いている。その時期は百合にいい置いて行ったに違いないのだ。あるいはまだ助けうる見込みがあるかもしれない。

「百合、この二品は、いつわしに見せよと申しておったか？」

外記は鋭い目を百合に向けた。

「は、はい。もし明け方までお帰りがなかったら、おじさまにお目にかけよと」

救いを求めるように、百合が泣きぬれた顔を上げる。

「そして、若殿はどこへ行かれたのだ」

「あの、そのお手紙にはなにも書いてないのでございましょうか？」

行く先は主膳の屋敷と聞いているが、なぜそこへ行くのか、伊之助は話してくれなかった。おそらく、それを書き置いた手紙だろうと思っていたのに、——急に百合は不安になる。

「これには何も書いてない。——すると、そちも知らんのか」

「いいえ、存じております。主膳の屋敷へ行く、行かなければならないことがあるとおっしゃってでございました」

「主膳の屋敷？——おひとりでか？」

「はい」

「いつごろのことだ、それは」

「四つ（十時）少し前でございます。——おじさま、早くお助けして、どうぞ若様をお助けあそばして！」

思い出すと、百合はもうやもたてもたまらなくなってきた。

「だんな様、こちらでございますか？」

ふっと廊下から、あたりをはばかるような声がした。

「だれだ——？」

外記がギョッとふり返る。

「佐平でございます。内々で申し上げたいことがございまして」

「——？」

外記は桃太郎侍の手紙を急いで懐中して、障子の外へ立っていった。

小者のささやくことばは聞きとれなかったが

「何ッ！」

驚愕するような外記の声に、百合はハッと胸をつかれた。

（何か若様に不吉なことが——！）

この場合そうとしか考えられない。

「百合——！」

障子の外から外記が興奮した顔を見せた。

「決してここを動いてはならんぞ、よいか」

「おじさま、あの、もしや——おじさま！」

が、外記は耳にもかけず、あとをしめきって、あわただしく去って行く。

（何かある。若様のお身になにかあったのだ）

百合はうつろな目をあんどんに向けて、じっと聞き耳を立てた。今にも屋敷じゅうの騒動になるのではあるまいか？

が、とうに九つ（十二時）を過ぎた。邸内はしんと寝しずまって、物音一つしない。無気味なほど静かだ。不安な時がきざんでいく。

（どうしたのだろう？）

百合にはわからない。何があっても、当然主

膳邸へ人数が向かわなければならないはずである。あるいは若様がこっそり、お帰りなったのだろうか？

いや、それなら、なにをおいても伊之助が自分に知らせてくれるはずだ。

それに、あの置き手紙にはなにが書いてあったのだろう。今夜の事情を書き残したものとばかり思っていたのに、そうではないらしかった。（ことによると、もしや素性のことを――？）

ハッと百合は気がついた。

ああいう潔白なおかただから、死を覚悟した以上、にせ若殿になった事情を明らかにしておく、そうかもしれない。だから、死んでからでなければ見せてはいけないとおっしゃったのだ。

「どうしましょう、わたくしは！」

見せたのではない。見られてしまったのだけれど、――自分の不注意から、たいへんなことになってしまった。

そういえば、にせ若殿とわかったので、おじさまは助けに行かないのかもしれない。行く必要がないと思っていられるのだ。そうに違いない。

「あんまりです、おじさま！」

娘心の、百合はカッと混乱してきた。たとえにせ若殿でも、一度その人のほかに夫はないと堅く心にきめている百合、――もうだれにも頼みはしない。自分ひとりでも助けに行く。きっと、助けてみせる。それができなければ、いっしょに死ぬまで。

「若様、いま参ります」

百合はふみ机の上の、外記が置き忘れて行ったその人のわきざしを取り上げて、ひしと胸に抱きしめた。

思えば、向島堤ではじめて悪人に取り囲まれた日、

「お女中、これを」

と、うしろざまに、さやごと抜いて貸してくれたのが、このわきざしであった。

今またその思い出のわきざしを帯にして、そ

の人のもとへ駆けつける。きっと、いっしょに死ねと天が命じるのだ。

「死にます、百合は喜んで」

急いで涙をぬぐった。じっと耳を澄ましたが、やっぱり人の起き出したけはい一つしない。

百合はそっと雨戸を一枚くって、たびはだしのまま庭へおりた。明るい星月夜である。高々と帯の間へつまをとって、いっさんに、裏庭のほうへ走りだす。

その人を思う火のような一念のほかに、百合の心にはもう何物もなかった。

邸内とはいえ、深い裏庭の林へかかると、自分の足音が陰々と耳につく。何か物の怪に追われているような無気味さだ。一気に駆け抜けようとした百合は、目の前の小道を横切って、スッと黒い影が音もなく木陰へ飛びこんだような気がして、

「アッ――！」

思わず棒立ちになった。たしかに人の姿である。こっちの足音を聞いて、あわてて隠れたのだ。

「だれです、そこへ隠れたのは？」

百合はわきざしの柄に手をかけながら、暗い立ち木のあたりへ、じっとひとみを定めた。

「おや、お嬢様ですね」

はたして、木陰からスッと人影が走り寄って来た。思いがけない伊之助である。しかも、ひとりだ。

「まあ、伊之助」

ほっとするより早く、――命にかけてもその人を守るといっていた伊之助が、たったひとりで帰って来たのである。

「若様は、伊之助！　若様はごいっしょではないのですか？」

「安心しておくんなさい。やっと命だけは助けてきました。――それより、どうしたんです、お嬢様は？　今時分、おひとりでどこへ行こうってんです？」

「では、おケガをあそばしたんですね。どこ、若様は、——どこにおいであそばすの」
もどかしそうに、百合は伊之助をかきのけようとする。
「林の中の稲荷堂です、断わっておきますがね、だんなはもう若殿じゃありません」
妙に伊之助のことばは冷たい。
「え、稲荷堂——？」
「板の間へ寝ているんでさ」
「まあ、どうしてそんなところへ、——動けないんですか？　そんなにおケガを」
「ケガもケガですがね、もう屋敷へはかえらないっていうんでさ。——だって、その傷じゃ無理だ、せめてお嬢様のお居間へでも隠してもらったらと、いくらあっしがすすめても、人目にかかってはよくない、ここでいいって動かない。あっしは腹がたっちまいましてね」
「——？」
「だんなはいったい、だれのために命がけになって働いたんだ。遠慮も時による。そんなからだで吹きっさらしの板の間へ寝て、もし傷口から夜風でもはいったらどうするんだ。なんなら、あっしのへやへでもいいから、家の中へはいらなけりゃいけませんっていうんだが、——だれにも顔を見せたくないってね」
「どうしてなんでしょうね、伊之助？」
百合は急に不安になって来た。顔を見せたくない、もしや二目と見られないほどのケガをしたのではないだろうか。
「お嬢様、江戸のご家老様にお目にかかったでしょう？」
これはまた意外なことをいいだす。
「まあ、江戸のおとうさま——？」
「おや、まだ会わないんですか？——じゃ、なんにも知らないわけだ」
「話して。おとうさまがどうしたのです」
「たしか、今ごろはご城代様にお目にかかっているはずですぜ。あっしたちはここへ来る途中

で会いました。顔を隠して、おひとりでした。ご家老様のほうから声をかけられましてね、大きな声じゃいえねえが、——本物の若様が全快したんで、ほんの数人でお供して、夕方の船で城下へついた。今、若君は人目にかからぬよう、ある場所へそっと忍ばしてある。これからご城代のところへ相談に行くところだっていってました」
「まあ！」
それでわかった。さっき、おじさまが驚いていたのは、父のことだったのだ。——なるほど、ほんとうの若様が着かれたうえは、もうあのかたは若様ではない。いや、それより、若様がふたりできては、今までのからくりが敵にも味方にも知れてしまう。そのためには、屋敷へははいらないと遠慮しているに違いない。
（わが事ついに終わる！）
疲れきった身を、あかくさい稲荷堂の板の間へ投げ出しながら、桃太郎侍はぼうぜんと、やみをみつめていた。天地静寂、わずかにキツネ格子から星空がのぞかれる。
この世に生をうけて二十数年、いまだかつて、こんな惨澹たる心境におかれたことはない。要するに今夜は惨敗したのだ。
いや、惨敗はまだいい。兵家の常として、また取り返すこともできる。が、小鈴のことを思うと、どうしても思いあきらめきれない。
あの時、——小鈴を抱いて一度は立ち上がったが、すでにおそく、自分も煙に巻かれてクラクラッと自失していった。
ふと冷気によみがえってみると、暗い茂みの庭に寝かされている。
「アッ、小鈴——」
思わず飛び起きようとすると、
「シッ」
いきなり上から押えつけられた。伊之助だったのである。
「じっとしていておくんなさい。まだ、敵の中

だ」

耳もとへ口を寄せて、必死の声である。

「小鈴は？——小鈴はどうした、伊之助！」

「だんなを助け出すのがやっとでした。やつらが火をかける、すぐ縁の下を破りにかかったんだが、手間取っちまって」

今にして思えば無理もない。敵の目の中を、よくあそこまで自分をひきずっていったと思う。おそらく、火事を見守っていた連中は、上にばかり気を取られていたのだろう。

が、その時は、そうは思えなかった。

見ると、——目の前で離室がどっと燃え上がっているのだ。

あの中の小鈴が焼かれている、たとえもう息はないかもしれないが、最後まで命がけで自分を救ってくれた小鈴。それを思うと、たまらなかった。

「放せ、伊之助」

せめて死骸だけでも、この腕に抱いて助けだしてやりたかったのだ。

「シッ！　だんな——だんな！」

伊之助がまるで上から、のしかかるように、

「敵が、——敵が！」

なるほど、すぐそばの植え込みをガサガサやりながら、

「よく燃えるな」

野太い声が手に取るように聞こえた。伊賀半九郎である。

「今ごろはもうふたりとも、こんがりと焼けているだろう。しかし、あれはほんとうに、にせ者だったのか」

相手は高垣勘兵衛であった。

「どっちだってかまわんさ。にせ者ならこれで若殿をふたりやっつけたことになる」

「こんどは主膳の番だな」

「——」

「早いほうがいいぞ。主膳はこっちの若君が貴公の子ということを感づいているんだろう？」

「薄々はな」

憎いやつ！　悪党！　小鈴の敵だ！——はね起きようとして、桃太郎侍はまたしても伊之助に押えつけられた。ドドッと屋根の燃えおちる音がした。

（ああ——！）

幾度か助けられておきながら、ついにたすけえなかったふがいなさ、これでも男かと、桃太郎侍は歯を食いしばったのである。

やがて、やっと敵の囲みが解けたらしいので、自分ではしっかりと立ち上がったつもりだったが、——からだじゅうが燃えるようで、全然、力が抜けていた。

「そうれ、ごらんなさい。——だんな、いつだって、かたきはとれるんですぜ」

急いで肩を貸してくれながら、伊之助がいった。

その帰りに、屋敷町のかどで、不意に伊織に呼び止められたのである。

「おお、そのお姿は——！」

伊織はがくぜんとして立ち止まった。が、驚いたのはむしろ桃太郎侍のほうである。——江戸をはなれてはならぬ伊織が、しかも面をつつんで、この夜ふけにただひとり。

「ご老人、もしも何か江戸表にまちがいでも」

すぐ兄新之助の身が思われたのだ。

「いや、安心していただきたい」

新之助君はさいわい手当てがまにあって、意外にも早く全快した。そこで、ほんの数人の供をつれて江戸を立ち、今夕城下へはいった。実はこれから、どういうふうにしてほんとうの若君を外記邸に入れるか相談に行くところだという。

桃太郎侍は今夜の失敗を簡単に話して——深夜とはいえ、だれが通らぬでもない、人に姿を見られてはお互いに困るのだ。くわしいことはいずれ屋敷で話すことにして、早々に別れた。

伊織は表門から、桃太郎侍は裏手から邸内へは

いったのである。
　が、ほんとうの若殿が、――兄新之助が城下へ着いた以上、もうにせ者は不要だ。いや、うっかり顔を見せては、それこそ今までのからくりがすっかり露見してしまう。万一、自分の素性をあかさねばならぬ立場にでもなると、外記の過去の過失まで暴露することになるのだ。
「せめて、それじゃ、あっしのへやへでも」
　無理にすすめる伊之助のことばを押しきってこの人目につかぬ稲荷堂へ身を隠したのだが、それにつけても、今夜の失敗が無念である。せめて兄が着くまでに、半九郎だけでも倒して、にせ若殿の役目を果たしておきたかった。
　どっちを向いても、われながらふがいない男だと思うと悲しい。
　からだじゅうがズキズキとして、熱ぼったい。身動き一つするのも今は大儀だ。
　そのうちに、いつか深い眠りにおち入ってしまったらしい。

　どのくらい眠ったのだろうか？
　夢一つ見ず、ふっと目がさめてみると、あたりが明るく、――すでに朝になっていた。
「あ、お目ざめになった」
　大きくのぞき込んでいた白い顔が、ぬれぬれとしたきれいな目が、朱のくちびるが、急にいきいきと輝くばかり。
「若様――！」
　じっと動かずにみつめている百合なのだ。と、思う間に、見る見るキラキラと涙が光って、
「まあ、よかった」
　急いでその涙をふく。
「お百合さん、――もう若様ではない」
　桃太郎侍は昨夜のことを思いだして、寂しくつぶやいた。
「いいえ、百合にはいつまでも若様」
「ああ、そういえば、たしか伊之助から預けたはずの手紙は、お百合さん」
「あの、それは、おじさまが――」

　百合はおろおろと口ごもって、
「お許しくださいませ。おじさまがふいに昨夜おいであそばして、お机の上にあったのを取っていってしまったのですもの」
　恥じ入るように、うなだれるのだ。
「読んだのか、お百合さん」
「いいえ、百合は――百合には見せてくれませんの」
「そうか。――できれば、だれにも見せたくなかったが、外記だけならまあいい。それにしても、こうなったら一日も早く、ここを出立しなければならぬ。外記がさぞつらいだろうから」
「若様、お許しあそばして、――どうぞ、若様」
　その思いにふける桃太郎侍の顔をふきげんと見たか、百合は泣きそうになって、身をすり寄せてきた。
「いいんだ、お百合さん。なんでもない。――おや！」
　気がついてみると、桃太郎侍は絹ぶとんの中に寝ているのである。
「ぜいたくなものを運び込んだものだな」
　古びたほこりだらけの堂の中、板張りのすきま漏る朝の日ざしに、はでなふとんだけが真新しい。まくらもとのほうへキリの手あぶりまで運びこんで、小鉄ビンがしずかに鳴っている。盆の上に水さし茶道具まで用意してあるのだ。なんのことはない、まるでぬすっとか山賊の隠れ家のようである。
「あの、伊之助が、なんでもよい、早く運ばなければと申すものですから」
　百合がほおをあからめた。
「じゃ、これもお百合さんのを取り上げたのか」
　そういえば、えりのあたりに、ほのかな女の移り香がただよっている。
「お気持ちが悪いのでございましょう？」
「いや、もったいない」
　こんなほこりだらけのところへ、ふとんがよごれるという意味であったが、いってしまって

から、妙にも取れそうなので桃太郎侍は苦笑した。
「あ、お百合さんはご家老に会っただろうな」
「いいえ」
「ほう。では、ずっとここにいたのか？」
「若様、お茶をさし上げましょうか」
視線を逃げるように盆を寄せるのである。
（なるほど、ちょっと会いにくい。それもあるのだ）
桃太郎侍は気がついた。父には無断で家出している百合である。——昨夜も会った時、伊織はひと言も娘のことはきいていなかった。が、ひとり娘のこと、心ではどんなにか心配していることだろう。
「早くあやまらなければいけないな」
「でも、おとうさま、おじさまとふたりきりでお話しして、すぐにおかえりになったのですって」
「かえった——？」
「ええ」
「——」
そうか。一藩の老職は公儀の許可なくして江戸を出たり、国もとへ帰ったりすることは許されない。それが悪人のほうへ知れると逆用されるおそれがあるのだ。人目につかぬように若殿の入れ替えをすまし、絶対に国もとへはいったことは秘密にして、早く江戸へ帰らねばならぬ。——なるほど、娘などに会ってはいられないわけだ。
（こりゃいかん。わしの立場も同じである）
悪人どもを押えられなかったのは残念だが、若殿が毒に倒れていた間だけの若殿役は、敵にも味方にもぼろをださず、どうやら無事にはたせたのだ。このうえよけいなお節介をしていると、すべてがうちこわしになる。今夜にも丸亀を立ちのこう。——桃太郎侍は意を決した。
「どこか、お気持ちが悪いのではございませんか？」
百合が心配そうに顔をのぞく。少し黙って考

え込んでいると、すぐ気にするのだ。
「いや、もうどこも悪くはない」
「お茶を入れたのですけれど」
「ありがとう。いただこう」
起き上がろうとすると、
「あ、いけません」
あわてて百合がふとんの上から押えつけた。まるで病人扱いだ。
「お傷にさわります。百合が運んでさしあげますから」
「傷——？」
気がついて手で探ってみると、胸にも、腕にも、ところどころおおぎょうに包帯がしてあるのだ。むろん、昨夜のかすり傷だが——こんなにされたのを少しも知らずに眠っていたと思うと、武士の心がけが、いささか心細い。
「伊之助は？」
「ついいましがた、おかゆをこしらえてくると申して、出てまいりました」
「起きてみたい、お百合さん。ぐっすり眠ったので、すっかり元気が回復したような気がするのだ」
いっているところへ、急に足音がして、
「だんな、だんな、本物が来ますぜ、本物の若殿が——」
キツネ格子の外から、伊之助があわただしく報告するのだ。
「なに、若殿が——？」
ハッと桃太郎侍はすわり直った。——それは少し危険である。自分がここに隠れていることは絶対にほかの者に知られてはならないのだ。
「ほんとうですか、伊之助」
百合は急いであたりを見まわす。これは、——こんなむさくるしいところへ、とまずそれが気になるらしい。
「ほんとうですとも」
伊之助はキツネ格子を少しあけて、中をのぞき込むように、ぬれ縁にかしこまった。せまい

堂の中は、ふとんが敷いてあると、ちょっと足の入れ場がないのだ。

「あれ、だんな、起きているんですか？——無理をしないほうがようござんすぜ」

「いや、もうたいしたことはない。——すぐ来られるのか、若殿は？」

「すぐでしょうよ。今、ご城代様があっしをそっと呼んで、——若様が稲荷堂へ参拝されたいと申している。ちょっと耳へ入れておくようにというんでさ——。そりゃいけません、だんなはケガをして寝てるんだからと、あっしは断わったんだが、そのままでかまうまい、よそながらご会釈をたまうのだから、といってました」

「——」

そうか、外記のはからいで、せめてよそながら、わしに兄上の顔を見せようというのだ。——桃太郎侍はふっと胸が熱くなる。

「あの、お髪をお直しいたしましょう」

百合がふと立って背後へ回った。なるほど、桃太郎侍は昨夜のままの乱れ髪である。

「なあに、寝ていてもいいっていうのだから、だんな、むりに起きなくてもいいんですぜ」

さんざんお家のために働いてやったんだ。小さくなってることはない、というような伊之助の口ぶりである。

「どうせよそながらってんですから、きっと自分によく似た男ってどんな人間か、ちょっと顔が見たくなったんでさ。若殿様の、気まぐれなんだ」

「まあ！　伊之助、そんな口をきいてはいけません」

手早く器用に髪を結びながら、百合がたしなめる。

「そうでござんすかね。そういやお嬢様はここのお家来さんでしたね。どうもすみません。伊之助にとっちゃ、親分はここにいる人よりほかにねえもんだから、つい口が過ぎました」

この男は、昨夜から少しおかんむりを曲げているのだ。だいいち、桃太郎侍をこんなところへ置きっぱなしにして、今までなんのあいさつもなかったのが気にいらない。そこへ、よそながらご会釈ときたんで、内心大憤慨なんだろう。

「あら、なにをそんなにおこっているんでしょう」

「おこってなんかいやしません。ただ、お嬢様、そんなに若様がありがたいんなら、そっちへおいでなさいまし。だんなはもう若様じゃないんですからね」

「まあ、そんな、そんな、——」

「ほんとうの若様は、あっちでござんすよ」

「伊之助、つつしまぬか！」

桃太郎侍はしかった。まるで、子どものけんかである。

「あっ、いけねえ。だんな、向こうへ若様がみえましたぜ」

「そうか。そこをしめて、おまえはさがっていよ」

「へえ」

キツネ格子をしめると、口では何といばってみても、相手は十万石の若殿だ。伊之助はあわててぬれ縁から飛びおりた。

やっとまげをまとめあげた百合は、急いで手をぬぐい、ふところから小箱を出した。香だ。

（さすがは育ちだな）

感心して見ていると、手あぶりにそれをたいて静かに下座へ両手をつかえた。朝の大気にふくいくとして香が漂い始める。

（はじめて相見る兄——）

桃太郎侍は座を正しながら、胸へ波うってくる激しい感情をじっと押えた。

明るい林の中を、若殿は外記ひとりを従えて、稲荷堂のほうへ進んで来る。

途中で、ふっと外記が立ち止まった。なにかことばをかけたらしい。

ふり返った若殿は、おうようにうなずいた。外記はそこに残ってあたりを見まわしている。

（なあるほど、あそこで見張りというわけだな）

ぬれ縁のそばに土下座してながめていた伊之助は、やがて近づく若殿新之助の顔を一目見て、

「アッ――！」

うっかり頭を下げるのを忘れてしまった。

ウリ二つというたとえがある。が、これはそんなものではない。りんとしたおもだちといい、やや胸を張ったスラリと上背のあるからだつきといい、ゆうゆうとしたその歩きつきまで、知らずに出会ったら、全く桃太郎侍と思わずにはいられまい。どこといって寸分の違いも見分けにくいのだ。

伊之助は思わず、ポカンと目をみはってしまった。その間に、堂の前へ進んだ若殿は、伊之助には見むきもせず、

「――！」

じっとキツネ格子を凝視して立った。明らかに堂の中の人を意識している複雑な表情だ。

（見つけたぞ、くそ！　やっぱり、うちのだんなの若殿のほうが男らしいや）

一方はほんとうの若殿、一方は元の素浪人に返って堂の中に小さくなっていなければならない。伊之助はしゃくにさわるのだ。どこかに欠点をさがさずにはいられない。そういった気持ちでしいて見れば、なるほど同じ顔だちでも桃太郎侍のほうがひきしまっている。苦労しているだけに、たくましい。眼光に底力があるような気がするのだ。

（けど、驚いたなあ）

伊之助は夢中になって、いつまでも若殿の顔から目が放せない。無礼などということは、とっくに忘れているのだ。

「下郎――」

ふっと若殿が、静かにふり向いた。

「へい」

さすがにびっくりして、あわてて頭をさげたが、憎いほど声も同じだった。

「堂のとびらをあけよ」

「へえ」

いよいよご対面ときやがったな。驚くな、こんちくしょう。中にはてめえなんかより、よっぽどりっぱな若殿がいるんだ。けど、びっくりしやがるだろうな。――伊之助はスルスルとぬれ縁へあがって、

「だんな、あけますよ」

堂の中へ声をかけた。中はひっそりとしている。かまわずキツネ格子を左右に開いた。

桃太郎侍が板の間へピタリと平伏している。ふとんは二つに折って背後へのけてあった。少し下がった百合のじゅじゅとした高島田が、きちんとそろえた両手の上へ重ならんばかり、ふくいくたる香のにおいが漂ってくる。

しんかんとした林の中で、小鳥の声が朝を歌っていた。

（こりゃ大しばいだ）

伊之助は急いで元の場所にさがりながら、見ると――若殿が食いいるように、堂の中をみつめている。

「両人、面を上げよ」

その声が激しい感情にいささか震えていた。

「ハッ」

桃太郎侍はおそおそる顔をあげる。

（アッ、同じ顔が両方でびっくりしている）

事実、ふたりはひたと顔を合わせて、またたき一つせず、見る見る双方のほおへ血の気が燃えてきた。

「失礼なところよりごあいさつ、かつは取り乱した姿をご覧にいれまして、恐れ入ります」

いつになく桃太郎侍がやっと口ごもりながらいって、改めて平伏しようとするのだ。

（おかしいぜ、だんな。何もそんなにこわがることはねえや。もっといばってりゃいいのに）

伊之助はちょっと不平だった。

「無用ぞ、新二郎！」

若殿が急に押しとめた。

「エッ！」

愕然として桃太郎侍が下げかけた顔をあげると、その目にあふれるばかり涙が光っている。

「外記から聞いた。——そちの手紙も見た」

いいながら、つかつかと縁端へ進みよるのだ。ただ顔を見るだけで別れねばならぬ兄と覚悟していたのに、——さては、外記が話したものとみえる。押えに押えていたなつかしさが胸いっぱいに盛り上がってきて、もうがまんができなかった。生まれてはじめて相見る肉親、同じ母の胎内に双生児として生まれた兄。

「では、——では！」

「新之助だ、兄だ、——ここへ来い！」

右手を差し延べているのである。

「兄上——！」

桃太郎侍は飛びつくように、ひしとその手を取って押しいただいていた。う、う、うッと、子どものように嗚咽がこみあげてくる。顔があげられない。

「新二！——知らなかったぞ、新二！」

つぶやくように、力いっぱい肩をつかんだ兄の手が、激しい感情に震えている。かつては、こうしていっしょに母の胎内にあったに違いない。手から手へ脈々と同じ血が、同じ心が、あたたかく交流して、相分かれていた二十数年の年月が、隔てが、一瞬にして溶けて一つになった夢のような甘美な一時である。

（あれ、いけねえ）

伊之助はぼうぜんとしてしまった——兄弟だったんだ。なんだかわからないが、どうもそうに違いねえ。だんなが兄上っていった。若殿が新二、新二って抱いている。子どもみたいに、ふたりで泣いている。

おやおや！　お嬢さんまで泣いてらあ。こいつあ、おかしい。妙なことになりやがった。——そう思っているうちに、ポロポロ伊之助も涙があふれて来た。

「新二、顔を見せろ」

「はい」

桃太郎侍はこぶしで涙をふきながら顔をあげた。ぬれた兄の顔が笑って、しげしげと見おろしている。

「にいさん——！」

なつかしく呼んで、改めて握っている手に力を入れた。

「新二——！」

「こうして、お目にかかれようとは思いませんでした」

「わしは少しも知らなかった」

「しかし、はじめてお目にかかったような気がしません」

「同じ顔だな。——わしはびっくりした。伊織が似ているというから、似てはいるだろうと思ったが」

「新二も驚きました。もうひとりの自分を見たような気がして」

兄弟は笑いあった。

「じいを恨むなよ、新二」

「恨みはしません」

「窮屈でも、しばらくここに隠れておれ。悪人どもを取り押えて、必ず父上にも対面させよう」

「——」

「無謀はいかん。ひとりで敵の中へ飛びこむなどは無謀だぞ」

「はい。兄上に代わって、一日も早く悪人どもを斬っておきたかったのです。昨夜は、失敗しました」

「わしのために死ぬ、その考えがいかん。わしのために生きる。これからは、そう心がけてくれ。どんな理由があっても、弟を失って喜ぶ兄はない」

「兄上——！」

はじめて聞く肉親のことばだ。感謝が新しい涙になる。

「アッ、だんな！——若様！　ご城代様がこっちへ手を振っていますよ」

伊之助があわただしく叫んだ。

外記が向こうから、しきりに手を振って合図している。
「新二、だれか来たようだ。隠れていよ」
若殿はそのほうへ手をあげて合図を返しながらいった。
「はい」
「傷は痛まぬのか？」
「ほんのかすり傷です。心配なさらないでください」
「しかし、手当てを怠るなよ。小事が大事になってはいかん。——百合、よくめんどうをみてつかわせ」
「は、はい」
百合がほおを染めながら、うれしそうに両手をつかえた。
「では、兄上——！」
「うむ。いずれすぐ迎えに来る。ゆるりと話を聞こう」
「はい。——ごめん」

桃太郎侍は急いで堂の中へはいって、キツネ格子をしめた。
若殿は、そしらぬ顔をして、堂を背にして立つ。参拝をすませたという形だ。
上島新兵衛が外記と連れだって、緊張しながら近づいて来た。
「申し上げます！」
新兵衛が興奮しながら、ハッとひざまずく。
「鷲塚主膳め、ただいまお目通り願いたいと申して参上つかまつりましたそうにございます」
「主膳が——？」
「はい。——殿様ご重体について、ぜひとも若殿をお城へご案内したいという口上だそうにございます。今となって急にさような申しいで、何かたくらみがあるのではございますまいか」
昨夜の事情をなにも知らぬ新兵衛は、容易ならぬといわぬばかりの顔だ。
「じい、はたして参りおったな」
若殿はキッと外記のほうを見た。——新二郎

が自分の身代わりに焼き殺された。敵は若殿を葬ったと信じて、必ず何か難題を持ち込むだろうとは、伊織や外記の昨夜からの予想であった。
はたして、ご重体を口実に親子対面を持ち込んで来た。死んだ若殿が対面できるはずはない。その虚をついて、一挙に国もとの万之助を押し立ててしまおうという腹であろう。
「御意。きょうこそ、かれら悪運の尽きかと存じます」
「うむ。今参った稲荷明神の加護かもしれぬ。じい、礼参りをしてこい」
若殿はわらって、
「新兵衛、まいれ。主膳の驚く顔を見物してつかわそう」
さっそうと歩きだした。新兵衛が不審そうにあとを追う。
「若、今しばらくのごしんぼう——」
ひとり残った外記は、堂の前にうなだれて立った。急に二つ三つ、年を重ねたような老いの姿だ。
「じい——」
堂の中から桃太郎侍がそっと呼んだ。
「万之助は半九郎の子だ。薄々は主膳も存じているはず、そこを責めてみよ」
「おお——！」
「しばらく悪人どもを待たしておく。かれらは善後策にろうばいしているものと油断しているであろう。その間に、味方を城へ入れる。決死の者数人でよい。如才もあるまいが、家督は万之助にきまったといわせて、総登城の太鼓を触れさせよ。それを合図に、主膳らの前へ兄上を案内申せ」
とっさの間によく機敏に働く桃太郎侍の頭だ。外記はアッと感嘆して、
「ようこそござしず——」
「いや、さしずではない。思いつきを申すまで。——半九郎は容易ならぬやつだ。くれぐれも兄上のお身のうえ頼むぞ」

「ハ、ハッ」
「遅れては手違いになる、急いでくれ」
「恐れ入りました。ご総明なるご采配、外記恥じ入ります！――ごめん」
老顔を輝かしながら、外記は走りだした。
走りながら忙しく目をぬぐっている。

「だいぶ手間どるようだな」
かみしもに威儀を正して、ゆったりと庭をながめているかに見えた主膳が、ふっと、半九郎を顧みた。外記邸の書院である。ここへ案内されてから、もう半刻（一時間）近くになる。少し待ちくたびれて、不安になってきたらしい。
「善後策に窮して、なかなか相談がまとまらんのでしょう」
半九郎は不敵な微笑をうかべた。
「まだなにか小細工をする気かな」
「いや、もう細工のしようもありますまい」
にせ者にもせよ、本者にもせよ、肝心の若殿が灰になっているのだ。いやでも万之助の家督を認めなければ、若木家がつぶれてしまう。
「おそらく、われわれに若殿を対面させられない理由を、どう答えたものか、困っているのでしょう。ご変死とは公表できませんからな」
「うむ。それにしても、おそすぎる。――窮鼠猫をかむということもあるぞ」
主膳はそれを心配しているのだ。敵の邸内である、どんな手配をするかもしれない。
「その心配はご無用です。一発の銃声で、裏表に伏せてある人数が蜂起しますからな」
半九郎はそっと胸をたたいて見せた。ぬけめなく短筒を忍ばせているらしい。
「うむ」
これ以上不安がっては、はらを見すかされる。また、不安がる必要もないのだ。用心深い主膳は、外記邸の前後へ人数を伏せたうえ、要所要所へ手配りをして、外からの加勢はむろん、邸内からアリ一匹はい出すきもないように、さしずして来ている。
（この男の前で、つまらぬことをいったものだ）
われながら、すぐに後悔した。
が、事実は、そのアリ一匹はい出すきもない外記邸から、堂々と大アリがはい出していた。むろん、思わぬ厳重な手配りで、人間は出すことができなかったが。
「ただ今、万之助君ご家督に評定がきまりました。ついては、総登城の太鼓をふれるようにという主膳殿の仰せです」
玄関に待っている敵方に通じると、――これが昨夜離れの焼き打ちに立ち会っていた男だけに少しも疑わず、ただちに門外の味方に通じる。伝令はそれからそれへと、またたく間に城内へ達していた。
ドーン！　ドーン！　ドーン！
不意に城のやぐら太鼓が鳴りだしたのだ。
「伊賀、なんだ、あれは？」
色を失ったのは主膳である。
「――――」
さすがの半九郎も、とっさには判断がつきかねた。
とたんに、間のふすまが左右に開いて、
「アッ」
殺したとばかりと思い込んでいた若殿が、近習を従えてつかつかと立ち現われたのだ。
「主膳、そのほう心をいれ替えて、若君を城内へご案内申しあげるそうだな」
すかさず外記が一喝する。
「ハ、ハッ」
愕然として、主膳は蒼白になってしまった。
半九郎は不敵にもじっと若殿の顔を凝視した……。たしかに若君に相違ないのだ。あれだけ念を入れて火をかけたのに、どうして生きてかえったのだろう。しかも、髪一つこげた様子もない。
「悪運の強い男だな」
「黙れ、下郎！　頭が高いぞ」

若殿の額に癇癖の筋があらわれた。にせ若殿にはないことだったが、場合が場合だけに、さいわい、だれも気がつかぬ。

「おれが下郎なら、そっちは河原こじきだ。お化け長屋の素浪人、にせ若殿の証拠を洗ってみせようか」

「アッ、もし！」

外記が急いでそでをつかんだ。烈火のごとく激怒した若殿が、いきなり小姓のささげる刀に手をかけようとしたからである。

「なりませぬぞ、若！」

外記は目顔でなだめて、ズイと前へ出た。

「半九郎、にせ若殿の証拠なら、こっちで詮議いたそうか」

「……？」

おや！　というように半九郎が目をみはる。

「主膳――！」

老巧な外記は、一転して、ほこ先を主膳に向けた。半九郎には素浪人根性がある、追い詰められると破れかぶれになって、なにをやりだすかわからないと見たのだ。

「そのほうは若殿をお城へご案内申し上げる前に、まずなすべきことがあろう。たち帰ってお梅の方に談合してみよ。そのほうは譜代の家来だぞ。この期に及んでも、まだお家の恥辱を明るみへ出したいのか。どうじゃ！」

あんに万之助の素性を責めるのである。

「恐れ入りましてございます」

思わぬ急所を突かれて、主膳は一言もなかった。そこを見抜かれては、もうこっちになんの名分もない。

「おいとまつかまつります。――伊賀、まいれ」

主膳は静かに立ちあがった。

「お供しましょう。こうなればどろ試合ですな」

半九郎は若殿の顔へ、ニヤリと嘲笑を投げて主膳のあとを追う。

「若、なんとなされます！」

外記がハッとして、若殿の前へたちふさがった。

「どけ、じい――許さぬ！」

まっさおになって、若殿が目をつり上げているのだ。――若殿として、人からこんな侮辱を受けたのは、はじめてだろう。激怒されるのは無理もない。

が、相手は、わざとおこらせようとしているのだ。けんかになれば、余儀なく主膳も立たざるをえない。その主膳を擁して、玄関から表門のあたりに待機させておいた素浪人どもにあばれさせる。うまくいけば形勢を逆転させられるかもしれないと、ねらっているのだ。

「ご無用になさりませ。お手をくださずとも、かれらの自滅は目前に見えております」

外記は必死に制止した。

「放せ、憎いやつ！　手討ちにしてくれる！」

「なりませぬ。さようなお軽々しいことはなりませぬ」

近習たちの顔にも当惑の色が浮かんだ。ここは大きく大局を見て事を処するの時、すでに総登城という大しばいが打ってあるのだ。城中には敵も味方もいっしょに並んで、事件の落着を待っている。一刻も早く登城して、一挙に事を決してしまわねば大混乱を来たすおそれがある。

「若殿、なにとぞご配慮のほどを――！」

一同思わず総立ちになろうとした。

ダーン！

突然玄関のほうから一発の銃声と同時に、ワーッというただならぬ絶叫が起こった。

「なにごと――！」

さすがに若殿が耳を澄ます。

「半九郎めの謀叛にございましょう」

外記はホッとため息を吐いた。

「何ッ、謀叛？――あくまで憎いやつ、行け！　斬って捨てい！」

「ハッ！」

度を失っているから、居合わせた近習が顔色

を変えて一度にバタバタッと、玄関のほうへ走りだす。

ワーッ！　ワーッ！　という喚声が、刃の触れ合う鋭いひびきが、戸障子の裂ける音が、たちまち騒然と耳朶をうってくる。

（容易ならんことになった）

広い書院はただふたり、外記はちょっと途方にくれた形だ。何より気にかかるのは、不意をうたれた味方の士気である。だれがその味方を統率する——思案にあまったところへ、

「兄上——！」

ふと、ふすまの影から走り出た人影、意外にも桃太郎侍であった。

「兄上、てまえにもう一度お身代わりをさせてください！」

桃太郎侍はこんな場合にも、おだやかに笑っている。

「アッ、新二、どうしてここへ！」

「形勢不穏と聞いて、実は先ほどからそっと百合のへやに忍んでいました——じい、兄上を早く」

「ならんぞ、新二、そちはケガをしているではないか」

「なんの、これしき。それより、兄上はお家にとって替えがたいおからだです。素浪人どもの相手は、てまえでたくさんです。扱いなれていますからね。——アッ、だれか来る！　兄上、そのびょうぶの陰へ——」

有無をいわせず、うしろの金びょうぶの陰へ押しやって、桃太郎侍はその前に設けたしとねへ、ゆうゆうとすわり込んだ。

「——？」

大胆といおうか、不敵といおうか、外記が口を出すすきさえない一瞬の早替わりである。

が、この人ならと外記はホッとした。同じ顔同じ姿でありながら、どこかどっしりと落ち着いて、急にたのもしく見えるから不思議だ。

「一大事でござります！」

廊下を走って来た上島新兵衛が、あわただしくそこへ平伏した。たすき、はちまきものものしく、呼吸をはずませている。

「新兵衛、あわてるにはおよばぬぞ、水でもつかわそうか」

「ハ、ハッ」

思わず顔を見あげて、そこにゆったりわらっている若殿を見ると、新兵衛は急に気がついて、はちまきを取った。それだけ落ち着きが出たのである。

「ただいま、鷲塚主膳が立ち去るのを待って、半九郎が突然短筒を発砲いたしました。それが合図とみえ、浪人体の者二十人あまりご門内へ乱入、うしろの門をしめて、いっせいに玄関へ斬り込みましてございます」

「食い詰め浪人があばれだしたと申すのだな」

「はい、即座に味方十人ばかり玄関を固め、必死に防ぎ戦っておりますが、なにぶん苦戦に見うけます。若殿にはなにとぞ、一応お立ちのきのほどを」

「いくじのないことを申すな。たかが素浪人の寄り集まり、なにほどのことがある。新兵衛、そちはあと詰めの者にゆるりと身じたくさせて、あとからつづけ」

桃太郎侍は羽織りを脱いですっくと立った。下はたすきがけである。

「外記、そちはただちに登城して、大手門をしめよ。お顔をつつんで微行、忘れるな！」

かまわず若殿を城へ入れて、藩士一同を押えよというなぞである。

「ハ、ハッ」

時にとって当を得たさしず、外記は思わず頭が下がった。

「敵味方の区別はするな。同じ家来どもである。頼みおくぞ」

いい捨てて足早に玄関へ向かう桃太郎侍。

（何から何まで——）

ふっと老いの目に涙があふれそうになった。

玄関前の庭は、時ならぬ殺陣に血風うずを巻くといった凄惨さだ。味方は死闘しながら、なにぶん不意に出られてあわてぎみである。戦う者だけが戦って、あとの者はうろうろしているという始末だ。つまり、人の和ができていないのである。

それにひきかえて、敵は、半九郎があと詰めの十人ばかりを擁し、ゆうゆうと先陣の奮闘を見守っている。玄関口が破れたら、一気にあら手を屋内へ殺到させるつもりだろう。

「小ダルマ、みごとであるぞ！　負けるな！」

玄関につっ立った桃太郎侍は、すぐ目の前でふたりを相手に奮闘している小ダルマの杉田助之進に、いきなり力強い声援をおくった。

右手を見ると、のっぽの大西虎之助がこれもふたりの浪人を相手に対峙している。橋本五郎太が植え込みを背に追いつめられている。味方はすでに少しずつ手傷を負わされているのだ。

「五郎太！　虎之助！　落ち着いてゆけ」

若殿としての声援が、はたして死にもの狂いになっている味方の耳にはいったかどうかはわからぬが——知略その手腕、じゅうぶんに信頼している若殿が陣頭に立っての激励である。多少気おくれがして、ぼうぜんと玄関に立ちすくんだ形の味方の士気が、急に引き立ってきた。

「ご加勢——」

二、三人がバラバラッと、庭先へ飛びおりて行く。

「おお、勇ましいぞ」

「ご加勢——！」

つづいて四人、五人、——いわば馬前の戦闘だ、身命を賭して働ける。その意気が、まさに踏み破られるかに見えた玄関の危機を危うくさせて、猛烈な乱刃となったところへ、

「若殿、あと詰めの用意ができましてございます」

上島新兵衛が駆けつけてきた。つづく十数人の諸士、これは身じたくかいがいしく、意気け

んこうたるものがある。

門を閉ざして、伊賀半九郎を大将に待機している人数も十人足らずだ。人数において、まさるとも劣りはない。

「ときをあげよ」

「ワーッ」

力強い絶叫が、いやが上にも味方の闘志をあおりたてて、——今が潮時と見たから、

「われにつづけ！」

桃太郎侍は凛然叱呼して、さっそうと抜き身をかざしながら、血風の中へ斬りこんだ。

戦いは意気である。なにものも恐れぬ若殿のみずぎわだった勇姿に、

「それ、おくれるな！」

ワーッ！　とあら手が興奮して、われ先にと押し出した。すでに敵をのんでいる。生死を忘れている。

ひとりとひとりにすれば、各自それだけの腕を買われて来ている浪人軍だが、悲いかな、お

のれ一個の利欲のために集まっている烏合の衆、——勝敗の数はこの一瞬に、おのずと決定していたのだ。

桃太郎侍のめざすのは、むろん半九郎である。

（きょうこそ、——小鈴のかたき——！）

まっしぐらに走りながら、横合いから斬りかかるふたり、三人を、たちまち烈刀にはね飛ばして、見向きもしなかった。

「——！」

と、見る、半九郎が人を小バカにしたようにニタリと笑って不意に逃げだしたのである。

「逃げるか、半九郎！」

「——」

が、半九郎はふり向きもしない。家の横手を回って、ドンドン裏庭へ走る。

（くそ！——）

桃太郎侍は必死に迫った。思ったより足の早い半九郎である。十間あまりの距離を、どうしても縮めることができない。ともすれば引き離

されがちに、裏山の林へ逃げ込んで行く。
「ひきょうだぞ、半九郎！」
体力において、決して劣るとは思わない。が、桃太郎侍はしだいに呼吸が乱れて来た。昨夜の疲労が、じゅうぶん回復していないのだ。それがすぐ肉体にこたえて来る。
（いかん、これが半九郎の手かもしれぬ）
さんざん疲れさせておいて、急に逆襲に出る。それだと気がついたが、すでにおそかった。林を登りきったところに、ちょっとした草原がある。裏門に近く、右手へ切れて林の中に、例の稲荷堂のあるところだ。
そこまで来て半九郎が、ひょいと立ち止まったのである。
「人まぜをせぬ一騎討ち、この辺ではどうです」
不敵なやつである、ゆうゆうと抜刀した。
「望むところだ、来い」
「おう」
サッと白刃が相対して、剣先の間合い六尺、森閑たる丘の日ざしに、ムラムラッと殺気が低迷する。
半九郎にとっても、相手は再三再四せっかくの網を脱出して、ついに九仞の功を一簣にかかしめた憎むべき仇敵、たとえ今、事破れてこの地を去るにしても、生かしては行きがたき恨みに燃えているのであろう、悪鬼のごとき形相に変わっていた。しかも、剣客者としても、思ったよりはるかに恐るべき敵。
（油断はできぬ）
桃太郎侍はじっと心気を沈めた。闘志において、ごうもひけはとらぬが、長追いをかけて呼吸がまだじゅうぶんに整っていない。ともすれば圧倒されそうだ。
「オウ！」
早くも見てとったらしい半九郎は、一挙に勝敗を決すべく、青眼の太刀を大上段に振りかぶりながら、ツッツと間合いを詰めて来た。
（うぬ――！）

われにもなく一足さがったところへ、
「エイ」
烈刀が白虹を描いて頭上に落ちて来る。その激しさ。正確さ。ヒラリと一度はかわしたが反発するすきさえ与えず虚へ虚へと踏み込んで、
「エイ！――オウ！」
猛然と乱車刀に攻めたててきた。
（うぬッ、――うぬッ）
桃太郎侍は歯がみをしながら、一度受け身にまわった体勢は、立ち直るべくもなく、しだいに追い詰められて、
（くそ、半九郎ごときに――）
あせればあせるほど、その虚を、虚をとつかれる。危うく呼吸が乱れてきた。
（いかん、――死ね）
ふっと気がついたのだ。盛り返そうとあせるから、受け太刀を意識する。意識するから、一方に虚を生じる。
（死なば死ね）
いきなり、おのれを投げだしてしまった。ただ来る太刀を受ける、それでいいのだ。
その虚心の気構えに、スーッと凝っていた胸が解け、いつか、受ける太刀が柔らかくなっている。
逆に、のしかかり、食いさがり、勝ち誇って仮借なく攻めたてていた半九郎のほうに、おのずとあせりが出てきた。
「トーッ！」
この一刀こそと、深く踏み込んで振りおろした気合いいっぱい必殺の剣、――桃太郎侍は薄紙一枚に右へかわして、危うくタッと前へ飛び抜けた。飛びながら、無意識に横へ一文字に払った太刀、ちょうど空を斬って飛び違えた半九郎が、
「ワアッ」
背後で思わぬ絶叫をあげた。
ふり返ってみると、――かわされたと見た敵が、とっさに身をひるがえして、追い撃ちに一

刀を振りかぶる、その虚へ夢想剣がきまったらしい。半九郎は大きく刀を振りかぶりながら、右胴をしたたか斬られてのけぞっているのだ。

「――！」

桃太郎侍はぼうぜんと立って、――ドッと枯れ草の上へくずれ落ちて行く半九郎の最期を見守っていた。

ベットリと全身にあぶら汗を感じながら、あらしのように息がはずんでいる。苦戦苦闘、こんなに窮地へ追いこまれたことは、いまだかつてない。ユラユラとまだ大地が揺れている気持ちだ。

（小鈴のかたき――！）

ついに今、討ちえた。憎むべき悪党、そして哀れなお俊のかたき！

が、桃太郎侍の胸は重い。ふっと、お俊によく似た仙吉のおもかげが思い出されたのだ。それは、かたきを討ちえた喜びにもまして、いいがたい寂しさを感じさせる。

「だんな！」

裏門口のほうから伊之助が、風のように飛んで帰ってきた。秘策を授けて、若殿と外記が徹行する前に、城の様子を見せにやっておいたのである。

「アッ、とうとうやっつけましたね」

今は一塊の土にひとしく、森閑たる白日にさらされている半九郎の死骸を見つけて、伊之助は大きな目をみはった。たちまち、その顔に憎悪の色がうかぶ。

「こんちくしょうめ。ひでえまねをしやがって、これであねご師匠もいくらかうかばれるんだ」

「伊之助、城の様子を聞こう」

むろん、それも気になる。――が、それより今は小鈴のことをいいだしてもらいたくない多感な桃太郎侍であった。

「そのこと、そのこと！　だんな、うまくいきましたぜ。あっしはほうぼう駆けまわって、登城する侍をつかまえちゃ――鷲塚主膳様が切腹

したってほんとうでござんすかって、聞いて歩きました。人間なんてものは、おもしろいもんですね。バカ、なにをいうって、おこるやつがあるかと思うと、それはほんとうか？　きさまはだれに聞いたなんて、まに受ける者もある。そのうちに、うわさはうわさを生んで、とうとう主膳のやつ、ほんとうに陰謀がばれて切腹したことになっちまいました」

「主膳の屋敷へ駆けつける者はなかったか」

「さあ。あっしの見ているところじゃ、ないようでしたぜ。現金なもんですね。もっとも、だれだって、悪いやつとわかってしまやあ味方だとはいいにくいでしょうよ。――そこへご城代様の姿が見えたもんだから、これはほんとうにご家督のことを心配してお味方らしいのが三人、五人と集まってくる。その人たちに、ご城代様が何か耳打ちすると、もうお顔を包んでいるのが若殿だとみんなに知れちまったんですね、ご門をはいるころには二、三十人の人数になって、堂々とお通りになりました」

「そうか、ご苦労だった」

たぶん成功するだろうとは思ったが、それでは今ごろすでに、兄上は病床の父上と無事に対面しているのではあるまいか。

「伊之助、ご苦労ついでにもう一つ働いてくれ」

「なんです、だんな！」

「たぶん勝負はついていると思うが、新兵衛たちがわしを捜しているといかん。――若殿は一足先に城へはいったから、ケガのない者はすぐ登城せよ、ケガ人はそれぞれ手当てをするようにと、おもやのほうへ伝えてくれ」

「承知しました――。で、だんなは？」

「稲荷堂で待っている。かえりに、そっと旅のしたくをしてきてくれ。どんな着替えでもよい」

「すぐにですか、だんな」

伊之助がちょっとポカンとする。

「すぐにだ。もうここには用はない。わしはお化け長屋の子どもたちが恋しくなった」

「偉い！　そうこなくっちゃ、だんなじゃない。——けれど、なんですね、黙って行っちまっちゃ、お兄上様があとで、さぞがっかりするだろうな」

「それをいうな」

桃太郎侍は刀をぬぐって納めて、さっさと歩きだしたが、

「伊之助、百合には内密だぞ」

置いてゆくつもりなのである。たとえ百合の心はよく承知していても、親にひと言の断わりもなく人の娘をつれて長い道中の泊まりは重ねられぬ。まして素浪人で一生を終わる覚悟の自分に百合はとうてい無理だ。恋は生活ではない。

「だんな——！」

何かいいたそうに伊之助が呼んだが、桃太郎侍は二度とはふり向こうとはしなかった。——理性で捨てなければならぬ恋、それは桃太郎侍にも、やはりつらいのだ。

（やっと、なすべきことを果たした）

なぜかホッとため息が出る。

「アッ——！」

なにげなく稲荷堂のキツネ格子に手をかけた桃太郎侍は、思わず中を凝視した。

「お百合さんではないか、どうしたのだ」

その百合がちゃんと旅姿でそこへ両手をつかえているのだ。前に深編笠まで添えて用意した包みは自分のための旅じたくではあるまいか。

「若様、江戸へお供させていただきます」

「江戸へ——？」

「百合は一生若様のお身のまわりの世話をさせていただけと、堅く父から申しつけられました」

意外にも必死の顔色である。

「ほう、伊織は江戸へたったのではないのか」

「いいえ、おじさまのお居間に忍んで、なりゆきを待っていたのだそうでございます。先ほど百合のへやへまいりまして、——若様はあまりにご聡明すぎると泣いておりました。いたわしいが、お兄君のため、一藩のため、曲げてすぐ江戸へお供を願うようにと——」

「——？」

公然と名のりをあげさせて、万一家来たちが兄より自分のほうへ心を動かしては困る。それを一藩の老職として心痛するらしい。おそらく、外記とも相談のうえではあるまいか。

「あの、お許しくださいますでしょうか？」

「許さぬといったら、お百合さん、自害せよといいつけられて来たな」

桃太郎侍にはすぐ読めた。

「申しわけございませぬ」

百合が急に泣きだした。——むろん、娘を殺して伊織が生きているはずはなく、まして外記はだれよりもいちばん腹を切りたがっているのではあるまいか。武家の義理は重くきびしく、つらいものだ。

「いや、心配しなくてもいい。わしは黙って逃げだすつもりでいたのだ。——ただし、お百合さんは置いて行くことにしていた」

素浪人の身は軽く、桃太郎侍は明るく笑った。

「まあ！」

どうしてというように、百合が端麗な顔を上げる。置いて行かれるなどとは夢にも思っていない顔だ。

「わしはお化け長屋へかえるのだ。お百合さんには長屋のおかみさんは向かぬ」

「そんなことはございません。百合は質屋もお米屋もよく存じていますわ」

「伊之助に聞いたのだろう？——が、そうではない。わしといっしょに行く以上、もう一生父に会わぬ覚悟がいる。わかるか、お百合さん？」

「若様でさえ、ご親子対面のならぬお身のうえ、おまえもきょうかぎり親子の縁を切ると——」

「そうか。よし、連れて行こう」

親子がそこまでの覚悟なら、もうなにもいうべきことはない。桃太郎侍は手早く旅じたくにかかった。

「若様——」

両刀をそでにうけて、いそいそと胸に抱いていた百合がそっと呼ぶ。
「いや、もう若様ではないぞ」
「では、あの、あの――何と申し上げれば」
「伊之助におそわるのだ」
すましてわらじのひもを結んでいると、突然キツネ格子の外から、
「長屋じゃ、おまえさん。あんた。かかあ天下は、こんちくしょうときまさあ」
伊之助である。アッと顔を見合わせるのへ、
「フフフ、それじゃおかみさん、あっしは一走り先へ行って、めおと船を頼んでおきますぜ」
「ハハハ、こんちくしょうでもいいそうだ、お百合さん」
「わたくし、もうお百合さんではございません」
「なるほど――」
深編笠をかぶってキツネ格子を出た桃太郎侍、先へぬれ縁を飛びおりて、
「さあ、――では、おかみさん」
つと百合のほうへ手を差し出す。深沈と愛情をたたえて、からかっている目だ。
「まあ！」
恥じらいながらそっとその手につかまって、身も心も投げかけるようにヒラリと大地へ、そのままチョウのもつれんばかり、林の小道へかかる幸福そうなうしろ姿を、老いの目に涙をたたえた伊織が、堂の陰へピタリと両手を突いて、いつまでも見送っていた。

山手樹一郎文学の位置

尾崎秀樹

1

小説のおもしろさは、「身につまされる」と「われを忘れる」の二とおりある。社会心理学では「身につまされる」をシンパシーであらわし、「われを忘れる」をアイデンティフィケーションでしめす。
「身につまされる」というのは、作中人物のおかれた状況や心の動きなどにひきつけられ、共感をおぼえることだし、「われを忘れる」というのは、物語の発展に魅せられ、虚構の世界に自己を没入させることである。たとえば、ヒーローやヒロインの運命に切実なものを感じ、あたかもそれが自分の問題であるかのごとく意識するのは「身につまされる」だし、筋の展開や作中人物の心理的緊張などに、ハラハラ、ドキドキするのは「われを忘れる」ことになる。
現実の作品においては、この二つの要素は別個に存在するわけではなく、あるときは一方がつよく、また他のときには別の面がまさるといった具合いに、複雑にからみあっており、それがまたおもしろさを倍加させる。
このことは娯楽享受のすべてにあてはまるが、大衆文学の場合には「身につまされる」要素は人生派の作品に多く、「われを忘れる」は伝奇ロマンなどによりつよくあらわれる。だが、「身につまされる」と同時に「われを忘れる」おもしろさをもつ作品こそ、理想的なものといえよう。
日本の大衆文学は、大正十年代のなかばごろに定着したといわれる。関東大震災で徹底的な

打撃をこうむった東京の出版界は、一、二年たないうちに奇跡的に復活し、以前にも増す活況を呈した。日刊紙は百万部をこえ、週刊誌の創刊があいつぎ、国民雑誌「キング」が登場するなど、活字メディアが整備されると同時に、映画（活動写真）の普及、ラジオの放送開始などまでふくめて、マス状況が深化し、それにともなって大衆文化のさまざまなジャンルが花ひらいた。

大衆文学に即していえば、新聞小説の刷新（新講談から大衆文学への転換）、新聞さしえの新風（本画家の積極的起用と印刷の技術革新）、年寄りから子どもまでが見ることのできる家庭大衆雑誌「キング」の登場、大衆作家の親睦団体である二十一日会の誕生と機関誌「大衆文芸」（第一次）の創刊などによって、新しい発表の場がひらかれ、受け手の層がひろがったことが、内容・形式両面における新次元をもたらしたといえる。

菊池寛はあげ潮にのったような当時の大衆文学の台頭にふれて、「台頭であるというよりも、むしろ創生であり発生である」といい、さらにつづけてつぎのようにその文学史的原因を分析している。

「一は、創作の平板化したことである。純粋な創作が、ほとんど興味を排斥していることである。私小説傾向が多くなって、小説に小説らしい事件が、何もなくなったためである。現在の芝居なり、小説で一番イヤがっていることは、芝居らしいこと、小説らしいことである。したがって、純粋な小説戯曲に事件の変化なく、趣向の面白さなく、空想なくロマンスなく、読者の求めている慰楽的分子は、ほとんど跡を絶つに至ったといってよい。むろん、その中に芸術的感興がないこともないが、しかし、よほど稟性のすぐれた人の心だって、いつでも芸術的感激だけを求めるように緊張しているものではない。いわんや普通一般の読者は、常に芸術と共

に慰楽を求めているものだ。純粋な文芸からほとんど慰楽を求められなくなったとき、読者は自然に大衆文芸なるものを要求していたといってもよいのである。

もう一つの原因は、講談の衰亡であろう。無学な教養のない講釈師の話す講談などが、相当教養のある今日の民衆にとって、だんだん魅力を失うことは当然である。ことに、いろいろな雑誌に同じ講談が、幾度も掲載され、大抵の講談の筋は分かっている以上、講談の興味の中心である筋の発展につながる興味などは全然なくなった。新しい感覚も感情も心理もない事件情景の描写など、現代の民衆に飽きられるのは当然であろう。現代の講談は、大衆文芸によって、圧倒的に活字の上から駆逐されかけているといってもよい」（「大衆文芸と新聞小説」）

在来の文壇小説が私小説的傾向をつよめ、小説のおもしろさやロマンを喪失したため、慰安をもとめる一般大衆の要求が満たされなくなったこと、その一方で昔ながらの講談が大衆にあきられ、あらたに開拓された読者層の欲求にこたえられなくなったことの二つの原因を、菊池寛はあげているわけだが、これはみごとに当時の一般大衆の文芸志向をとらえ、大衆文学誕生の要因を解明していた。

たしかに当時の小説は、芸術性を標榜しながら、身辺雑事を描くことにとどまり、社会的なひろがりをもてなくなっていた。日刊紙の百万部突破や週刊誌の創刊によって開拓された受け手の層は、洗練された文学よりはおもしろくてためになる作品を望んだ。それにこたえたのが新興文学としての大衆文学だったのである。

日本の大衆文学は近世以来の話芸の伝統をひくと同時に、西欧近代のロマンの構想をとりこんだものであった。ロマン・ピカレスクなものがまず伝奇小説として定着したのはそのためである。

今でこそ大衆文学には、時代小説から現代ふ

うなエンタテインメント、ミステリーやSF、ノンフィクション・ノベルまでがふくまれるが、そうなったのは比較的新しく、成立当時は大衆文学＝時代小説とみなされていた。家庭恋愛小説は通俗小説とよばれ、ミステリーは探偵小説のカテゴリーにいれられた。それが昭和五、六年ごろから次第にあいまいになり、戦後は時代もの、通俗もの、推理ものが、それぞれの特性を生かしながら、マスコミ文学一般の中に同居する形がゆきわたった。その裏には大衆文学の質的向上があり、読者の成長をともなっていたが、大衆文学における時代小説の優位はくずれ、その分だけシリアスな歴史文学への志向がつよまったといえる。

なぜ日本の大衆文学が時代小説中心の形ではじまったか。この問題は大衆文学の日本的特性ともふかくかかわっている。外国の例でいえば、大衆文学は大量生産、大量伝達、大量消費の公式にたつものだが、日本ではそれだけではなく、別のアルファがつけ加わる。

十九世紀の後半まで頭にマゲをのせ、侍は刀をさして町中を横行していた。その旧套を脱して近代化の道を歩み出したのは、それ以後のことである。大衆文学の定着した時期は、明治維新から数えて半世紀あまり、やっと幕末維新が歴史に変わろうとするときにあたっていた。その変革を体験した古老たちも次第に少なくなり、回顧録はむかし話ではなく、歴史の記録となりつつあった。

草創期の大衆文学が時代小説と同義だったのは、現実の憂さや暗さからエスケープし、夢をはばたかせることのできる時代背景として、旧幕時代が好まれた結果である。そのことは徳川三百年の中で、元禄期以後、とくに文化・文政あたりから幕末へかけてが、作品の背景として選ばれる割合が多かったのでもわかる。

もちろん、徳川の前・中・後期では、風俗や意識もかなりことなっているが、当時の大衆読

者はそこまでの詮索はせず、同じ色合いで理解していた。その上にあぐらをかいたような作品も少なくなかったが、それはともかく、マゲをのせた時代への親近感と距離感が、時代小説を受け入れる読者意識の中にあったことはたしかである。

このことは、たとえばフランス十九世紀の武俠小説や伝奇ロマンが、フランス大革命を好んで時代背景にしたことと類似している。日本でも時代小説の背景は、変革期、なかでも幕末維新の動乱期が多いが、それと同じ意識のあらわれといえよう。

俗にチャンバラ小説といわれる時代小説には、現代通俗ものにない利点があった。刀を振って状況を断ちきることができたからである。実際には侍といえども、そう簡単に刀を抜くわけにはゆかず、それなりの責任が生じるのだが、虚構の世界ではそういった問題とは別に、剣は状況切断の活性剤の役割をはたしてきた。これは中谷博の有名な「ラスコリニコフの斧」説だが、時代小説にはこういった代償満足の働きがあったのである。

大衆文学が成立するのは大正十三、四年ごろだが、それ以前から先駆的ないくつかのこころみがあり、時代の混迷とそこからの脱却といった意識がつねにともなっていた。大衆文学の先駆的な作品といえば、まず中里介山の「大菩薩峠」があげられる。介山が「大菩薩峠」を執筆した裏にも、大逆事件以後の時代的風圧がよみとれるが、作者の好むと否とに関係なく、盲目の剣士机竜之助の像が、時代小説におけるニヒルの系譜を生み出したことは、大衆文学と大衆との対応を物語っている。

2

大衆文学は現代の神話学だ。誤解のないように言っておくが、これは大衆文学が神話だというわけではなく、作品と受け手の関係に神話学

が成り立つということだ。

大衆作家は大衆の意識下に眠っているものを掘りおこし、ときには欲望や夢の先取りをしながら、それを具象化してゆく。具象化された像は大衆の意識にうつし変えられ、さらにAからBへ、Cへとひろがる過程で修正を加えられ、ふたたび書き手のもとに送り返される。この相互作用の中から大衆文学のヒーローやヒロイン像が生まれてくるのだ。大衆作家は大衆読者のアイドルとなるヒーローやヒロインを創り出すことによって、はじめて作品の永遠性を保持することができるのだ。

机竜之助にはじまったニヒル剣士の系譜は、その後、堀田隼人や丹下左膳、新納鶴千代などを生み、戦後には眠狂四郎へつづく。この種のタイプは時代の余計者の流れであり、時代にいれられなかったプチプル・インテリゲンチャの屈折した意識をやきつけていた。

だが、ニヒルなタイプのほかに、鞍馬天狗のようなフェアな自由人もあり、超人型、明朗型、任侠型などさまざまな像が活躍する。それはあたかも人気講談に、軍談もの、武勇もの、騒動もの、政談もの、世話もの、白浪もの、怪談もの、道中もの、仇討ちもの、俠客ものなどが存在するのと同様に、類別化されているが、この種の類別がヨコの関係だとすれば、ヒーローやヒロインの諸タイプはタテの系譜だといえる。

大衆文学の草わけの一人、白井喬二は、ニヒル剣士の系譜とは別に、〝神のごとき白痴〟ムイシュキンを思わせる熊木公太郎の像を「富士に立つ影」で創造し、明朗型主人公の具象化をこころみた。このタイプは「祖国は何処へ」の台次郎にある面をひき継がれ、さらに「盤嶽の一生」の阿地川盤嶽で大成された。

盤嶽と同門の笠置某に言わせると、阿地川盤嶽は変人でもなく、といって凡人でもなく、白くて丸っぽそく、つかみどころがないようでいて、何を蓄えているかわからない「繭のような男」ということになっているが、現実があまりにもおろかしいために、真っ正直すぎる盤嶽がかえって間抜けに見えるといった関係が、社会と彼との関係にはあるようだ。

天性の善人である公太郎の像は、盤嶽に至ってはっきりとタイプ化されるわけだが、その少し前に長谷川伸が新聞に連載した「紅蝙蝠」や「戸並長八郎」の長八郎が創造されていることも見落とせない。

長谷川伸の創造した戸並長八郎は、現在ならさしずめ歯みがき粉の宣伝にでも使われるほどの白い歯の持ち主で、笑うと両頬にふかいえくぼが刻まれる、人好きのするタイプだ。楽天的で愛嬌があり、どこか底が抜けている感じで、シラノ・ド・ベルジュラックの運命を思わせるところもあるが、天下の御意見番型や冷たいニヒル型とは別のサイクルに属する。

下村海南はこの戸並長八郎を好きな人物としてあげたことがあるようだが、そういったこころみの上に山手樹一郎の明朗時代小説が形成されたことは、きわめて興味ぶかい。

山手樹一郎は書いている。

「昭和七、八年ごろ、少年雑誌の編集者であった私は、ひそかに文筆で立ってやろうという野心をおこし、――というのは、当時雑誌の編集者で五十、六十まで働いている人はほとんどないことに気がついて、できれば筆一本で食って行ける道をひらいておかないと、いまに家族を泣かせることになるぞと、暗然たる不安を感じはじめたからで、時代小説ならおれにも書けそうだと、まず志を立てた。

しかし、文筆で早く一本立ちになるには、いわゆるアナをねらう必要がある、当時時代小説では『股旅小説』が大いに流行していた。が、すでに流行している分野でアナをねらうのは、相当の才能がないかぎりちょっとむずかしい。

そこで気がついたのは、時代物にユーモア小

説の見あたらないことである。私はこれだと思った。この着想は決して悪くなかったようだが、さてこれを実現しようとなると、その時代の風俗なり生活なりをかなり突っこんで自分のものにしないと、ユーモア味など到底出てくるものではない。といって、そんな研究などは一年や二年でできるものではないので、とにかく持っている知識だけで試作をやってみることにして、『一年余日』を書き、『うぐいす侍』を書いた」（「わが小説」）

山手樹一郎は大正八年に編集者生活に入って以来、小学新報社や博文館で「少女号」「少女世界」などを編集し、昭和七、八年当時は「少年少女譚海」の編集名義人であった。彼が文筆へ転じるに際して明朗時代ものをねらったことは、山手樹一郎文学の特質を考える上でたいへん興味ある事柄だ。

大正末年から昭和初年代へかけて黄金時代を築いた大衆文学は、あざやかな脚光に彩られた反面、マモンの支配に属し、せっかくもっていた新興文学としての意欲をうすめていった。円本ブームも頭打ちとなり、作品のマンネリ化がめだった。そして、作家の社会的地位こそあがったが、大衆文学と純文学をわけ隔てる垣根は依然としてつよく、そのどちらのジャンルにも不満を抱く書き手たちが、「新青年」などの媒体にユニークな作品を発表した。

この状況をなんとか打開しなければならないという思いは、作家たちの一部をとらえていた。吉川英治が「かんかん虫は唄う」を書き、佐々木味津三が「小笠原壱岐守」をこころみ、大仏次郎が「ドレフュス事件」を手がけるといった動きは、それを物語る。

長谷川伸の「紅蝙蝠」「戸並長八郎」は昭和五年から六年へかけて書き継がれ、白井喬二の「盤嶽の一生」は昭和七年に雑誌に連載された。ひとつは朝日新聞であり、他は「オール読物」だったが、山手樹一郎はこれらの作品を読

んだに違いない。「紅蝙蝠」や「盤嶽の一生」は、いずれも時代小説の新しい次元をしめしており、いわば明朗時代小説につながる作品だった。山手樹一郎は回想の中で、それらの作品についてふれていないが、時代もののユーモア小説をアナだと思った着想の裏には、これらの諸作が存在していたように私は思う。

もちろん、時代小説の新しい分野として、時代もののユーモア小説を手がけようと思った山手樹一郎の場合には、資質的なものがつよく作用していたことはいうまでもない。軍国主義の風潮がつよまるにつれて、股旅小説や伝奇小説は発表しにくくなるが、そのこととは別に、山手樹一郎と明朗時代小説の結びつきほど、ふさわしいものはなかった。

これは「コロンブスの卵」かもしれない。山手樹一郎が歩いてきた明朗時代小説の一筋の道が、私たちに最初の出会いをごく自然なものに感じさせるのだろうが、それほどこの結びつきは、時代状況からいっても、作家的資質からいっても適切な選択だった。

山手樹一郎がこの筆名を用いるのは、「一年余日」からである。この短編は「サンデー毎日」の大衆文芸に応募し、佳作に選ばれ、昭和八年十一月の増刊号に掲載された。山手樹一郎はこの「一年余日」で明朗時代小説のひとつの方向を手さぐりしている。

これは参覲の途中で平戸港へ寄った薩摩侯が、酔いにまかせて、平戸の城を一握りに投げつぶせそうな小さな城だと口にしたのを、たまたま使者としてその宿へ出かけていた平戸藩士が耳にしたことからおこった騒ぎを、ただ一人、冷静にうけとめた小館守之助の、余裕のある身の処しかたを描いたものだ。使者をつとめた鳥海半兵衛は守之助に果たしあいを申しこむが、守之助はそれに一年の猶予を申し送ったことから、臆病者あつかいされ、頑固者の妻の父は新婚間もない妻を連れ帰ったりするが、やが

て一年後に、薩摩の船が帰国のおり、守之助が真の武勇の士であることが証明されるといった内容で、この主人公守之助の人物像は、周囲の人々の角ばった態度と対比して、いかにも人間味にあふれ、またユーモラスな味さえもっている。しかし、素材の枠の中で、それを充分に発揮させるところまでは至っていない。

次作の「うぐいす侍」になると、明朗時代小説にたいする作者の意識はより明確になり、ほのぼのとした味わいを感じさせる珠玉の短編にまとまっている。

藪鶯をとってきて仕立てることを内職としているため、うぐいす侍とよばれる軽輩の青木又六は、同僚たちに五両の借金をたのみこみ、城代家老の愛娘お麗さまに恋文をうけとらせることができれば貸してやるとからかわれて、鶯を贈るのと一緒に恋文を渡すことを実行し、仲間の侍たちを驚かせる。だが、彼が金を必要としたのは、領内の飢えた子どもたちに食べ物をやるためであり、また恋文を送ったのも、家老に領内の人々の困窮の事情を告げる機会を得るためだった。そして、作品の結末で、肝心の恋文を渡した相手をそれと知らず、「それならもっと本気で文を書くところだったなあ」と、つぶやくくだりが、この又六の人柄を象徴的に物語るだけでなく、作品全体に何ともいえない温かさをただよわせるのだ。

山手樹一郎はこの二作にふれて書いている。「はじめの『一年余日』は五十枚ほどのものだが、堅すぎて、自分が意図したほどのユーモア味は出せなかった。次の『うぐいす侍』は二十三枚ほどのものだが、これはある程度その味が出てきたと思った。

しかし、私はここで大きな失敗を一つしている。それは青木又六という主人公に、食いかせぎに村へ入りこんで百姓一揆を扇動している口先だけの浪人者を、切らせていることである。人を切るという気持ちにユーモア味などあるはずはない。

これを映画に取りあげた三村伸太郎君は、この浪人者を生かして使っている。その役をやったのは沢村国太郎君で、これが実にユーモア味のある人物になっていておもしろかった。

なるほどこの手もあるなとは思ったが、当時はただそう思っただけで、このほうが本当だったと気がついたのは、それから十年もたってからである」

私が山手樹一郎の作品にふれたのは、「うぐいす侍」が一冊本の短編集として博文館から刊行されて後のことだ。たしか映画の方を先に見た記憶がある。しかし、この短編の持ち味にはつよくひかれた。太平洋戦争がはじまる直前のことで、それだけ世情にうるおいがとぼしかったためかもしれない。私はそれにつづけて春陽堂から出た『桃太郎侍』を読み、すっかり山手文学のとりこになるのである。

3

「桃太郎侍」は、はじめ昭和十五年に岡山合同新聞に連載され、翌年秋、単行本にまとまったはじめての新聞小説である。初期の代表作であるだけでなく、山手樹一郎の作家的資質を遺憾なく発揮した長編として記憶される。この作品を書いたことで、山手樹一郎は明朗時代小説の手法を完全にマスターし、新しい方向をひらいた。その意味では、「桃太郎侍」の中にそれ以後の山手文学の諸要素がすべてふくまれているといえよう。

この作品の主人公右田新二郎は、年齢二十五歳、「気はやさしくて力持ち」という歌の文句を、そのまま絵にしたような人物である。踊りの師匠で実は女スリの小鈴を助けたときに、「桃から生まれた桃太郎」と名乗ったのがその名のおこりだが、以後「桃太郎」の名にふさわしい明るい正義派として活躍する。

乳母の千代を母と信じて成長した新二郎は、その臨終に彼の出生の秘密を聞かされ、再出発する気で家をはなれるが、偶然のことから讃州丸亀城主若木家のお家騒動にまきこまれ、実の兄にあたる新之助を守って、お家乗っ取りをたくらむ国家老鷲塚主膳の一味と戦うことになる。

新之助と新二郎は双生児の兄弟であり、若殿である兄にくらべて、新二郎は一介の浪人として育ったわけだが、瓜二つであることを利用し、毒をもられて病床にある兄の代わりに、若殿になり代わって、悪党たちの計画の裏をかく。だが、敵もさるもの、つぎつぎに襲撃はくり返され、知恵くらべさながらの追いつ追われつを展開しながら、四国への道中行をつづける。

桃太郎侍に惚れこむ小鈴、彼が危機を救った江戸家老神島伊織の娘百合などとの交渉や、担ぎ呉服屋でスリを本業とし、お化け長屋に桃太郎をともなって以後、その腹心となる伊之助の活躍、あるいは鷲塚主膳の意を受けて、陰謀を推しすすめる伊賀半九郎の悪人ぶりなど、各種のキャラクターやその設定は、時代もののツボを心得たものであり、われを忘れてたのしむことのできる要素をたっぷりと備えている。

おまけに善玉・悪玉が明確で、お家騒動の図式もわかりやすく、話が軽快なテンポでくりひろげられるために、娯楽小説としても一級品で、あきることがない。しかも、新二郎の言動は明快であたたかさがあり、作者の夢がそこに託されていることがわかる。

昭和十五年といえば、日中戦争も四年目に入り、大陸だけでなく、太平洋の緊張も次第にたかまってきた時期である。岡山合同新聞は現在の山陽新聞で、山手樹一郎は大系社の池内祥三の依頼により、地方新聞の連載を引き受けたものの、はじめての新聞小説だけにいろいろと苦労も多かったと思われる。

昭和十四年秋に博文館を退社し、筆一本になった山手樹一郎は、十人近い家族をかかえて四苦八苦していたようだが、それだけに後へ引けないものがあったであろう。暗さは実生活だけでたくさんだという思いは、彼の実感だったに違いない。明朗時代ものを書こうとしたねらいの裏には、せめて小説の中で明るさをもとめたいという切実な願いが秘められており、それがこの重苦しい時代の読者たちをもとらえたのではなかろうか。

「桃太郎侍」は予想外に好評で、地方紙ではあるが、山手樹一郎の存在はひとまわり大きく人人の視野にうつった。山手樹一郎の苦労話を少し聞いてみよう。

「さて書くという段になって、新聞小説ははじめてだし、とにかく読者にうけなければならないので、毎日ずいぶん苦労をした。一日分の三枚半を書くのにほとんど一日がかりで、何度も書きなおしをやったものである。

幸いにこれが非常にうけてくれたので、翌十六年『恋風街道』(当時太平洋戦争勃発まえで、やわらかい題名はいけない時代だったから『戊辰進軍譜』という題だった)を、これも合同新聞に書きおろした時は、稿料も一回七円とせりあげてくれたので、私は大いに池内君を徳としたものである。

それはそれとして、とにかく『桃太郎侍』で苦労したことは、後でずいぶん役に立った。東海道から讃州丸亀へ行く道中記も、その時はじめておぼえたもので、あれから二十年私は小説の上で東海道を五十回ぐらいも上り下りしているだろうから、よく使ったところはたいてい暗記しているほどである」(「あのことこのこと」)

山手樹一郎の作品は善玉・悪玉の動きがきわだち、ご落胤、お家騒動などの素材が、道中仕立てでくりひろげられるケースが多い。しかも、そのヒーローは気がやさしくて腕がたち、一見女ぎらいだが女性からはしたわれるといっ

なお、「桃太郎侍」はアンソニー・ホープの「ゼンダ城の虜」にヒントを得たと伝えられる。「ゼンダ城の虜」は「一英国紳士伝中三カ月の記録」という別名をもっているのでもわかるように、英国の名家出身のルドルフ・ラッセンダルの追憶談の形をとった長編で、戦前、日本でもよく読まれた。

ラッセンダルはルリタニア国王と瓜二つの容貌をもち、そのため毒を盛られた国王の身代わりとなって、王朝転覆の陰謀をたくらむ国王の異母弟や、その腹心たちと戦うわけだが、この設定は、「桃太郎侍」とも似通った部分がある。美姫あり、剣侠の士あり、忠臣あり、悪党あり、それらが卍巴に交錯する姿は、文字どおりピカレスク・ロマンの一典型といえる。

だが、大切なのは、何からヒントを得たかではなく、それをどう自家薬籠中のものと化したかである。山手樹一郎の場合はみごとに彼自身の文学世界の中にとかしこんでおり、独自なものとして作品化されている。その意味では「桃太郎侍」に登場する諸人物や事件は、すべて山手樹一郎のものなのだ。

たタイプであり、俠気の年増女やうぶな姫君、それに小町娘などがからみあい、気のいいスリやコソ泥も登場するといった設定が特徴的だが、そういったパターンは「桃太郎侍」によってこころみられ、定着したものだといえよう。

だが、この一見類型的に見えるパターンも、山手樹一郎の手にかかるといきいきと躍動しはじめる。ごく平凡でありふれた人物の設定や状況を描きながらも、そこに夢やロマンをたっぷりともりこみ、読者に解放感をもたらすのは、容易ならぬ技であり、山手樹一郎にしてはじめて可能なことだといえる。

大衆は昨日が今日につづき、今日が明日につうってゆく日常生活の繰り返しの中で、なおかつ夢をもとめるものだ。類型的なパターンはかえって読者にしたしみを感じさせ、安心して作品世界にとけこむ喜びを与える。山手樹一郎の作品が私たちにもたらす慰安の質は、まさにそういったものである。

私は春陽堂版の『桃太郎侍』を、なけなしのお小遣いをはたいて買ったときのことをおぼえている。装丁はたしか清水三重三だった。私は読みおえた後、「うぐいす侍」と並べて書棚に収めたが、外地から引き揚げるときにそのままにして家を出た。あの本はどうなったかと、ふと思うことがある。

（引用文は現代かなづかいに改めた上、一部の漢字を書き換えてあります―編集部）

山手樹一郎長編時代小説全集1

桃太郎侍

発行——一九七八年三月二五日初版

著者——山手樹一郎©

装画——国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁——玉井ヒロテル
発行者——和田欣之介
発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三—四—一六
〒一〇三 ☎東京二七一—〇〇五一 振替東京〇—一六一七
印刷製本——城北印刷製本センター

◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします